

首都圏中央連絡自動車道 埋蔵文化財調査報告書29

— 市原市久保堰ノ台遺跡 1・2 —

平成 28 年 3 月

国土交通省 関東地方整備局

公益財団法人 千葉県教育振興財団

首都圏中央連絡自動車道 埋蔵文化財調査報告書29

いちほらしくぼせきのだい
— 市原市久保塚ノ台遺跡 1・2 —



序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを目的として、昭和49年に設立されて、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第751集として、国土交通省関東地方整備局の首都圏中央連絡自動車道建設事業関連に伴って実施した市原市久保塚ノ台遺跡1と久保塚ノ台遺跡2の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、縄文時代中期から後期にかけての遺構・遺物が多量に検出され、この地域に暮らした人びとの歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が、学術資料として、また地域の歴史解明の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成28年3月

公益財団法人 千葉県教育振興財団
理 事 長 堀 田 弘 文

凡 例

- 1 本書は、国土交通省関東地方整備局による首都圏中央連絡自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県市原市久保字馬頭台48-1ほかにある久保堰ノ台遺跡1（遺跡コード219-094-1）、久保堰ノ台遺跡2（遺跡コード219-094-2）である。
- 3 発掘から報告書刊行に至る業務は、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆・編集は上席文化財主事古内茂が担当した。また、黒曜石の産地同定分析を株式会社パレオ・ラボに委託し、その結果を付章に掲載した。
- 6 発掘調査から報告書刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、国土交通省関東地方整備局及び市原市教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地図は、下記のとおりである。
 - 第1図 国土地理院発行 1/25,000
 - 第2図 市原市発行 1/2,500
- 8 周辺地形の航空写真は、京葉測量株式会社による昭和53年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位はすべて座標北である。座標値は世界測地系による。

本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の経緯と経過	1
第2節	遺跡の位置と環境	2
第2章	調査の方法と概要	5
第1節	調査の方法	5
第2節	調査の概要	5
第3節	基本順序	6
第3章	久保塚ノ台遺跡1	9
第1節	住居跡	9
第2節	小竪穴	15
第3節	土坑	24
第4節	溝状遺構	30
第5節	遺構外出土遺物	35
第4章	久保塚ノ台遺跡2	37
第1節	住居跡	37
第2節	小竪穴	93
第3節	土坑	114
第4節	溝状遺構	140
第5節	遺構外出土遺物	155
1	土器	155
2	土製品	162
3	石器	162
4	石製品	173
第6節	遺構・遺物からみた久保塚ノ台遺跡	174
1	集落と土器群	174
2	石器群とその組成	174
3	石器製作跡と黒曜石	182
第5章	結語	183
付 章	黒曜石製石器の産地推定	184
報告書抄録		巻末

挿図目次

第1図 久保堰ノ台遺跡と周辺の遺跡……………	3	第22図 久保堰ノ台遺跡2全体図(1)……………	38
第2図 久保堰ノ台遺跡の周辺地形……………	7	第23図 久保堰ノ台遺跡2全体図(2)……………	39
第3図 基本土層柱状図……………	8	第24図 SI-002・010……………	40
第4図 久保堰ノ台遺跡1全体図……………	8	第25図 SI-002出土土器1)……………	41
第5図 SI-001・002、SK-034……………	10	第26図 SI-002出土土器2)……………	42
第6図 SI-001・002・007出土遺物……………	12	第27図 SI-002出土土器1)……………	43
第7図 SI-006……………	14	第28図 SI-002出土土器2)……………	44
第8図 SI-006出土遺物……………	15	第29図 SI-003・出土遺物……………	46
第9図 SI-007、SK-028……………	16	第30図 SI-004……………	47
第10図 SK-002・003・004・011・015・ 016・017-1・017-2・018……………	17	第31図 SI-004出土土器……………	49
第11図 SK-021・029・033・036・045……………	18	第32図 SI-004出土土器1)……………	50
第12図 SK-019・020・039・040・041・ 042・043・044・046・051・077……………	19	第33図 SI-004出土土器2)……………	51
第13図 SK-010・026・027・030・031・ 032・035・037・050・058……………	20	第34図 SI-005・006・008・009・011・ 014(1)……………	52
第14図 SK-001・005・006・007・008・ 023・024・068・069・074・076……………	26	第35図 SI-005・006・008・009・011・ 014(2)……………	53
第15図 SK-049・052・053・054・055・ 056・060・061-1・061-2・062・ 063・067・075・078・085・086・ 089……………	27	第36図 SI-005出土土器1)……………	55
第16図 SK-046・051・091・092・093・ 094・095……………	28	第37図 SI-005出土土器2)……………	56
第17図 SK-087・097・100、SD-002・003……………	31	第38図 SI-005出土土器……………	57
第18図 SK-001・002・003・005・006・ 011・015・016・018・019出土遺物……………	32	第39図 SI-006出土土器……………	59
第19図 SK-020・022・027・028・029・ 031・032出土遺物……………	33	第40図 SI-006出土遺物……………	60
第20図 SK-033・036・037・039・040・042・ 044・045・049・054・055・058 出土遺物……………	34	第41図 SI-008出土土器1)……………	62
第21図 SK-062・067・070・071・074・077・ 085・086・087・091・095、 遺構外出土遺物……………	36	第42図 SI-008出土土器2)……………	63
		第43図 SI-008出土土器3)……………	64
		第44図 SI-008出土土器1)……………	65
		第45図 SI-008出土土器2)……………	66
		第46図 SI-009出土遺物……………	68
		第47図 SI-009出土土器……………	69
		第48図 SI-010出土遺物……………	70
		第49図 SI-011出土土器1)……………	70
		第50図 SI-011出土土器2)……………	72
		第51図 SI-011出土土器……………	73
		第52図 SI-014出土土器1)……………	75
		第53図 SI-014出土土器2)……………	76
		第54図 SI-014出土土器1)……………	77

第55回	SI-014出土石器(2)·····	78	第85回	SK-203·204·206-1·206-2·207· 208·209-1·209-2·211·212-1· 212-2·212-3·····	118
第56回	SI-015·017·····	79	第86回	SK-123·126·200·201·203·204· 206-1·207·208·211出土遺物·····	119
第57回	SI-015出土遺物·····	82	第87回	SK-219·223-1·223-2·229·237· 242·247·248·249·252·255· 256·257·258·····	121
第58回	SI-015出土石器·····	83	第88回	SK-223·229·237·242·247·249 出土遺物·····	122
第59回	SI-016·出土石器·····	84	第89回	SK-246·248出土遺物·····	123
第60回	SI-016出土遺物·····	85	第90回	SK-244·246·259·262·264·265· 266·269·270·271·273-1·273-2· 273-3·····	124
第61回	SI-017出土遺物·····	86	第91回	SK-276·277·278·280-1·280-2· 282-1·282-2·282-3·282-4· 282-5·283·285·286·288·299·····	126
第62回	SI-018·····	87	第92回	SK-289-1·289-2·295-1·295-2· 295-3·300-1·300-2·304·306·309· 312·313·314·319·321·····	127
第63回	SI-018出土遺物·····	89	第93回	SK-259·262·269·278·295·299· 306出土遺物·····	128
第64回	SI-019·····	90	第94回	SK-309出土石器·····	131
第65回	SI-019出土遺物·····	91	第95回	SK-309出土石器、SK-314出土遺物··	132
第66回	SI-025·出土石器·····	92	第96回	SK-268·033·074·076·251· 254·311、SH-128·129·508、 SK-268出土石器·····	134
第67回	SK-001·009·010·025·075·····	94	第97回	SK-033·074·076·251·254·311、 SH-128·508出土石器·····	135
第68回	SK-001·010·025·075出土遺物·····	96	第98回	SK-293出土遺物·····	136
第69回	SK-025出土遺物·····	97	第99回	SD-002·004·005·006·007 出土石器·····	141
第70回	SK-115·120·121·210·····	98	第100回	SD-002·003出土石器、 SD-004出土石器(1)·····	142
第71回	SK-120·121出土遺物·····	99	第101回	SD-004出土石器(2)·····	143
第72回	SK-003·004·006·012·020·042· 046·047·116·117·202·205·····	101			
第73回	SK-116·117·202·205出土遺物·····	102			
第74回	SK-221·231·275·307·308·····	103			
第75回	SK-221出土遺物·····	104			
第76回	SK-231出土遺物·····	105			
第77回	SK-275·308出土遺物·····	107			
第78回	SK-307出土石器·····	108			
第79回	SK-307出土遺物·····	109			
第80回	SK-002·008·013·017·018·019· 021·028·030·031·032·····	110			
第81回	SK-022-1·022-2·024·035·038·057· 062·072·079·082·083·089·102· 119·····	111			
第82回	SK-008·017·022·089出土遺物·····	112			
第83回	SK-072·079·102·119出土遺物·····	115			
第84回	SK-122·123·125·126·127·128· 129·131·133·134·200·201·····	117			

第102図	SD-005出土石器1)……………	144	第114図	遺構外出土石器3)……………	166
第103図	SD-005出土石器2)、 SD-006出土石器……………	146	第115図	遺構外出土石器4)……………	167
第104図	近世陶磁器……………	154	第116図	遺構外出土石器5)……………	168
第105図	遺構外出土器(西地区1)……………	156	第117図	遺構外出土石器6)……………	169
第106図	遺構外出土器(西地区2)……………	157	第118図	遺構外出土石器7)……………	170
第107図	遺構外出土器(西地区3)……………	158	第119図	遺構外出土石器8)……………	171
第108図	遺構外出土器(東地区1)……………	159	第120図	遺構外出土石器9)……………	172
第109図	遺構外出土器(東地区2)……………	160	第121図	遺構外出土石器10)……………	173
第110図	遺構外出土器(東地区3)……………	161	第122図	石器集成図1)……………	175
第111図	遺構外出土器(東地区4)、土製品…	163	第123図	石器集成図2)……………	177
第112図	遺構外出土器1)……………	164	第124図	石器集成図3)……………	178
第113図	遺構外出土器2)……………	165	第125図	石器集成図4)……………	180
			第126図	石器集成図5)……………	181

表 目 次

第1表	久保塚ノ台遺跡1発掘調査・ 整理作業概要……………	1	第5表	久保塚ノ台遺跡1出土石器一覧表……………	35
第2表	久保塚ノ台遺跡2発掘調査・ 整理作業概要……………	1	第6表	久保塚ノ台遺跡2小堅穴計測表……………	113
第3表	久保塚ノ台遺跡1小堅穴計測表……………	23	第7表	久保塚ノ台遺跡2土坑計測表……………	137
第4表	久保塚ノ台遺跡1土坑計測表……………	29	第8表	久保塚ノ台遺跡2出土石器一覧表……………	147
			第9表	久保塚ノ台遺跡2出土陶磁器一覧表……………	154

図 版 目 次

図版1	久保塚ノ台遺跡周辺の航空写真	図版5	1 SK-015・017・018・019・020全景
図版2	1 調査前近景	2 SK-021全景	
	2 3C-00グリッド周辺調査状況	3 SK-029全景	
	3 4D区上層確認	4 SK-029遺物出土状況	
	4 4C区上層確認	5 SK-033遺物出土状況	
図版3	1 SI-001・002調査状況	6 SK-040遺物出土状況	
	2 SI-002全景	7 SK-045遺物出土状況	
	3 4D-34・35グリッド周辺調査状況	8 SI-006埋設土器(炉跡)	
図版4	1 4C・D区調査状況	9 SK-087遺物出土状況	
	2 SI-007全景	10 SK-097全景	
	3 SI-002炉跡	図版6	1 空撮1(遺跡西部全景)
	4 SI-007炉跡	2 空撮2(遺跡全景・西方から)	

	3	空撮3 (4J区遺構検出状況)	3	SK-221全景
図版7	1	基本土層 (6P-64グリッド)	4	SK-231全景
	2	基本土層 (5M-91グリッド)	5	SK-242全景
	3	ピット群検出状況 (4R-42~46グリッド周辺)	6	SK-248全景
図版8	1	SI-002全景	7	SK-275調査状況
	2	SI-002遺物出土状況	8	SK-275全景
	3	SI-003全景	図版16	1 SK-268遺物出土状況
図版9	1	SI-004遺物出土状況	2	SK-280全景
	2	SI-004炉跡	3	SK-307調査状況
	3	SI-004全景	4	SK-307遺物出土状況
図版10	1	SI-005遺物出土状況	5	SK-293調査状況
	2	SI-005埋設土器 (炉跡) 1	6	SK-308調査状況
	3	SI-005埋設土器 (炉跡) 2	7	SK-309遺物出土状況
	4	SI-005埋設土器 (炉跡) 3	8	SK-309全景
	5	SI-006遺物出土状況	図版17	遺構出土土器 (1)
図版11	1	SI-008遺物出土状況	図版18	遺構出土土器 (2)
	2	SI-008炉跡 (配石)	図版19	遺構出土土器 (3)
	3	SI-008全景	図版20	遺構出土土器 (4)
図版12	1	SI-006全景	図版21	遺構出土土器 (1)
	2	SI-014遺物出土状況	図版22	久保堰ノ台遺跡1 遺構外出土土器
	3	SI-015遺物出土状況		久保堰ノ台遺跡2 遺構出土土器 (1)
	4	SI-010全景、SI-002 (右)	図版23	遺構出土土器 (2)
図版13	1	SI-016全景	図版24	遺構出土土器 (3)
	2	SI-018全景	図版25	遺構出土土器 (4)
	3	SI-019遺物出土状況	図版26	遺構出土土器 (5)
	4	SI-025遺物出土状況	図版27	遺構出土土器 (6)
図版14	1	SK-001遺物出土状況	図版28	遺構出土土器 (7)
	2	SK-012遺物出土状況	図版29	遺構出土土器 (8)
	3	SK-022遺物出土状況	図版30	遺構出土土器 (9)
	4	SK-022遺物出土状況	図版31	遺構出土土器 (10)
	5	SK-022全景	図版32	遺構出土土器 (11)
	6	SK-025遺物出土状況	図版33	遺構出土土器 (12)
	7	SK-033遺物出土状況	図版34	遺構出土土器 (13)
	8	SK-074遺物出土状況	図版35	遺構出土土器 (14)
図版15	1	SK-076遺物出土状況	図版36	遺構出土土器 (15)
	2	SK-119遺物出土状況	図版37	遺構出土土器 (16)
			図版38	遺構出土土器 (17)

図版39	遺構出土土器 (18)	図版63	近世陶磁器
図版40	遺構出土土器 (19)		遺構出土土器 (1)
図版41	遺構出土土器 (20)、遺構外出土土器	図版64	遺構出土土器 (2)
図版42	遺構出土土器 (21)	図版65	遺構出土土器 (3)
図版43	遺構出土土器 (22)	図版66	遺構出土土器 (4)
図版44	遺構出土土器 (23)	図版67	遺構出土土器 (5)
図版45	遺構出土土器 (24)	図版68	遺構出土土器 (6)
図版46	遺構出土土器 (25)	図版69	遺構出土土器 (7)
図版47	遺構出土土器 (26)	図版70	遺構出土土器 (8)
図版48	遺構出土土器 (27)	図版71	遺構出土土器 (9)
図版49	遺構出土土器 (28)	図版72	遺構出土土器 (10)
図版50	遺構出土土器 (29)	図版73	遺構出土土器 (11)
図版51	遺構出土土器 (30)	図版74	遺構出土土器 (12)
図版52	遺構出土土器 (31)	図版75	遺構外出土土器 (1) - 表
図版53	遺構出土土器 (32)		遺構外出土土器 (1) - 裏
図版54	遺構出土土器 (33)	図版76	遺構外出土土器 (2) - 表
図版55	遺構出土土器 (34)		遺構外出土土器 (2) - 裏
図版56	遺構外出土土器 (西地区1)	図版77	遺構外出土土器 (3) - 表
図版57	遺構外出土土器 (西地区2)		遺構外出土土器 (3) - 裏
図版58	遺構外出土土器 (西地区3)	図版78	遺構外出土土器 (4) - 表
図版59	遺構外出土土器 (東地区1)		遺構外出土土器 (4) - 裏
図版60	遺構外出土土器 (東地区2)	図版79	遺構外出土土器 (5)
図版61	遺構外出土土器 (東地区3)	図版80	遺構外出土土器 (6)
図版62	遺構外出土土器 (東地区4)	図版81	遺構外出土土器 (7)
	遺構外出土土器製品	図版82	遺構外出土土器 (8)、石製品

付 章

久保堰ノ台遺跡1

図1	黒曜石産地分布図 (東日本) ……………	185
図2	黒曜石産地推定判別図 (1) ……………	187
図3	黒曜石産地推定判別図 (2) ……………	187

久保堰ノ台遺跡2

図4	黒曜石産地分布図 (東日本) ……………	189
図5	黒曜石産地推定判別図 (1) ……………	192
図6	黒曜石産地推定判別図 (2) ……………	192

久保堰ノ台遺跡1

表1	分析対象……………	184
表2	黒曜石産地 (東日本) の判別群名称…	184
表3	測定値および産地推定結果……………	185

久保堰ノ台遺跡2

表4	分析対象……………	188
表5	黒曜石産地 (東日本) の判別群名称…	189
表6	測定値および産地推定結果……………	190

表7 石器種類別の産地推定結果…………… 191

表8 出土遺構別の産地推定結果…………… 191

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯と経過

公益財団法人千葉県教育振興財団は、首都圏中央連絡自動車道建設事業関連に伴う埋蔵文化財調査を平成19年度から継続して実施してきており、既に本事業に関する調査報告書も28冊を刊行している。このたび報告する遺跡は、市原市久保字馬頭台に所在する久保塚ノ台遺跡となる。なお、本遺跡は小湊鉄道の敷設により分断されているため、便宜的に年度当初に調査した鉄道部分から西側を久保塚ノ台遺跡1とし、次いで調査した東側部分を久保塚ノ台遺跡2と命名して調査を実施してきた。そのため本報告では調査に基づいて久保塚ノ台遺跡を分離し、久保塚ノ台遺跡1、久保塚ノ台遺跡2として報告することとした。

以下、第1表及び第2表に発掘調査の開始から報告書刊行に至るまでの経緯と各年度の調査内容及び担当者を明記した。

第1表 久保塚ノ台遺跡1発掘調査・整理作業概要

調査年度	遺跡名・所在地	発掘調査・整理内容	期 間	調査(研究)部長	課長(所長・班長)	担当者
平成23年	久保塚ノ台遺跡1 市原市久保字馬頭台48-1 ほか	確認調査 上層 395/4,000㎡ 確認調査 下層 28/4,000㎡ 本調査 上層 1,250㎡	4/11～6/22	及川淳一	白井久美子	相京邦彦
平成26年		水洗・注記～実測・拓本・ トレースの一部 トレースの一部～ 原稿執筆・編集	4/1～5/16 10/1～11/28	伊藤智樹	今泉 潔	古内 茂
平成27年		編集の一部・印刷・刊行		-	岸本雅人	井上哲朗

第2表 久保塚ノ台遺跡2発掘調査・整理作業概要

調査年度	遺跡名・所在地	発掘調査・整理内容	期 間	調査(研究)部長	課長(所長・班長)	担当者
平成23年	久保塚ノ台遺跡2 市原市久保字馬頭台46-1 ほか	確認調査 上層 950/9,500㎡ 本調査 上層 6,500㎡	7/20～12/12	及川淳一	白井久美子	相京邦彦 加藤正信 鶴沢正則 加納 実 宮 重行
平成24年		水洗・注記～ 実測・拓本の一部	4/6～3/21	関口達彦	高田 博	森本和男 山口典子
平成25年		接合・実測の一部～ 原稿執筆・編集の一部	6/1～3/31	伊藤智樹	白井久美子	古内 茂 小高春雄
平成26年		挿図・図版作成の一部～ 原稿執筆・編集の一部	5/19～9/30	伊藤智樹	今泉 潔	古内 茂
平成27年		編集の一部・印刷・刊行		-	岸本雅人	井上哲朗

第2節 遺跡の位置と環境

今回報告する久保堰ノ台遺跡は古くから知られていた遺跡¹⁾である。房総半島のほぼ中央部に位置し清澄山の東北部にあたる麻綿原高原(夷隅郡大多喜町)に水源が認められる養老川によって形成された標高55m～56mの段丘部分に営まれた縄文時代の遺跡である。遺跡の所在する養老川中流域では山間部を蛇行しながら東京湾に向かって流れているため、河川によって形成された河岸段丘面では古くから人びとの生活した痕跡が遺跡として多数残されてきた。また、本遺跡から南を遠望すると高滝ダムによって堰き止められた養老川は、人造湖である「高滝湖」を出現させた。そのため高滝湖を中心に周辺の自然環境は一変し、いまでは風光明媚な景観へと変貌を遂げている。

次に報告する久保堰ノ台遺跡を含めて周辺に所在する遺跡を概観してみたい。

まず、本事業関連で調査された縄文時代の遺跡についてみると、隣接する緑岡古墳群(3)では古墳の封土下や周囲から中期から後期にかけての住居跡や貯蔵穴、土坑といった遺構が検出されている。さらに東に位置する大和田横穴群(4)では、台地部分から早期末葉の土器群が出土し、山小川遺跡(白井ほか2009、森本2012)では後期の集落跡が調査されている。また遺跡分布地図²⁾によると、林遺跡(15)、大口遺跡(16)、愛宕遺跡(17)や中ノ台遺跡(19)などでも縄文時代の遺物散布がみられるという。なお、本遺跡では過去に土偶も発見³⁾され、穴倉昭一郎氏によって地元の『南総郷土文化研究会誌』で紹介されている。

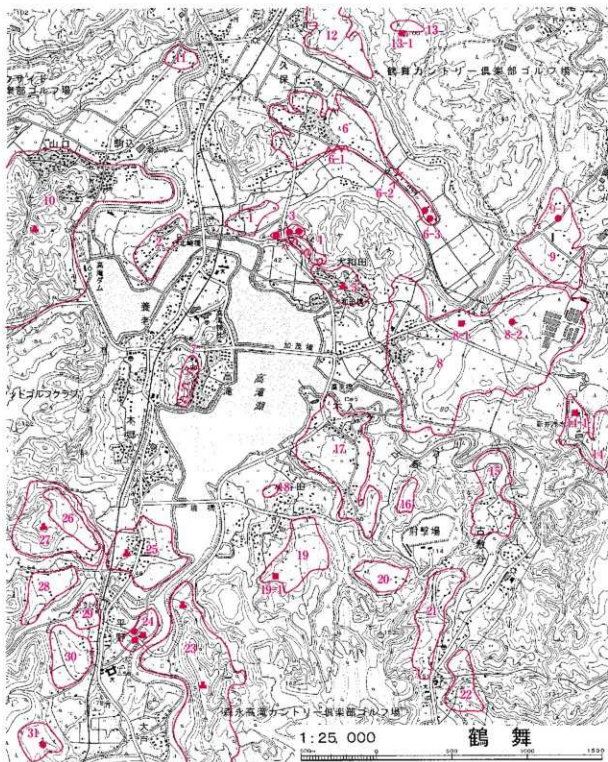
弥生時代では本事業でもその一部が調査(森本2013)された番後台遺跡(2)は、既に昭和54・55年に調査(藤崎1982)され、中期の集落跡、当時としては貴重な鉄製品(鉄斧)が出土し注目を浴びた。また小谷田八木遺跡(18)も同時期の遺跡として知られている。さらに図示はできなかったが江子田古墳群の一部である江子田上原台遺跡(南総中遺跡)(南総中遺跡調査団1978)も古墳群とともに中期に出現する方形周溝墓群の存在が確認された著名な遺跡である。

古墳時代では本事業関連で調査された緑岡古墳群(3)や柏野1号墳(白井ほか2014)、山小川1号墳(白井2009)などの円墳がある。さらに東へ1.2kmには大和田新谷古墳群(6-3)が存在する。また南に2.7kmの地点には皿郷田茂古墳群(24)がみられる。一方、山間部の傾斜地を利用した横穴墓群では大和田横穴群(4)、宮原横穴群(7)などが知られている。

次いで奈良・平安時代に入ると、各地で窯を構築して須恵器等の日常什器の生産が活発となる。周辺では本遺跡から数百m北に位置する永田(6-1)・不入(6-2)窯跡群は房総を代表する須恵器生産窯として評価されている。不入遺跡(6)は須恵器生産に携わる工人たちの生活の場であったものと思われる。

中世になると、険しい山間部やその傾斜地を巧みに利用して小規模な城館が出現する。北へ2kmに御園生館跡や明光寺館跡、陣馬台砦跡、南には大羽根城跡(23)、本郷堀ノ内館跡(25)、本郷明金城跡(27)、西には本事業で調査された山口城跡(10)と高滝湖を取り囲むように城館跡が構築されている。

このように時代を追って遺跡の変遷をみてみると、縄文時代から各時代を通して人びとは養老川によって形成された河岸段丘に居を構えてきたことが理解できる。ただ居住空間を限られた段丘上に求めたためか集落が継続しつつその規模を拡大していくといったような集落構成までには至らなかったものと考えられる。



1. 久保ノ台遺跡1・2
2. 番台遺跡
3. 緑岡古墳群
4. 大和田横穴群
5. 高滝陣屋跡
6. 不入遺跡 (6-1 永田窯跡, 6-2 不入窯跡, 6-3 大和田新谷古墳群)
7. 宮原横穴群
8. 柏野遺跡 (8-1 神山塚, 8-2 柏野1号墳)
9. 山小川遺跡 (9-1 山小川1号墳)
10. 山口城跡
11. 下駒込遺跡
12. 久保北新畑遺跡
13. 田尻久保台遺跡 (13-1 長塚台三山塚)
14. 花和田遺跡 (14-1 花和田三山塚)
15. 林遺跡
16. 大口遺跡
17. 愛宕遺跡
18. 小谷田八木遺跡
19. 中ノ台遺跡 (19-1 中ノ台行人塚)
20. 作尻遺跡
21. 下根遺跡
22. 新井代遺跡
23. 大羽根遺跡
24. 皿郷田茂古墳群
25. 本郷堀ノ内館跡
26. 沢ノ上遺跡
27. 本郷明金城跡
28. 田野々遺跡
29. 堂ノ前遺跡
30. 上平野遺跡
31. 高野遺跡

第1図 久保ノ台遺跡と周辺の遺跡

- 注1 本遺跡は昭和39年に藤原文夫氏によって『南総郷土文化研究会誌』第3号で「永田雑記」として記載された中で「古代の遺跡と遺物」の項にみられる。そこには遺跡の時期として加曾利E式・堀之内式の型式名が記されている。
- 2 千葉県教育委員会1999『千葉県埋蔵文化財分布地図(3)－千葉市・市原市・長生地区(改訂版)－』による。
- 3 穴倉昭一郎氏は『南総郷土文化研究会誌』第6号に「養老川中流域発見の土偶」というタイトルの中で本遺跡から採集した土偶を紹介している。

参考文献

- 藤原文夫1964「永田雑記」『南総郷土文化研究会誌』第3号 南総郷土文化研究会
- 穴倉昭一郎1968「養老川中流域発見の土偶」『南総郷土文化研究会誌』第6号 南総郷土文化研究会
- 南総中学遺跡調査団編1978『千葉・南総中学遺跡』市原市教育委員会
- 藤崎芳樹1982『市原市番後台遺跡・神明台遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 白井久美子ほか2009『市原市山小川遺跡・柏野遺跡・山口城跡』(財)千葉県教育振興財団
- 森本和男ほか2012『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書15－市原市竹ノ下遺跡・関尻遺跡・山小川遺跡・長南町田宿川間遺跡－』(財)千葉県教育振興財団
- 森本和男2013『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書21－市原市番後台遺跡・山口城跡・大和田遺跡群－』(公財)千葉県教育振興財団
- 白井久美子ほか2014『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書22－市原市柏野遺跡－』(公財)千葉県教育振興財団

第2章 調査の方法と概要

第1節 調査の方法

遺跡の発掘調査に当たり、対象範囲を覆う方眼網からグリッドを設定した。方眼網は世界測地系に基づいて設定し、基点を $X = -70,900$ 、 $Y = 29,020$ とした。そこから東に向かって20mごとにアルファベットで $A \cdot B \cdot C \cdot \dots$ と付し、南へは算用数字で $1 \cdot 2 \cdot 3 \cdot \dots$ とし、これを組合せ大グリッド名として、さらに大グリッドの中を2m方眼の小グリッドで100分割した。基点は北西隅が1A-00となり、各大グリッドの南東隅が99になる。

本遺跡は現存する地形から尾根状に東西へ延びた台地に形成されていたものである。だが、小湊鉄道の敷設時に南北に分断されてしまった。このため調査は線路を境界として1次、2次と二回にわたって実施されることになった。その1次分が久保塚ノ台遺跡1であり、2次分が久保塚ノ台遺跡2として今回報告することとなった。

前述したように遺跡は道路建設事業に先行して調査したものであり、工事に伴う掘削幅は約30m～60mとなり、その間を調査対象としたものである。遺跡の内容については前述の報告や分布調査等の記載から縄文時代中期から後期に属する遺構・遺物が主体となることが予想された。また本事業の関連で久保塚ノ台遺跡1の道路を挟んだ西には平成17・18年度に調査された番後台遺跡があり、ここでも若干ながら縄文時代中期の土器片と小竇穴・土坑等が検出されている。そのため当該時期の遺構・遺物の出土を念頭において調査を進捗させていくことにした。

以下、簡単に調査の方法を記載しておきたい。

調査は事業者からの要請により、久保塚ノ台遺跡1から開始された。線状の調査となるため、まず遺跡の概要を把握することを目的として事業地内に幅2m、長さ10mのトレンチを設定し、重機により表土層を排土した。その後、遺物の出土量や遺構の存在が想定される部分については、本調査に切り替えて作業を進めていくことにした。そして遺物の出土地点を正確に把握するためにトレンチ方式からグリッド方式に変えて記録するような調査方法を採用した。上層(縄文時代以降)の調査が終了すると、下層の調査に移した。しかし、周辺一帯での堆積土を観察すると下総台地とは異なる堆積土となり明確な関東ローム層が確認できない堆積状況であった。しかも表土層と縄文土器包含層において旧石器時代に属する石器群が検出されることはなかった。そのため下層については28㎡の確認調査をもって終了とした。

次いで久保塚ノ台遺跡2についてみると、基本的には久保塚ノ台遺跡1と同様な手順を踏襲して調査を進捗させていった。しかも住居跡等の遺構が多数検出されたため慎重に調査を継続することとなった。ただ、下層の調査については、久保塚ノ台遺跡1と同様であったため省略した。

第2節 調査の概要

久保塚ノ台遺跡1・久保塚ノ台遺跡2の両遺跡は個別に調査したものであるが、前述したように現況からは小湊鉄道の敷設により分断されたもので、第3章以下は遺跡を調査の手順通り分割したが、ここでは同一遺跡としての視点で記載しておきたい。

遺跡は、まずトレンチ方式により調査がすすめられ、遺構が密に分布することが判明した久保塚ノ台遺跡1と久保塚ノ台遺跡2の中央部分を除きグリッド方式に切り替えて調査を進捗させていった。久保塚ノ台遺跡1は大グリッドの3D区から住居跡が検出され、周辺では小竪穴や土坑等がみられた。だが東よりの小浜鉄道に接した部分での遺構分布は疎らなものとなっている。住居跡からは縄文中期の加曾利E式土器が出土しているが、総体的に遺物の出土量は少なかった。一方、久保塚ノ台遺跡2は4J区を中心とした調査区西側で住居跡が集中的に検出され、中央部分は空白地帯となり、東側では若干の小竪穴と多数の土坑が検出された。空白地帯となった4・5L～N区では遺物包含層となっている第Ⅱ層でも遺物出土量は明らかに僅少であったため当初から遺構は存在していなかったものと思われた。なお、4D区から5D区にかけて試掘状に4m×4mを掘削し記録したが、周囲の地盤は軟弱であったため傾斜にかかる部分は無理に調査はしなかった。

また、本事業での関連遺跡として調査された番後台遺跡は道路を挟んで西に近接して位置する。だが調査報告をみると、縄文時代では中期の土器片と数点の石器が出土しているのみである。調査結果から本遺跡でみられた縄文中期の集落はそれほど大きなものではなかったと理解できよう。

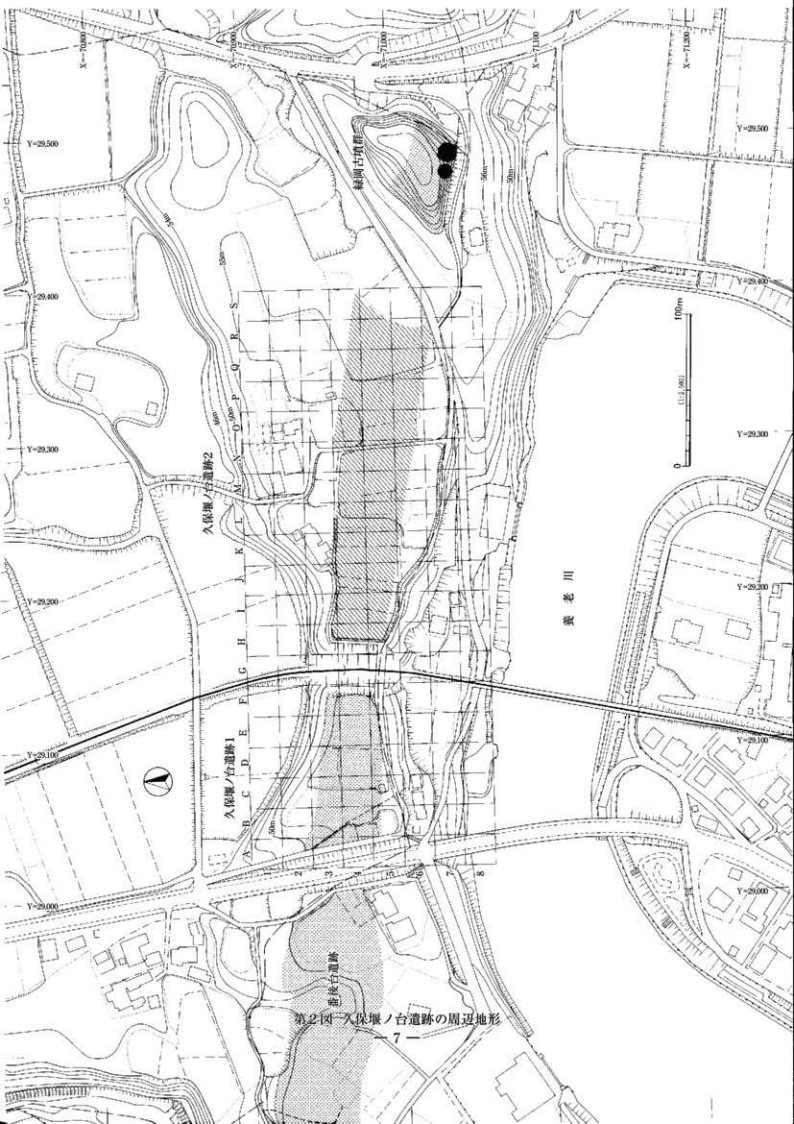
次に、検出された遺構・遺物の概要について触れておきたい。住居跡についてみると、その掘り込みは浅く、後述するように竪穴の検出をもって住居跡の存在を把握するといったような事例が認められた。その点小竪穴は掘り込みがより深いため住居跡よりも容易に検出できたものの、後世の開墾等でかなり深くまで人為的な削平が及んでいた。

遺物についてみると、住居跡の重複した4J区では土器・石器ともに豊富な出土量を示した。土器は中期の加曾利E式以降の時期で占められており、後期の加曾利B式まで確実に継続していたようである。その後、安行I式以降の土器はほとんどみることができないため、人びとの活動は急速に衰退していったものと考えられる。石器についてみると、4J区を中心に多くみられた。これを器種別にみると、とりわけ印象的な事例として破損した石鎌の多さを指摘できる。微細な剥片は観察できなかったが4J区周辺では石鎌等の石器製作が行われていたものであろう。加えて目立つ器種が楔形石器である。楔形石器は旧石器時代に普遍的にみられる器種であるが、本遺跡では旧石器時代の遺物が集中的に出土している場所がないため、縄文時代中期以後の所産と考えることが妥当といえよう。この楔形石器は製作途中の半成品なども出土しているため遺跡内で製作していたことは容易に想像できる。さらに打製石斧の側面を剥離したような剥片も出土しており、日常的に使用する石器はこの地で作られていたと考えてよさそうである。

さて、ここで遺構・遺物以外での特筆できる事例として土器表面の剥落をあげることができる。一般的に台地上から出土した土器の表裏面は鮮明な形で文様を残しているものである。だが、本遺跡での出土土器は表裏面の剥落が著しく、文様としての縄文等は痕跡を残すほどで図示不可能な大型片がしばしばみられた。これらの土器の表面を観察すると粘性に富む土がごびり付くように付着している。この粘性に富む土は後述する第Ⅱ層（土器包含層）である黒褐色土に起因している。また溝が数か所にみられ、溝に伴うとみられる中・近世陶磁器も出土している。しかし溝以外から出土した陶磁器も存在していたため、これらの陶磁器類は溝状遺構の関連遺物として扱うことにした。

第3節 基本層序

本遺跡における基本層序として久保塚ノ台遺跡2でみられた3か所の層位を図示しておきたい。図では西から5K-80、5M-91、6P-64グリッドの順に配置した。前述したように、ここでの堆積土には県内



第2図 久保塚ノ台遺跡の周辺地形

の台地で広範にみられる立川ローム層を明確に確認することはできなかった。遺物包含層は第Ⅱ層となるが、次の第Ⅲ層では下末吉ロームが混入した層へと変化する。

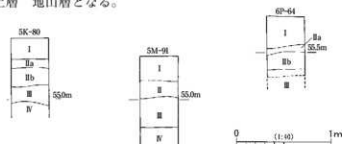
本遺跡の堆積土を大きく分離すると以下のとおりとなる。

第Ⅰ層 暗褐色土 表土（耕作土）。30cm～50cmの層厚である。

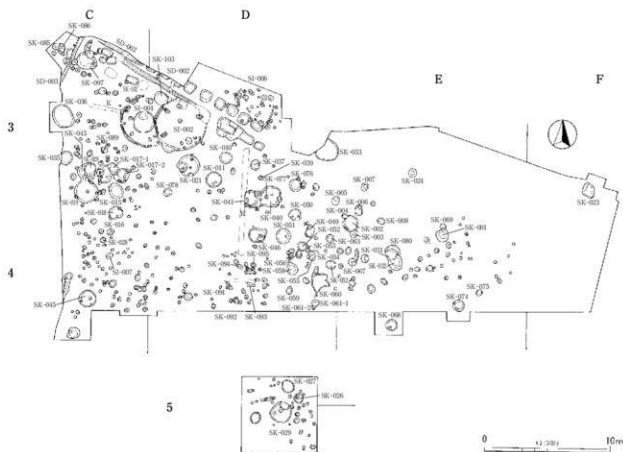
第Ⅱ層 黒褐色土 粘性が強く、よく締まっている。遺物包含層となっている。場所によっては色調から暗褐色と黒褐色に分離できる場所もみられた。30cm～40cmの層厚である。本層は縄文時代の遺物包含層となっているが、粘性の強さという点を考えると自然な堆積ではなく人為的な堆積土とも考えられる。

第Ⅲ層 褐色土 場所によっては白色や黄褐色の粘土層を混入する。20cm～30cmの層厚を維持している。白色粘土層の堆積も部分的にみられる。全体としてはいわゆる下末吉ロームと立川ロームの混入層と考えられる。

第Ⅳ層 黄褐色砂質土層 地山層となる。



第3図 基本土層柱状図



第4図 久保塚ノ台遺跡1全体図

第3章 久保堰ノ台遺跡 I

本遺跡は尾根状を呈した台地に立地していることと既設の道路や鉄道によって分断されているため発掘調査の可能な台地部分4,000㎡を調査対象として遺構確認のための調査を実施した。その結果、遺構の存在が想定できる1,250㎡について本調査を実施することとした。前節でも触れたとおり遺跡を覆う表土層は粘性土を含んでおり掘土には予想以上の労力を費やした。表土層を除去すると各所で人為的な落ち込みが認められ3C区と3D区では円形を呈した住居跡の痕跡が確認できた。さらに、その周囲を囲むように小堅穴状の遺構や土坑が多数存在していることが判明した。遺構の分布についてみると、住居跡の存在する西側に多くみられ、東へ移行するに従って希薄となるような傾向を示していた。また4F区では植物根等の痕跡はみられても明らかに遺構としての掘り込み等を確認することはできなかった。

表土を除去した後、随時各遺構の調査にあたることとした。その結果、本遺跡では住居跡4軒、小堅穴32基、土坑約100基、溝状遺構を数条検出することができた。また、本遺跡では遺構の覆土が薄いことや整理作業の段階で堆積土や遺物の出土量、炉跡や柱穴の存在等を検討した結果、遺構としての根拠を保持していないものについては欠番として取り扱った。以下において001から順次説明を加えていくが、番号が飛んでいる遺構を、検討結果から欠番にしている。久保堰ノ台遺跡 I の住居跡では、SI-003・004・005の説明が欠落するが、これが欠番として取り扱った遺構である。これは後述する久保堰ノ台遺跡 2 についても同様となる。

以下、住居跡、小堅穴、土坑、溝状遺構の順にその成果を記述していく。

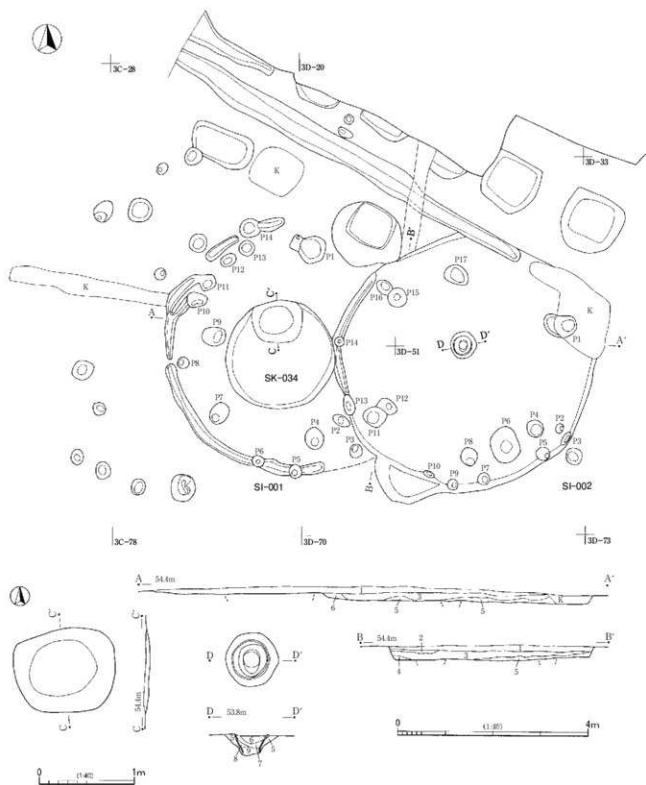
第1節 住居跡

SI-001 (第5・6図、図版3・17・18・21)

本跡は3C区と3D区を跨ぐような形で検出された。形状は遺存する周溝の痕跡から径が約5.4mの円形を呈した住居跡と推測される。また図示から理解できるように壁面はほとんど存在していないような状態であった。床面の一部は重複するSI-002の西側で確認されたためSI-002→SI-001という新旧関係が成立する。また本跡の中央部に位置するSK-034の小堅穴は、その上面にSI-001の炉跡が認められたため、より古い時期に設置されたものであることが判明した。ピットは周溝内で14か所に認められたが、本跡に伴う柱穴はP4やP7、P9などが考えられる。P5、P6、P8、P11～P13などは壁に沿って穿たれた壁柱穴と考えられる。炉跡はほぼ中央に設置されており、SK-034と重複し約5cmの堆積土(焼土混入の黒褐色土)が認められた。

覆土は6層に分類できた。第1層は黒褐色土(ローム粒を少量混入)、第2層は黒褐色土(ローム粒を少量混入、SI-001の床面)、第3層は黒色土(ロームブロックとローム粒混入)、第4層は黒褐色土(ローム粒を多く混入)、第5層は黒褐色土(ロームブロックとローム粒混入)、第6層は褐色土(流出したローム層)という構成になる。なお、堆積土は後述するSI-002と共通である。

遺物の出土状況についてみると、土器の出土量は少なく、接合した胴部の大型片と底部が主な出土土器となる。石器では石鏃・楔形石器・スクレイパー・打製石斧が出土している。図示した1・2はP2・P3・P4に囲まれるような位置で出土している。このことから本跡の時期は加曾利EⅡ式期となろう。



第5圖 SI-001・002、SK-034

SI-001 ビット一覧（数字は床面からの深さ、単位=cm）

P 1-20	P 2-65	P 3-19	P 4-52	P 5-25	P 6-13	P 7-66	P 8-25
P 9-14	P 10-54	P 11-8	P 12-9	P 13-8	P 14-11		

遺物

土器 1は胴部が1/2程度遺存したもので縄文は複節のRLを用いている。沈線間は磨り消され器面調整を施しているような丁寧な仕上げとなっている。2は底部で胎土には若干の雲母や小石、石英粒が混入されており1とは異なる個体と思われる。3は有孔鈔付土器の口辺部片である。内外面には赤彩の痕跡が認められる。4の縄文は複節となる。1と同一個体という可能性も否定できない。

石器 5は脚部の欠損した石鏃である。6・8は楔形石器で、6は薄手の剥片を用いたもので、下端部は折断している。裏面でも小さな剥離を加えているため楔として分類した。8は小礫の上下両面に剥離を施している。7は搔器のような形態を呈したもので、裏面の剥離は整形のためのものであろう。右側縁では両面から剥離されているため石器とした。9は打製石斧の頭部であり、表裏に自然面が認められるため扁平な礫の側面を簡単に剥離し石斧にしたものと思われる。

SI-002（第5・6図、図版3・4・17・21）

本跡は西側部分がSI-001と重複しており、そこで周溝の一部が約3m検出できたため形状はほぼ把握できた。径は5.5mほどで北東部分が溝や攪乱により損壊を受けており、壁面は状態の良い部分で15cmを計測する。床面は平坦で、柱穴状のビットは17か所を数える。その深さや位置からP 4、P 8、P 12、P 15、P 17などが主柱穴と考えられた。一方、P 3、P 5、P 7、P 9、P 10などは壁柱穴になるものであろう。また炉跡は中央部に位置し、底部の欠損した深鉢が設置されていた。いわゆる土器埋設炉である。このタイプの炉跡は後述する久保塚ノ台遺跡2でも複数基が確認されている。埋設部分での堆積土は4層に分離できた。第6層は黒褐色土（砂粒混入）、第7層は黒褐色土（焼土・砂粒混入）、第8層は黄褐色土（黄白色砂粒混入）、第9層は黄褐色土（硬い粘土質）となり、焼土層の形成はみられなかった。

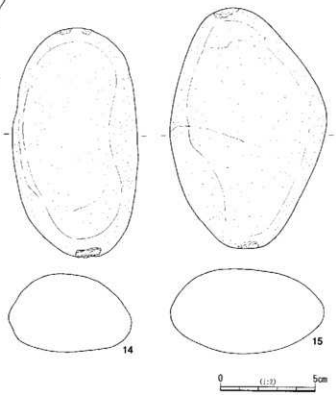
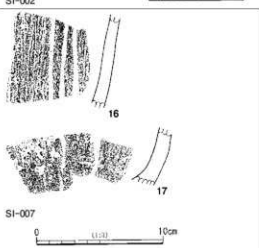
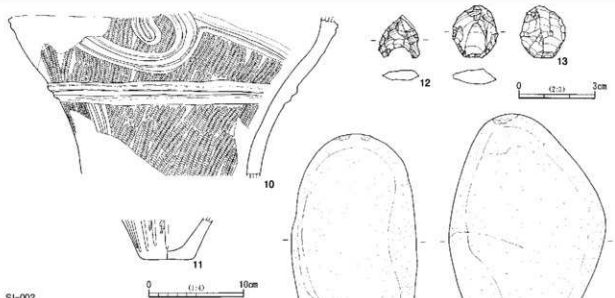
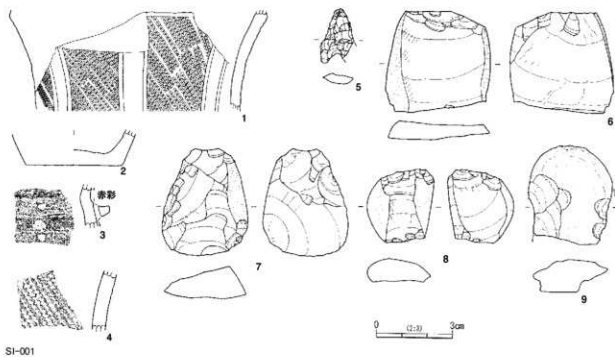
本跡内での遺物出土量はSI-001よりも多かったが、土器は小片がほとんどで図示することができなかったため図示は2点のみとなった。石器では黒曜石製の石鏃、楔形石器のほかに礫石の出土があった。住居跡の時期は炉跡に埋設された深鉢から加曾利E I式期となろう。なお、堆積土は前述したSI-001と重複しているため共通となる。

SI-002 ビット一覧（数字は床面からの深さ、単位=cm）

P 1-39	P 2-13	P 3-12	P 4-92	P 5-83	P 6-14	P 7-50	P 8-92
P 9-53	P 10-25	P 11-82	P 12-55	P 13-21	P 14-11	P 15-61	P 16-63
P 17-53							

遺物

土器 ここでは時期決定を可能にした10の深鉢に注目したい。大きく開いた口辺部を炉跡に転用したものであり、縦横に貼付された隆帯と縄文で装飾されており、磨り消し部分は認められない。器面は被熱のためか剥落が著しい。11は底部片で器面には数条の沈線と僅かに遺存した縄文が観察できる。時期的には



第6図 SI-001・002・007出土遺物

SI-001で出土している大型片と同時期となろう。

石器 石器として図示できるものは敲石を含めて4点となる。12の石礫は製作時に先端右部分の剥離に失敗したようである。13は搔器状に整形された楔形石器である。刃部では両面から剥離が施されている。14・15は縦長の敲石とともに上下端に打痕がみられる。

SI-006 (第7・8図、図版5・17・18・21)

本跡は3D区のはほぼ中央部に位置し、住居の北側は斜面になっており遺構の一部は失われていた。さらに南には後世の貯蔵穴らしき隅丸方形の深い掘り込みが存在し、総体的に遺構の遺存状況は良好とはいえなかった。壁も東西部分で確認されているが、壁高は状態のよい部分で10cmほどしか残されていなかった。床面は平坦ながらも柱穴状のピットが多数(一覧表)みられるため状態としてはよくなかった。ただ炉跡は土器埋設炉であったためはっきりと確認できた。SI-002と同様に深鉢の上半部を使用した炉跡であった。しかも埋設された土器も類似した深鉢であった。

覆土は上下2層に分類できた。第1層は表土、第2層は黒色土(ローム粒を少量混入)、第3層は黒褐色土(ローム粒とロームブロックを混入)となる。また第4層は黒褐色土(ローム粒を混入し乾燥するとサラサラの状態となる)、第5層は黄褐色土(ローム粒とローム粒混入)で第2・3層と異なる色調と性質の堆積土となる。このことから隅丸方形の掘り込みは後世の貯蔵穴と考えられた。

遺物の出土は他の住居跡と比較すれば多いといえよう。図示した2点は炉として使用されたもの1と直接して出土した深鉢の胴部である。また、土器片鏟が4点出土したことも注目できる。石器では敲石が2点出土した。炉に使用された深鉢から本跡の時期は加曽利E I式期となろう。

SI-006 ピット一覧(数字は床面からの深さ、単位=cm)

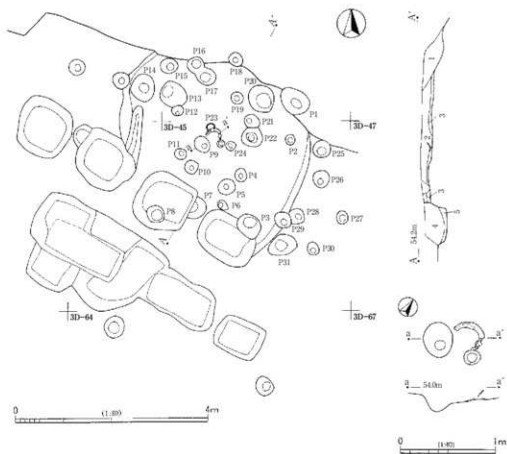
P 1-43	P 2-20	P 3-84	P 4-36	P 5-30	P 6-60	P 7-26	P 8-48
P 9-20	P 10-27	P 11-19	P 12-52	P 13-80	P 14-87	P 15-32	P 16-19
P 17-21	P 18-38	P 19-55	P 20-70	P 21-34	P 22-35	P 23-8	P 24-25
P 25-49	P 26-39	P 27-17	P 28-21	P 29-42	P 30-20	P 31-33	

遺物

土器 1は炉に使用された深鉢で口辺部から頸部にかけて遺存したものである。縄文地に隆帯を貼付した装飾で縄文の撚りは密であり3本燃りと思われる。被熱のため器内外面は脆くなっている。2も地文には複節の縄文を用い、垂下する粘土紐に刻目を施している。その後、沈線による区画がみられる。3~5は口縁部に縄文地に隆帯を貼付している。6は口唇部を丸く整形しており内面の作りも丁寧で若干調整を加えているようである。8は細い原体を組み合わせ異方向に回転させることにより羽状の効果を演出している。9・10は胴部片で縦方向に2~3本の沈線がみられる。これらはおおむね加曽利E I式となろう。

土製品 11~14は土器片鏟で、12には縄文地に施された沈線がみられる。14は約1/2を欠損するもので、左側が口唇部となる。

石器 敲石が2点出土した。15は上下端に僅かな打痕が認められる。裏面には磨耗痕があるため磨石としても使用されたようである。16は上下と両側面に打痕が観察できる。



第7図 SI-006

SI-007 (第6・9図、図版4・18)

本跡は4C-27・28グリッドにかけて焼土混入層が認められたため土坑(SK-025)という認識で調査を進捗させていった。しかし掘り込みは浅く8cmほどで地山層に変化したため精査の範囲を拡大し住居跡の存在も想定してつつ調査を継続した。その結果、前述したように明確な住居跡の痕跡は確認できなかったが周囲には柱穴と考えられるようなビット(P4、P9、P13、P18)が認められるため整理作業の段階で住居跡として認識した。土器等の遺物は少なく図示した2点は、炉跡と想定される落ち込み(焼土混入の黒褐色土)から出土したものである。

SI-007 ビット一覧(数字は床面からの深さ、単位=cm)

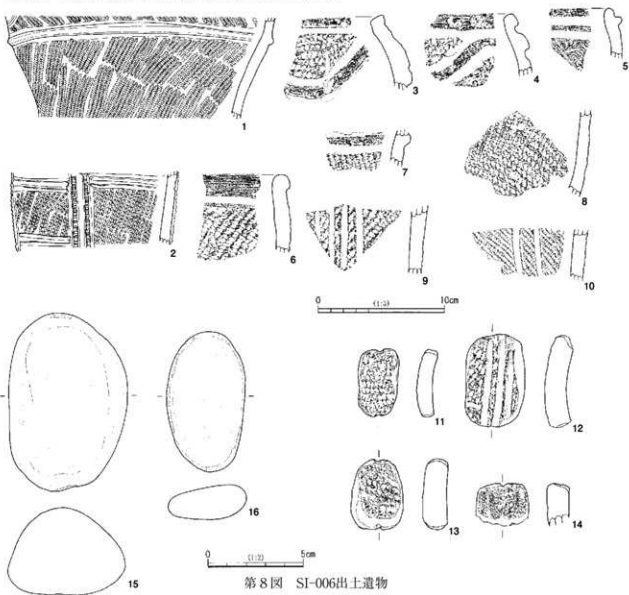
P 1 - 17	P 2 - 16	P 3 - 15	P 4 - 51	P 5 - 20	P 6 - 36	P 7 - 24	P 8 - 27
P 9 - 52	P10 - 5	P11 - 54	P12 - 25	P13 - 56	P14 - 28	P15 - 24	P16 - 25
P17 - 24	P18 - 35	P19 - 22	P20 - 8	P21 - 23	P22 - 31	P23 - 18	P24 - 19
P25 - 27	P26 - 23	P27 - 22	P28 - 21	P29 - 36	P30 - 48	P31 - 17	P32 - 61

遺物

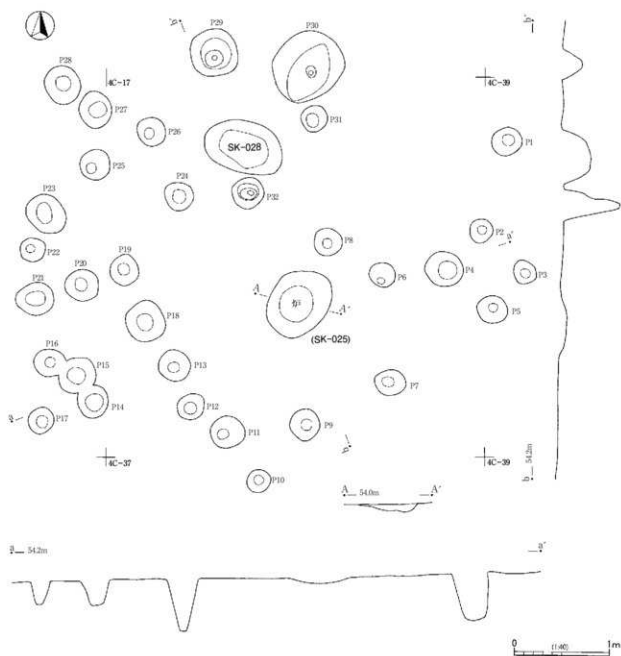
土器 16・17は同一個体と考えられる。16は胴部片で器面には集合条線を施し垂下する沈線を加えている。時期的には加曾利EⅡ式となろう。同様な施文を有するものがSK-027とSK-036からも出土している。

第2節 小竪穴

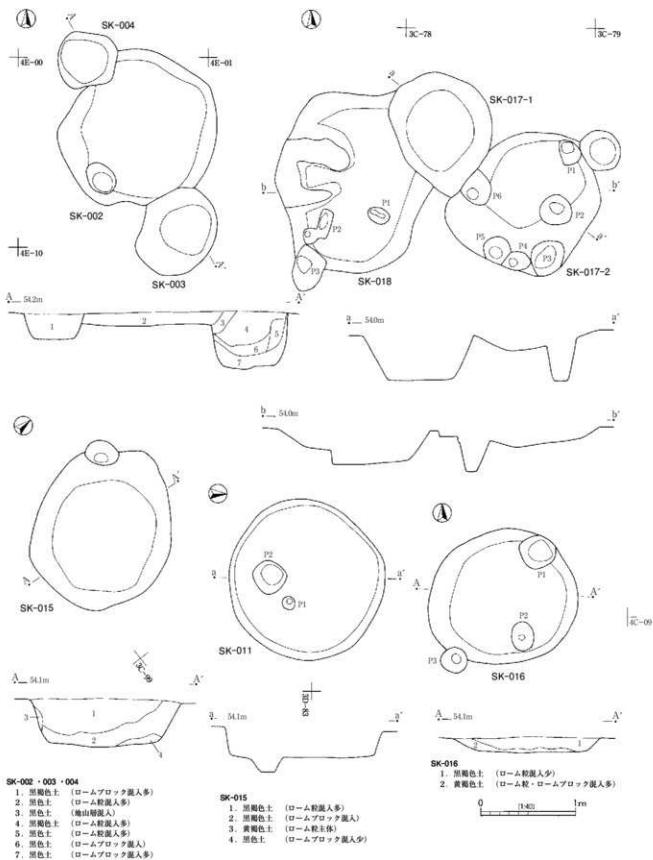
本遺跡では縄文時代中期集落の特徴ともいえる小竪穴が、住居跡周辺で十数基が検出されている。その形態についてみると、径が1m～2m、深さは住居跡の床面を掘り込んでいることもあり開口部から20cm～40cmほどを計測する。平面形は概して円形に近いタイプとなる。そこで、ここでは径が1.5mを基準にして大きいものをAタイプ、小さいものをBタイプとして分類した。その結果、Aタイプの小竪穴は18基、Bタイプは14基となり、ややAタイプが多いようである。また小竪穴に伴うピットについてみると大きいAタイプには18基中の14基にみられた。一方、Bタイプでは14基中で5基にしかみられなかった。ピットの深さは底面からの計測とした。なお、本節では小竪穴の形態等については別途一覧の計測表としてまとめた。本節では遺物を出土した遺構を中心に記載する。



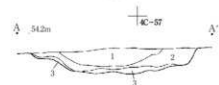
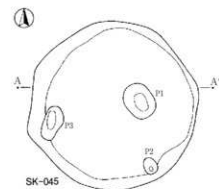
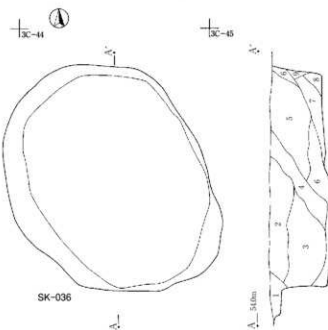
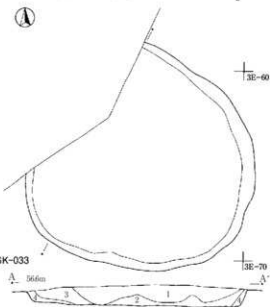
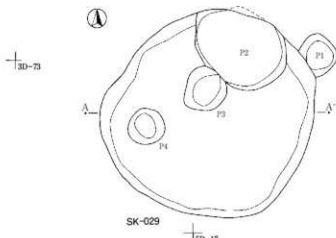
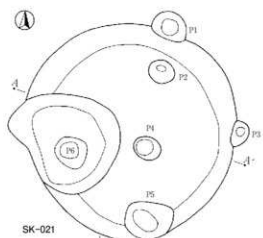
第8図 SI-006出土遺物



第9图 SI-007、SK-028



第10図 SK-002・003・004・011・015・016・017-1・017-2・018



- SK-021**
1. 黒褐色土 (ローム粒混入少)
 2. 褐色土 (黄色砂層混入多)

- SK-029**
1. 黒褐色土 (ローム粒混入多)
 2. 褐色土 (黄色砂層混入多)
 3. 褐色土 (ローム粒主体)
 4. 褐色土 (ロームブロック・黄色砂層混入)
 5. 黄褐色土 (黄色砂層混入多)

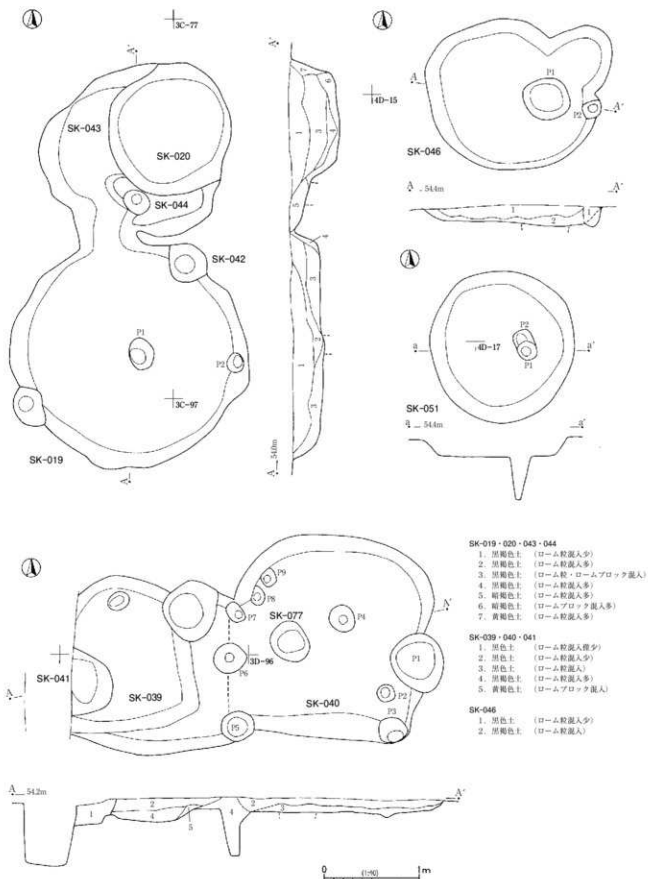
- SK-033**
1. 黒褐色土 (ローム粒混入少)
 2. 黒褐色土 (ロームブロック混入)
 3. 黄褐色土 (ローム粒混入多)
 4. 黒褐色土 (ロームブロック・ローム粒混入)

- SK-036**
1. 黒褐色土 (ローム粒混入)
 2. 棕色土 (ローム粒混入少)
 3. 黒褐色土 (ローム粒混入)
 4. 黒褐色土 (ロームブロック・ローム粒混入)
 5. 黒褐色土 (ローム粒混入)
 6. 黄褐色土 (棕色土・ロームブロック混入)
 7. 黄褐色土 (棕色土・ローム粒・ロームブロック混入)
 8. 棕色土 (黄色砂層混入)
 9. 黄褐色土 (ローム粒混入多)

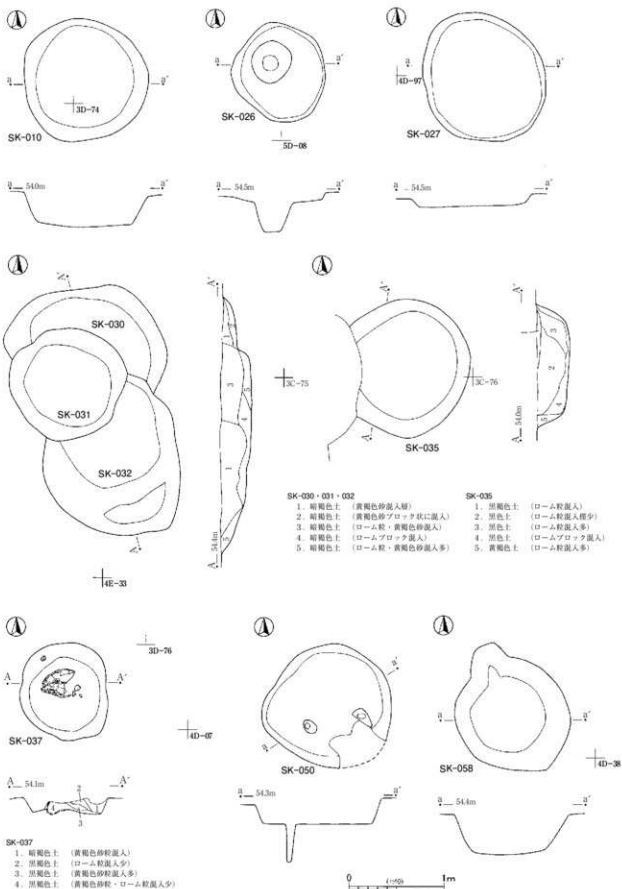
- SK-045**
1. 黒褐色土 (ローム粒混入少)
 2. 黒褐色土 (ローム粒混入多)
 3. 褐色土 (黄色砂層混入)



第11図 SK-021・029・033・036・045



第12図 SK-019・020・039・040・041・042・043・044・046・051・077



第13図 SK-010・026・027・030・031・032・035・037・050・058

Aタイプ

SK-002 (第10・18図、図版18)

本跡は土坑2基と重複していた。重複部分は限定的であったため形状を損なうことはなかった。堆積土から推測すると土坑よりも古い時期と考えられる。遺物は少なく図示は胴部片の1点のみとなる。緻密な縄文地に5mm幅の半截竹管状の工具で縦方向に沈線を施している。時期は加曾利EⅠ式と思われる。

SK-011 (第10・18図、図版18)

本跡は底面からの立ち上がりも垂直に近く円形を呈した典型的な小堅穴といえよう。ただ遺物の出土は少なく図示できたものは底部に近い破片のみであった。器面には密に燃られた縄文がみられる。

SK-015 (第10・18図、図版5・21)

本跡の東壁に接してピットが穿たれているが浅いものであり、付帯するピットではなかろう。遺物は若干の土器片と破損した石織が出土している。破損石織には左側縁にきれいな剥離が施されており製作途中で廃棄されたものであろう。

SK-016 (第10・18図、図版18)

本跡の壁は皿状を呈したものであり、地山が崩壊したものとと思われる。またP1は、その深さから支柱穴的なピットとなろう。遺物は土器片が数点みられたが、器面の状態が良好な口縁部2点を図示した。17は口縁の無文部に調整痕がみられる。18は波状口縁であり内外面ともに丁寧に仕上げられている。期的には加曾利EⅡ式となろう。

SK-019 (第12・18図、図版5・19・21)

本跡は北に位置するSK-043・044と接近しているため壁部分が崩壊したものと考えられる。その形状から典型的な小堅穴となろう。P1は深く柱穴とみて間違いないまい。一方、北壁(SK-042)と東西壁に接しているピットは本跡に伴うものとするには疑問が残る。遺物の出土量は多く、期的には加曾利EⅡ式が主体となる。本跡の構築された時期も加曾利EⅡ式としてよいであろう。24・25は口縁部にみられる刺突文が特徴的なものであり、25と28は地文に燃糸文を使用しており同一個体とも思われる。石器も小型の磨製石斧が出土しており、研磨は刃部のみのみられる。石材はチャート製で類例は少ない。

SK-021 (第11図、図版5)

本跡も整った円形を呈しており中央に位置するP4は柱穴となろう。西に大きく段上に開口した落ち込みは本跡とは別の土坑と思われる。本跡の底面より数cm低い。遺物は小片が若干出土しているが図示できるような土器はみられなかった。

SK-029 (第11・19図、図版5・17・19)

本跡にみられるピットはP2を除くとすべて20cm未満と浅い。底面では若干凹凸が認められた。P2は60cmを越える深さとなり遺物も集中的に出土している。おそらく小堅穴とは異なる性格を有した遺構と思われる。遺物10・13～15は覆土上層から出土しておりP2の窪みに投棄されたものと考えられる。10は口縁部が約1/3遺存する連弧文系の深鉢である。13は同一個体である。11は底部で燃糸文を地文とし2本一組の沈線が垂下する。12も燃糸文を地文に用いている。棒状工具による刺突は左から右へ移動している。18・19は曾利系の深鉢である。ともに胴部片で18は大きく湾曲する胴部となる。いずれにしても本跡では連弧文系の土器群が主体となっており、おそらく小堅穴とP2も土器形式からみれば同一型式の中に取まるものといえる。

SK-033 (第11・20図、図版5・20)

本跡は北側部分の傾斜地が損壊していたため、その一部は調査できなかつた。形状や壁面等も整ったものとは言いがたい。遺物は多く出土したが、小片や器面が磨耗していたため3点だけを図示した。1・2は口縁部片で口縁と平行に隆帯がみられる。3は口辺部片で枠内に縄文を充填したキャリバータイプの深鉢となろう。時期的には加曾利EⅡ式期とみなされる。

SK-036 (第11・20図、図版20・21)

本跡は不整形を呈している。掘り込みはしっかりしたもので65cmと深い。出土遺物も多く土器片は100点を越えるが図示のできるものは少なかった。4は口縁部で隆帯が縦方向に貼付されている。5も口縁部片で条線による器面整形がみられる。時期的には加曾利EⅡ式の終末からⅢ式となろう。6・7は垂下する隆帯が特徴的である。SK-029で出土した曾利系に分類できる深鉢である。8は打点部に整形のための二次剥離が認められる。残された形状から石製の素材とも思われる。

SK-039・040 (第12・20図、図版5・17、20)

本跡は土坑も含めて複雑な重複関係にあり、個別の形態も正確には把握できなかつた。平面形も他とは異なるが一定の大きさであったためここに含めた。遺物の出土も少なく、SK-040では小片が9点だけであった。一方、SK-039では数十点を出土し、図示できる底部もみられた。図示した底部は、器面に条線のみが残されるものであり、この条線から推測すると曾利系の範疇に入るものと思われる。

Bタイプ

SK-020 (第12・19図、図版5・19)

本跡は前述したSK-043・044と重複して検出されたものであり、SK-043と比較すると約20cmほど深い掘り込みとなっている。おそらく本跡のほうが新しく構築されたものであろう。遺物は土器片が約30点出土しており、1はSK-044出土の20と、2は同様にSK-044出土の21と同一個体となる。3は縄文のみが施文されている胴部片である。時期的には加曾利EⅠ式期となろう。

SK-027 (第13・19図、図版19・21)

本跡は掘り込みが浅く、壁も崩れるように傾斜したものであった。出土遺物も少ないが土器片と石器が出土している。6は縦方向に直線状に施された沈線間に刷毛目状の器面整形が観察できる。7は地文に縄文が施されている。時期としては加曾利EⅡ式となろう。8は刃部の失われた磨製石斧の頭部を敲石として再利用したものである。きれいな楕円形を呈した断面から磨製石斧の一端を垣間見ることができる。下端は敲打により著しく磨耗している。

SK-030・031・032 (第13・19図、図版17・20・21)

3基が重複したものであり、中央に位置するSK-031の掘り込みが最も深い。次いでSK-032となるが、南側には底面より約10cmの段差が設けられている。出土遺物は、SK-030では僅少で、SK-031・032では各20点ほどの遺物が検出された。そのうちSK-031では5点を図示した。20・21はキャリバータイプの口縁部で、口縁直下に隆帯が貼付された深鉢である。22は底部片で僅かに縄文が遺存する。23は薄手の剥片を用いた石鎌で、先端部を欠損する。24は磨石の欠損品であり、表面は研磨されたように滑らかである。側面では若干の打痕も観察できる。SK-032では4点を図示した。25は縦方向に複数の沈線が施される。26は口縁部で直下に浅く幅広の沈線がみられる。27は条線により器面が整形されている。いずれも加曾利

EⅡ式に属するものである。28は左右対称とはいえないが欠損のみられない石鏃である。

SK-037 (第13・20図、図版17)

本跡はBタイプの中でも小規模なものである。遺物は口縁部を欠損した大型の深鉢が横たわるような形で出土した。地文には縄文が施され、垂下する沈線間は磨り消される典型的な加曽利EⅡ式に位置づけられる土器である。

SK-058 (第13・20図、図版20)

本跡には不整形な一部がみられるものの40cm余りの掘り込みであった。出土遺物は数点と少なかったが、図示できる破片が2点みられた。30は波状口縁を呈する部分で、口唇部は丸く整形されている。周囲にも沈線の一部が認められるため杵状に区画されたものであろう。31には口縁直下に浅いがはっきりとした沈線が横走する。時間的にはいずれも加曽利EⅡ式となろう。

SK-074 (第14・21図、図版20)

本跡ではピットが2か所で検出されたが、P2は底面下85cmを計測する深いピットであった。遺物は少なく図示できるものは1点のみであった。キャリバータイプの深鉢と思われる。口縁と平行に貼付された隆帯の上下には沈線が施される。

第3表 久保塚ノ台遺跡1小竪穴計測表

(数値単位=cm)

遺構番号	位置	形状	タイプ	長径	短径	深さ	ピット数	P番号	深さ	備考
1	SK-002	4E-00	不整形円形	A	167	155	14	1	1	32
2	SK-011	3D-83	円形	A	170	165	30	2	1	42
									2	13
3	SK-015	3C-88	楕円形	A	160	145	50	1	1	26
4	SK-016	4C-08	円形	A	155	143	16	3	1	38
									2	18
									3	12
5	SK-017-2	3C-78	楕円形	A	155	132	38	6	1	12
									2	39
									3	19
									4	10
									5	20
									6	32
6	SK-019	3C-86	円形	A	250	235	32	3	1	50
									2	8
									3	7
7	SK-021	3D-72	円形	A	277	226	20	6	1	11
									2	12
									3	49
									4	70
									5	10
									6	12
8	SK-029	5D-17	不整形円形	A	224	208	22	4	1	11
									2	66
									3	18
									4	11
9	SK-033	3D-69	不整形円形	A	233	232	22	0		
10	SK-034	3C-59	円形	A	230	230	35	0		第5図参照
11	SK-036	3C-44	楕円形	A	265	208	65	0		
12	SK-039	3D-95	不整形	A	165	-	25	1	1	7
13	SK-040	3D-96	不整形	A	214	-	15	9	1	43
									2	10
									3	18
									4	35

	遺構番号	位置	形状	タイプ	長径	短径	深さ	ビット数	P番号	深さ	備考
13									5 6 7 8 9	21 56 17 15 14	
14	SK-043	3 C-76	円形	A	-	-	-	-	-	-	
15	SK-044	3 C-77	-	A	-	-	20	1	1	32	
16	SK-045	4 C-46	円形	A	178	177	28	3	1 2 3	16 7 26	
17	SK-046	4 D-05	不整形	A	165	105	19	1	1 2	5 10	
18	SK-051	4 D-17	円形	A	160	153	18	2	1 2	45 27	
19	SK-010	3 D-64	円形	B	130	127	42	0			
20	SK-020	3 C-77	円形	B	132	130	52	0			
21	SK-026	4 D-98	楕円形	B	107	100	10	1	1	-	
22	SK-027	4 D-97	楕円形	B	145	128	10	0			
23	SK-030	4 E-13	楕円形	B	175	-	16	0			
24	SK-031	4 E-04	不整形円形	B	125	115	33	0			
25	SK-032	4 E-23	楕円形	B	-	143	27	0			
26	SK-035	3 C-97	円形	B	126	-	35	0			
27	SK-037	3 D-75	楕円形	B	103	93	18	0			加曽利EⅡ式口縁部
28	SK-050	3 D-97	円形	B	136	130	27	2		-	一部複乱
29	SK-058	4 D-27	不整形円形	B	123	116	42	0			ビットとの重複か
30	SK-068	4 E-52	円形	B	125	119	5	1	1	10	
31	SK-074	4 E-09	円形	B	133	122	22	2	1 2	7 85	
32	SK-076	3 D-87	隅丸方形	B	130	126	33	1	1	10	

第3節 土坑

土坑は、前出の小堅穴と比較してより小規模なタイプを主体として、平面形が楕円形や不整形といったものや掘り込まれた基底面の立ち上がりが緩やかな作りとなっている遺構を「土坑」として分類した。遺構番号には前出の小堅穴と同様に「SK」を用いたため遺構番号が継続していない点については、遺構番号は付けたものの植物根や後世の掘削等による落ち込みであったり、皿状の浅い落ち込みにも番号を付したため整理の過程において欠番が生じていることを付記しておきたい。また、柱穴状のビットでは「SH」として遺構番号をつけてみたが、図示できるような遺構や遺物はみられなかったため掲載に際しては省略した。なお、本節でも遺物を出土した土坑を中心に記述していくこととし、土坑個々の詳細については計測表としてまとめた。ビットは底面からの深さとした。

SK-001・069 (第14・18図、図版17・18)

本跡は、形状についてみれば前述したBタイプの小堅穴に加えることもできるが、大きく傾斜する壁面となっているため土坑とした。遺物は10点ほど出土したが、いずれも覆土上層から検出されている。1は底部が約1/2遺存したものである。縄文は複節の原体を使用しており、沈線間での磨り消しは認められない。2は1/2ほどが遺存した手捏土器で、僅かに口縁部を欠損する。器内外面では凹凸が著しい。3・4は同一個体であり、口辺部に貼付された隆帯が特徴的といえる。4は胴部片で沈線による懸垂文がみられる。これらは時期的におおむね加曽利EⅠ式となろう。なお、SK-069では土器の細片数点が出土したのみであった。

SK-003 (第10・18図、図版18・21)

本跡はSK-002と一部が接して掘り込みは60cmの深さを計測している。覆土上層から図示できる大型の破片が数点出土した。7・8は波状口縁で隆帯の貼付が確認できる。9の隆帯の下には渦巻文が想定できる。10は平縁で内彎するような作りである。幅広の沈線が垂下し沈線間はいきれいに磨り消されている。11・12も同様な磨り消しを有する。時期的には加曾利EⅡ式でも新しいタイプか一部はEⅢ式となろう。

SK-005 (第14・18図、図版18)

本跡もSK-003同様に掘り込みが深く堆積土も近似している。出土遺物は少なく図示できる土器は1点のみであった。口縁部片で縄文施文の痕跡が認められるところから加曾利EⅡ式と考えられる。

SK-006 (第14・18図、図版18)

本跡は北側に柱穴状のピットが検出できた。しかし、その深さと規模から推定し本跡に伴うものではないようである。覆土中から若干の土器片が出土したが、図示できる土器は1点のみであった。口辺部で器面には縄文が施文されているが、右隅の剥落部分にも縄文の痕跡が観察できる。つまり、幅広の隆帯部分を貼付する以前に縄文施文を実施していた証左となろう。時期的には加曾利EⅡ式でも新しいものと思われる。

SK-018 (第10・18図、図版5・18)

本跡は西側の覆土上面において砂質粘土の層がみられたため粘土部分を追っていくとカマド状の輪郭を呈したため、奈良・平安時代の住居跡を想定して調査をすすめた。だが、当該期の遺物は見出せなかったため土坑として本節で取り扱うことにした。出土遺物は20点ほどみられたが、図示できるものは掲載した口縁部1点のみである。時期は加曾利EⅡ式かEⅢ式となろう。

SK-022 (第19図、図版19)

本跡はSK-010の南に隣接して検出された土坑で掘り込みは浅く、平面形は整った円形となる。図示できた土器片は2点あり、4は口縁部の小片で、5は底部となる。底部の上部に2本一組の沈線が認められる。

SK-028 (第9・19図、図版19)

本跡はSK-016の南2.5mに位置し、鶏卵状を呈した土坑となる。図示できる口縁部片が出土している。波状口縁下には沈線によって描かれた楕円文の中を縄文で充填する。時期は加曾利EⅢ式期と捉えてよいものであろう。

SK-042 (第12・20図、図版20)

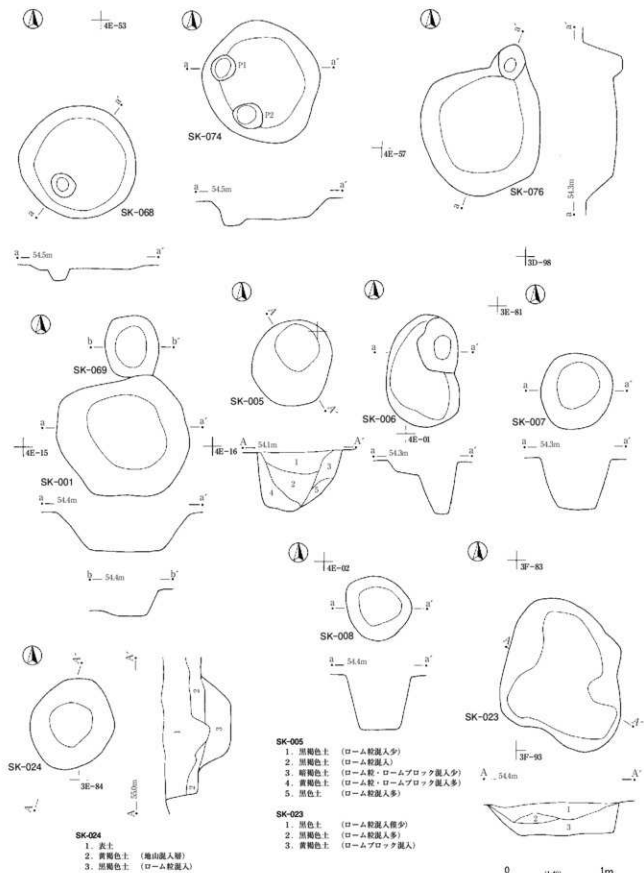
本跡はSK-019の壁面に穿たれた柱穴状の遺構である。遺物は図示したように小規模な遺構としてみれば多いといえよう。SK-019との関連は把握できなかった。図示した土器はおおむね加曾利EⅡ式の範疇に入るものである。19は無文の浅鉢と考えられる。

SK-049 (第15・20図、図版20・21)

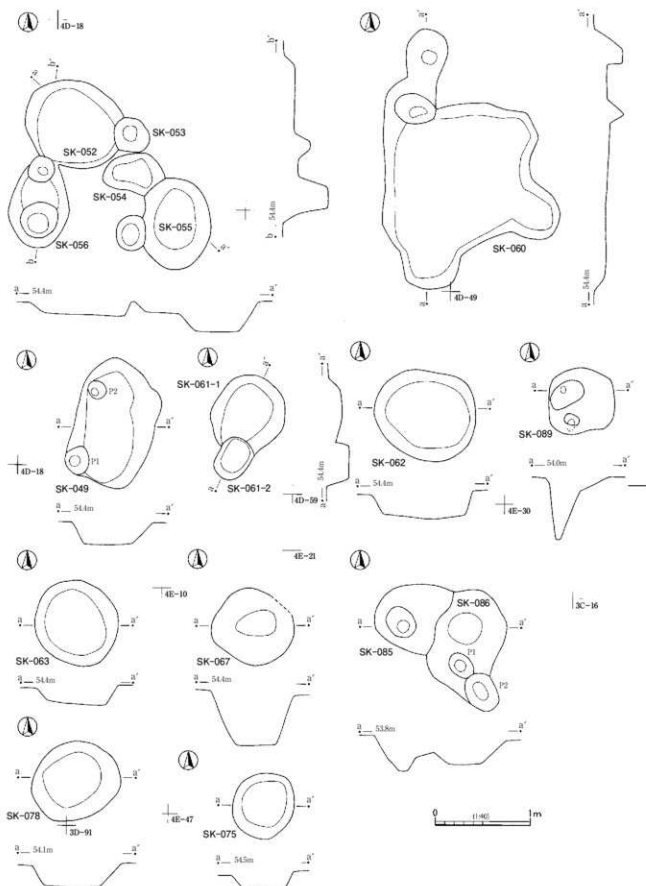
本跡は整った掘り込みとはいえないが長楕円形を呈している。出土遺物には土器と石器がみられ、胴部片の2点と石鏃片を図示した。25は左端に沈線がみられる。27は有茎鏃を製作中に破損したものと考えられる。有茎部の表裏面にはきれいに押圧剥離が施されている。

SK-054 (第15・20図、図版21)

本跡は集中して検出された土坑群中の1基で形態的に整ったものとはいえず掘り込みも浅い。若干の土器片も出土したが図示できるものはなかったが、石鏃の未成品が出土している。一部には自然面もみられ



第14図 SK-001・005・006・007・008・023・024・068・069・074・076



第15图 SK-049 · 052 · 053 · 054 · 055 · 056 · 060 · 061-1 · 061-2 · 062 · 063 · 067 · 075 · 078 · 085 · 086 · 089

るところから扁平な小礫を剥離し石鏃の素材としたものである。

SK-055 (第15・20図、図版20)

本跡はSK-054と接して検出されたものであり、きれいな楕円形を呈している。図示できる胴部片が出土した。3本一組の沈線が垂下する。磨り消しが認められないため加曾利EⅠ式となろう。

SK-062 (第15・21図、図版20)

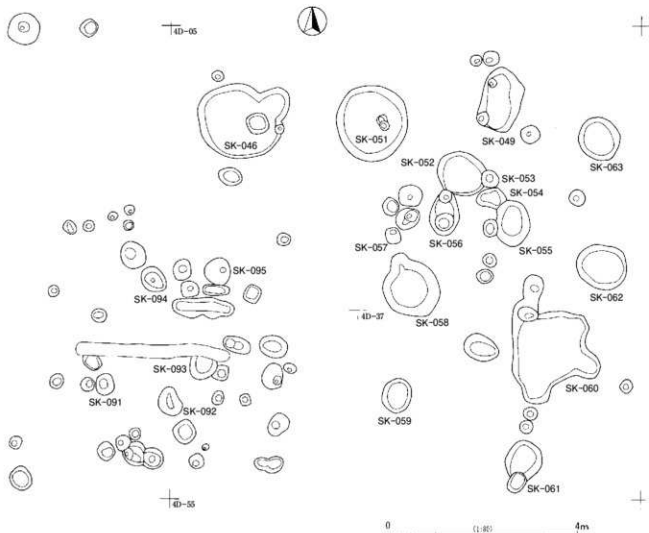
本跡は東西に長軸をもち壁面もしっかりした土坑となっている。出土遺物は土器のみであるが、図示できるものが3点みられた。1・2は口縁部片で、口縁直下には楕円によって区画された縄文がみられる。3は磨消帯の幅は広がっている。いずれも加曾利EⅡ式とみてよいであろう。

SK-067 (第15・21図、図版21)

本跡は北東の一部が陥穴状の遺構と重複していた。底面の形は楕円形となるが、掘り込みも深く壁面もしっかりしたものであった。出土した石器は敲石で表面には広範囲に打痕の痕跡が認められる。裏面でも中央部に打痕が残る。

SK-070 (第21図、図版21)

本跡は楕円形を呈した小規模なピットで覆土中から先端の一部が欠損した石鏃が出土している。表裏両面には石鏃らしい丁寧な整形が施されている。



第16図 SK-046・051・091・092・093・094・095

SK-071 (第21図、図版21)

本跡も小規模なものでSK-070から南東へ1.5mほど離れて検出されたものである。ここでも石鏃が出土している。形状は不整形で先端部と左側を大きく欠損している。

SK-077 (第12・21図、図版20)

SK-040内で検出されたビットで小竪穴に伴うものかどうか即断できなかったため土坑として取り扱った。出土土器は口縁部片で口縁直下に3条の沈線が横走する。沈線以下は竹管状工具による縦方向の沈線で充填される。時間的には加曾利EⅡ式でも新しいタイプとなろう。

SK-085・086 (第15・21図、図版20)

本跡は東西に接したような形で検出されたものである。若干の土器片が出土したが図示できるものは少なかった。いずれも胴部で沈線間に磨り消しが認められる。

SK-087 (第17・21図、図版5・17)

3C-06と3C-16の間に深鉢の底部が単独で出土したものをSK-087とした。周辺は図示したように柱穴状のビットは認められるが、跡跡を想定できるような痕跡は認められなかったため、単独の土坑として扱った。このような検出例の状況から埋葬とも考えられる。出土した土器は胴下半部から、底部が遺存するもので縄文地に3本一組の沈線が認められる。沈線間は狭いが磨り消されているようである。時間的には加曾利EⅡ式期となろう。

SK-091 (第16・21図、図版21)

本跡は柱穴状のビットで掘り込みも深く、周辺では多数のビットが確認されている。住居跡の存在も考えられるためSK-093を中心に精査を継続したが、焼土の痕跡や一括土器等を発見することはできなかった。出土した石器は敲石で表面の中央部には凹みが認められ、長期にわたって使用されていたものと思われる。

SK-095 (第16・21図、図版21)

本跡もSK-091と同様のビットで敲石が1点出土した。下端部には明確な打痕が認められる。

第4表 久保塚ノ台遺跡1土坑計測表

(数値単位=cm)

遺構番号	位置	形状	長径	短径	深さ	ビット数	P番号	深さ	備考	
1	SK-001	4E-05	不整形	145	134	38	0			
2	SK-003	4E-00	楕円形	98	77	60	0			
3	SK-004	4E-00	不整形	62	55	26	0			
4	SK-005	3D-99	楕円形	90	81	60	0			
5	SK-006	3E-91	楕円形	119	77	15	1	1	40	P1本跡に伴うものではない
6	SK-007	3E-81	円形	80	76	55	0			
7	SK-008	4E-02	楕円形	70	63	60	0			
8	SK-017-1	3C-78	楕円形	130	105	46	0			
9	SK-018	3C-77	不整形	188	165	50	3	1 2 3	34 23 31	
10	SK-022	3D-74	円形	55	52	7	0			SK-010に隣接
11	SK-023	3F-83	不整形	168	140	35	0			
12	SK-024	3E-73	楕円形	100	86	30	0			
13	SK-025	4C-28	楕円形	77	60	8	0			SI-007カ跡 (第9図参照)
14	SK-028	4C-17	楕円形	86	55	24	0			第9図参照
15	SK-038	3D-75	円形	57	50	5	0			図省略
16	SK-041	3D-95	不整形	-	-	25	0			覆乱有り
17	SK-042	3C-87	円形	40	40	35	0			

	遺構番号	位置	形状	長径	短径	深さ	ビット数	P番号	深さ	備考
18	SK-049	4D-08	長楕円形	136	85	25	2	1	13	P2-記録なし
19	SK-052	4D-18	楕円形	108	90	13	0			
20	SK-053	4D-18	円形	40	36	-	0			
21	SK-054	4D-18	不整形	65	45	10	0			
22	SK-055	4D-28	楕円形	95	70	30	0			
23	SK-056	4D-17	楕円形	95	65	25	2	1 2	10 30	
24	SK-057	4D-27	楕円形	35	22	29	0			
25	SK-059	4D-37	楕円形	255	235	35	0			
26	SK-060	4D-39	不整形	220	190	20	2	1 2	18 16	
27	SK-061-1	4D-48	楕円形	-	75	14	0			
28	SK-061-2	4D-48	楕円形	45	35	23	0			
29	SK-062	4D-38	楕円形	107	94	26	0			
30	SK-063	4D-19	楕円形	94	86	20	0			
31	SK-067	4D-29	隅丸方形	82	76	57	0			
32	SK-069	4E-06	楕円形	65	57	25	0			
33	SK-070	4E-14	楕円形	35	24	12	0			
34	SK-071	4E-25	円形	40	38	8	0			
35	SK-072	4E-24	円形	52	50	64	0			
36	SK-073	4E-34	円形	36	35	41	0			
37	SK-075	4E-37	円形	69	65	15	0			
38	SK-077	3D-86	楕円形	43	38	-	0			SK-040に伴うビットか
39	SK-078	3D-81	楕円形	93	81	24	0			
40	SK-079	3D-83	円形	36	35	65	0			
41	SK-084	4D-02	円形	50	47	63	0			
42	SK-085	3C-15	(楕円形)	-	75	41	0			
43	SK-086	3C-15	楕円形	105	75	25	2	1 2	3 11	
44	SK-087	3C-16	-	-	-	0				土器のみ単独出土
45	SK-088	3C-87	楕円形	55	35	52	0			
46	SK-089	3C-77	隅丸方形	80	68	14	2	1 2	65 11	
47	SK-090	3C-76	円形	60	58	40	0			
48	SK-091	4D-34	円形	45	40	65	0			
49	SK-092	4D-34	不整形	61	45	44	0			
50	SK-093	4D-35	(円形)	62	(50)	17	0			一部が溝により削平
51	SK-094	4D-25	円形	40	35	38	0			
52	SK-095	4D-25	円形	57	56	87	0			
53	SK-100	3C-38	円形	54	53	12	0			

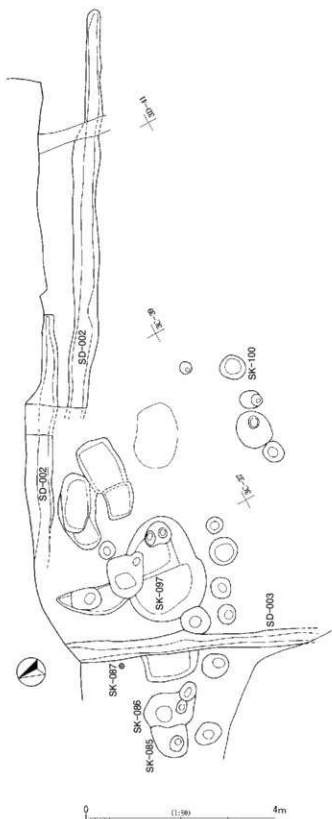
第4節 溝状遺構

今回の調査で3C・4C区と3D区の北側に溝状の落ち込みが認められた。それぞれSD-001からSD-003として調査を進捗させていったが出土遺物は少なく遺構の時期を決定づけるまでには至らなかった。SD-001は4C-30・40グリッドから南に向かう形の溝状遺構であるが、調査区ぎりぎりでは検出されたため2mほどの調査で終わった。SD-002-1は3D区から3C区へと続くようであり、一部はSD-002-2と平行しつつ北西に進んでいくようであった。

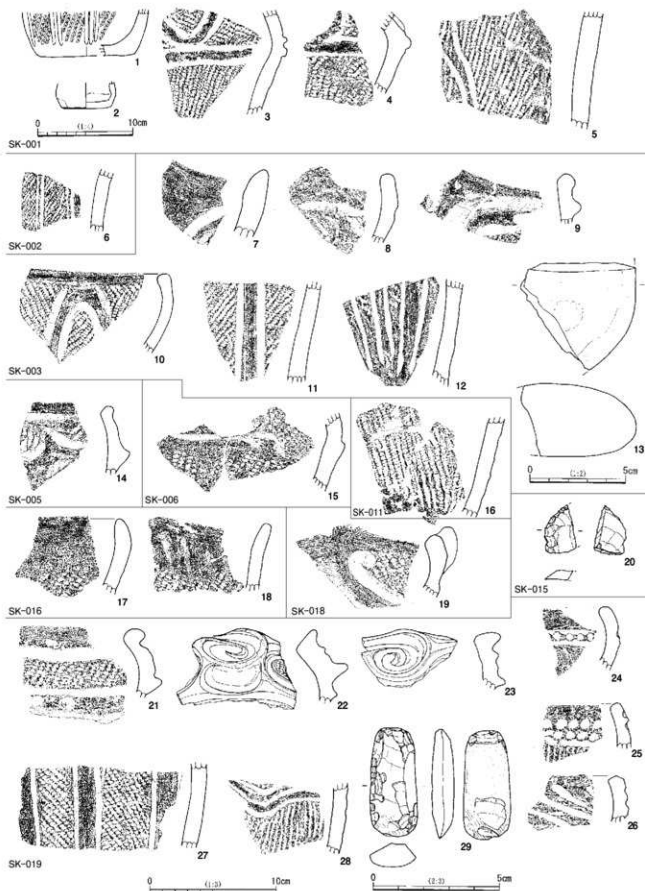
SD-003は両端が調査区外へ向かっているため、5mほどの調査で終了せざるを得なかった。こうした溝状遺構は後述する久保塚ノ台遺跡2でも検出されており、本遺跡よりも規模が大きく遺存状態も良好であった。

出土遺物も少数ながら良好な近世陶磁器が出土している。そして第2章でも触れたが、久保塚ノ台遺跡1と久保塚ノ台遺跡2は同一台地上に存在している遺跡であるためここで検出された溝状遺構も近世に属

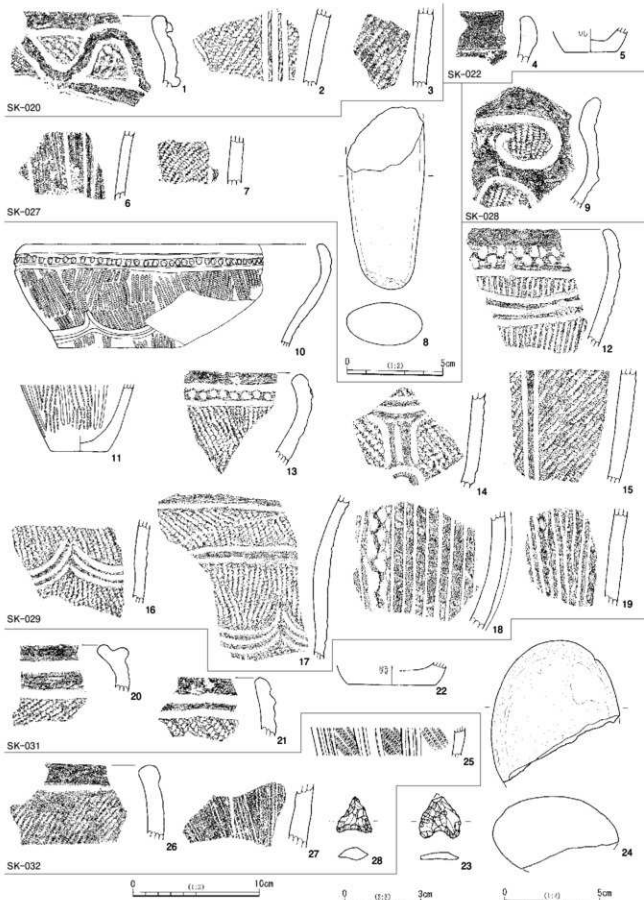
するものと考えても間違いのないであろう。ただ、遺物は近世陶磁器や縄文土器の小片と若干の石器が出土したものの、図示できる遺物は石器だけであったため陶磁器については久保塚ノ台遺跡2で触れることにしたい。



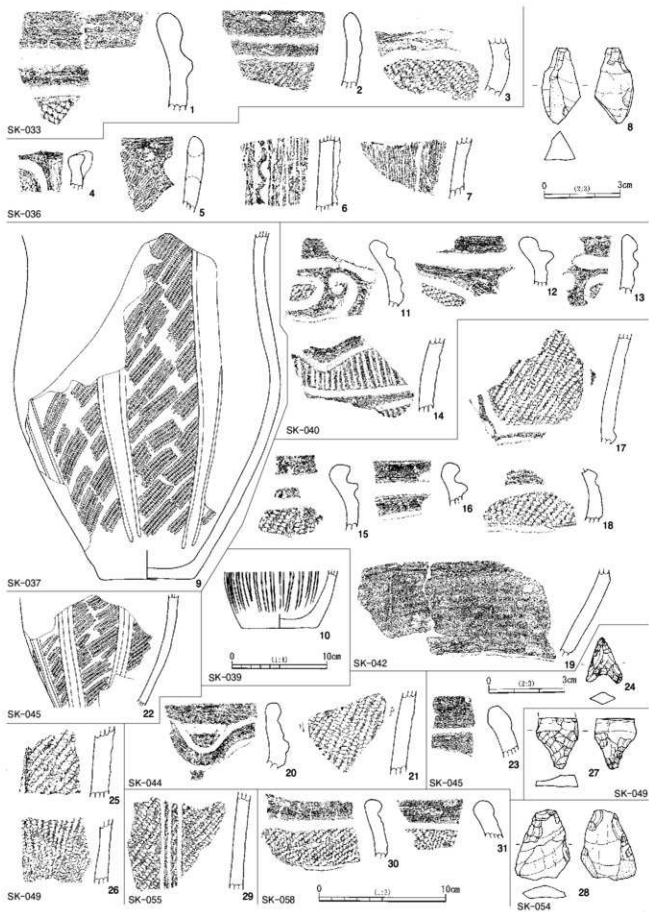
第17図 SK-087・097・100、SD-002・003



第18图 SK-001·002·003·005·006·011·015·016·018·019出土遺物



第19回 SK-020・022・027・028・029・031・032出土遺物



第20图 SK-033·036·037·039·040·042·044·045·049·054·055·058出土遺物

第5節 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物についてみると、縄文土器は出土はしているが、小片あるいは器面が磨耗しており図示に適さないものが多かった。そのため本節では石器群についてのみ掲載することとした。

14・15は石鎌であるが、2点とも未成品である。14は欠損部がみられないため成品とも思われるが、基部の作りや側縁の整形から未成品とした。15は側縁の表裏に加工がみられる。製作途中で破損したものであろう。

17は楔形石器である。扁平な小礫の一端に両面から加撃しているため楔形石器とした。刃部は4回～5回の剥離によって簡単に作り出されている。

18は打製石斧である。頭部が欠損した打製石斧で表裏面に自然面がみられるため扁平な礫を利用して刃部や側縁を作出したものである。刃部には打痕のような痕跡もみられる。

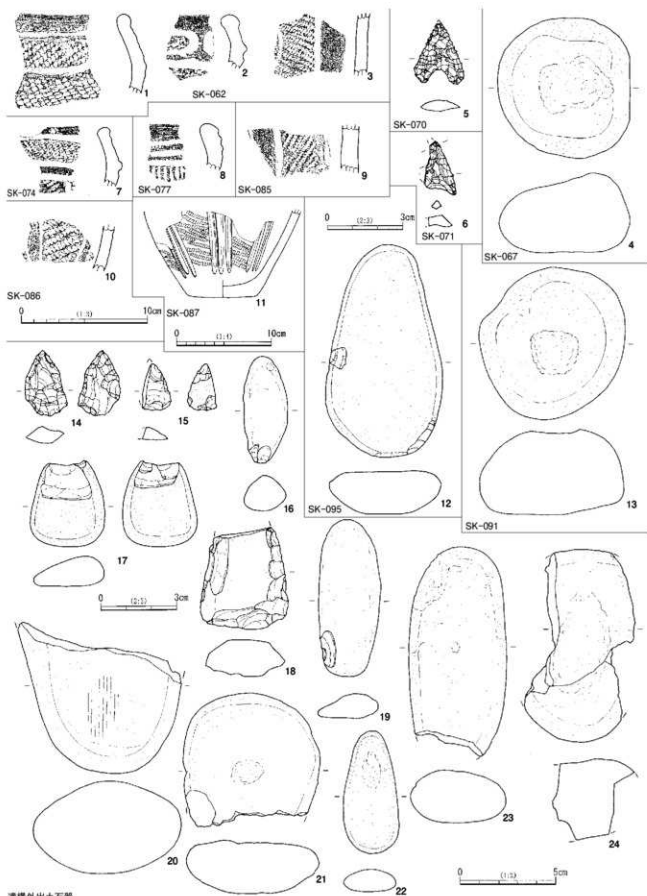
20は大きく欠損した磨石であり表面の斜線部では研磨したような滑らかな面が観察できる。

21・23・24は敲石で、いずれも欠損している。21・24は磨石を兼用したものである。中央部には敲打による凹みが認められる。23は左上部側面に著しい打痕がみられ、欠損部にも若干の打痕が認められる。

16・19・22は石器素材である。16は下端部に2回の剥離が試みられている。19・22には剥離と軽い打痕がみられる。19や22は小型磨製石斧の素材ともなり得る扁平な礫である。

第5表 久保塚ノ台遺跡1出土石器一覧表

挿図No	出土地点	遺物番号	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
第6図 5	SI001	23	石鎌	黒曜石	22.21	(15.55)	4.42	(1.0)	
第6図 6	SI001	6	楔形石器	黒色頁岩	38.47	40.45	6.6	16.5	
第6図 7	SI001	20	スクレイパー	ガラス管デイスイト	43.34	34.28	13.38	18.7	
第6図 8	SI001	7	楔形石器	頁岩	30.37	28.16	7.88	8.9	
第6図 9	SI001	31	打製石斧	石英斑岩	(51.98)	(44.29)	(19.43)	(58.9)	
第6図 12	SI002	20	石鎌	黒曜石	15.69	16.41	4.4	0.9	
第6図 13	SI002	37	楔形石器	黒曜石	20.9	18.15	7.06	2.7	
第6図 14	SI002	-	敲石	石英斑岩	121.25	66.33	40.82	456.8	
第6図 15	SI002	33	敲石	ホルンフェルス	127.76	81.57	43.74	593.6	
第8図 15	SI006	7	敲石	石英斑岩	93.42	62.56	47.45	398.6	
第8図 16	SI006	3	敲石	砂岩	73.84	40.85	17.85	85.6	
第18図 13	SK003	2	磨石	石英斑岩	(54.27)	(60.4)	37.77	(160.3)	
第18図 20	SK015	-	石鎌	チャート	18.98	(12.28)	4.15	(1.3)	
第18図 29	SK019	7	磨製石斧	チャート	43.17	19.11	9.38	10.8	
第19図 8	SK027	1	敲石	砂岩	(96.66)	41.11	23.39	(118.8)	
第19図 23	SK031	3	石鎌	黒曜石	(16.76)	16.23	2.88	(0.8)	
第19図 24	SK031	2	磨石	砂岩	(77.47)	66.7	(22.72)	(306)	
第19図 28	SK032	1	石鎌	チャート	14.45	14.1	4.36	0.7	
第20図 8	SK036	3	潤片	チャート	30.04	15.64	11.24	4.5	
第20図 24	SK045	8	石鎌	チャート	18.75	14.09	5.04	0.8	
第20図 27	SK049	2	石鎌	チャート	(19.83)	16.73	5.26	(1.8)	
第20図 28	SK054	1	石鎌	頁岩	28.06	21.4	4.06	2.6	
第21図 4	SK067	2	敲石	石英斑岩	75.51	69.57	41.9	287.5	
第21図 5	SK070	2	石鎌	黒曜石	24.19	19.84	4.06	1.2	
第21図 6	SK071	1	石鎌	黒曜石	(23.14)	(13.48)	5.29	(1.2)	
第21図 13	SK091	1	敲石	チャート	78.12	77.67	(49.31)	(427.7)	
第21図 12	SK095	1	敲石	石英斑岩	112.09	62.23	23.32	232.0	
第21図 22	SK102	1	敲石	ホルンフェルス	64.61	29.15	12.92	33.1	
第21図 23	SH002	2	敲石	砂岩	11.06	51.43	27.84	236.5	
第21図 19	SI1003	1	礫	角閃岩	82.76	33.18	13	52.1	
第21図 15	SD002	1	石鎌	チャート	(36.76)	(11.2)	4.48	(1.1)	
第21図 14	トレンチ	47	石鎌	チャート	25.82	16.82	6.21	2.7	
第21図 16	トレンチ	17	礫	流紋岩	56.4	23.1	19.57	32.6	
第21図 17	トレンチ	35	楔形石器	砂岩	(34.14)	30.08	11.79	(16.1)	
第21図 18	トレンチ	42	打製石斧	砂岩	(53.88)	46.16	21.68	(73.1)	
第21図 20	トレンチ	34	磨石	砂岩	(75.64)	77.12	48.12	(362.5)	
第21図 21	トレンチ	17	敲石	石英斑岩	(66.77)	72.37	29.39	(207.7)	
第21図 24	トレンチ	32	敲石	砂岩	102.03	(44.05)	46.28	(321.6)	



遺構外出土石器

第21図 SK-062・067・070・071・074・077・085・086・087・091・095、遺構外出土遺物

第4章 久保堰ノ台遺跡2

本遺跡は上層6,500㎡を調査した結果、住居跡16軒、小竪穴26基、土坑118基と数条の溝を検出できた。住居跡は4 J区とその周辺で12軒以上が集中的に検出された。とりわけ中期の加曾利EⅡ式期では一定規模の集落を構成していたものであろう。小竪穴は住居跡周辺で18基と東側で8基が検出されている。また土坑の分布は中央部の空白部を除き希薄ながらも全面にみられた。そのほかに調査区東側の5 O区や5 P区を中心としてピット多数が認められた。しかし、これらのピットの大半は遺構との関連を正確に把握することができなかった。

なお、住居跡については調査時点で遺物の出土状況から、その存在を想定して番号を付していったものである。しかし、整理作業を進捗させていく中で堆積土や遺物の出土量、炉跡や柱穴の存在等を検討した結果、遺構としての根拠を見い出せないものについてはすべて欠番として取り扱った。そのため遺構・遺物の記載については多々欠番が生じたことを付記しておきたい。

第1節 住居跡

SI-002 (第24図、図版8)

本跡は遺跡北側の4 I1区と5 I1区に跨がるような形で検出されたものである。形状は北壁部分をSI-010によって破壊されているが、径はほぼ5.3mの円形を呈していたものと思われる。掘り込みは15cm～20cmと浅く、覆土は分離できなかった。覆土の色調は粘土混入の黒褐色土であった。壁面は状態の良好な部分で20cmほど遺存しており、周溝は一周していたようである。さらに壁際に沿って柱穴が検出されており、深いものでは床面下20cmを超えるものもみられた。床面についてみると、南側から北方向に緩やかに傾斜しており、その差は15cmほどとなる。なお、床面下の堆積土は粘土を含む黄褐色土となっている。柱穴らしきピットは、壁に接したものを除くと12か所に認められる。主柱穴といえるピットは、その深さからP2、P4、P5、P7、P9、P12などが該当するものと思われる。炉跡は周囲を礫で囲んで作られており、大小の礫を合わせて25点が使用されていた。いわゆる石囲い炉としてよいであろう。図示したように、完形品ではないが明らかに石器として使用された痕跡を残す剥片なども出土している。また炉跡の中心部では床面下20cm以上を掘り込んでいた。

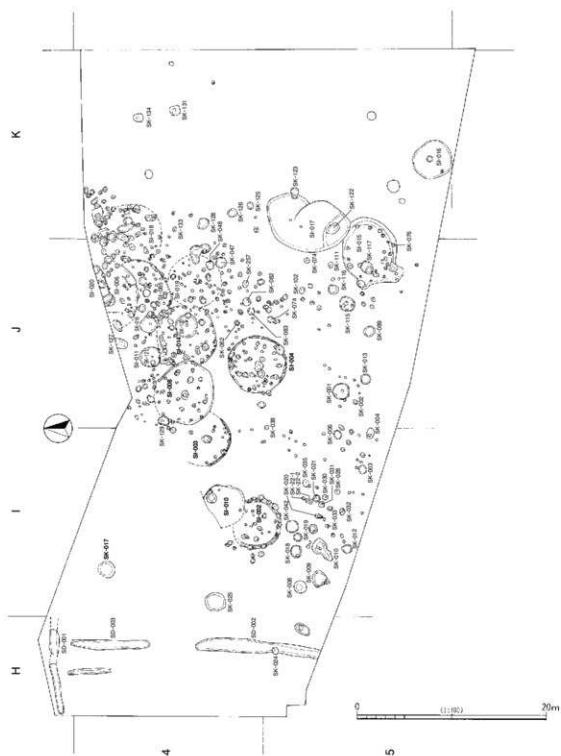
堆積土は、覆土が黒褐色土で覆われ、炉跡内は若干白色粘土が混入された黒色土であった。

遺物の出土状況についてみると、特に炉跡周辺では多量の土器・石器が出土している。さらに中央や北寄りに一括土器（2点）が出土し、1点は底部が上となり倒立した形であった。石器では炉跡の周囲から磨石・敲石・石皿、覆土中から尖頭器・石鎌などが出土している。石器以外の礫の石材はほとんどが粒子の粗い軟質砂岩であった。

本跡の時期は多数出土した一括土器から加曾利EⅡ式期となろう。

SI-002 ビット一覧表 (数字は床面からの深さ、単位=cm)

P 1 - 9	P 2 - 20	P 3 - 9	P 4 - 49	P 5 - 21	P 6 - 15	P 7 - 48	P 8 - 14
P 9 - 37	P 10 - 9	P 11 - 12	P 12 - 24	P 13 - 26	P 14 - 10	P 15 - 26	P 16 - 107
P 17 - 19	P 18 - 18	P 19 - 22	P 20 - 22	P 21 - 16	P 22 - 14	P 23 - 27	P 24 - 15



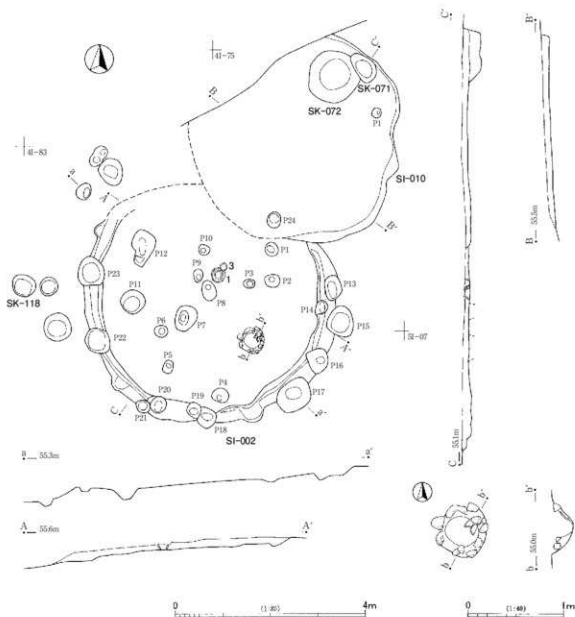
第22図 久保塚ノ台遺跡2全体図(1)



第23図 久保塚ノ台遺跡2(全体図2)

遺物 (第25~27・28図、図版22~24・63・64)

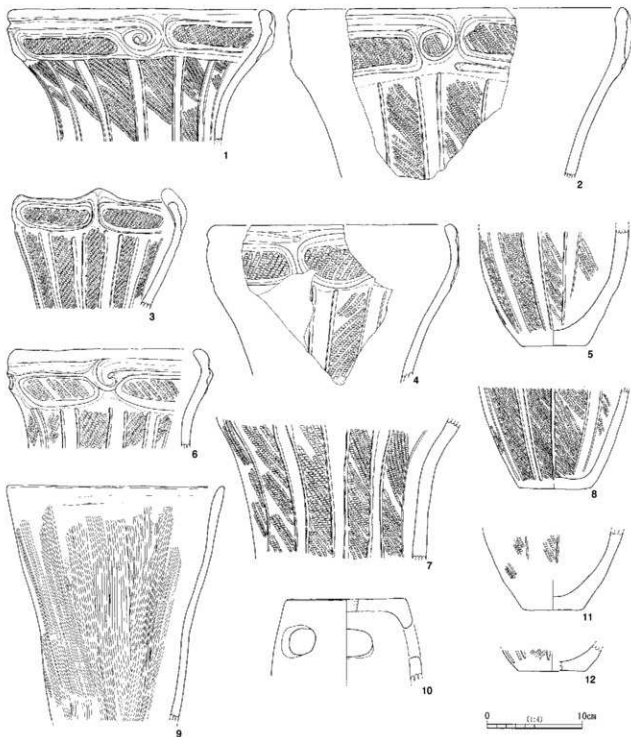
土器 ここでは実測可能な一括土器が多く出土した。1~8は同様な文様構成となる。1・2・6の口辺部には渦巻文がみられるが、2や6は簡略化されている。胴部は垂下する沈線間の縄文を磨り消している。1は、住居跡のほぼ中央に穿たれたP8とP9に隣接する位置で3と接して検出されたものである。いずれも底部が欠損しており、口縁部が被熱しているため一時的に炉跡として使用されたものであろう。2・4は大型の剥片であったため、径は推定による。13・14・16~21も同様なタイプとなろう。9はP7とP11の間で出土したものであり時間的にも近いものとなろう。器形は緩やかに外反するタイプで、器面は縦方向に櫛歯状工具で整形されている。他の一括土器と比較すると、器厚は7.5mm前後と薄い。8はP4の北で出土している。また10はP19の上部から出土した器台のような土器で、上面と側面及び内面はきれい



第24図 SI-002・010

に整形され、一部には磨き状の調整も認められる。15・23～25は半截竹管状の工具により縦方向や斜行する沈線と貼付した粘土帯により裝飾が施されている。これらは曾利系の土器となろう。22は摺糸文が施文されたものであり、いわゆる連弧文系の土器である。26・27には口縁直下に円形の刺突文が施される。22とはほぼ同時期のものといえよう。なお、これらの土器群は大半が石囲い炉の周囲から出土したものである。

石器 本跡では土器と同様に石器の出土量も他の住居跡を凌駕していた。器種も豊富で石鏃・楔形石器・



第25図 SI-002出土土器(1)

磨製石斧・打製石斧・磨石・敲石・石皿の7種がみられた。また11・14・15・17～20は石開い炉の一部となっていた。破損品を再利用したものと考えられ、被熱により一部赤化している部分もみられた。なお、石材や計測値については遺構外出土遺物の項で一覧表としてまとめてある。

1は尖頭器である。完形品であり、左右は非対称といえる。その形状や石材から旧石器時代に属するものとなろう。旧石器時代に属する唯一の製品である。

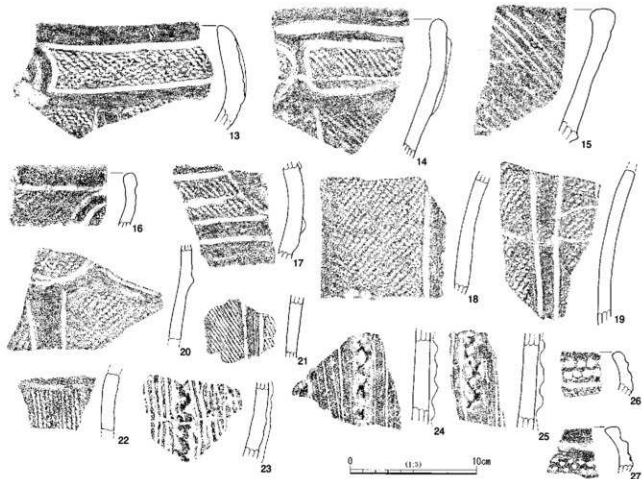
2・3は石鏃である。2点はともに欠損品である。3のように抉りをもたない幅広の大型品は概して作りが粗雑である。

4は楔形石器である。上部では両面からの剥離が観察できるため楔形石器とした。下部でも整形のための剥離が数回施されている。

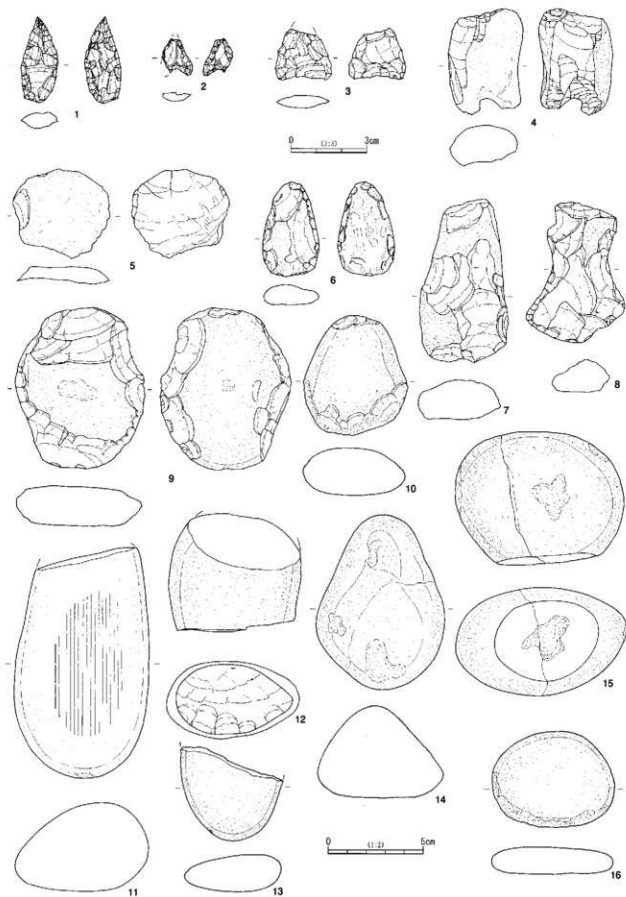
5は剥片である。石器に加工されてはいないが、一部に小さな剥離が施されている。石器として使用されたか、あるいは素材として剥離されたものであろう。

6は磨製石斧である。小型品で研磨部分は一部にしか認められない。刃部での研磨が明確に認められたため磨製石斧とした。周囲の剥離から打製石斧として再利用された可能性も否定できない。

7～9は打製石斧である。3点出土しており、大きな欠損は認められない。ただ、いずれも作りは粗雑であり、9は表裏面に打痕が認められる。また両側面を剥離し、上下を大きく剥離することによって刃部を作出している。簡単な作りであるが石斧としての条件は満たしているものといえる。



第26図 SI-002出土土器(2)

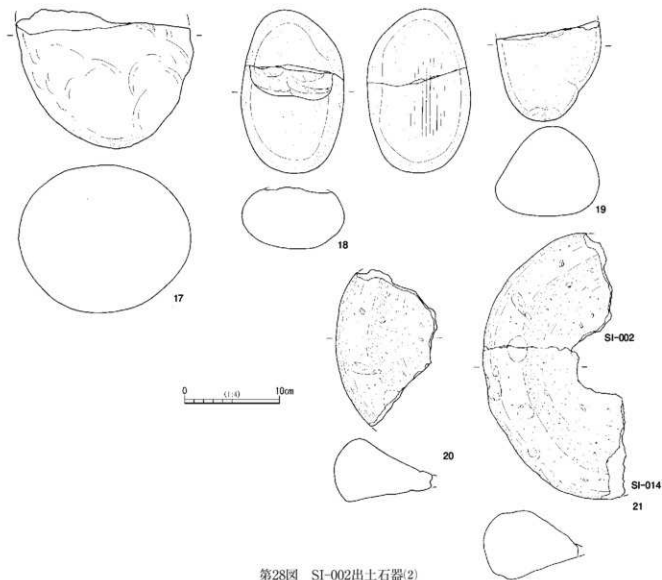


第27图 SI-002出土石器(1)

11～13・18は磨石である。11の下端には僅かではあるが打痕が確認できる。表裏面は側面と比較して滑らかな面がみられたため線描で表現した。12・13ではそれほど顕著な使用痕は認められない。18も11のようなタイプで表面の赤化は破損部でも確認できるため打割した後、炉に設置されたものであろう。

10・14～17・19は敲石である。10の上下端には顕著な打痕が観察できる。剥離はその時に生じたものであろう。また、表面の一部には滑らかな面もみられるため磨石としても利用されたものであろう。14では表面や側面だけでなく平坦な破砕面にも打痕が認められる。17は特異な存在といえよう。これも炉の周辺から出土しており、遺存する形状から約40%は欠損していると考えられる。遺存重量は4.75kgを計測するところから本来は9kgほどの重さであったろう。表面は被熱によるものか著しく剥落している。そのため使用痕等は確認できないが、球形で住居跡内出土という点を考慮すると道具として使用していたと考えることが妥当であろう。このため敲石として分類した。19も遺存部の重量が1.26kgで1/2以上は欠失している。打痕は下端部に明確に残っている。

20は石皿である。約1/4が遺存したもので中心部にむかって大きく凹んでおり長期間使用されたものであろう。21はSI-014と接合する石皿である。約1/2遺存している。



第28図 SI-002出土石器(2)

SI-003 (第29図、図版8)

本跡は前述したSI-002の北東約5mに位置し、4I-68グリッドで検出されたものである。ここでも地山は北方向に傾斜しており、本跡の約3/5の壁面は消失していた。遺存状態の良い南壁部分でも覆土の厚みは2cm～3cmと薄く、周溝が存在していたため辛うじて住居跡との境界を確認することができた。遺存した周溝部分から本跡の形状は円形で、その径は6m前後であったと考えられる。柱穴は、ピットが1か所に残されており、P1、P3～P5などは床面下の深さ(26cm～61cm)やその位置から柱穴の可能性が高い。そのほか、壁面に接したピットは壁柱穴と考えられる。床面の遺存部は比較的平坦であった。炉跡はしっかりとした姿で残されていた。南壁から2mほど離れて、長さ90cm、短径80cmの楕円形を呈していた。

堆積土は粘性のある黒褐色土であった。炉跡部分では3層に分離できた。第1層は黒褐色土(若干の土器片がみられ、焼土ブロックと炭化物を含む)。第2層は黒褐色土(焼土と炭化物を少量含む)。第3層は黄褐色土(黒色土と焼土、砂粒を少量含む)となり、焼土や炭化物を含有するところから炉跡とみて間違いないであろう。

出土遺物の出土状況についてみると、覆土中から土器片10数点出土したが一括品は認められなかった。石器は磨石や打製石斧、石鏃片などが出土している。

本跡の時期は出土土器からみて加曾利EⅡ式期でも新段階の時期となろう。

SI-003 ピット一覧表(数字は床面からの深さ、単位=cm)

P1-61	P2-8	P3-26	P4-33	P5-38	P6-31	P7-19	P8-20
P9-32	P10-50・31	P11-10					

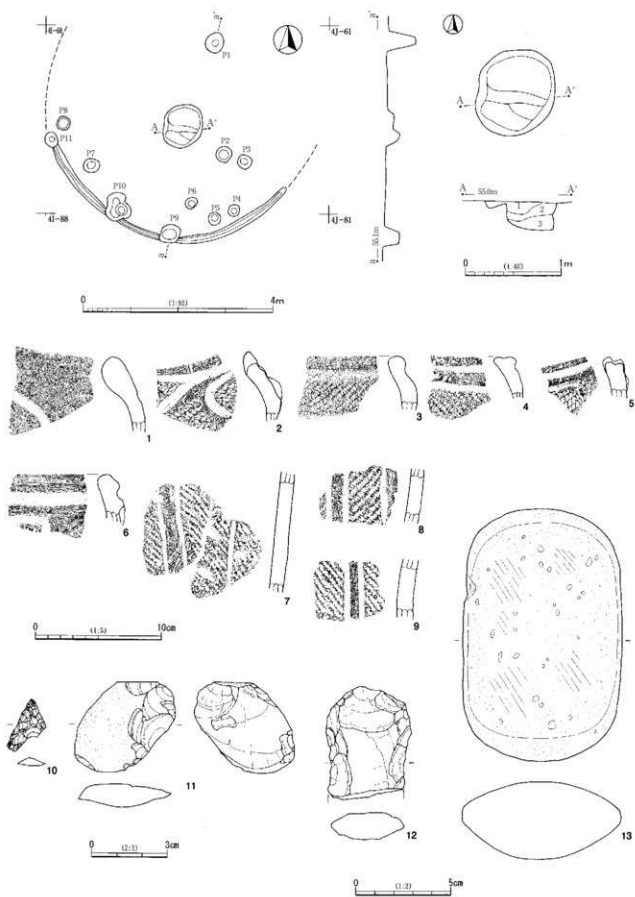
遺物(第29図、図版24・64)

土器 ここでは実測できるような一括土器はみられなかったため、図示できるような口縁部の大型破片を中心に羅列した。1は大きく内彎する波状口縁部であるが、磨耗により縄文の有無がはっきりしない。3は辛うじて単節のLRと判別できる。7～9は沈線間を磨り消した胴部片である。

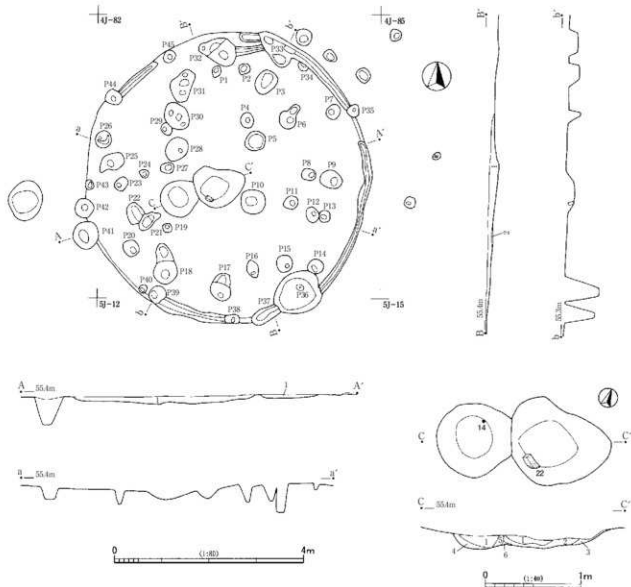
石器 石器の出土量も少なかった。10は脚部の一方が欠損している。しかし作りは均整のとれた形状に仕上げている。11は自然面を多く残す剥片で打点部を削除している。表裏両面で整形剥離が施されており、右側縁を刃部としたスクレイパーとなろう。12は下部の約1/3が欠損した短冊タイプの打製石斧といえる。本遺跡での打製石斧としては丁寧に整形された類となろう。13はP1の西1mほどの地点で出土した磨石である。その形状と石材から石皿とともに使用した典型的な磨石といえる。表裏両面は磨耗により丸味を帯びる。周囲には若干の打痕を残す。

SI-004(第30図、図版9)

本跡は4J区と5J区にかけて位置しており、検出された住居跡群の中心に位置する。平面形は円形で、その径は6.2mを計測する。遺存状態は概して良好といえよう。西側壁面の一部は確認できなかったが、ほぼ全景を検出できた貴重な事例である。ただ、ここでも壁面の高さは数cm、低い部分では床面と同レベルとなり、周溝の存在により漸く全体を把握できたところである。覆土の堆積は厚い部分で15cmほどであった。床面では若干の凹凸が認められた。炉の痕跡は隣接する2か所で認められた。おそらく住居跡中央部に設置された炉跡が住居跡廃棄時まで使用されていた炉跡と考えられる。ピットは壁柱穴をふくめて45か所で検出できたが、小さく浅いものは植物根の可能性もある。P36は、その大きさと平坦な底面から土坑



第29図 SI-003・出土遺物



第30図 SI-004

と考えられる。

堆積土は第1層が粘性を有する黒褐色土、第2層は若干焼土を混入した黒褐色土である。炉跡では色調、含有物質などから6層に分離できた。第1層は黒色土（焼土粒、炭化粒を含む）、第2層は黒色土（炭化粒を多く含む）、第3層は暗黄褐色土（黄褐色砂層と焼土粒を含む）、第4層は黒色土（黄褐色砂層を含む）、第5層は黒色土（黄褐色砂層と白色粘土を含む）、第6層は黒色土（焼土粒を多く含む）となる。なお、22は炉跡上面から出土した板状の砂質凝灰岩は被熱しているところから、炉跡で使用されていたものと思われる。

遺物の出土状況についてみると、本跡では炉跡の周囲を中心として土器・石器が広範に分布していた。とりわけ石器では石鏃など剥片石器の出土が多かった。ただ、P45からP20に向かって幅70cm前後の浅い擾乱が帯状にみられたため西側の遺物は希薄であった。

本跡の時期は接合した一括土器などから加曾利EⅡ式期後半からEⅢ式期にかけてのものとなろう。

SI-004 ビット一覧表 (数字は床面からの深さ、単位=cm)

P 1-6	P 2-12	P 3-23	P 4-28	P 5-20	P 6-60	P 7-62	P 8-48
P 9-63	P 10-21	P 11-32	P 12-37	P 13-59	P 14-9	P 15-61	P 16-62
P 17-46	P 18-74	P 19-12	P 20-56	P 21-37	P 22-18	P 23-46	P 24-24
P 25-73	P 26-55	P 27-30	P 28-35	P 29-26	P 30-22	P 31-30	P 32-81・30
P 33-19	P 34-14	P 35-24	P 36-31 (土坑)	P 37-15	P 38-23	P 39-64	P 40-33
P 41-56	P 42-54	P 43-24	P 44-52	P 45-9			

遺物 (第31~33図、図版23・25・65)

土器 本跡では全体の形が認識できる土器は1のみであった。しかも出土地点はP 8~炉跡の間で11点の破片が接合したものである。接合しなかった部分は拓本(1-2、1-3)として掲載した。推定口径は45cmとなり、かなり大型の深鉢といえよう。口辺の栴門枠によって区画された縄文は横方向、胴部では縦方向に縄文本体を回転させている。2は小型で口縁部から胴上半部の1/3が遺存したもので、胴部では沈線間に磨り消しがみられる。3も1/4程度が遺存した口縁部片を復元したものである。器厚は4mm~5mmと薄い。4・5は隆帯間に沈線を施し、6の波頂部には退化した渦巻が認められる。7~9はしっかりした隆帯で文様が表現されており、10では3本一組の沈線が特徴的である。これらは加曾目EⅢ式として捉えられよう。15の地文では摺糸文が採用され、16はSI-002の9にみられるような胴部が条線によって覆われるものとなる。

石器 本跡にみられる石器の出土は土器と比較すると豊富な内容を示している。剥片石器類についてはチャートが多用され、黒曜石は5の石鏃の1点のみであった。さらに石器として剥片類を使用していることも特徴的である。

1~5は石鏃である。1は形態的にみれば旧石器時代の尖頭器ともいえるがチャートを採用し、自然面を残している。縄文中期以降の所産とみて間違いあるまい。2は脚部が広く、全体の形は正三角形に近い。3・4は脚部を欠損している。5は先端部が欠損し左右非対称の成品である。

6~8は楔形石器である。6は断面三角形の縦長剥片を用いたものであり、下端部を簡単に加工しただけである。7は薄い剥片を素材とし、下端部を丁寧に剥離し成品に仕上げている。8も粗雑ながらも下部での表裏両面からの剥離が施されている。

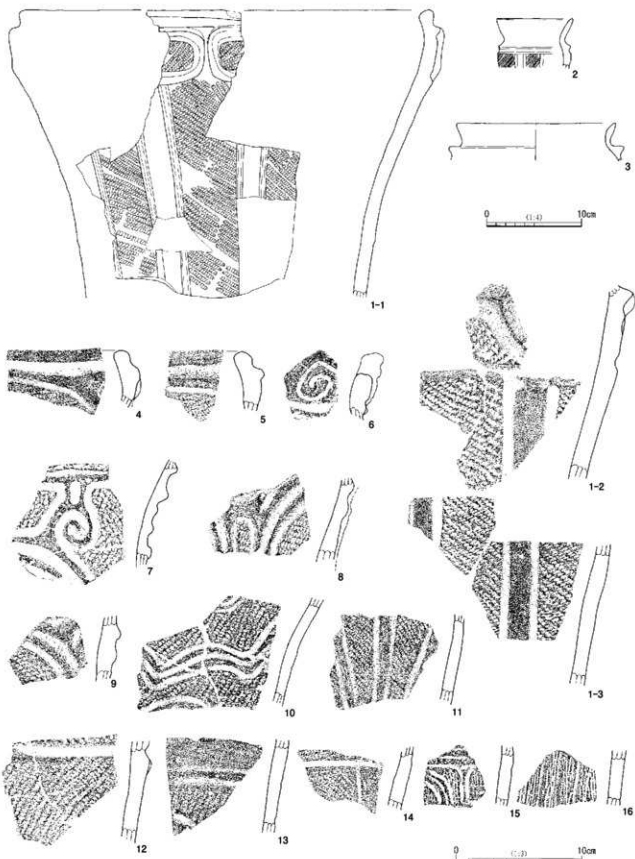
9~12は剥片である。9は石鏃か楔形石器の製作過程で廃棄されたものであろう。10~12では明確な使用痕が観察できる。12の右側縁には使用による微細な剥離痕が著しい。

13は磨製石斧である。下半部の欠損したものが1点のみ出土した。残された表裏面はきれいに研磨されている。側面も均等に研磨されており精巧に製作された磨製石斧であったものと思われる。

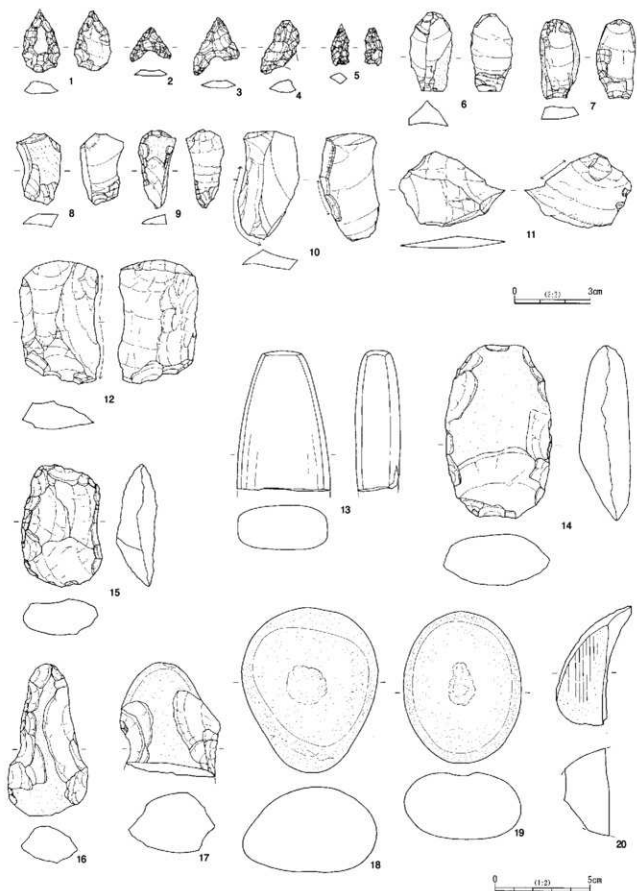
14~17は打製石斧である。破損品1点を含めて4点が出土した。14は西側の炉跡から出土したものである。扁平な河原石で製作されたらしく表裏の中央部に自然面が残されている。15はやや小さめの石斧で、周囲は左右の側縁は簡単な剥離で整形されている。16は頭部の作りから嵌め込みタイプの石斧であろう。17は頭部のみの遺存である。

18~21は磨石である。4点が出土し、18・19は表裏面に打痕が認められる。20・21の表面の一部は研磨を施したように滑らかなものである。また21の裏面は打割により平坦に整形されている。

22・23は台石である。22は東側の炉跡から出土したもので、3cmほどの厚みを有する板状の原石を長方



第31图 SI-004出土土器



第32图 SI-004出土石器(1)

形に整形している。炉周辺で台などに使用されたものと考えられる。23も台石と思われる。本来は円形を呈していたものと考え、約1/3の遺存となる。中央部分にあたる右隅では使用によりやや凹みが認められる。

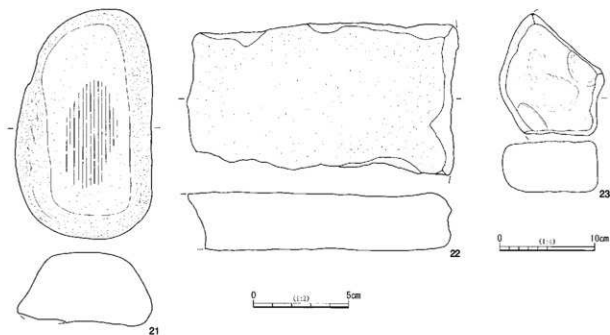
SI-005 (第34・35図、図版10)

本跡は4 J区で北半分がSI-006と南壁の一部がSI-014と重複し正確な平面形を把握することはできなかった。周辺にみられる住居跡からおおむね円形ないしは楕円形を呈していたものと推測できる。南側で確認できた壁面は3cm～5cmと僅かに残されたもので、床面は北から南に向かって傾斜しており良好な状態とはいええない。床面の遺存部からは37か所でピットが検出されているが、床面からの深さが30cm以上ではP1、P3、P4、P5、P6、P8など十数か所となり、これらのピットは柱穴となる可能性を否定できない。次に炉跡についてみると、ここでは珍しい類例といえる炉跡の検出となった。平面・断面の詳細は別図とした。炉跡は床面下を1mほど掘り下げ、小型の深鉢を設置した後に底部欠損の大型品を設置し炉としている。いわゆる土器埋設炉である。大型品は口縁部まで遺存しており、被熱し赤褐色に変色しているため長期間の使用を思わせた。

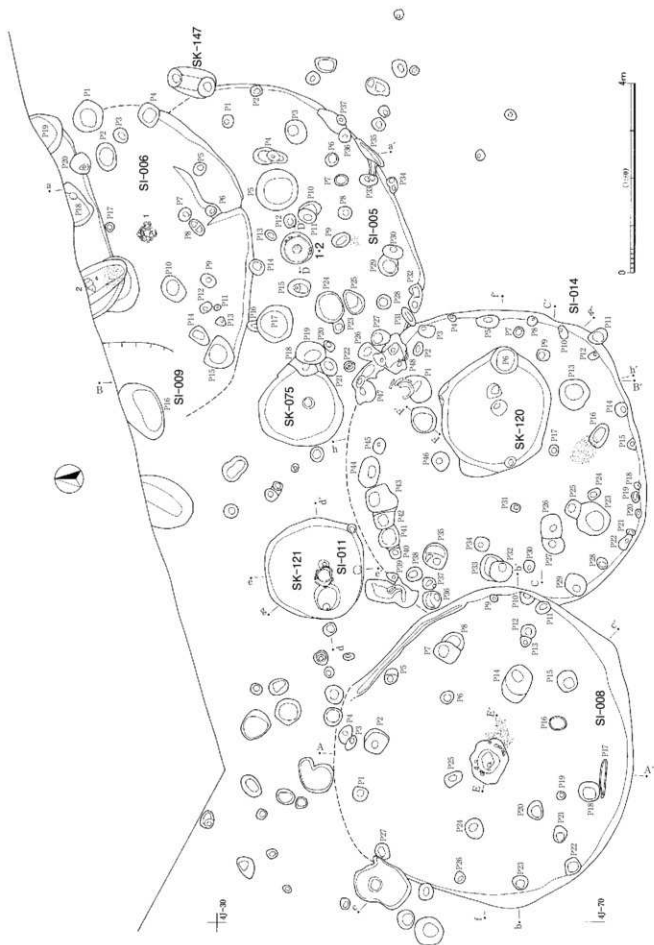
堆積土はSI-004と同様の黒褐色土となり、焼土や砂粒が若干混入していた。炉跡周辺部の堆積土は5層に分離できた。第1層は黒褐色土(焼土と砂粒を含む)、第2層は暗褐色土(黒色土を含む)、第3層は暗褐色土、第4層は暗黄褐色土(褐色土と黒色土混入)で小型土器を固定するためかよく締まっていた、第5層は暗灰褐色土(砂層)となる。

遺物の出土状況についてみると、炉跡周辺を中心として、大木式的な文様が胴部に施された小型品と大型破片及び石鏃、打製石斧、磨石、敲石、石皿片などが出土している。

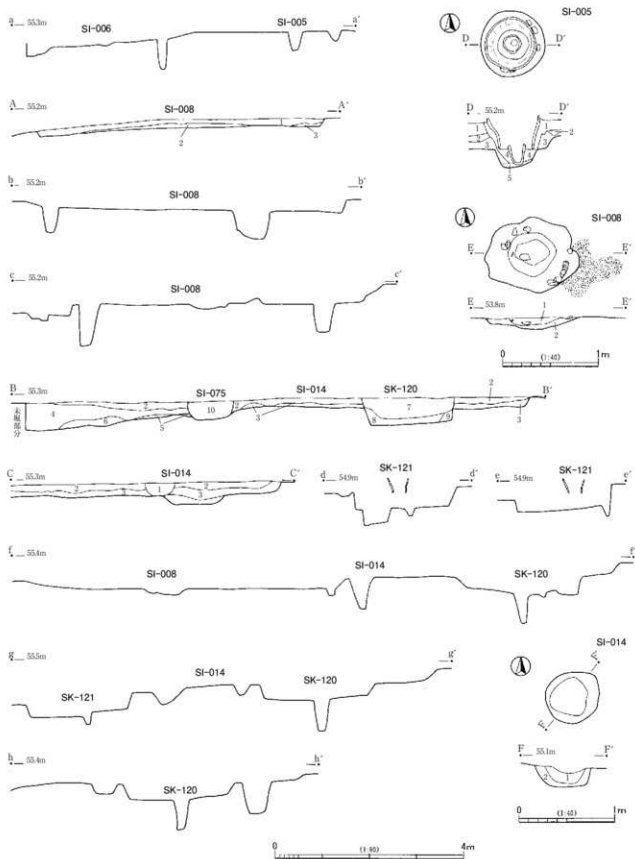
本跡の時期は土器埋設炉の土器から時期は加曾利EⅡ式期となろう。



第33図 SI-004出土石器(2)



第34图 SI-005・006・008・009・011・014(1)



第35图 SI-005·006·008·009·011·014(2)

SI-005 ビット一覧表 (数字は床面からの深さ、単位=cm)

P 1-32	P 2-11	P 3-60	P 4-57	P 5-64	P 6-40	P 7-28	P 8-52
P 9-14	P 10-9	P 11-38	P 12-8	P 13-15	P 14-19	P 15-65	P 16-9
P 17-43	P 18-69	P 19-85	P 20-17	P 21-26	P 22-32	P 23-28	P 24-19
P 25-23	P 26-31	P 27-34	P 28-21	P 29-21	P 30-35	P 31-24	P 32-29
P 33-29	P 34-35	P 35-23	P 36-24	P 37-20			

遺物 (第36~38図、図版25・26・66)

土器 1・2は第34図に示したように土器埋設炉を構成していた2点である。2の小型土器を支えとし、その上に底部を除去した1の大型土器を設置することにより炉として使用していたものであろう。1の口縁部内外面は被熱のため赤褐色に変色している。器面の文様構成は加曾利EⅡ式を特徴づけるものである。口辺には隆帯で区画された中を縄文で充填し、その間に渦巻文を配置する。2も同様な文様構成できれいな楕円の中を縄文で満たし、その上をS字状の簡略化した渦巻文で飾る。3は口縁部が失われており、胴部の2/3が遺存した小型品である。文様は胴部に渦巻文が描かれ、沈線間は磨り消されている。期的には加曾利EⅡ式期と考えてよいであろう。胴部の文様から大木9式に近いものとなろう。4は口縁部が2/3ほど遺存した深鉢で2と同様な文様構成となるが、ここでの隆帯ははっきりと表現されている。5~10も口縁部片であり、埋設土器と共通する文様構成となる。11・13・19も沈線主体で文様が構成される。口縁部の作りは異なるが信州にみられる曾利式の影響を受けたものとなろう。12・20は口辺にみられる縦方向の沈線や粘土紐の貼付から古い段階の土器と思われる。14~18は円形の刺突文や隆帯がみられるところから加曾利EⅡ式の後半からEⅢ式にかけてみられるものであろう。17・21は曲線化した沈線を主文様としており、おそらく加曾利EⅡ式の後半からEⅢ式の時期となろう。

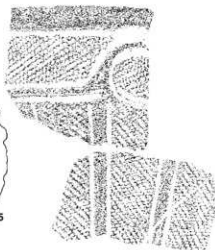
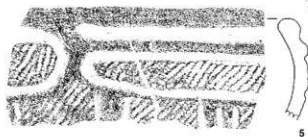
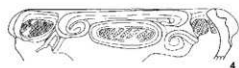
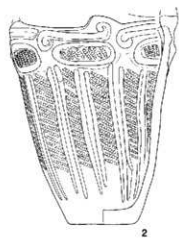
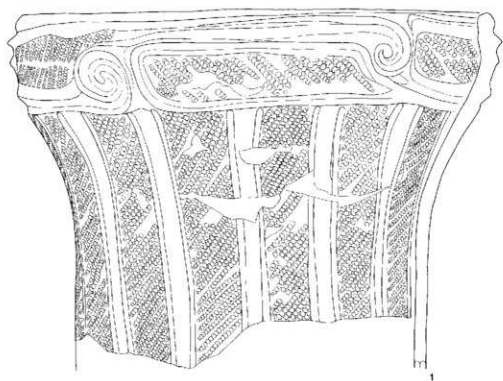
石器 本跡では石鎌をはじめとして各種の石器がみられる。とりわけ石鎌等の剥片石器類は17点を図示することができた。ほかにも石斧や敲石、磨石、石皿と生活具としての石器も豊富といえよう。ただ住居跡が重複しているため確実に本跡に伴うとは限らない。

1~12は石鎌である。完形品は1・2・4の3点と少ない。石材をみると黒曜石製が6点と多いことに注目できる。1の下部は直線的でいわゆる平基タイプといえよう。一方、10の下部は半円形に仕上げられた類例の少ないものである。11は小剥片を素材として小さな剥離で簡単に石鎌としているが鎌としての効果には疑問符が付くような作りである。12は製作途上に破損、廃棄されたものであろう。3・5~9はいずれも先端部に欠損がみられる。

13は楔形石器である。1点のみの出土であるが黒曜石製で表裏から簡単な剥離で仕上げている。

14~17は剥片である。いずれも微細な調整痕が認められ、16は細石刃を思わせるような縦長の剥片である。18・19・22・23は打製石斧である。18は側面をみると磨製石斧の素材を想起させる。刃部は表裏面から小さな剥離で仕上げている。19は撥型に整形された石斧で裏面には若干の自然面を残す。22は右側縁が加工されているため打製石斧とした。23の石材は赤色チャートで石斧にはあまり使用されない石材であるが、周囲の加工から打製石斧とした。

20・21・24は敲石である。20は磨製石斧の素材にできるような形態を有する。欠損品ではあるが、下部には顕著な打痕が観察できる。21も欠損しており、上下側面は長期的使用を物語る。24は敲打により下部は凹んでいる。



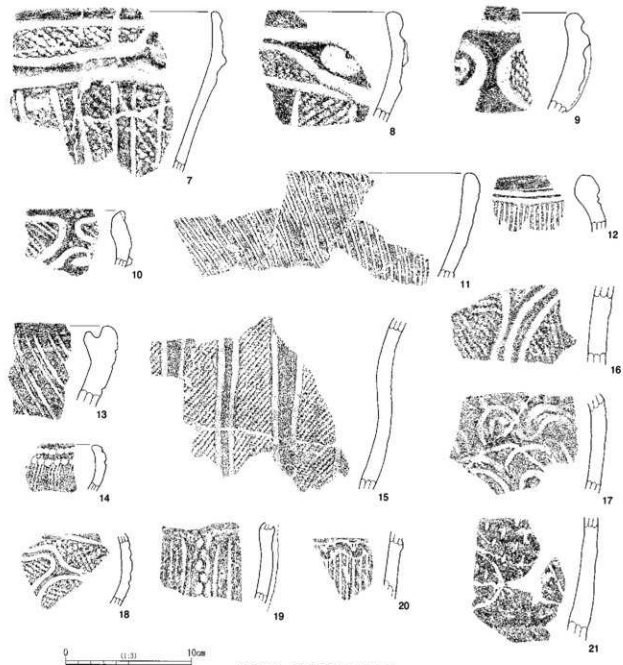
第36图 SI-005出土土器(1)

25・26は磨石である。25は完形品で表面中央部では顕著な磨耗痕が認められる。下端部に打痕を残す。26は約1/2の遺存で中央部は滑らかで周囲には打痕が著しい。

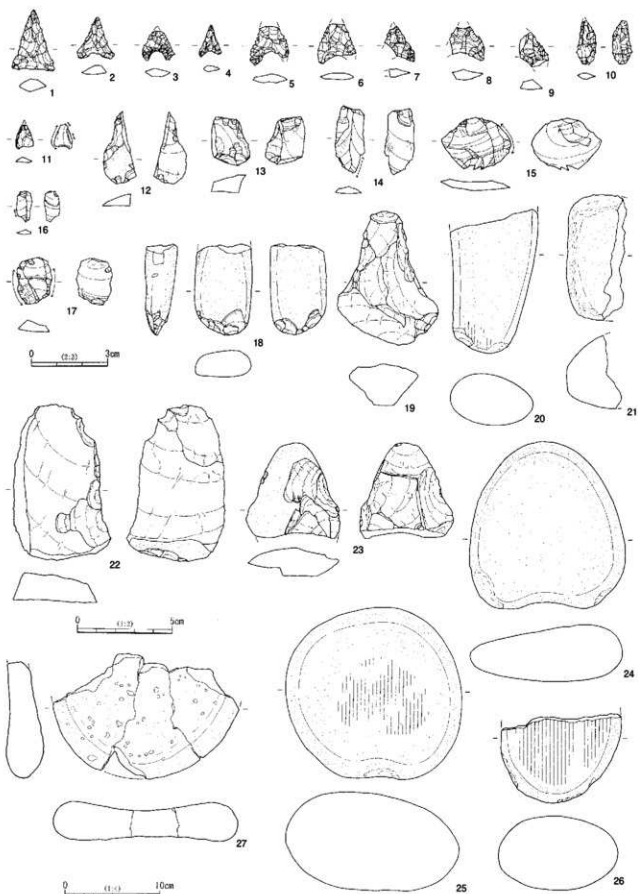
27は石皿である。破損した3点が接合したものである。炉跡の西、P24周辺で出土した。約2/5が遺存するもので、中央部にむかって皿状に緩やかな窪みがみられる。裏面はほぼ平坦である。

SI-006 (第34・35図、図版10・12)

本跡は4J区で検出され、約1/2は調査区外にあたるため未調査となった。しかも南側はSI-005と重複しており、平面形を把握することはできなかった。床面の状態は概して軟弱で、調査区外の北方向に向かって緩やかに傾斜する。ピットは20か所で検出できたが、柱穴を想定できるピットは少なくP5、P9や



第37図 SI-005出土土器(2)



第38图 SI-005出土石器

P16では床面下50cm以上を計測する。灰跡は南壁から3mほど離れて検出された。楕円形と想定できる約30cmの掘り込みに焼土混入の黒褐色土の堆積がみられた。また、この部分はSI-020とした住居跡らしき落ち込みが認められており、焼土混入層は上面に堆積していた。

床面上の堆積土はSI-005と同様であった。

遺物の出土状況についてみると、大型の浅鉢が灰跡から1m南で床面直上から出土している。住居跡の時期を決定づけるものとなろう。ほかにキャリパータイプの深鉢もみられる。また石器も石鏃、スクレイパー、打製石斧、磨石などが床面上から出土している。

本跡の時期は浅鉢を基準に考えると加曾利EⅢ式期といえよう。

SI-006 ビット一覧表 (数字は床面からの深さ、単位=cm)

P 1-20	P 2-14	P 3-13	P 4-42	P 5-66	P 6-14	P 7-13	P 8-37
P 9-52	P 10-25	P 11-12	P 12-17	P 13-10	P 14-26	P 15-23	P 16-52
P 17-23	P 18-30	P 19-20	P 20-28				

遺物 (第39・40図、図版25・27・66)

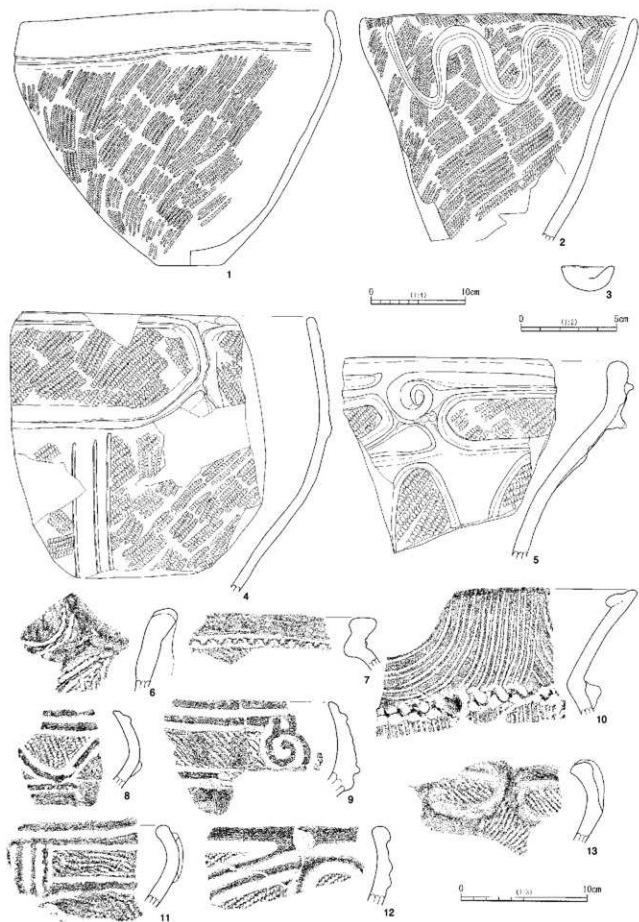
土器 ここでは一括土器がミニチュア土器を含めて3点出土した。浅鉢は前述したように床面上で、2の深鉢は灰跡の上面において検出されている。ほかに口縁部の大型破片もみられたため、口縁部を中心として器面の遺存度の良好な土器片について図示した。1は口縁部の一部が7cmほど遺存していたため器形全体を知ることができた。口縁部の器厚は12mm前後、胴部では7mmと薄い。口縁は平縁で約1cm幅の浅い沈線が施される。以下は縄文が底部に至るまで施文されている。2は底部を欠失しており、口縁から胴部の2/3が遺存したものである。縄文が器面全体に施され、口縁部にはのみ縄文原体の回転方向を変えることにより、羽状の効果を演出している。また2本一組の浅い沈線が大きく緩やかな波状を形作る。3はミニチュア品である。口径28mm、高さ13mmを計測する。4は口辺部を隆帯で区画し、胴部に3本一組の沈線がみられる。5には渦巻文がみられ、胴部の磨り消しは大胆になり縄文が幅広い沈線によって区画される。時的には加曾利EⅢ式といえよう。6は2列の押引と胎土に混入された雲母から、阿玉台Ⅱ式の波状口縁となろう。14は縄文が地文となり、粘土帯に沿って幅広い押引文が施される。時的には阿玉台式でも終末期のものとなろう。7～9・11などは粘土紐の貼付が明確であり、加曾利E式でも古いタイプとなろう。8・9は頸部に無文帯を残すようである。10は曾利系の特徴が口唇部によく表現されている。18・19も同系統のものである。15は胴部片であるが粘土紐による施文は、大木式的なモチーフで飾られている。16・17は文様、施文具等から堀之内Ⅰ式と思われる。

石器 石器は量的には少ないが、それぞれ個性的な成品が出土している。

20～23は石鏃である。20は別名トトロト石とも呼称される石材のため磨耗が著しく剥離までははっきりしない。21は先端が欠損している。22は剥片に簡単な整形剥離を施しただけで成品としている。23は破損しているが、表面では広く主剥離面がみられる。

24は楔形石器である。表皮部分の丸味を利用して楔形石器に仕上げたものである。裏面での加工も認められるため楔形石器としてよいであろう。

27はスクレイパーである。剥片の周囲を簡単に加工したのみで右側縁を刃部に仕上げている。



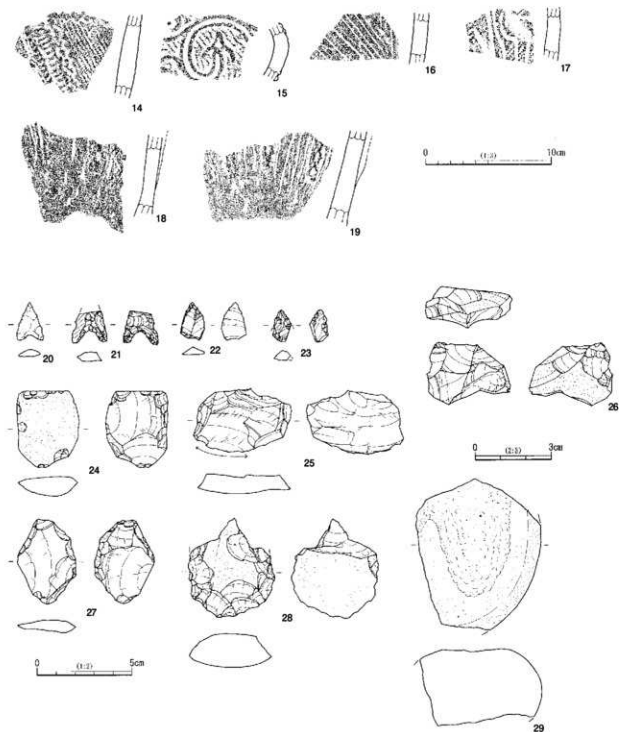
第39图 SI-006出土土器

25は剥片である。横長剥片を素材としたもので下部に使用痕が観察できる。

26は石核である。残核であろうが、22のような石鏃を製作することを考えるとまだ剥片剥離は可能となろう。

28は打製石斧である。打製石斧の刃部が遺存したものである。表裏面に自然面が認められるため扁平な河原石を素材として使用したものであろう。

29は磨石である。残された側面には打痕はみられず、表面が大きく剥離されている。



第40図 SI-006出土遺物

SI-008 (第34・35図、図版11)

本跡は4 J 区の西に位置し、隣接して東にSI-014、西にSI-003が検出されている。平面形は、一部北側の壁面が失われているもののほぼ円形としてよいであろう。長径は東西方向にあり6.7m、短径は南北約6.3mを計測する。一部ではあるが、周溝を確認できた。床面の状態は良好で平坦な面を形成していた。覆土の堆積は、本跡が最も厚く20cmを計測する。ピットは27か所で検出されている。深さ50cmを超えるピットは8か所を数える。柱穴を想定するとP 2、P 7、P 15、P 21などが該当しよう。炉跡は住居跡のほぼ中央で検出されている。炉跡の中央部は約15cm掘り込まれており図示したような位置に十数個の礫が配置されていた。残された礫は多くはないが石囲い炉としてよいであろう。また、炉跡の東側部分では床面が焼けて(トーン部分)いた。これは石囲い炉の設置以前に、炉として使用されていた痕跡と考えられる。

本跡の堆積土は層厚があったため3層に分類できた。第1層は黒褐色土、第2層は黒色土(黄褐色砂粒を若干混入)、第3層は黒色土(黄褐色砂粒をやや多く混入)となる。炉跡では、第1層が黒褐色土(焼土・炭化物を混入)、第2層は暗褐色土(焼土ブロック・砂粒を多く混入)となる。

遺物の出土状況についてみると、炉跡の周囲では土器は少なく、反面、10点以上の礫がみられた。そのうちの21・25・32は道具として使用された痕跡が認められたため図示した。また、P 14やP 24周辺でも土器や石器が出土している。なお、図示した一括土器は炉跡から北西に約1m離れた地点で出土したものである。

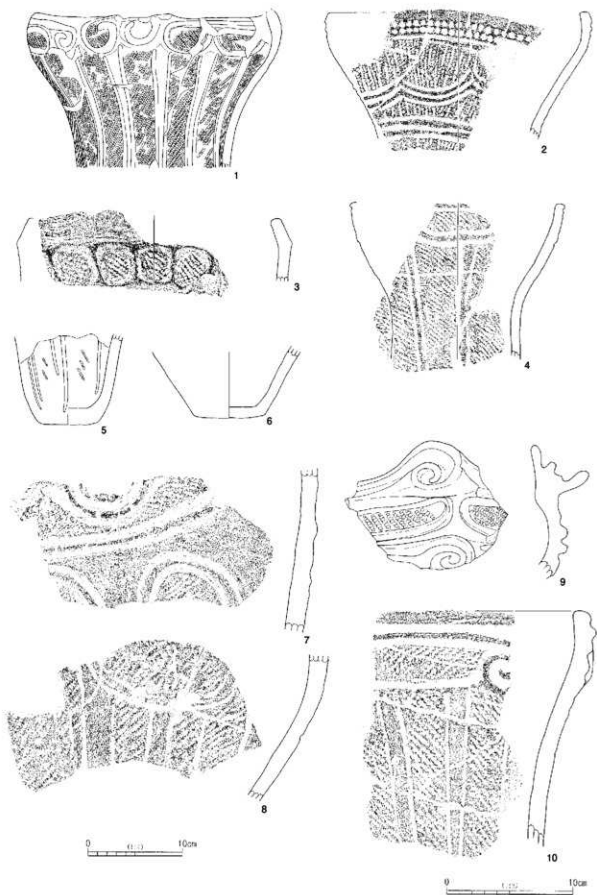
本跡の時期は一括土器を基準として加曾利EⅡ式期の後半からEⅢ式期にかけてとなろう。

SI-008 ピット一覧表(数字は床面からの深さ、単位=cm)

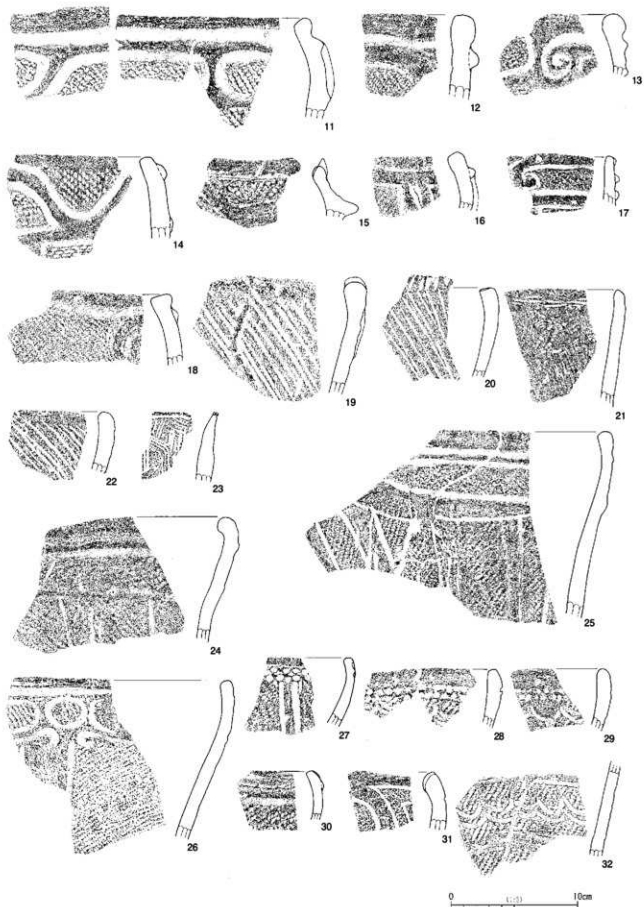
P 1-32	P 2-66	P 3-26	P 4-28	P 5-38	P 6-11	P 7-78	P 8-72
P 9-13	P 10-29	P 11-30	P 12-9	P 13-32	P 14-63	P 15-62	P 16-4
P 17-11	P 18-58	P 19-18	P 20-15	P 21-64	P 22-27	P 23-54	P 24-29
P 25-34	P 26-12	P 27-24					

遺物(第41~45図、図版25・28~30・67)

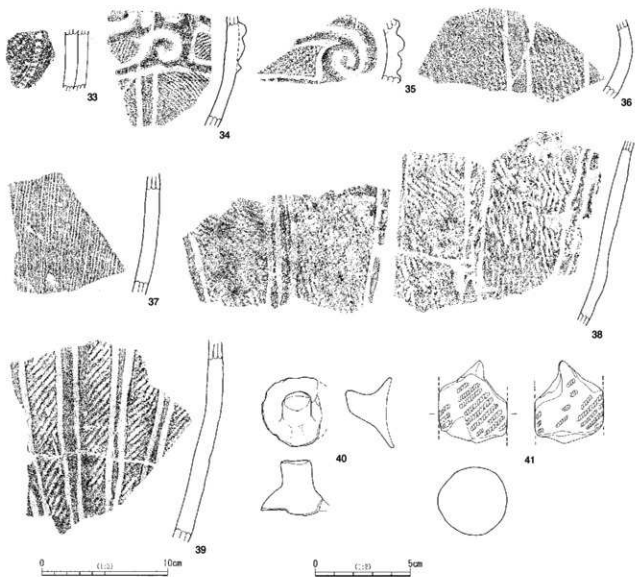
土器 本跡から出土した土器は多く器形を認識できる一括土器も3点を数える。1は底部を欠損した深鉢で4か所にみられる把手部分がすべて破損している。破損部を観察すると、新たな破損面ではなく若干磨耗部分も認められるため意識的に口縁把手部を平坦に整形したものと思われる。文様は渦巻文が簡略化され円形に近い。2は連弧文系の深鉢で口縁直下に2列の刺突文が施される。地文の縄文は単節を巻きつけた燃糸文とみなされる。時間的には1と同時期となろう。4の口縁部は楕円状に区画され、その直下にも沈線が巡る。この点は1と共通するようである。5・6は底部であるが、5の器面に施文された縄文はほとんど磨耗している。3は口縁部の大型片で隆帯によって区画された中を縄文で充填する。前者よりも新しい時期で1に近いものとなろう。7・8・38も時間的には同時期とみなされる。2点とも大きなタイプの深鉢で近接した位置において出土した。接合はしていないが胎土・縄文などから同一個体と思われる。7は胴上部、8は胴下部にあたる破片であろう。型的には加曾利EⅢ式となろう。9は隆帯による渦巻文が鮮明である。10は4と同様の文様構成とみられる。時間的には2の連弧文系土器と重なるものである。また11~17、34・35などは太い隆帯が用いられているところから加曾利EⅡ式の範疇として捉えることができよう。19~23はヘラや半截竹管による沈線が器面を飾る。19は緩やかに垂下する粘土紐の貼付がみら



第41图 SI-008出土土器(1)



第42图 SI-008出土土器(2)

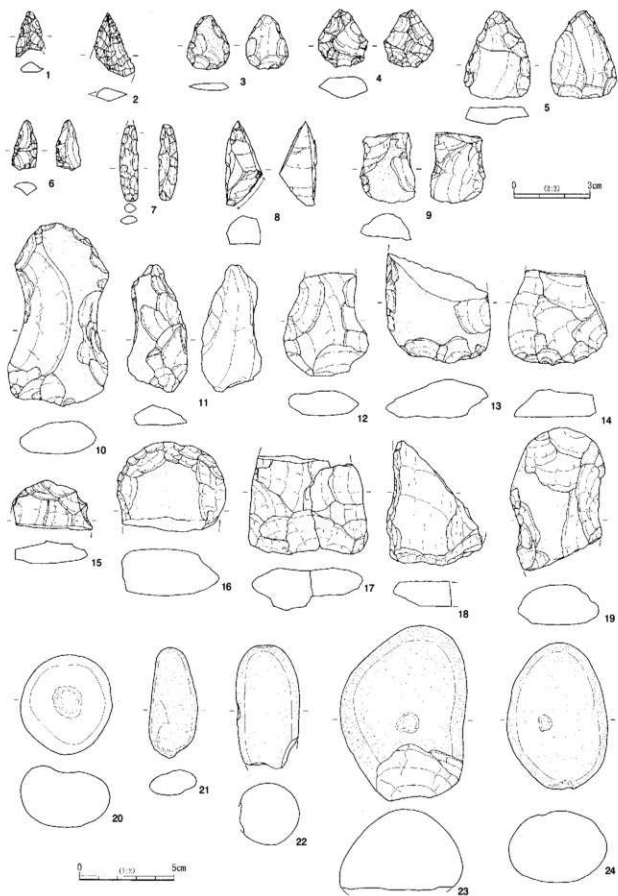


第43図 SI-008出土土器(3)

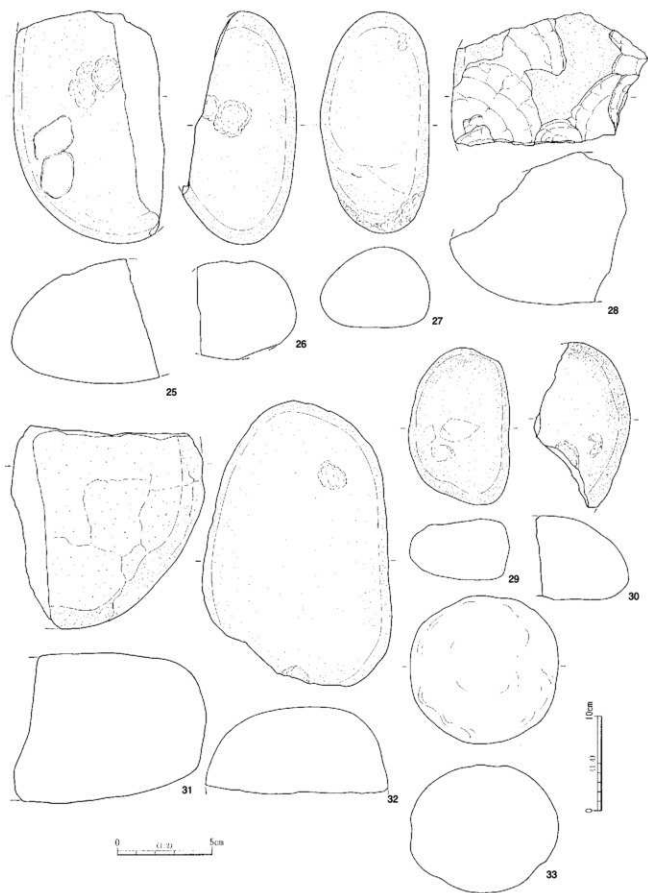
れる。19・20・22は曾利系の影響とみてよいであろう。緩やかな隆帯を有する18や24～26にみられる沈線間が磨り消された土器群は前述1と同時期とみられる。26は渦巻が消滅して円形に変化したものである。27～29・32は刺突文と椎抽な連弧文を施した土器群で、27以外は同一個体とも考えられる。30は微隆起線がみとめられるため加曾利EIV式の到来を示唆するものである。31は明確な沈線による幾何学的な文様の一部がみられるため称名寺式となろう。33は磨耗した器面に僅かな縄文施文が観察できる。また隆帯の脇をヘラによる押引文を施している。阿玉台式の小片で終末期のものである。40は胴部に貼付された突起物で、41は後期に属する土偶の脚の一部と思われる。

石器 ここでの器種は石鏃や打製石斧が主体となり、典型的な磨石はみられなかった。ほかにSI-002でも出土している球形の敲石がみられた。このため球形の敲石は間違いなく本遺跡では道具として使用されていたものとなろう。

1～6は石鏃である。1は石脚と先端の一部が欠損する。2も欠損品となるが、両側縁は鋸歯状にきれ



第44图 SI-008出土石器(1)



第45图 SI-008出土石器(2)

いに剥離されている。3～5は未成品のような仕上げである。いずれも黒曜石以外を採用したものである。6は製作途中で破損し廃棄したものであろう。

7は石錐である。先端部が欠損するがやや厚みを増すため錐となろう。しかし石錐の可能性も否定しきれない。

8・9は剥片である。8はナイフのような形をした剥片で、右側縁には微細な調整痕が認められる。9は小型打製石斧のような形態であるが、刃部となる下端の加工はみられない。右側縁では表裏面で整形剥離が施されている。

10～19は打製石斧である。打製石斧は10点と多い。ただ完形品は2点のみで、10では表面に自然面を多く残す。反面、11の裏面では大きく主剥離面を残す。16は頭部が遺存したもので、周囲は丁寧な剥離によって整形されている。ほかは破損品で刃部の遺存が5点となる。

20～24・26・27・29・30・32・33は敲石で11点を数える。これらのうち20・22・26・29の4点は軟弱な凝灰岩（弱固結凝灰岩）であり、あまり敲石には使用されない石材である。32は表面の一部と右側縁に顕著な打痕が認められる。33は約3kgの重量で大きな破損はみられない。SI-002出土品よりも1kg弱軽い。

25・28・31の3点は台石である。25・28の表面の一部には上部からの加撃による剥落がみられる。

SI-009（第34・35図）

本跡はSI-006を調査中に西側隅で掘り込みらしき段差を確認できたため、調査区の限界まで排土をしたものである。しかし土坑や傾斜する地形により明確な根拠を得ることはできなかった。ただ落ち込み周辺では少なからず、土器や石器が出土したため住居跡の一部と考えて報告することにした。

遺物（第46・47図、図版31・32・68）

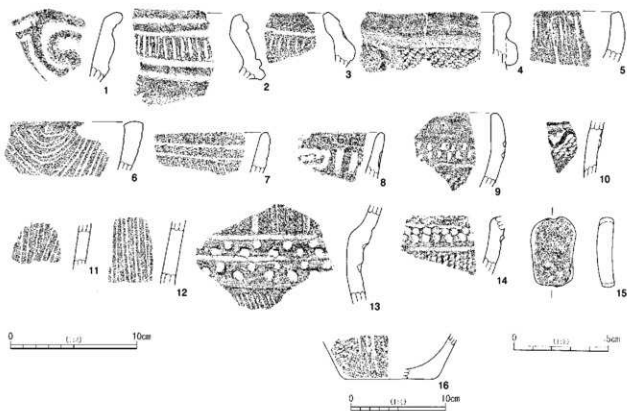
土器 一括土器の出土はみられなかったため口縁部と大型片を中心に図示した。1は波状口縁に渦巻文を描いたものである。2・3は口縁部でその屈曲する角度から器形は浅鉢となるようである。隆帯によって区画された口辺部には縦方向の沈線を充填したもので、時期的には加曾利EⅠ式とみなされる。8・10も同時期となろう。5～7、10～13は半截竹管や細い沈線により主文様が描かれている一群の土器である。曾利系の影響を受けていることは否定できない。13にみられる円形の刺突文は連弧文系に付された円形刺突文に近似する。9・14の文様構成はほとんど同様となる。刺突文下にみられる燃糸は9が縄文であり、14は燃糸文となる。14は典型的な連弧文系といえる。16は底部で沈線間は磨り消しが認められる。15は中期の土器片を利用した土錐である。僅かに縄文の痕跡を残すが拓本でははっきりしない。

石器 石器は土器に比べて多く出土している。未成品を含む石錐は7点出土しており、周辺の住居跡でも破損品等がしばしばみられるところから石錐を中心とした石器製作がおこなわれていたようである。

1～7は石錐である。1は薄い剥片を利用して石錐としたものである。2～4は破損品となる。5は周囲の剥離から石錐製作の意図がよく理解できる資料となる。6・7も側縁での加工から石錐製作を試みた結果、捨てられたものと思われる。

8～12は剥片である。8の右側縁上部には微細な剥離痕が認められる。そのほかは自然面を残す剥片であり、二次剥離が観察できるため図示した。石錐製作には十分な大きさといえる。

13は石核である。礫を打割したもので、2枚～3枚の剥片を剥取したものである。ここでのチャートの剥片は、こうした礫から得られるものと思われる。



第46図 SI-009出土遺物

14～16は打製石斧である。14・15は頭部が遺存したもので扁平な礫を素材とし簡単に側面を整形して刃部を作出しているようである。16は刃部であり、裏面では自然面が認められる。

17～19は磨石である。いずれも欠損品で、18の表面ではきれいな磨耗部分が認められる。19は軟弱な凝灰岩で、表裏面に敲打による痕跡が窪みとして残っている。同種の石材はSI-008でも出土している。

SI-010 (第24図、図版12)

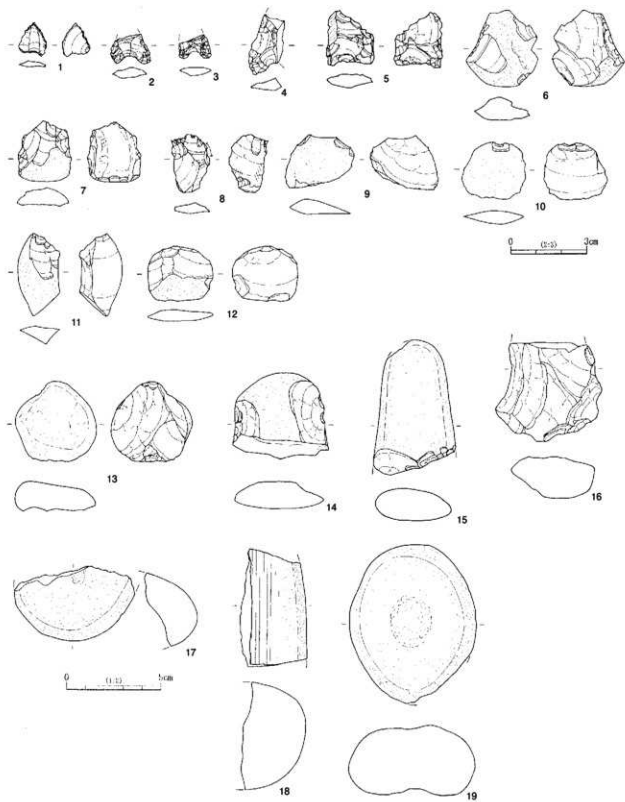
本跡は前述したSI-002の北壁の一部と重複していたようである。斜面部に位置しており、東側部分に15cmほどの落ち込みが認められたため住居跡の存在を想定しつつ調査を進めていった。その結果、住居跡と想定した部分の西側は傾斜部分にあたり壁面の確認はできなかった。つまり東側半分が僅かな壁面として残されているような状況であった。遺存部の径は4.4mを計測するが、形状は円形に近い隅丸方形といえる。床面は平坦であったが、柱穴らしきピットと印跡は検出できなかった。北東コーナーよりに検出されたピットは開口部の大きさや形、底部の作りから土坑として分類した。

堆積土は、SI-002とほぼ同様な色調であった。ただ重複部分ではSI-002の覆土を切っているようにもみえた。

遺物は小破片が若干出土しただけで、本跡の時期決定までには至らなかった。

SI-010 ピット一覧表 (数字は床面からの深さ、単位=cm)

P 1 - 21	SK - 071 - 23	SK - 072 - 29
----------	---------------	---------------

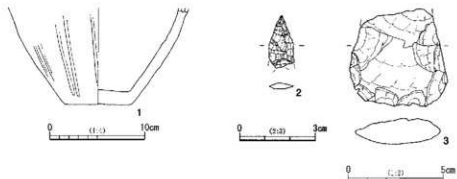


第47图 SI-009出土石器

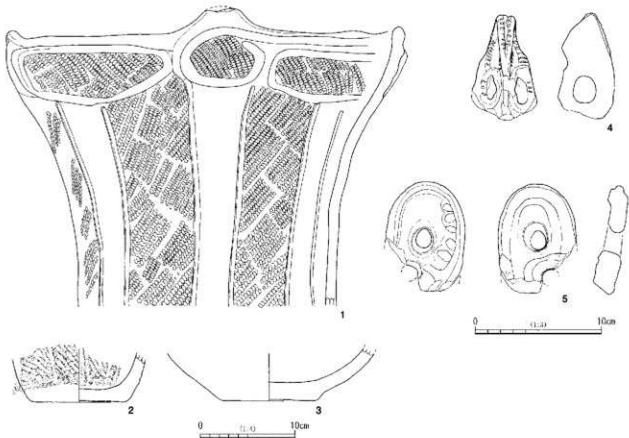
遺物 (第48図、図版31・68)

土器 土器は、図示したもの以外は小片が若干出土しただけである。ただ図示した土器は北側斜面部から出土しており、本跡に伴う土器とは断定できない。器面は磨耗が著しく、僅かに2本一組の沈線が認められる。時間的にはおそらく加曾利EⅡ式となろう。

石器 2点が出土したのみである。2は脚部が欠損した石鏃で鋭利な先端部を作出し、薄く精巧な作りとなっている。3は頭部が欠損した打製石斧で、裏面は自然面加工が施されていない。一部に被熱痕が認められる。



第48図 SI-010出土遺物



第49図 SI-011出土土器(1)

SI-011 (第34・35図)

本跡は4 J区の住居跡集中地区を精査中に小堅穴(SK-121)の中央部に一括土器が検出されたため、急遽遺構番号をSI-011として周辺の調査を進めていった。同時進行していたSI-014では南壁から東壁にかけては僅かながら確認できるが、北壁部分では地山も北方向に向かってやや傾斜しており、壁は明確に把握できなかつた。こうした状況のもとでの調査であったため、本跡は一括土器出土地点と小堅穴周辺の精査に終始した。以下、記載した遺物は小堅穴周辺で出土した土器・石器である。

本跡の時期は一括土器の出土から加曾利EⅡ式期の末からEⅢ式期と考えられるが、本跡では平面形等の詳細を把握することはできなかった。

遺物 (第49～51図、図版31～33・68)

土器 1は口径約40cmの大きな深鉢で底部を欠損する。口縁の波頂部下に描出された渦巻文は簡略化されたものであり、胴部にみられる磨り消しの無文帯は8か所にみられる。2は底部であるが、前者とは縄文の磨りが異なる。沈線間での磨り消しもみられないため、1より古く位置づけられよう。3も底部で大きく開くタイプとなるため浅鉢と考えられる。4・5は把手部分であり、その形状から時期的には勝坂式の末期に位置づけられよう。6～11は口縁部片で隆帯と沈線によって文様が構成されている。21～24は胴部片で磨り消し等はみられず、沈線と縄文のみとなる。これらはおおむね加曾利EⅠ式となろう。12・13は沈線のみで13の口唇部はやや凹むような作りである。28とともに曾利系の土器といえよう。14・15・18は渦巻文や沈線により区画された縄文がみられる。17・19・20では口縁直下に刺突文が施されている。16は2条の太い沈線が施され、胴部にもその痕跡が残る。25では横位に3本組の沈線が走る。これらは加曾利EⅡ式後半からEⅢ式となろう。29は大型土器の胴部片で、隆帯による曲線で大胆に表現した深鉢である。時期的には加曾利EⅢ式となる。30は沈線間が磨り消され、31では縄文に変わり刺突文で充填している。

石器 石器は打製石斧を中心に10点を図示した。

1～4は打製石斧である。1は断面でみると磨製とも思えるが、刃部が欠損しているため打製石斧とした。2は完形品で左側縁は弯曲している。3は大きな原石から剥離した剥片を利用して製作した石斧である。裏面は周囲だけの剥離で仕上げている。4も磨製石斧から転用したような断面である。

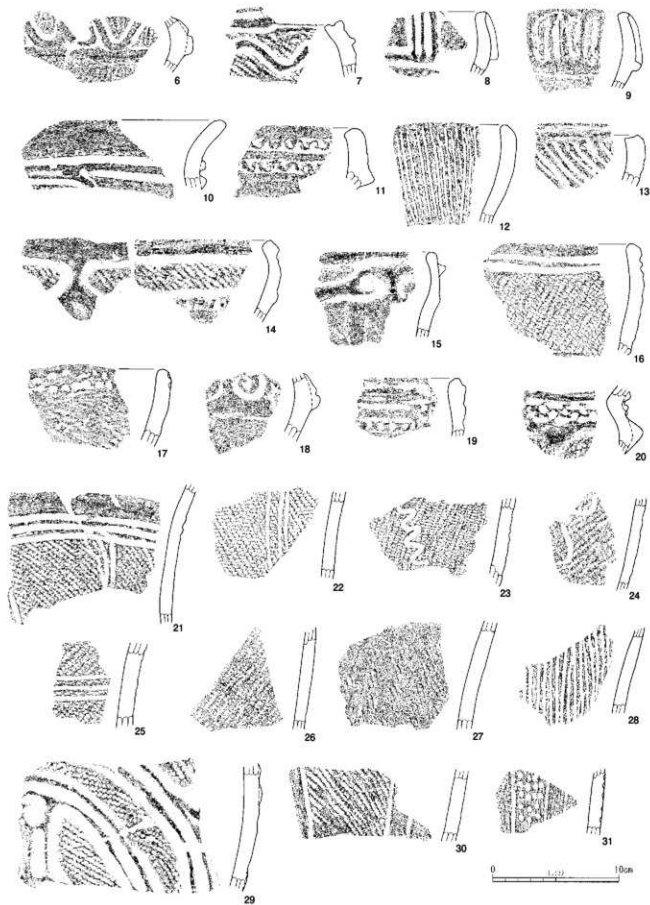
5・7は磨石である。5は径1cmほどの打痕の周囲には滑らかな面が認められる。7は上下部分を敲打に使用し、表面では若干ながら円滑な面を認めることができる。

6・8・9は敲石である。6は破損部の鋭角な部分を刃部あるいは敲打により使用している。片刃石斧ともいえよう。8は表面に僅かな打痕がみられる。9は下端部が顕著に使用されている。

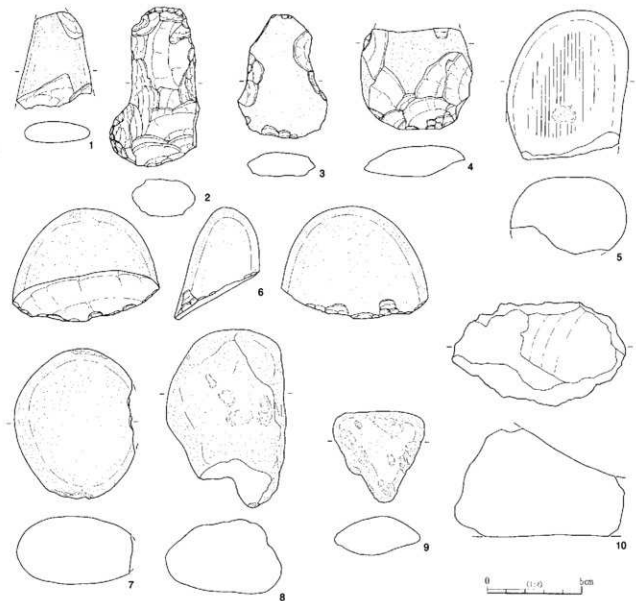
10は石皿の一部である。表裏面を観察すると長期に使用されたようである。

SI-014 (第34・35・52図、図版12)

4 J区のほぼ中央で検出されたものであり、調査開始時点でP1と接するような位置で一括土器が検出された。そのためこの土器を中心にSI-013を設定したが、調査が進捗するにつれ全容が把握できるようになると、SK-120を一周するような形で壁面を確認できた。さらに東西の壁の一部はSI-005とSI-008に接している。また、SK-120によって床面が大きく削除されていた。SK-120は、いわゆる小堅穴であり、床面下42cmで底面となる。その中に穿たれたピットはSK-120に伴うものであろう。土層断面からは、住居跡の廃棄後にSK-120が構築されたようである。本跡の平面形は円形を呈しており、その径は約6.5mとな



第50图 SI-011出土土器(2)



第51図 SI-011出土石器

る。床面は緩やかな凹凸がみられ、P16とP17の間には焼土の散布が認められた。壁面付近では等間隔に小ビットが穿たれている。大部分は壁柱穴になるであろう。柱穴と考えられるビットは、P3、P6、P13、P23、P32、P35、P43などで支柱穴とも思われる。炉跡はSK-120の北に接して検出され、約20cmほど掘り下げ炉としていた。

堆積土についてみると、床面を覆う第2層、第3層には若干の焼土と炭化物が混入していたことが特徴的であった。第1層は黒褐色土（少量の焼土粒と炭化物を若干多く混入）、第2層は黒褐色土（焼土粒と炭化物を少量含む）、第3層は暗褐色土（粘質土と炭化物を少量含む）、第4層は黒褐色土（少量の焼土粒とローム粒を多く含む）、第5層は暗褐色土（ローム粒を多く含む）、第6層は暗褐色土（砂粒を多く含む）、第7層は暗褐色土（SK-120覆土で焼土粒・砂粒・ローム粒を少量混入）、第8層は暗褐色土（SK-120覆土で焼土粒少量、砂粒を多く混入）、第9層は黒褐色土（SK-120覆土で砂粒を多く混入）、第10層は黒褐色土（SK-075覆土で焼土粒を少量、ローム粒をやや多く混入）で構成されていた。一方、炉跡をみると、第1層は黒褐色土（焼土ブロック、ロームブロックを多く混入）、第2層は暗褐色土（焼土ブロック、ロー

ムブロックを少量混入)となり長期間の使用を想起させる。

遺物の出土状況についてみると、P1に接して1の胴下半部を欠失した深鉢が検出されSI-008に東壁に接する位置で2・3の深鉢が、ほかに炉跡とP45の間で浅鉢が出土した。これらの時期は加曾利EⅡ式とみなされる。また石器では石鏃、石鏃の未成品、剥片、石皿、台石、凹石などがみられ豊富な出土量となっている。

本跡の時期は一括土器の出土から加曾利EⅡ式期となろう。

SI-014 ピット一覧表(数字は床面からの深さ、単位=cm)

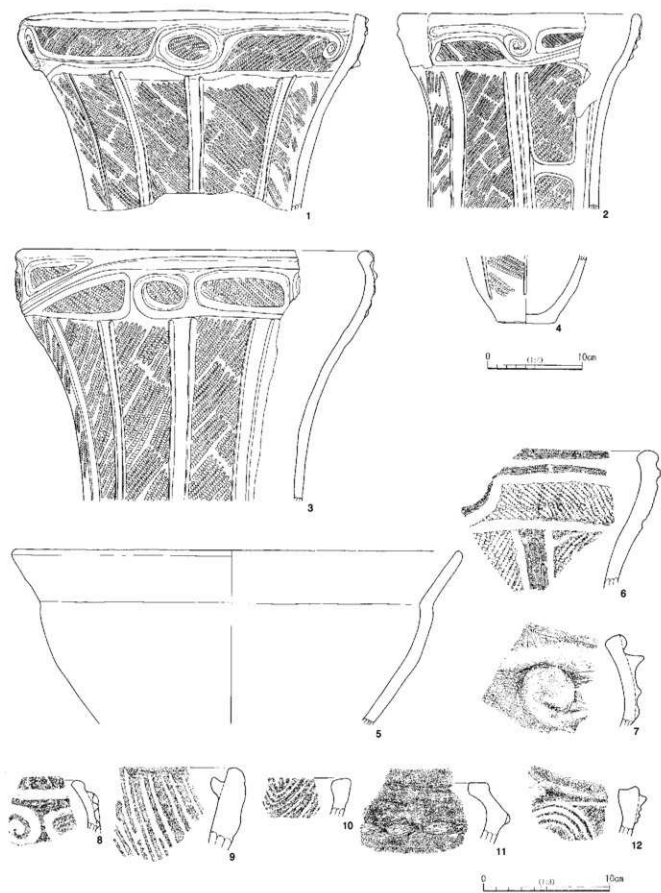
P1-69	P2-29	P3-41	P4-13	P5-30	P6-39	P7-23	P8-49
P9-16	P10-20	P11-71	P12-23	P13-72	P14-29	P15-17	P16-23
P17-27	P18-39	P19-18	P20-23	P21-14	P22-1	P23-52	P24-40
P25-42	P26-68	P27-28	P28-35	P29-46	P30-31	P31-26	P32-69
P33-11	P34-48	P35-63	P36-40	P37-39	P38-19	P39-19	P40-33
P41-20	P42-37	P43-63	P44-53	P45-27	P46-22	P47-11	P48-25

遺物(第52~55図、図版31・33・34・69)

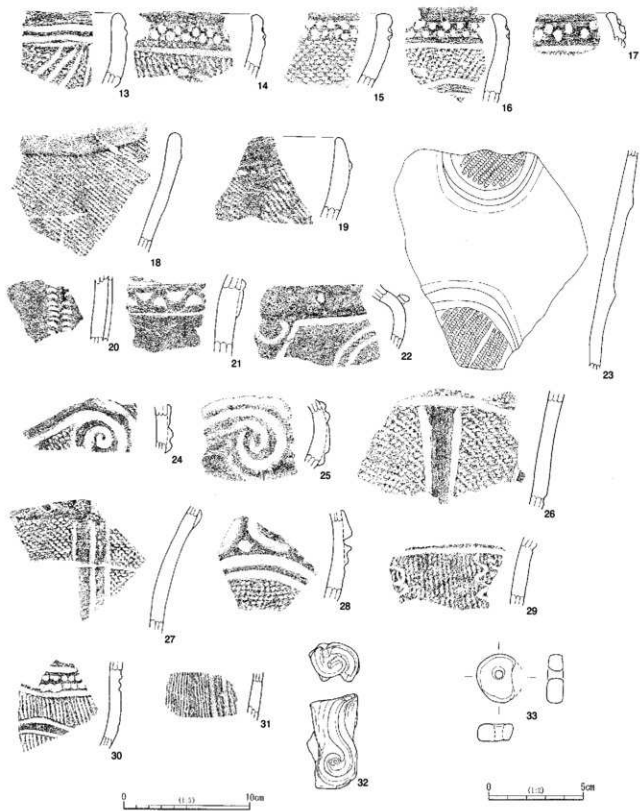
土器 1と3はほぼ同様な文様構成で器面が飾られている。楕円形ないしほぼ三角形の隆帯で区画された中は縄文で充填され、渦巻文は簡略化され楕円形に表現されている。なお、1は被熱した痕跡はみられないため炉としての使用はなかったようである。一方、2でははっきりとした渦巻文を描出している。4は小さめの深鉢で沈線間に磨り消しを有している。5は浅鉢で器面での文様は無く、底部は遺存しない。その口径は前出の深鉢を上回り推定48cmとなる。6~8では渦巻文や磨り消し等がみられる。13~17の口縁部は沈線と円形刺突文で構成される。いわゆる連弧文系を含む土器群となる。22は有孔鏝付土器の鏝部分である。24~31も時期的には一括土器と同時期の加曾利EⅡ式と考えられる。9・10は曾利系であり、9は内面に粘土帯による稜を形成する。11・12・21はやや古手の土器群で、粘土紐の貼付とその造形により文様を形作る。11は内罅する口縁部から浅鉢となろう。12は粘土帯で曲線を描き、21は鋸歯状に粘土を添付している。時期的には加曾利EⅠ式と思われる。18・19は緩やかな波状を呈した口縁部で、微隆起以下には縄文が施文される。典型的な加曾利EⅣ式といえる。32は同時期の突起部分となろう。23は大きな胴部片で、磨り消し部分が大きく隆帯によって楕円形に区画された中は縄文で充填している。時期的には加曾利EⅣ式直前の大型深鉢とみなされる。20は隆帯の左右にヘラによる幅広の連続爪形文がみられる。阿玉台Ⅲ式となろう。33は有孔円盤で一部欠損する。文様は認められない。

石器 ここでは石器の出土量が抜きんでいる。とりわけ石鏃では多様な変化がみられ、成品か未成品の判別が難しいものもある。しかも破損品が多いことと多量の剥片の出土を考えると、本跡周辺で石器製作がおこなわれていたと考えてよいであろう。

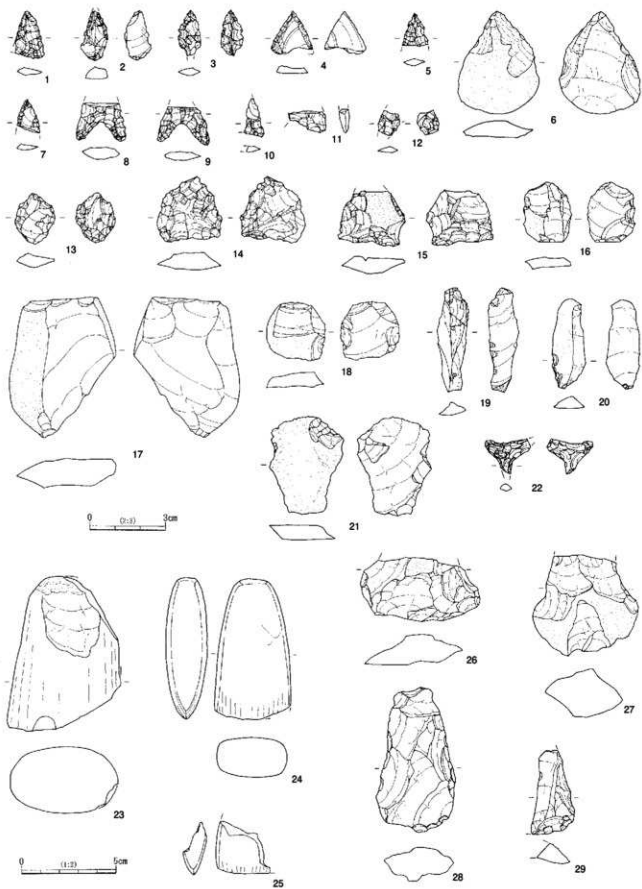
1~15は石鏃である。未成品を含めた15点のうち11点が黒曜石製である。その多くが破損しているため明確な形態を把握することはできないが、1~4の形態を比較すると大きく整形の異なる成品となる。1は左右が非対称で、2は整形が行き届いていないようである。3は明らかに有茎となり、4は薄い剥片の左右側縁を加工するだけで成品としたように思われる。また、6・13・14のみ欠損部はみられない。しかし6を成品と捉えるか、未成品とするか疑問の残るところである。13・14は製作途中で廃棄されたことも考えられる。



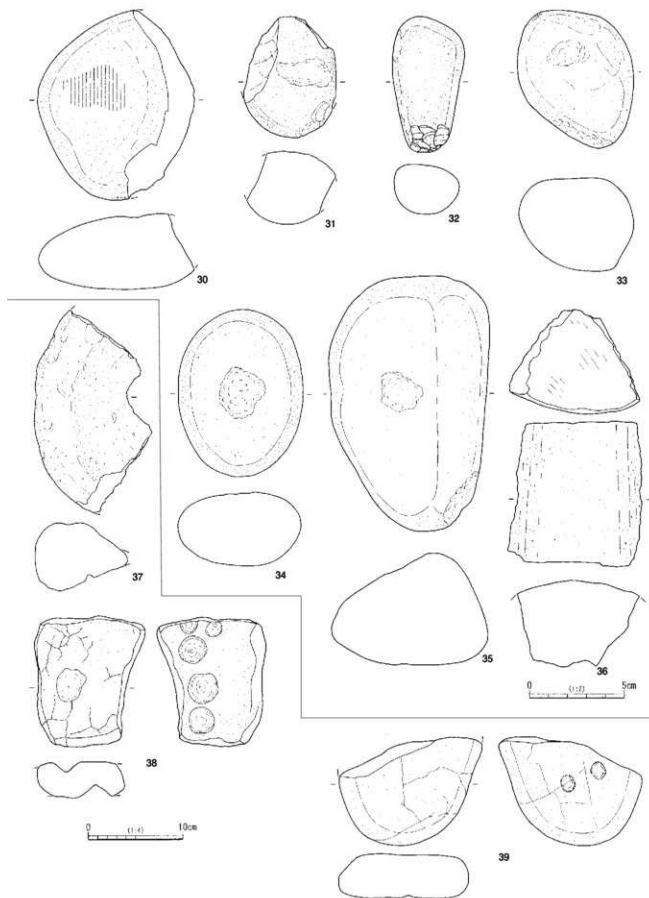
第52图 SI-014出土土器(1)



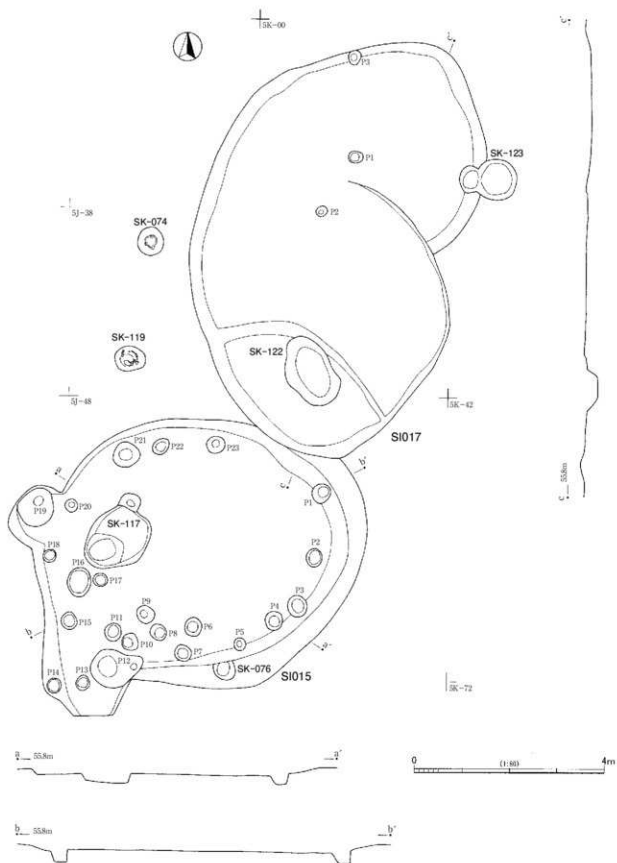
第53图 SI-014出土土器(2)



第54图 SI-014出土石器(1)



第55图 SI-014出土石器(2)



第56图 SI-015・017

22は欠損しているが石鏃と捉えるよりも石錐と考えてよいであろう。

16・17は楔形石器である。16は自然面の残る薄手の剥片であるが、上下端の表裏に剥離が施されている。17は上部で表裏からの剥離がみられる。

18～21は剥片である。いずれも二次剥離が施されているため図示した。19や20は石器として使用されていたことは間違いあるまい。

23～25は磨製石斧である。23は磨製石斧の上半部が遺存したもので、その後には敲石として使用されたらしく左側面には打痕がみられる。24は刃部を僅かに欠損する。きれいに面取された石斧といえる。25は刃部の約2/3が残されたものである。刃部の損傷は少ないため使用して間もなく破損したものと思われる。

26～29は打製石斧である。28は原形をとどめている。ほかは刃部が遺存したものであり、26・27では自然面が認められる。29の遺存部をみると、表表面はかなり丁寧な剥離で整形されていたようである。

30・31・34は磨石である。30は欠損しているが、表裏面の中央部は滑らかな面に変化している。34は表裏面に打痕がみられ、その周囲は磨耗している。

32・33・35は敲石である。32は石器製作に用いたらしく、下端部が著しく損傷している。33は表面の中央部と下端部が敲打のためか白く変色している。35も表裏面の中央部に打痕を残す。

37は石皿である。約1/4が遺存し、長期の使用により中央部が抜けてしまったようである。SI-002から出土した石皿片と接合している。

38は凹石である。数か所の窪みが認められる。断面はやや弯曲しており、石皿の一部であったと思われる。

39は台石である。表面に2か所の凹みが認められた。石皿として使用されていたとも考えられる。破損面も磨耗していたため台石に転用したものであろう。

36は石棒の一部が遺存したものであり、推定径は15cmとなる。表面は丸く整形されている。破損部の一面は磨耗しているため破損後も再利用されていたと思われる。この径の大きさから考えると中期の所産とだろう。

SI-015（第56・57・58図、図版12・35・39・70）

本跡は住居跡集中部の南、大グリッドでいう5J区と5K区間で検出され、後述するSI-017と北側の一部が重複する。平面形は長径7.0m、短径5.6mの楕円形を呈するものと思われるが、西側部分がはっきりしない。あるいはP12とP19は出入り口部分とも考えられる。壁面は西側ではっきり確認できたが、そのほかでは緩やかに立ち上がっていた。床面は比較的平坦であった。中央西よりに浅く大きな掘り込みが確認できたが、本跡とは切り離して考えるべきものであろう。ここではSK-117とした。ここでの跡は検出できなかった。精査はしたものの痕跡らしきものさえ確認できなかった。重複するSI-017でも跡は存在していなかった。ピットは計23か所で検出できた。床面上のピットを観察すると、その位置は壁に沿った形で配置されているため壁柱穴とも考えられる。

堆積土は、他の住居跡と同様に黒褐色土の堆積がみられた。

遺物の出土状況についてみると、1はP22の周辺で、2は3の0.6m東、3はSK-117とP23との中間地点で押し潰されるような形で検出されている。そのほかは床面に近いところから出土している。石器も磨石・石斧類のほかには石鏃や楔形石器などの剥片石器もみられた。

本跡の時期は、緩やかな波状を描く連弧文の一括土器から称名寺式・堀之内式と入り交じった状態で出

土しているが、より後出の堀之内Ⅰ式期と考えたい。

SI-015 ビット一覧表（数字は床面からの深さ、単位=cm）

P 1-24	P 2-34	P 3-28	P 4-20	P 5-8	P 6-22	P 7-13	P 8-35
P 9-6	P 10-26	P 11-24	P 12-35	P 13-11	P 14-23	P 15-26	P 16-12
P 17-31	P 18-10	P 19-28	P 20-23	P 21-25	P 22-10	P 23-18	

遺物（第57・58図、図版35・39・70）

土器 1と2は連弧文系の深鉢である。1の地文は撫糸で口縁直下に2列の刺突が巡る。3は口縁部が欠損するもので下降する沈線の様相から堀之内Ⅰ式となろう。4も同時期であろう。6・8～10は比較的細い撚りの縄文を地文とし、9・10では沈線間を磨り消している。これらは加曾利EⅢ式からEⅣ式への移行期にみられる土器群といえよう。11と17は、その文様構成から称名寺式となろう。そのほかは口縁部の作り、沈線の用い方などから堀之内式に属するものである。12・15は堀之内式でも後出のタイプとなろう。ほかに土製品が1点みられた。5は土鍾と考えたが、周囲は磨耗しており切り込みが明確ではない。拓本には沈線の一部と刺突が僅かに残されている。

石器 10点が出土した。

1は石鎌である。破損品であるが、右側縁部の作りは丁寧である。製作途中で廃棄されたものであろう。

2は楔形石器である上部で表裏面での剥離が認められるため楔形石器とした。見方を変えると石鎌製作の素材とも考えられる。

3は搔器である。打点部に近い厚手の剥片を素材とし周囲に簡単な整形を施し石器としたものである。作りについてみると粗雑感は否めない。

4は剥片である。裏面下端部には整形のための剥離が3回にわたって施されている。楔形石器として使用したものか、未成品とも考えられる。

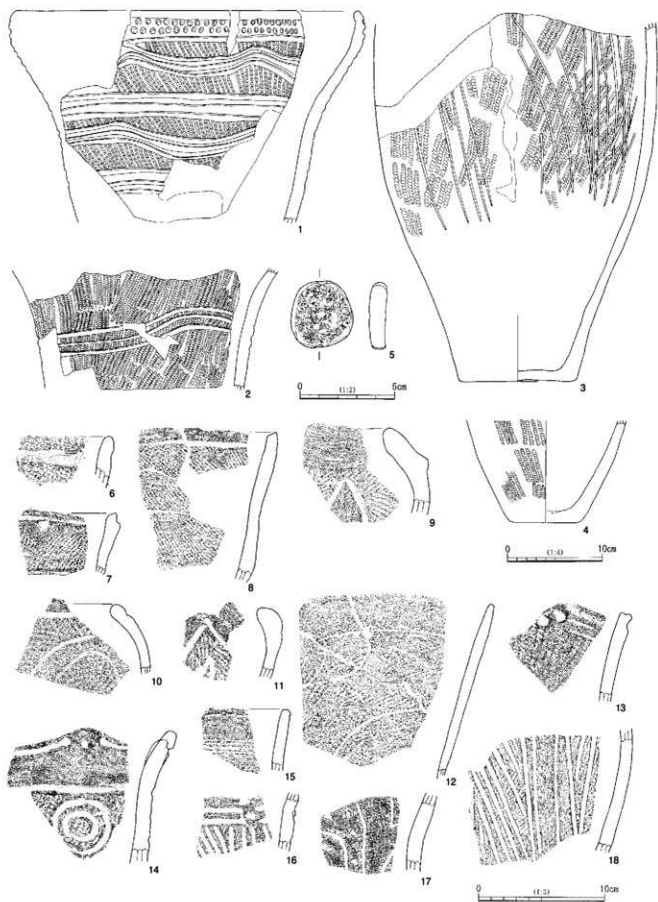
6・7は打製石斧である。6は一部欠損するものの分銅タイプに近い石斧である。7は上半部を失っている。刃部は簡単な剥離で作出したものである。また、側面では顕著な打痕が認められるため、破損後には敲石として使用していたものであろう。ともに自然面を残している。

8～10は磨石である。3点とも表面は滑らかである。8の下端部は意識的に剥離したような剥離面である。9は上部に打痕が認められる。10にも左下端部に打痕を観察することができる。

5は石剣である。一部が遺存したものである。遺存部が磨製石斧の上半部と異なり平行に整形されている点と石材には緑泥片岩が採用されている点から、石剣の可能性が強いものと判断した。

SI-016（第59図、図版13）

本跡は5K区の西側、5K-83・84グリッドで検出された小型の住居跡である。平面形はほぼ円形を呈しており、長径は4.2m、短径は4.0mを計測する。壁は比較的良好な状態で遺存しており、やや傾斜するが床面までの掘り込みは15cmほどの深さであった。床面は西に傾斜するものの平坦である。ビットは2か所のみで浅く柱穴を想起させるものではない。ただP1としたビットは床面から5cmと浅く、なだらかな掘り込みであったため焼土はみられなかったが、炉跡として使用していたとも考えられる。



第57図 SI-015出土遺物

堆積土は、黒褐色土が主体となり、下部では黄褐色の砂粒が若干混入していた。P1の堆積土も同様であった。

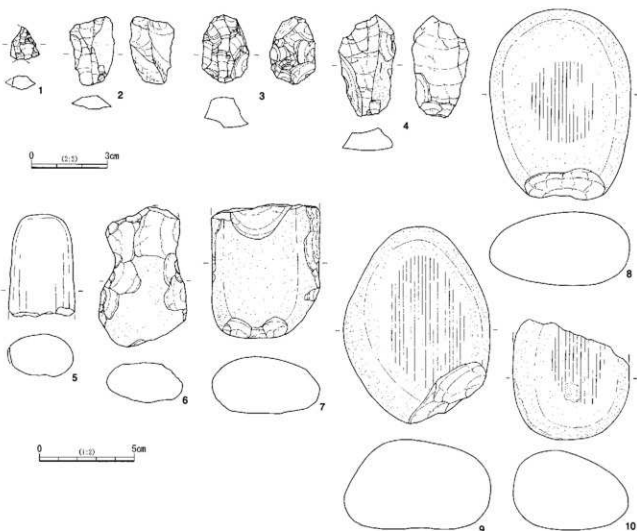
遺物の出土状況についてみると、P1から薄手の深鉢が出土し、覆土中からも後期の土器群がみられた。本跡の時期は大型破片等の出土から堀之内Ⅱ式期となろう。

SI-016 ビット一覧表 (数字は床面からの深さ、単位=cm)

P 1 - 5	P 2 - 7
---------	---------

遺物 (第59・60図、図版36・39・70)

土器 本跡から出土した土器群はすべて後期に属するものであった。1～3は底部で、3の底部には網代痕がかすかに残る。胴部では縄文が施文されているようであるが、器面の剥落が著しく図示してもはっきりしない。4は浅鉢で補修孔が穿たれている。口唇部と沈線下には刻目が施される。5・6は縄文地に半截竹管による浅い沈線が器面を飾る。7・8は同一個体で、口縁は波状となる。器面はヘラ状工具により整形しているが、かなりの部分で凹凸が残る。9～12は口辺に粘土帯を貼付した土器群で、10・11の裏面

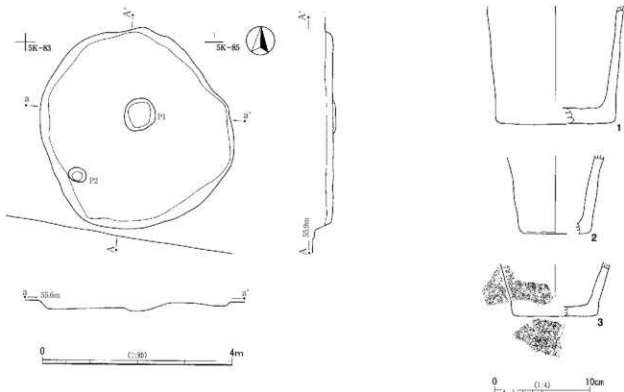


第58図 SI-015出土土器

にみられる沈線は細いが深くしっかりと掘り込まれている。13・14も同一個体であり縄文地に斜行する浅い沈線が特徴的である。これらは堀ノ内Ⅱ式とみてよいであろう。15は胴部片で沈線により渦巻が表現されている。堀之内式の渦巻きとは異なるため加曾利E式でも古い部分に位置づけられよう。16も縄文のみで即断はできないが同一時期と考えられる。

石器 3点が出土した。

17は完形の打製石斧であり、扁平な河原石を素材としたもので表裏に自然面を残す。18・19は敲石で、18の敲打部分は表皮が剝離し白色化している。19は上下の端部に僅かな打痕が観察できる。また裏面の平坦部は滑らかであり、磨石としても使用されたようである。



第59図 SI-016・出土石器

SI-017 (第56図)

本跡は前述したSI-015の一部と重複する。平面形は、楕円形を呈した2軒の住居跡が重なり合ったようにも思われる。壁面と思われる部分は緩やかに傾斜し床面へと続くが、主柱穴に値するようなピットはみられない。さらに炉の痕跡も認められず住居跡とするには甚だ心許ない。ただ、深鉢の大型片が出土したため、住居跡の存在を想定して調査した。

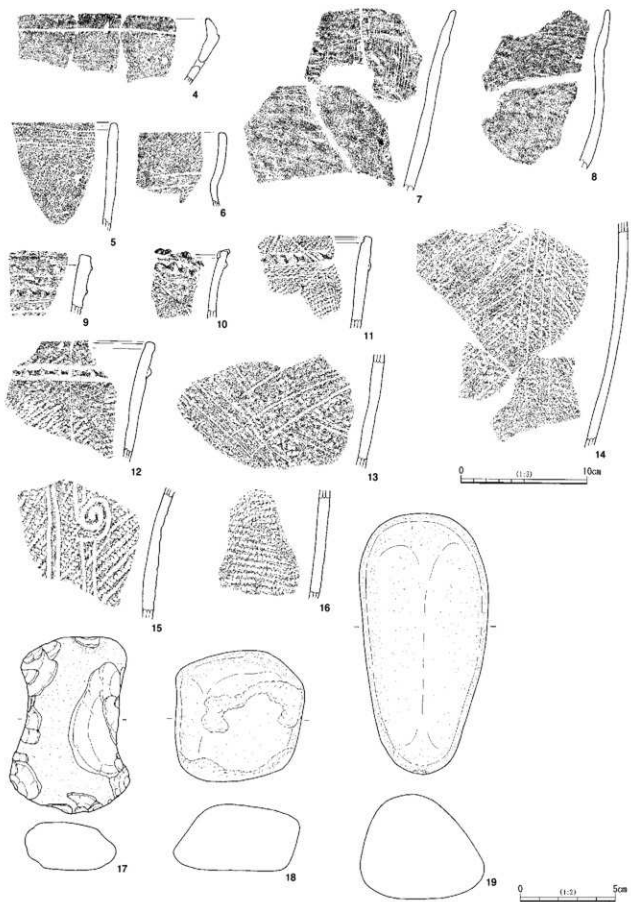
堆積土は、黒褐色土が主体となっている。

遺物の出土状況についてみると、後期に属する大型片と底部が出土している。

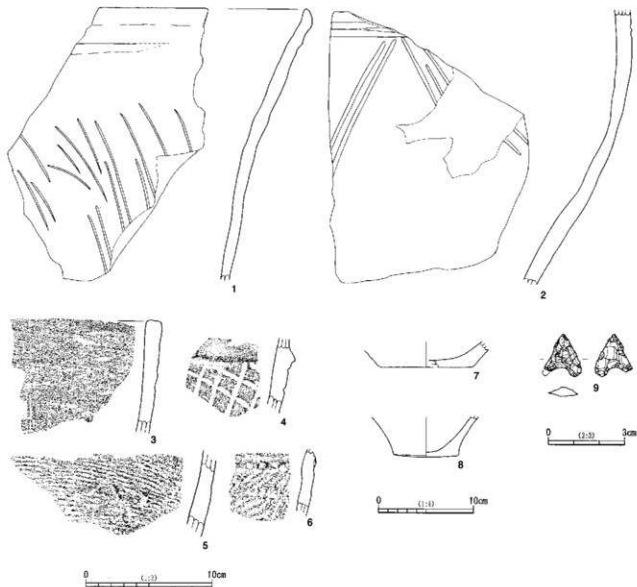
本跡の時期は、出土土器から堀之内Ⅱ式期と考えられる。

SI-017 ピット一覧表 (数字は床面からの深さ、単位=cm)

P 1 - 23	P 2 - 19	P 3 - 25
----------	----------	----------



第60図 SI-016出土遺物



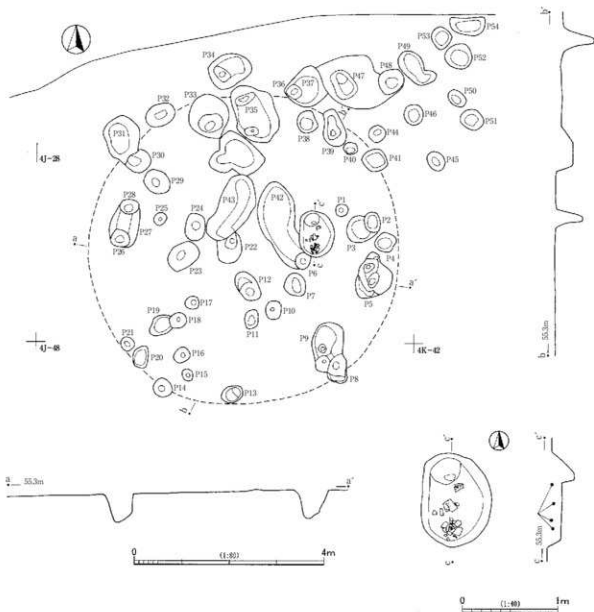
第61図 SI-017出土遺物

遺物 (第61図、図版37・39・70)

土器 土器の出土量は少なかったが、大型の破片が2点出土した。1はP2から2mほど南で出土している。口縁が緩やかに外反する深鉢で沈鉢らしき痕跡を残す。胴部はヘラ状工具で整形しているが粗雑なものである。また口縁部の内側は若干内増するような作りである。2はポイントC'付近の床面から出土したものである。胴部の膨らみが大きい深鉢で、口辺には横走する沈線と胴部にみられる斜行沈線で主文様を構成している。ただ器面が磨耗しているため、地文に縄文らしき痕跡もみられるがはっきりしない。以上の2点は施文等から堀之内Ⅱ式と考えられる。3は下部に半截竹管状の工具による縦方向の沈線がみられる。器面の整形は粗い。4の隆帯以下でははっきりとした沈線による格子目文が描かれる。5は全面が縄文施文と思われるが磨耗により痕跡をとどめる程度となっている。6には紐線文が僅かに確認できる。これらはおおむね堀之内Ⅰ式となろう。底部が2点出土している。いずれも堀之内式に属するものと思われる。

石器 1点出土した。

9は石鎌である。左脚部を若干欠損しており左右対称とはいいがたい。表裏面の剥離は丁寧に施されている。



第62図 SI-018

SI-018 (第62図、図版13)

本跡は4 J区と4 K区にかけて検出されたピット群を精査の過程で、4 K-21・22グリッド間において一括土器の出土とともに灰の痕跡を確認した。そこで灰跡を中心に平面形の把握を試みたが、精査の結果、周囲はほぼ平坦で壁の立ち上がりなどの痕跡すら見当たらなかった。しかし、灰跡周辺の床面は比較的平坦で状態は良好であった。ピットの検出状況を見ると、灰跡の東側では耕作による削平も深くほとんど認められなかった。しかも遺構の分布も希薄となっていた。灰跡を基準として住居跡の範囲を破線で括ったが、P30～P41までは壁柱穴とも考えられる。だが、P42とP43は、その形状から後期にしばしばみられる出入り口のような様相を呈している。またピットの深さも一様ではないが、床面下で30cmを超えるピット数は25か所と多数が検出されているところから住居跡の重複も考えられる。灰跡は楕円形であり、長径98cm、短径75cmを計測する。深さは床面下15cmとなる。

灰内の覆土は黒褐色土で若干の焼土が認められ、床面直上の堆積土も焼土を除きほぼ同様なものであった。

遺物の出土状況についてみると、本跡では炉跡内とP35から器形の窺える粗製深鉢が出土している。ほかには中期から後期にかけての破片がみられた。

本跡の時期は炉跡から出土した粗製土器から加曾利B I 式期に該当する。

SI-018 ビット一覧表（数字は床面からの深さ、単位=cm）

P 1-44	P 2-58	P 3-15	P 4-28	P 5-68	P 6-44	P 7-23	P 8-47
P 9-55	P 10-53	P 11-16	P 12-62	P 13-14	P 14-37	P 15-16	P 16-35
P 17-58	P 18-36	P 19-16	P 20-55	P 21-27	P 22-56	P 23-60	P 24-54
P 25-31	P 26-38	P 27-16	P 28-30	P 29-53	P 30-24	P 31-26	P 32-20
P 33-28	P 34-27	P 35-26	P 36-51	P 37-32	P 38-35	P 39-70	P 40-33
P 41-27	P 42-36	P 43-50	P 44-41	P 45-30	P 46-37	P 47-37	P 48-30
P 49-22	P 50-38	P 51-40	P 52-22	P 53-29	P 54-37		

遺物（第63図、図版38・39・70）

土器 ここでも大型の剥片が出土している。1は口縁部から胴下部にかけての大きな破片である。炉跡の上面から出土している。器面は縄文で全面に施文が及ぶようである。口縁の内側には浅い沈線がみられる。2は口縁部と底部を欠損する深鉢で器面には若干磨き痕が認められる。3は1の底部と考えられるが接点を見出すことはできなかった。いずれも加曾利B I 式となろう。4は把手部分の破損品であり、勝坂式終末期のものであろう。5は波状口縁片で隆帯以下は細沈線で縄文と磨り消し部分を区画している。時期的には加曾利E III からE IV 式への移行段階といえよう。6は口縁直下に粘土帯を貼付し刺突を加えている。稚拙な粘土紐の貼付がみられる。7・8は口縁部の作りや沈線による曲線等からこれらは堀之内I 式となろう。9の沈線間には縄文の末端部がみられる。11は器厚は4mmと薄く、沈線間を縄文で満たす。一方、12は沈線のみで文様構成となる。器形は胴部がやや丸味を帯びた鉢形と推測できる。いずれも堀之内II 式と考えられる。10は幅広の沈線間に磨り消しが認められるところから加曾利E II 式となろう。

石器 石器は少なく、図示できるものは4点だけであった。

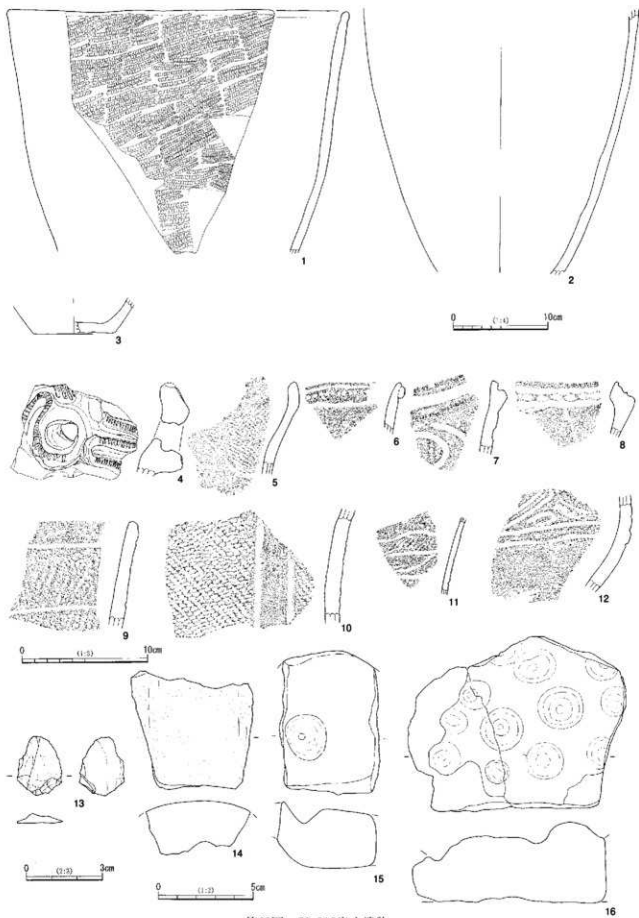
13は剥片である。一部に二次剥離がみられる。石鎌の素材とも思われる。

14は石棒である。一部が遺存し、表面はきれいに整形されている。この大きさから中期のもの推測できる。SI-014でも同様な石棒が出土している。

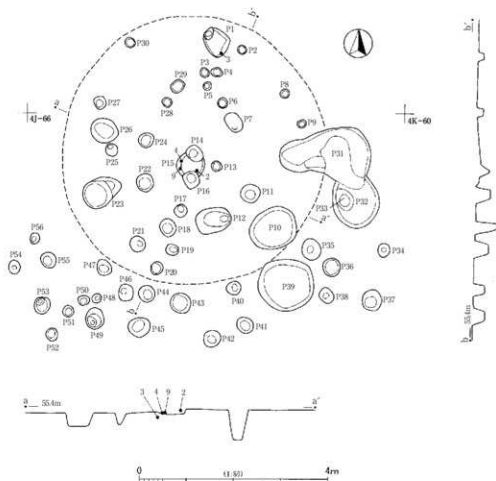
15・16は凹石である。15は器面に1か所の窪みがみられる。16は裏面にはみられないが、表面では所狭しと大小の窪み痕が形成されている。

SI-019（第64図、図版13）

本跡は4 J 区のなかでも4 J -67グリッドを中心としてビット群が検出された地点に位置し、遺物も伴っていたため住居跡の存在を想定して調査を慎重に進めていった。ただ、SI-018と異なる点は住居としての掘込み、炉跡といった関連遺構の検出には至らなかった。ビットは下記のとおり柱穴としての十分な深さを有しているものも多々みられた。



第63図 SI-018出土遺物



第64図 SI-019

遺物の出土状況についてみると、中期末葉から後期前半の土器群が出土している。P15からは後期初頭の同一個体数点が出土している。こうした点から住居跡の痕跡として報告するにとどめたい。

本跡の時期は後期初頭から前半期となろう。

SI-019 ビット一覧表 (数字は床面からの深さ、単位 = cm)

P 1 - 13	P 2 - 13	P 3 - 14	P 4 - 12	P 5 - 24	P 6 - 13	P 7 - 51	P 8 - 11
P 9 - 5	P 10 - 25	P 11 - 63	P 12 - 50	P 13 - 21	P 14 - 29	P 15 - 8	P 16 - 32
P 17 - 47	P 18 - 30	P 19 - 22	P 20 - 21	P 21 - 45	P 22 - 36	P 23 - 63	P 24 - 23
P 25 - 34	P 26 - 27	P 27 - 29	P 28 - 17	P 29 - 25	P 30 - 14	P 31 - 38	P 32 - 18
P 33 - 33	P 34 - 33	P 35 - 46	P 36 - 9	P 37 - 42	P 38 - 24	P 39 - 30	P 40 - 21
P 41 - 22	P 42 - 50	P 43 - 24	P 44 - 24	P 45 - 37	P 46 - 26	P 47 - 26	P 48 - 38
P 49 - 41	P 50 - 27	P 51 - 30	P 52 - 25	P 53 - 21	P 54 - 52	P 55 - 49	P 56 - 17

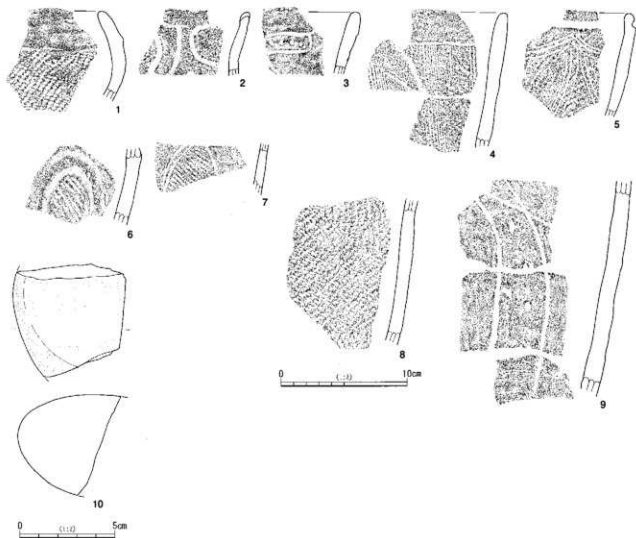
遺物 (第65図、図版38・70)

土器 土器の出土量は少なく、文様のはっきりした破片を図示した。3はP 1、9はP15から出土した。時期的には加曾利EⅢからEⅣ式から堀之内I式までがみられる。

1は緩やかに内彎する口縁部で縄文との境界に微隆起を配置する。7は胴部片で沈線に囲まれた枠内は縄文で満たされる。時期的には加曾利EⅣ式となろう。3・9は沈線内に刺突文を加えるもので称名寺式に位置づけられる。2は太い沈線が特徴的である。4は沈線以下を篩菌状痕で器面を覆う。5は縄文地に半截竹管により施文している。時期的には堀之内I式の範疇で捉えられよう。なお、6の胴部片は隆帯の形から加曾利EⅢ式となろう。

石器 1点出土した。

10は磨石である。欠損しており、残された表皮部分は滑らかである。



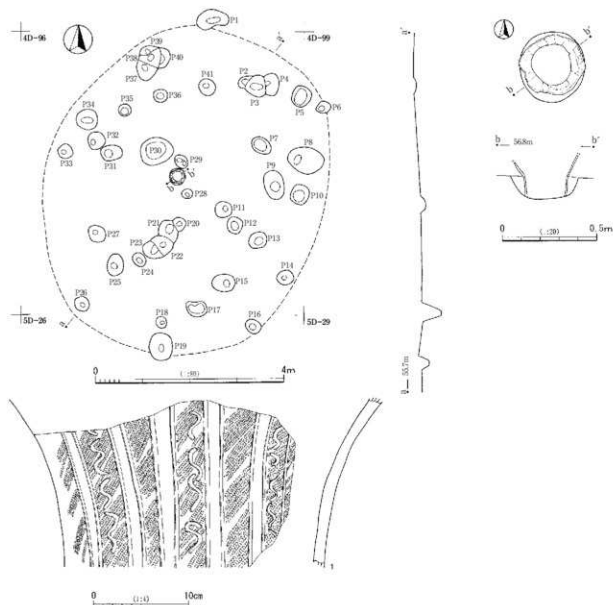
第65図 SI-019出土遺物

SI-025 (第66図、図版13)

本跡は、積極的な根拠はないが5 O-07グリッドにおいて一括土器が検出されたため住居跡を想定して調査を進めていった。ただ、ここでは明確な炉跡は検出できなかった。一括土器は図示したような形で埋め込まれており、口縁部と底部が欠損していた。堆積土は粘土質の黒褐色土であり、焼土や炭化物等は認められなかった。しかし底部が欠損しているため意識的な埋藏というよりも炉跡としての可能性も否定できないため一括土器出土地点の周辺を図示してみた。ピットは40か所余を掲載したが柱穴として十分な深さを示すものも少なくない。こうしたことを考慮すれば住居跡の存在した可能性は十分考えられる。

遺物 (第66図、図版39)

土器 胴部のみであるが、遺存する下部の径は27cmを計測する。上部では約38cmとなり、口縁部に向かって大きく外反する深鉢である。地文の縄文は垂下する沈線で区画され、さらに沈線により「S」字状の文様が施される。時期的には加曾利EⅡ式となろう。



第66図 SI-025・出土土器

SI-025 ビット一覧表（数字は床面からの深さ、単位=cm）

P 1-22	P 2-12	P 3-28	P 4-18	P 5-10	P 6-8	P 7-13	P 8-69
P 9-42	P 10-40	P 11-44	P 12-12	P 13-20	P 14-11	P 15-60	P 16-17
P 17-17	P 18-13	P 19-32	P 20-22	P 21-16	P 22-45	P 23-18	P 24-35
P 25-40	P 26-15	P 27-23	P 28-8	P 29-11	P 30-14	P 31-34	P 32-37
P 33-39	P 34-36	P 35-17	P 36-11	P 37-41	P 38-47	P 39-28	P 40-10
P 41-43							

第2節 小堅穴

小堅穴については、前述した久保塚ノ台遺跡1では小堅穴を開口部の規模によってAタイプとタイプBに分類して記載したが、本遺跡では開口部の径が1mに満たないタイプでも基底部の立ち上がりが明確なものはここに含めることとした。また、ここでは明らかに貯蔵を主目的とした形態の異なるタイプの小堅穴が検出されている。そのため貯蔵目的のタイプを形態の相違により、CタイプとDタイプ（フラスコ形）として分類して、出土遺物を中心に記載していくこととした。なお、小堅穴個々の詳細については計測表としてまとめ、ビットは床面からの深さとした。

Aタイプ

本タイプは縄文時代中期の集落では普遍的にみられる小堅穴である。ここでは9基が該当する。SK-025とSK-210ではビットはみられなかった。SK-010の平面形は不整形で出入り口部分とも考えられる。出土遺物はSK-025で多く、次いでSK-120・121となる。また、SK-009・115・210では図示できるような遺物は出土していない。

SK-001（第67・68図、図版14・42・71）

本跡に伴うビットは計6か所で検出できた。P6は深さからみて主柱穴的な役割を果たすものであろう。

遺物は、そのP6周辺から1～3が出土した。いずれも器面は著しく磨耗しているが、渦巻文と沈線ははっきり認識できる。時期的には加曽利EⅡ式となろう。4は前者よりも古く位置づけられよう。なお、1・2は同一個体と思われる。

5は石簾未成品である。石簾としての形態はおおむね整っているが、右側縁の加工は加えられていない。

SK-010（第67・68図、図版42）

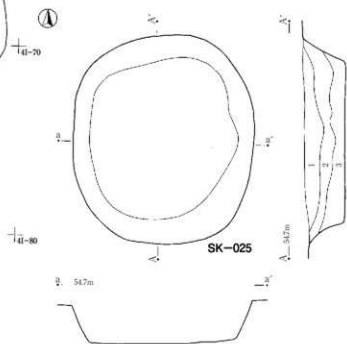
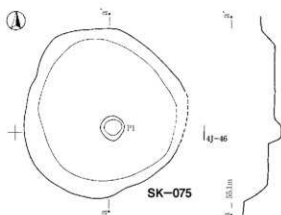
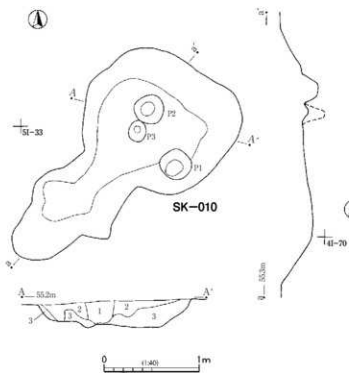
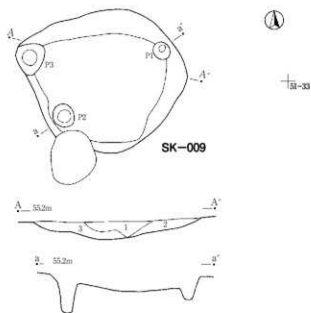
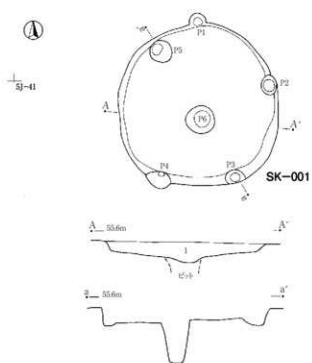
本跡のビットはいずれも深い。ただ平面形は不整形であり、南西部に延びる掘込みは出入り口か、土坑との重複となろう。遺物は小片が出土しては、本跡の時期を断定するには不十分である。

6は波状口縁の波頂部となる。沈線か条線を確認できる。阿玉台Ⅲ式であろう。7の地文は縄文で太い沈線が施される。加曽利EⅡ式となろう。

SK-025（第67・68・69図、図版14・40・43・71）

本跡ではビットはみられなかった。しかし出土遺物は豊富で器形の理解できる一括土器をはじめとして図示できる土器も多数みられた。

10は緩やかな波状口縁で、口縁内側に浅い沈線が施される。文様は胴上半部に沈線による三角文が描かれ、一部には縄文の施文がみられる。13は口縁部から胴部にかけて約1/3が欠損する。内外面は磨きによ



SK-001

1. 黒褐色土 (黄土・砂粒混入)

SK-009

1. 黒褐色土 (砂粒・粘土・ブロック状に混入)
2. 黄褐色土 (砂粒・黒色土混入)
3. 黄褐色土 (砂粒・粘土混入)

SK-010

1. 黒褐色土 (ロームブロック・ローム粒混入)
2. 黒褐色土 (砂粒・粘土混入)
3. 黄褐色土 (砂粒・粘土・黒色土混入)

SK-025

1. 黒褐色土 (黄褐色砂粒混入)
2. 黒褐色土 (黄褐色砂粒・白色粘土混入)
3. 黒褐色土 (白色粘土混入)

第67図 SK-001・009・010・025・075

りきれいに仕上げられており、底部にまで及んでいる。典型的な精製土器といえよう。口唇部には指痕による押圧で凹みを作り、内面の2か所に棒状工具による刺突を加えており、穿孔までには至っていない。器面の文様は短沈線による曲線や斜線が縦横に施されている。15は口縁部が1/5程度の遺存で推定復元によるものである。器厚は5mmと薄く、熱りの密な短い原体で施文されている。時期的には堀之内Ⅱ式となろう。なお、29・33・34の鉢形土器や30の浅鉢、内面がきれいに仕上げられてた29・30も同時期の所産といえよう。11は3単位の波状口縁を有するタイプと考えられる。器面上半部に縄文を施文した後に、深い沈線で半月形や楕円を頸部に描く。12は口縁部の1/4ほどが遺存したものである。11同様に縄文地のうえを沈線で飾る。14は縄文のみの施文で内面の一部には磨き痕も認められるが、仕上げは概して粗雑で凹凸もみられる。このほかに27・28・35も含めて堀之内Ⅰ式と考えられる。21は幅広の連続爪形文が隆帯に沿って施されているところから阿玉台Ⅲ式となろう。22は胎土に雲母を含み縄文施文が認められるため阿玉台Ⅳ式といえる。16は加曾利EⅡ式の底部である。22～24は口縁部片で枠内を縄文施文する。32は胴部片で磨り消しが認められる。これらは加曾利EⅡ式となろう。また、25や37は隆帯を有するタイプで前者よりも新しく位置づけられる。17～20は後期の底部である。

石器が2点出土している。40の剥片の表面には自然面が多くみられる。右上部側縁に整形のための剥離が施されている。41は打製石斧の頭部である。ここでも自然面を残す。整形という点では断面図に示したように左右対称とは大きくかけ離れている。

以上のような出土遺物からみれば、本跡の時期は堀之内Ⅱ式期と考えることができよう。

SK-075 (第67・68図、図版41・42)

本跡の中央に穿たれたビットもSK-001同様の柱穴となろう。遺物は少なく、図示できる土器は2点のみであった。8には細い粘土帯が波状に貼付されたもので加曾利EⅠ式となろう。9は基底部の作りから後期に属する底部である。

SK-115 (第70図)

ここでもP4は60cm余りの深さとなり主柱穴的なビットとなろう。しかし出土遺物には恵まれず、図示できるような土器はみられなかった。

SK-120 (第70・71図、図版41・42・71)

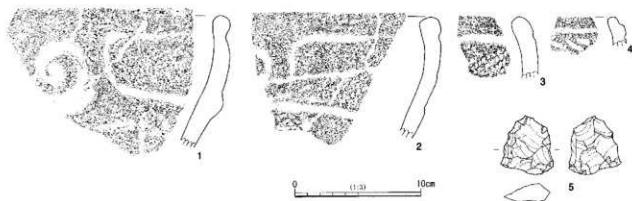
本跡も中央に位置するP4が主柱穴になるものと思われる。浅い掘込みのP1は独立した土坑となるようである。遺物は多いとはいえないが、石器も含めて10点を図示することができた。時期的にはすべて加曾利EⅡ式の新しいタイプに含められよう。

1は口縁部が3/5ほど遺存する深鉢であり、渦巻文がやや簡略化されている。10数片が接合したもので、そのうちの1点はSI-014出土したものであった。4は円形の刺突文と下部には連弧文の一部が確認できる。5は口辺部片である。紐等を通すためか橋状に粘土を貼付している。

ほかに石器が2点出土している。9は凹石であり、石皿の一部を再利用したのと考えられる。10は打製石斧の完形品である。整形は入念で鋭利な刃部を作り出している。

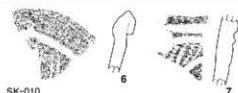
SK-121 (第70・71図、図版42・71)

本跡はSI-011内で検出された小堅穴である。P3とP4の間には住居跡に伴う一括土器が出土している。つまり住居跡よりも古い遺構であることは確認できた。しかし本跡覆土内で出土している土器とは形式的な差異は認められない。本跡の形態はSK-120とほぼ同様なタイプの小堅穴であり、中心に位置するピツ

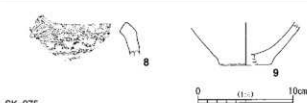


SK-001

0 (1:3) 3cm

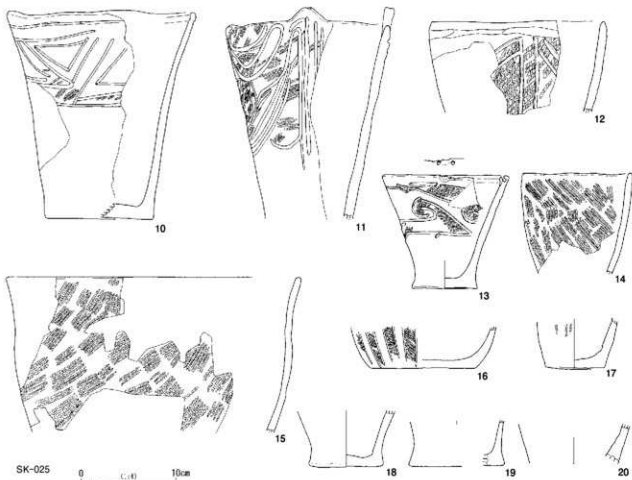


SK-010



SK-075

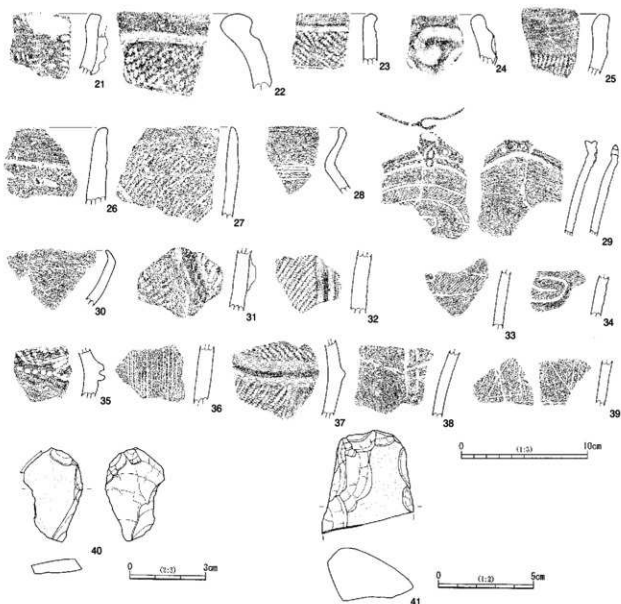
0 (1:3) 10cm



SK-025

0 (1:3) 10cm

第68図 SK-001・010・025・075出土遺物



第69図 SK-025出土遺物

下は床面下19cmと浅い。遺物は少なく、図示できる土器が3点と石器が5点となっている。

11~13はいずれも加曾利EⅡ式で渦巻文や、沈線間の磨り消しといった特徴を具備したものである。

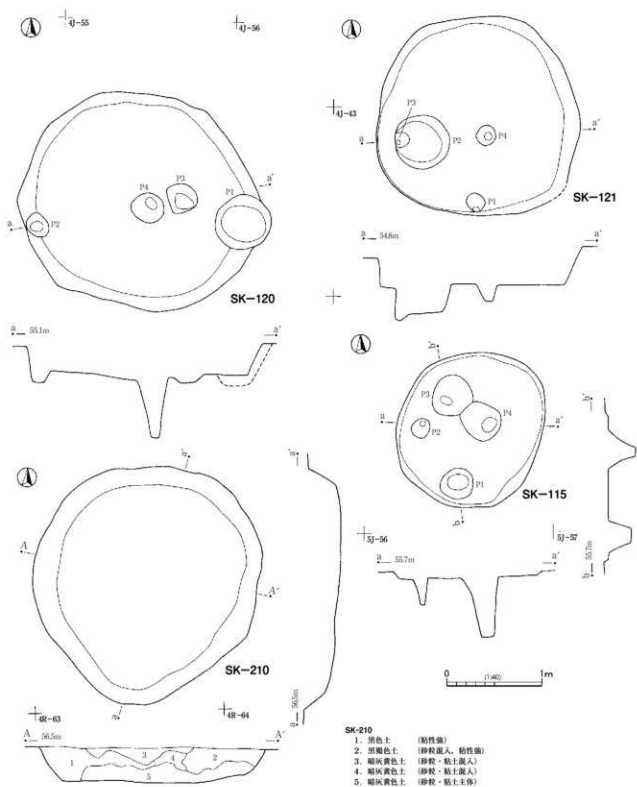
14は自然面を残す石鏃で、簡単な剥離で周囲を整形し成品としている。本遺跡ではしばしばみられるタイプである。15・16は黒曜石製で加工は丁寧である。17は磨石で表面は研磨されたように滑らかである。側面には打痕がみられる。18は敲石で表裏両面の中央部に打痕があり、周囲ではみられない。

SK-210 (第70図)

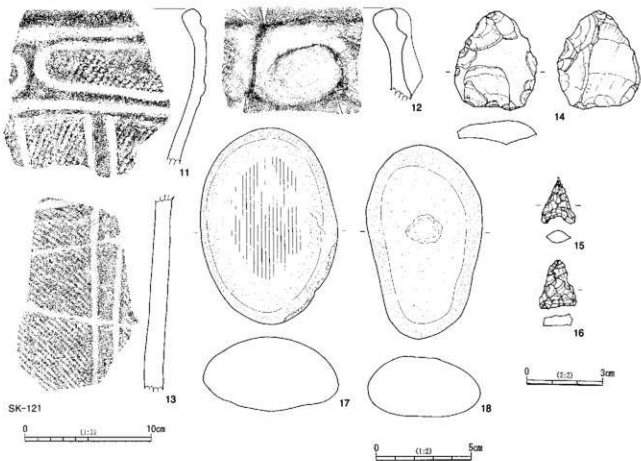
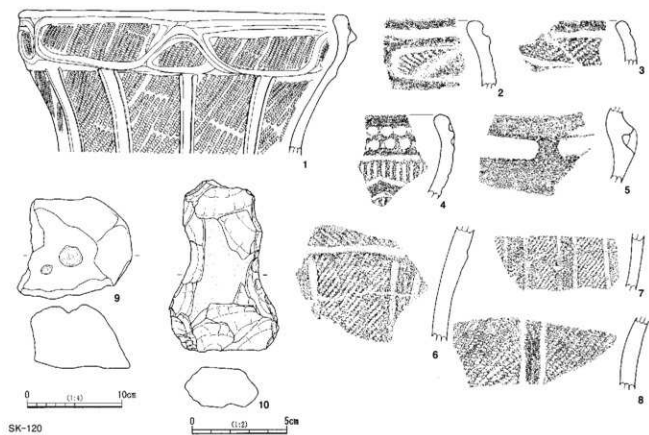
本跡でのビットは確認できなかった。遺物も出土していない。

Bタイプ

このタイプは総体的にみて前者よりも規模が小さく遺物の出土量も少なかった。しかも土器面が著しく磨耗しており所属時期を判別できるものは僅少であった。そのため図示できるような土器片はできる限り



第70图 SK-115·120·121·210



第71図 SK-120・121出土遺物

掲載することとした。また石器に至っては図示できるような遺物は1点のみであった。なお、SK-003・006・020では遺物の出土は認められず、SK-012は覆土中から土器片10点と礫片3点が出土したが、土器の器面は磨耗が著しく図示が不可能であったため図示することができなかった。SK-004・042・046・047も小片が若干出土したのみで図示できるものはなかった。

SK-116 (第72・73図、図版42)

図示できる土器片は8点となる。1は磨消縄文と沈線の組み合わせによる文様構成である。そして大きく内彎する口縁部から加曾利EⅢ式の終末からEⅣ式に位置づけられる。2の沈線間の縄文は磨り消され幾何学的な文様がみられる。薄手の器厚で、口縁の内面には浅い沈線が認められる。堀之内Ⅱ式となろう。3・5は器面の磨耗が著しい。明確な沈線により飾られており、4・6も含めて堀之内Ⅰ式となろう。

SK-117 (第72・73図、図版44・71)

ここで図示できる遺物は胴部片2点と石器1点であった。

9・10は同一個体と思われる。深鉢で隆帯と縄文による文様構成から加曾利EⅢ式となろう。

11は黒曜石の剥片で下端に小さな剝離が施されている。搔器のような使い方をしたものであろう。

SK-202 (第72・73図、図版44)

土器3点が図示できた。14の縄文は複節のようである。加曾利EⅡ式となる。12・13の器厚はやや薄手となり、時期的には後期に属するものと思われる。

SK-205 (第72・73図、図版44)

10点余りの破片が接合したものである。波状口縁を呈した紐線文系深鉢であり、内面では細く深い沈線が2条みられる。施文された縄文には加曾利B式特有の乱雑さがみられる。

Cタイプ

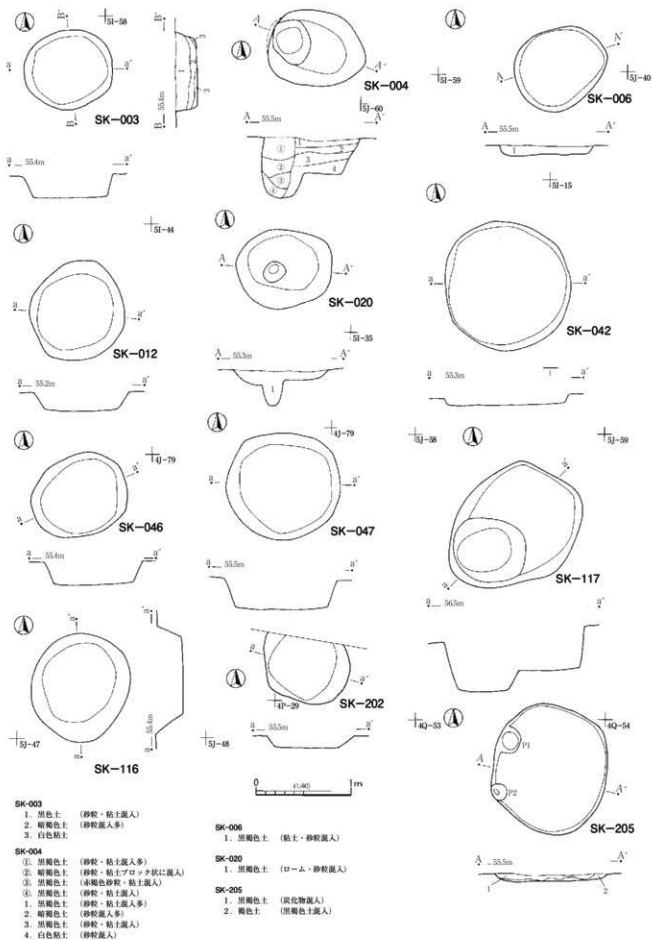
本タイプの平面形は、Bタイプとしたものと同程度の大きさである。ただ掘り込みは深く明らかに貯蔵穴を意図した作りとなっている。

SK-221 (第74・75図、図版15・40・44・71)

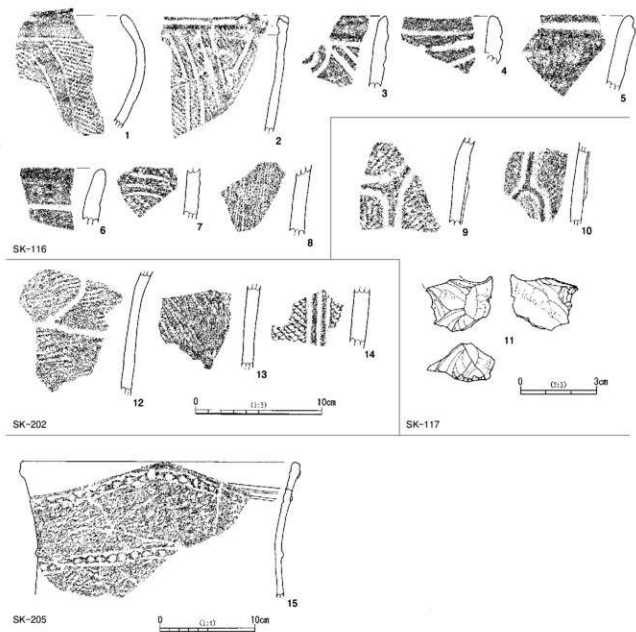
本跡は開口面から底面まで1m余りの深さとなっている。底部付近ではやや広がりを見せる。むろん製作当時の開口部は削平されていると考えられるので本来の深さは1.5mほどはあったものと思われる。出土遺物についてみると、一括土器はみられなかったものの大型の口縁部片が数点出土している。

1は幅広のヘラによる押し文が隆帯に沿ってみられる。阿玉台Ⅲ式となろう。9は口辺部片で幅の狭い施文具で密に押し引している。施文具から阿玉台Ⅱ式と考えられる。いずれも雲母の混入は認められない。4・5は加曾利E式でも新しいタイプである。4の沈線は浅く、5は渦巻きが簡素化され円形に変化している。2・3・6～8は波状口縁での施文や口唇部の作りから堀之内Ⅰ式となろう。12・13の胴部片も同時期と考えられる。10の胴部片では太い沈線と刺突がみられる。この点から称名寺式となろうが11も同時期であろう。15の平坦面はきれいに仕上げられているため、脚付の器台と考えてよさそうである。器台部分の推定径は14.5cmとなる。脚部の一部には短沈線による文様もみられる。惜しむらくは欠損品で全体が確認できないことである。時期的には本跡が堀之内Ⅰ式期と考えられるため同時期の土製品と考えたい。14は土鍾である。薄手の土器片を利用しており、これも後期の所産であろう。

16は砥石と考えられる。表裏両面に僅かな凹みを残す。17は敲石で側面と下端部には顕著な打痕が認められる。



第72図 SK-003・004・006・012・020・042・046・047・116・117・202・205

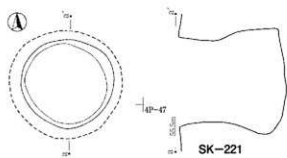


第73図 SK-116・117・202・205出土遺物

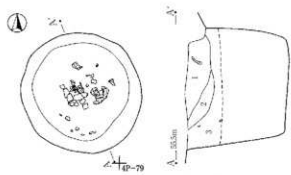
SK-231 (第74・76図、図版15・45・71)

円形のきれいな貯蔵穴となる。ただ下半部では湧き水がみられたため、遺物を取り上げたところで底部まで一挙に掘り下げた。そのため堆積土は上部面のみ記録となってしまった。しかし遺物の出土量は多く、土器では中期の加曾利EⅡ式から後期の堀之内I式までが出土している。

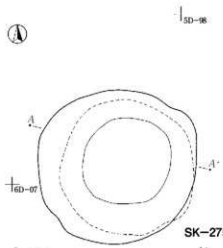
1～3は加曾利EⅡ式となろう。隆帯枠内において縄文の充填がみられる。6は口辺部にみられる隆帯の作りから加曾利EⅢ式、7は口縁直下の微隆起が特徴的である。加曾利E式での最後の段階となろう。4・5は沈線で区画された描出から称名寺式と思われる。また13～16も同時期で刺突と沈線による文様構成となる。8～12は口縁部で、9や10は堀之内I式によくみられる作りと施文である。11は口縁部に粘土紐を縦位に貼付し、小ぶりの刺突文で文様を構成する。17や18の底部もこの時期の所産となろう。



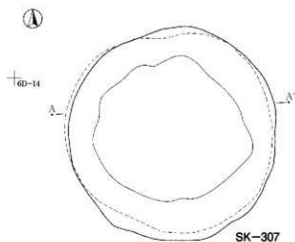
SK-221



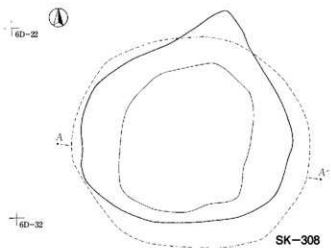
SK-231



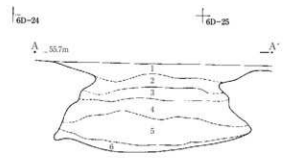
SK-275



SK-307



SK-308



SK-231

1. 黒褐色土 (粘土混入, 粘性強)
2. 暗褐色土 (粘土混入)
3. 黒褐色土 (粘性強)

SK-275

1. 黒色土 (粘性強)
2. 黒褐色土 (粘土混入, 炭化物混入少)
3. 暗褐色土 (砂粒・粘土混入, 粘性強)

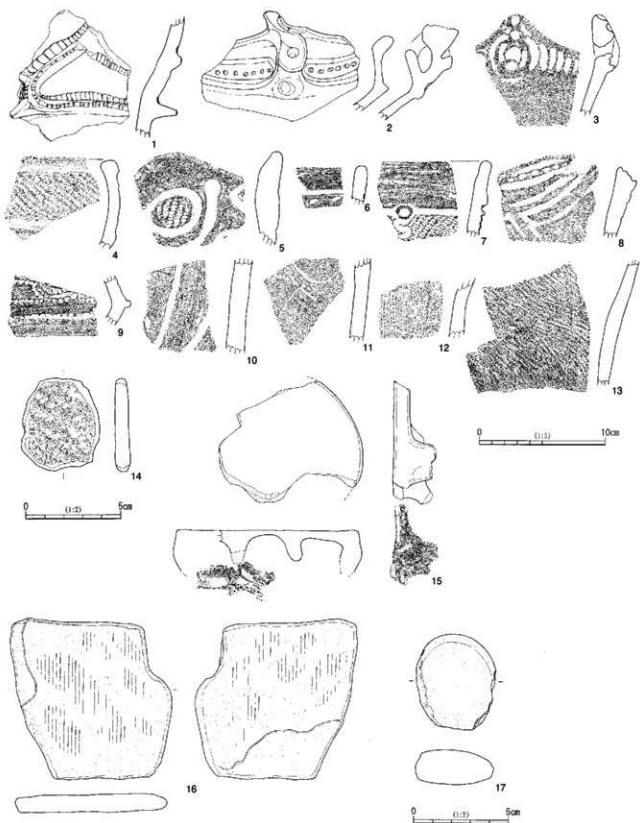
SK-307

1. 黒色土 (粘性強)
2. 黒色土 (粘土ブロック状に混入)
3. 黒褐色土 (炭化物混入少, 遺物多)
4. 褐色土 (粘性強)
5. 暗灰黄色土 (砂粒・粘土混入)
6. 暗灰黄色土 (粘土主体, 黒色土混入)

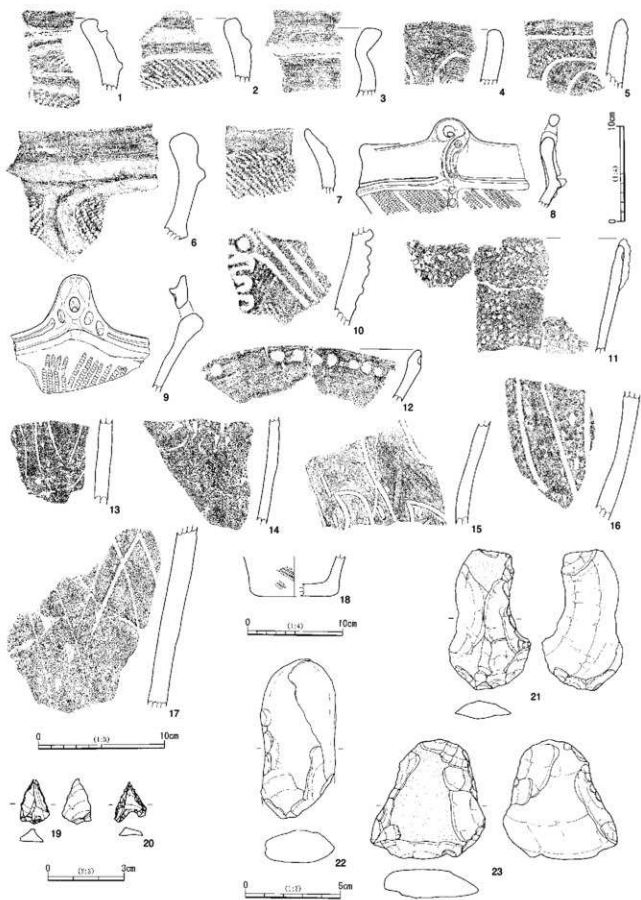
SK-308

1. 原褐色土 (焼土混入少)
2. 原褐色土
3. 暗褐色土 (粘土ブロック状に混入)
4. 暗灰黄色土 (粘土主体)

第74図 SK-221・231・275・307・308



第75图 SK-221出土遺物



第76図 SK-231出土遺物

19・20は石鎌であり、19は周囲の整形が若干みられる程度で、裏面では2回の整形剥離を加えているだけである。未成品とも考えられる。20は左右非対称となるが、裏面での加工も認められるため成品といえよう。21～23は粗雑な製作だが打製石斧に分類できよう。21は礫の表皮部分を若干残しており、裏面での加工はほとんどみられず、刃部に3回の小さな剥離を施しているだけである。こうしてみると打面部作出時に剥離された剥片に簡単な加工を加えて石斧としたものと考えられる。22は扁平な礫を利用したもので刃部が失われている。側面の整形は中央部だけで石斧としている。23も表裏の側面に簡単な整形剥離を施し石斧としたもので、刃部の作出は簡単である。

Dタイプ

本タイプは、いわゆるフラスコピットと呼称される特徴的な作りである。

SK-275 (第74・77図、図版15・46・71)

3基検出されたうちで最も小規模なフラスコピットである。遺物は覆土上層から出土したものである。时期的には阿玉台Ⅲ式とみられる土器群となろう。

1は隆帯に沿ってヘラによる押しが施される。3・6も胎土に小石が混入し、暗褐色を呈した色調などから1と同一個体と思われる。5は施文具のヘラが異なるもの同時期と考えられる。2の把手部分は勝坂式の色彩がよく表現されている。4は隆帯に囲まれた部分に縄文が施されており加曾利EⅢ式に位置づけられよう。

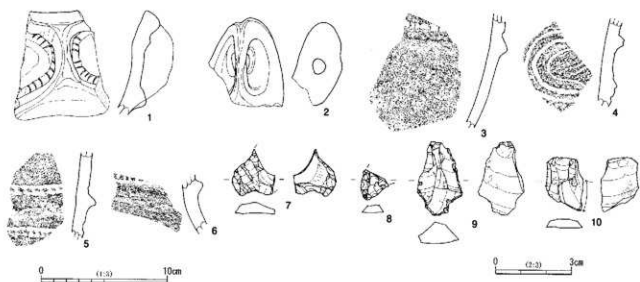
石器は図示できる黒曜石製の石器が4点出土した。7・8は石鎌の破損品である。9は周囲が調整された剥片で削器のような使用法が想定できる。10にも右側縁に調整痕が認められた。

SK-307 (第74・78・79図、図版16・41・47・48・71)

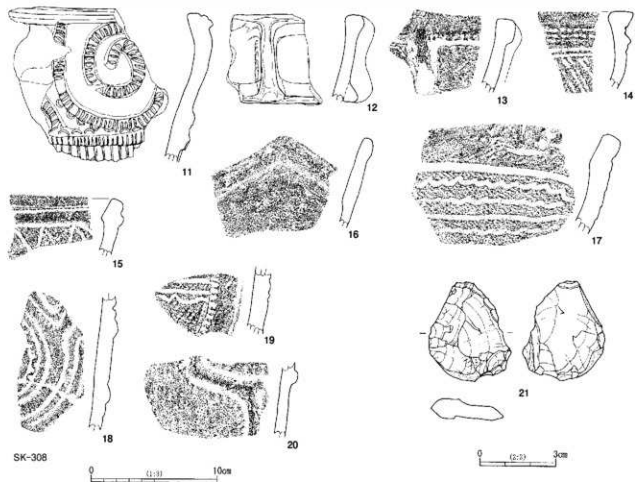
本跡では住居跡以外の遺構として最多の遺物が出土している。遺物の多くは覆土3層から5層で出土しており、そのほとんどは阿玉台Ⅲ式に属するものであった。

1は覆土4層から集中的に出土したものである。底部は欠損しているが、幅広の押し文と口縁突起部の作りから阿玉台Ⅲ式に相当するものであろう。2の底部は1に接合はしないものの近くで出土したため同一個体の可能性も否定しきれない。3は底部のみの遺存で、1よりもやや大きな土器となる。1にみられるような隆帯に沿った押しは認められない。4は隆帯の下に沈線がみられる。胎土には雲母の混入が著しい。5は隆帯の側縁を半載竹管状の工具で刺突し、隆帯以下では同工具による集合沈線で器面を飾っている。6は胴部的大型片である。文様は、隆帯をU字状に貼付するところは4と同様である。また隆帯に沿った連続爪形文が特徴的である。胎土には若干の雲母を含む。7は把手部分の一部を失う口縁部である。いずれも1と同時期のものであろう。8～10は無文の波状口縁部片である。器形は浅鉢となろう。8の胎土には石英粒と白色鉱物が多く混入し、雲母は少ない。9・10・13～15には雲母の混入が目立つ。14・16・19～21は器面に施される文様には押し文のほかに縄文、12・13は条線文、12～15・17・21～25は沈線文などがみられる。23は浅鉢で口辺部に瘤状の把手を貼付し、深い沈線で口辺に鋸歯状の文様を描いている。胎土には雲母が混入されている。26は土錘で表面には文様の痕跡は認められるが磨耗が著しい。若干雲母が認められるため阿玉台式に属することは間違いないであろう。

石器は5点出土している。27は右脚部が欠損しているものの石鎌らしい側縁の作りである。28はかなり大きな礫から剥離したものであろう。図示したように各所から剥片剥離の痕跡がみられる。打面調整痕も認められるが石質的には良好な剥片が得られなかったのではなかろうか。29は打製石斧で表面が著しく磨

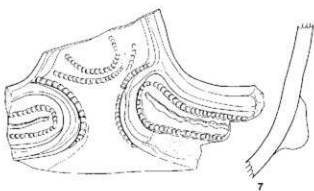
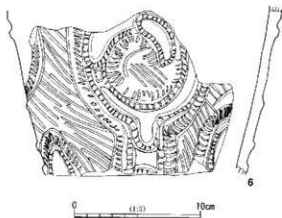
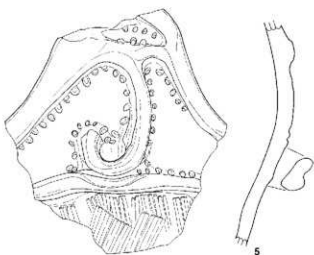
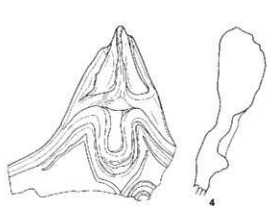
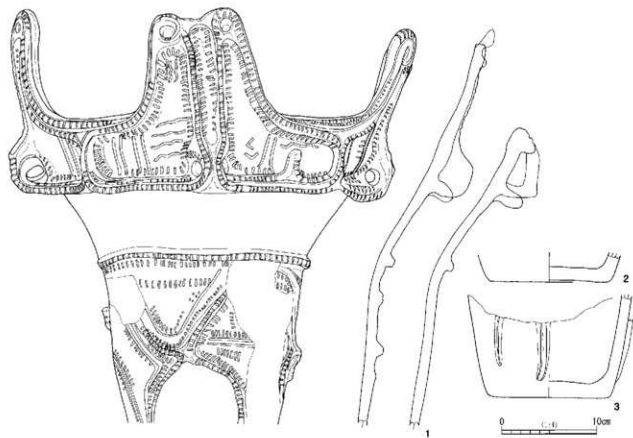


SK-275

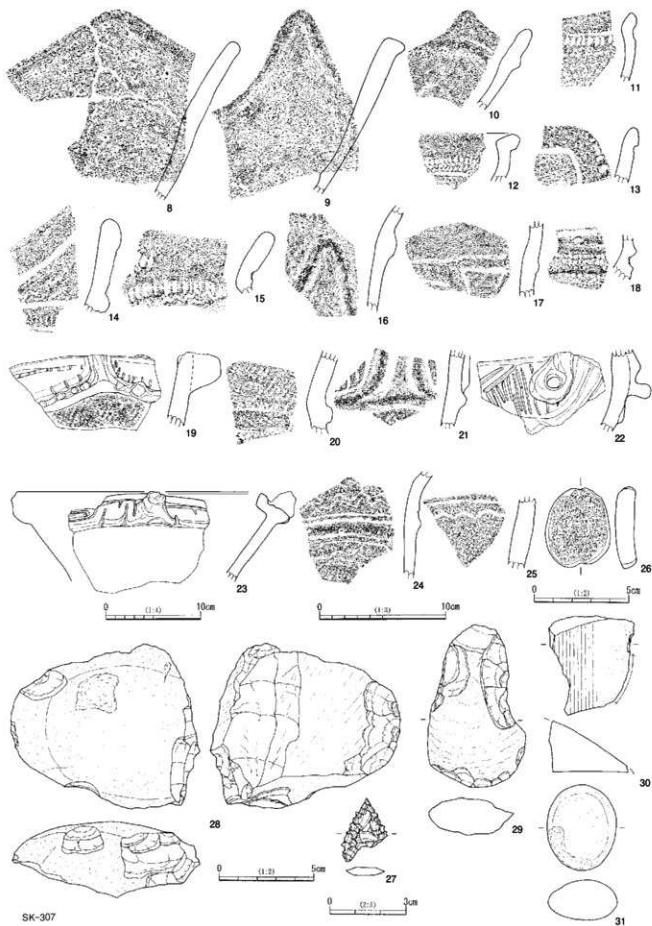


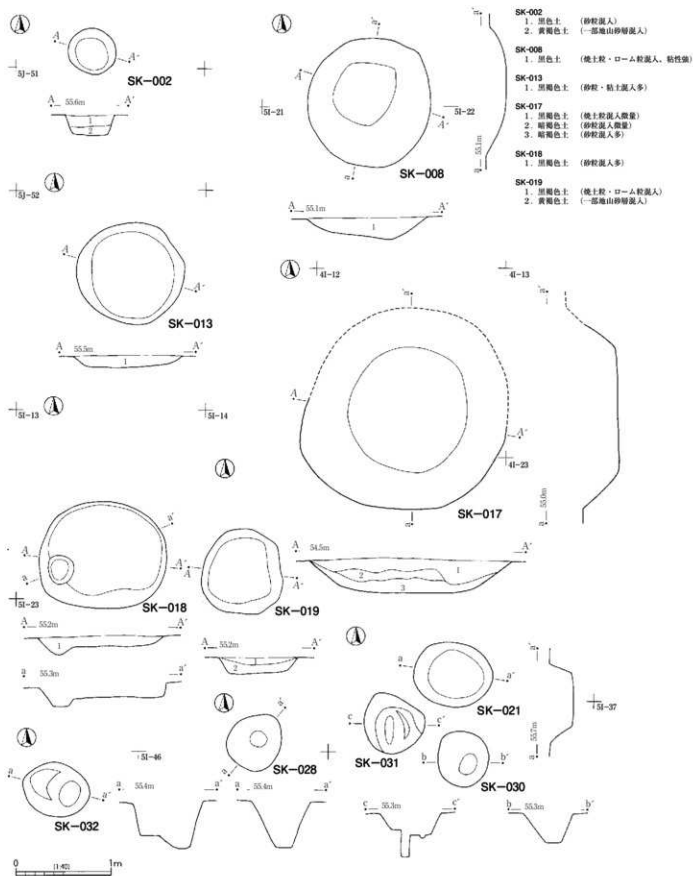
SK-308

第77图 SK-275・308出土遺物

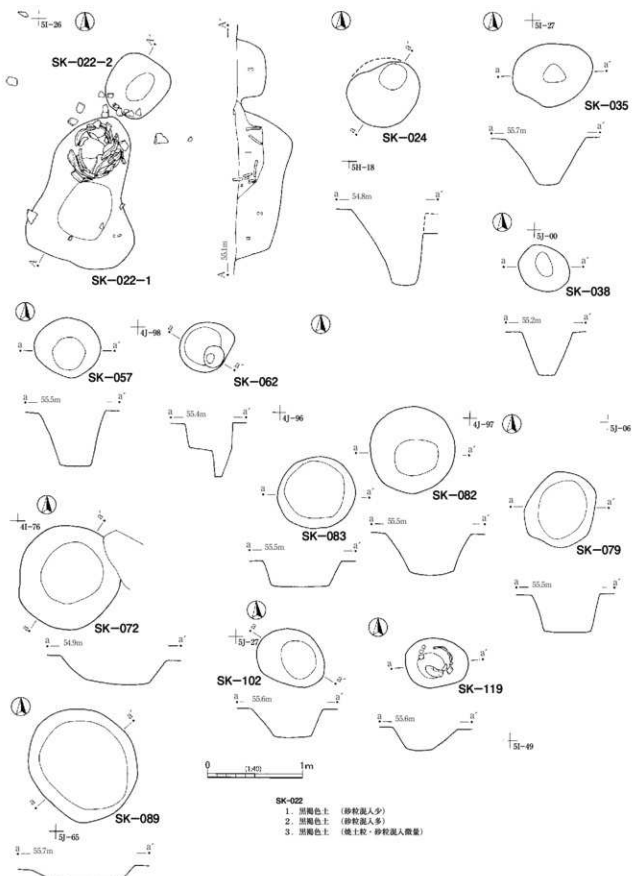


第78图 SK-307出土土器

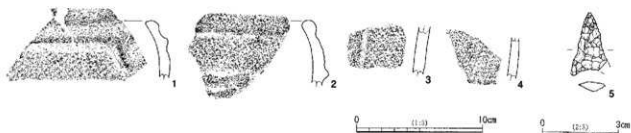




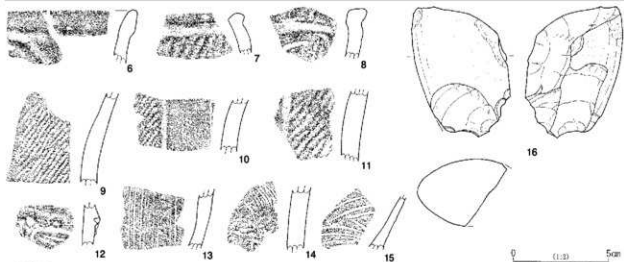
第80図 SK-002・008・013・017・018・019・021・028・030・031・032



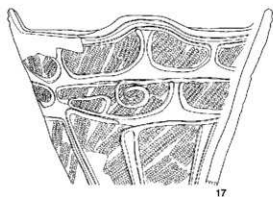
第81図 SK-022-1・022-2・024・035・038・057・062・072・079・082・083・089・102・119



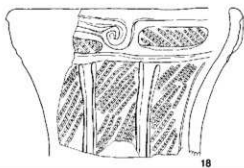
SK-008



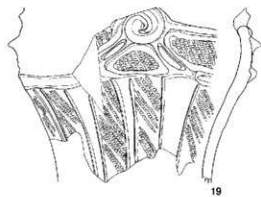
SK-017



17

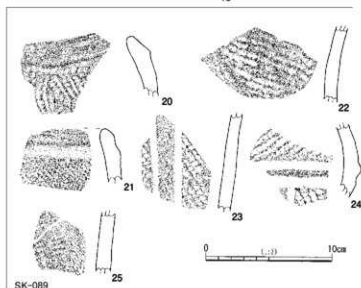


18



19

SK-022



SK-089

第82図 SK-008・017・022・089出土遺物

耗している。30には滑らかな面が観察できる。31は剥落部分があるため敲石として使用されたものであろう。

SK-308 (第74・77図、図版16・46・71)

本跡での遺物は覆土1・2層で出土している。時期的には阿玉台Ⅱ式から終末期に属するものと考えられる。

11は粘土帯を渦巻状に貼付し刻目を施しており、勝坂式に属するものである。押し出したような刻目は阿玉台式と共通するところもいえる。12・13は同様な口縁部となるが、口唇部の作りが異なる。14は半截竹管による横位の押しで胴部では斜行する。これらは阿玉台Ⅱ式となろう。15の隆帯の下には波状の沈線文がみられる。16は無文で浅鉢の口縁である。18・20には隆帯がみられる。20の拓本でははっきりしないが、隆帯に沿って半截竹管による押しが付されている。これらはおおむね阿玉台Ⅲ式となろう。また17・19では地文が縄文となる。とりわけ17の縄文は単節のLRで、原体は密に燃っている。時期的には阿玉台式期でも終末期に該当するものであろう。

石器が1点のみみられた。21はチャートの剥片で表表面に整形のための剥離が観察できる。残された形状と剥離から石鎌製作の意図が窺われる。

第6表 久保塚ノ台遺跡2小竪穴計測表

遺構番号	位置	形状	タイプ	長径	短径	深さ	ビット数	P番号	深さ	備考	
1	SK-001	5J-41	円形	A	170	170	15	6	1 2 3 4 5 6	2 15 3 3 10 45	加曾利EⅡ式
2	SK-009	5I-32	不整円形	A	180	150	20	3	1 2 3	12 32 26	
3	SK-010	5I-33	不整形	A	270	160	28	3	1 2 3	27 22 25	土坑と重複か
4	SK-025	4I-70	楕円形	A	230	190	43	0			堀之内I・Ⅱ式
5	SK-075	4J-35	円形	A	178	168	25	1	1	16	
6	SK-115	5J-46	円形	A	165	155	10	4	1 2 3 4	22 28 31 63	
7	SK-120	4J-55	円形	A	250	230	30	4	1 2 3 4	11 16 9 66	P1は土坑か 加曾利EⅡ式
8	SK-121	4J-43	円形	A	215	210	45	4	1 2 3 4	24 29 33 19	P2は土坑か 加曾利EⅡ式
9	SK-210	4R-53	円形	A	255	235	35	0			
10	SK-003	5I-57	円形	B	93	84	24	0			
11	SK-004	5I-59	楕円形	B	103	79	36	1	1	24	
12	SK-006	5I-49	楕円形	B	97	85	11	0			
13	SK-012	5I-43	円形	B	104	100	20	0			
14	SK-020	5I-24	楕円形	B	101	84	15	1	1	27	
15	SK-042	5I-14	円形	B	136	134	10	0			
16	SK-046	4J-78	楕円形	B	104	86	24	0			
17	SK-047	4J-78	円形	B	121	114	34	0			
18	SK-116	5J-37	円形	B	115	105	28	0			堀之内式
19	SK-117	5J-58	不整楕円形	B	155	122	44	0			加曾利EⅢ式
20	SK-202	4P-19	円形	B	92	—	13	0			
21	SK-205	4Q-53	楕円形	B	135	120	8	2	1 2	8 9	加曾利B式
22	SK-221	4P-36	円形	C	100	95	111	0			堀之内I式
23	SK-231	4P-68	円形	C	130	125	105	0			堀之内I式
24	SK-275	5O-97	円形	D	96	90	52	0			阿玉台Ⅲ式
25	SK-307	6O-14	円形	D	170	150	78	0			阿玉台Ⅲ式
26	SK-308	6O-22	円形	D	150	140	75	0			阿玉台Ⅲ式

第3節 土坑

土坑は、前出の小堅穴と比較してより小規模なタイプを主体として、平面形が楕円形や不整形といった落ち込みや基底面の立ち上がりの緩やかな作りといった遺構を「土坑」として分類した。遺構番号には前出の小堅穴と同様に「SK」を用いたため遺構番号が継続していない点と遺構番号は付けたものの植物根や後世の掘削等による落ち込みにも念のため遺構番号を付したため欠番が多く生じてしまうこととなった。また、柱穴状のピットでは「SH」で番号をつけてみたが、図示できるような土器は僅少であったため図示できるもののみ掲載することとした。なお、本節でも特徴的な土坑と図示できるような遺物を出した土坑のみを記述の対象としたことを付記しておく。土坑個々の詳細については計測表（第7表）としてまとめた。ピットは底面からの深さとした。

SK-008（第80・82図、図版49・71）

本跡は小規模な円形の掘込みであり、覆土上層から中期の土器片が若干出土している。1・2は加曾利EⅢ式の口縁部で器面がだいぶ磨耗している。3・4は加曾利EⅢ式胴部片である。

5は石鏃で右の脚部が欠損している。だが左右対称の均整のとれた作りである。

SK-017（第80・82図、図版49・71）

本跡は皿状に掘り込まれた大規模な土坑である。遺物では、小破片が10数点出土し、磨製石斧の破損品もみられた。

6～8は口縁部で、8の文様からは新しいタイプの加曾利E式の片鱗が窺える。9～11は同時期の胴部片と思われる。12は口縁部から掘内I式とみられ、13・14も同時期となろう。15は加曾利BⅡ式の台付鉢の破片である。

16は断面が楕円形に整っており、本来は磨製石斧であったものと思われる。破損後は敲打具として利用されたり、石核として剥片を剥離されたりしている。

SK-022（第81・82図、図版14・40）

本跡は3基の土坑により構成されたもので、遺物は2基の土坑が重複したものと考えられるSK-022-1の北側の落ち込み部分から一括土器3点が出土した。

17は波状口縁を呈した深鉢で口縁部に向かって直線的に開くタイプとなる。文様は18・19にみられるような口縁部文様帯と異なり、分離した文様帯を構成する。渦巻文は沈線により下段で作られ、胴部の文様については大きな差異は認められない。一方、18・19は口縁部が内彎するキャリバー形を呈しており、渦巻は隆帯によって構成されている。時期的にはいずれも加曾利EⅡ式の範疇を逸脱するものではなからう。

SK-072（第81・83図、図版49・72）

ここでは図示できる遺物は土器片1点と石器2点だけであった。

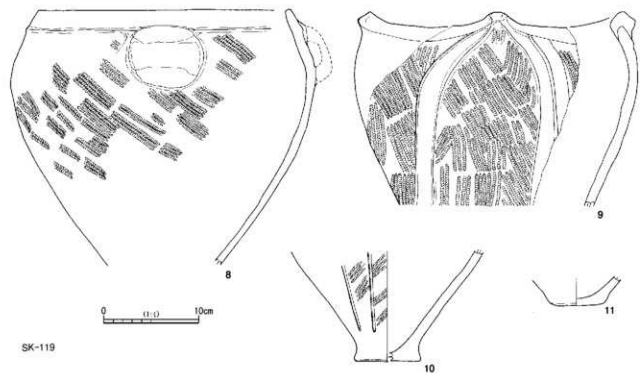
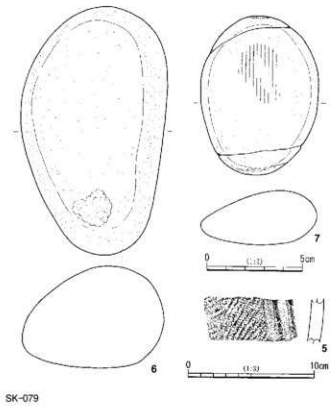
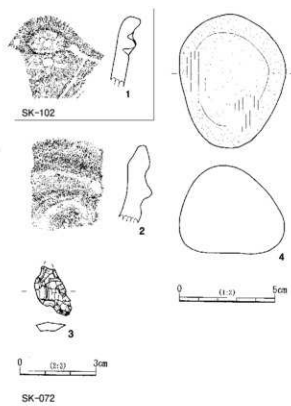
2は退化した渦巻文を有する波状口縁の一部である。時期的には加曾利EⅢ式となろう。

3は製作に失敗した石鏃であろうか。先端部と脚部が失われている。4は磨石で表面の一部に滑らかな面が形成され、裏面は平坦となっている。

SK-079（第81・83図、図版49・72）

本跡の掘込みは開口部から40cmを計測し、基底部からの立ち上がりもしっかりしたものであった。ここでも3点の遺物が図示できた。

5は胴部片で微隆起の左右は磨り消されている。



第83图 SK-072・079・102・119出土遺物

6は敲石で表面下部に打痕がみられる。7は磨石と敲石の兼用品で上下端に打痕がみられ、中央部には滑らかな磨耗痕が観察できる。

SK-089 (第81・82図、図版49)

本跡は浅い皿状の土坑で10数点の土器片が出土している。そのうちの6点について図示した。いずれも器面が磨耗している。

20は口縁部に微隆起を有するもので、22の微隆起は斜行する。器面の色調や縄文が近似するところから同一個体と考えられる。加曾利EⅣ式に位置づけられる。21も緩やかな隆線が認められる。時間的には20よりもやや古式となろう。23・24は沈線や磨り消し等から加曾利EⅢ式である。

SK-119 (第81・83図、図版15・41・49)

本跡は第81図にみられるよう径60cm余りの土坑であり、覆土中から図示したような一括土器が出土している。このことから本跡は加曾利EⅣ式期に営まれた遺構といえよう。

8は口縁直下に一對の把手が付されていたようである。貼付された粘土帯の破損部が残されている。9は緩やかな波状口縁を呈した深鉢で微隆起により区画された中を縄文で充填する。しっかりした微隆起から2点は加曾利EⅣ式となろう。10は縄文間に沈線がみられ、底部の作りが特徴的である。時間的には加曾利EⅢ式期に属するものであろう。

SK-123 (第84・86図、図版50)

本跡はほぼ円形の浅い土坑であり、中期の土器2点が出土している。

1は中期後半に稀にみられる両耳壺の把手部と考えられる。2は底部片で後期に属するようである。

SK-126 (第84・86図、図版50・72)

本跡もSK-123と同様の形状と規模の土坑であり、ここでは称名寺式の大型片が出土している。

3は平縁の深鉢で約1/5が遺存する。口縁部下にみられる沈線は深く鮮明であるが、器面には刷毛目状の整形痕や縄文らしき痕跡も一部で認められる。磨耗が著しいため縄文の表現については省略した。4は沈線で曲線を表現しており縄文らしき痕跡もみられる。5では区画された沈線内にはっきりした縄文が観察できる。ともに称名寺式となる。

6は敲石と磨石を兼用した石器で1/5程度の遺存である。

SK-200 (第84・86図、図版50)

本跡は楕円形の掘込みが重複しているような形状を呈した土坑で、図示できる土器片が1点出土した。器面は縄文に覆われており、口縁内面には浅い沈線が巡る。加曾利B式の粗製深鉢である。

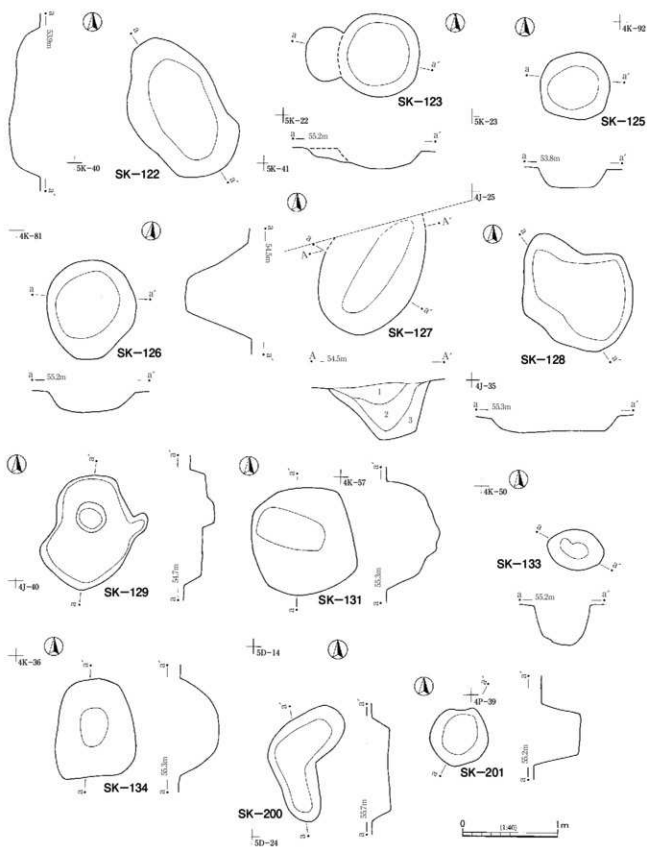
SK-201 (第84・86図、図版50)

本跡は比較的深く掘り込まれた遺構で、覆土上層から数点の土器片出土した。9は波状口縁の一部で半截竹管のような同一工具による刺突と沈線で文様を描いている。9～11は加曾利EⅡ式となろう。9は連弧文系によくみられる複数刺突である。

SK-203 (第85・86図、図版72)

本跡は不整形な形状を呈した遺構で南よりに底部分がある。ここでは小さな土器片数点と図示できる石器が2点出土した。

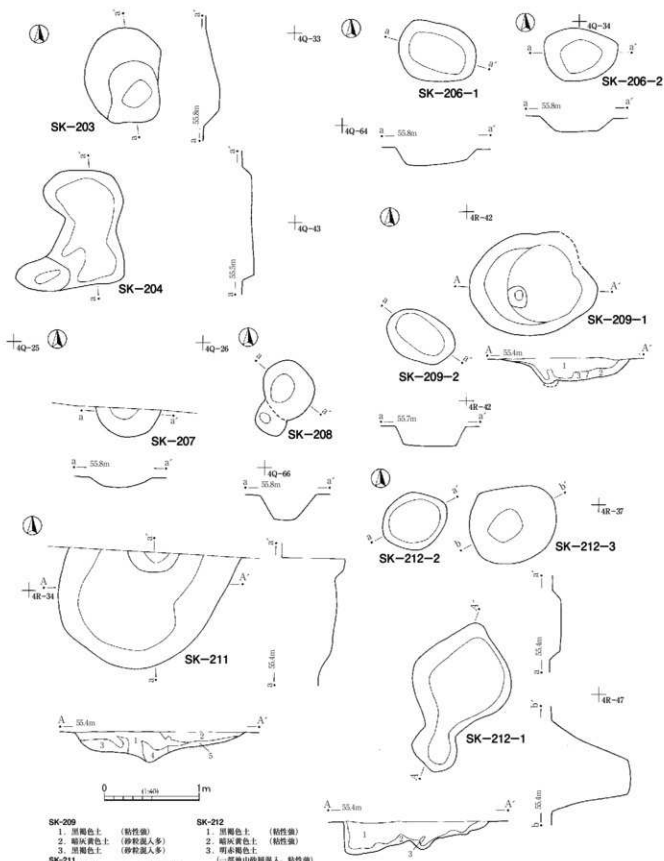
12は石鎌の脚部が遺存したものである。13は薄く扁平な河原石の側縁を上下から挟るように整形している。形としては鎌先部分の作出かと思われるが、石材は軟弱な凝灰岩であるため疑問も残る。



SK-127

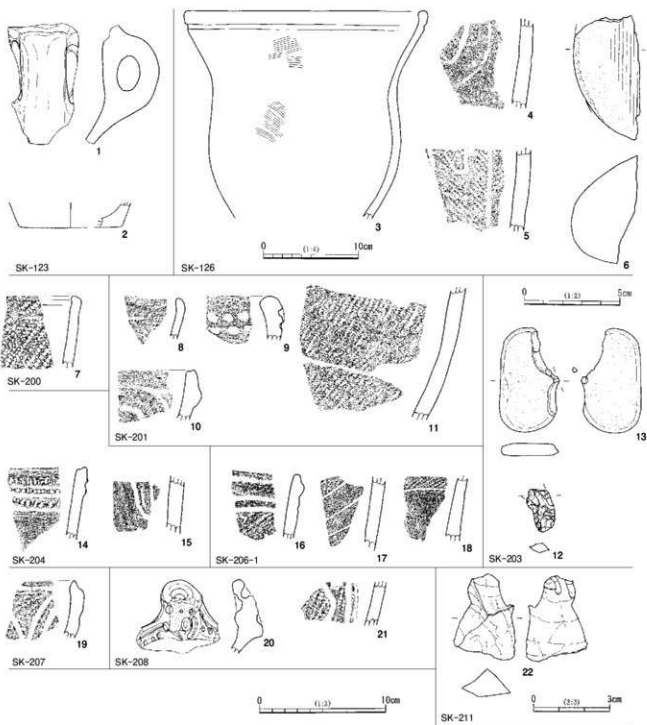
1. 黑褐色土 (炭化物混入少、粘性強)
2. 深褐色土 (砂粒・炭化物混入多、粘性強)
3. 暗褐色土 (黒色土・砂粒混入多、粘性強)

第84圖 SK-122・123・125・126・127・128・129・131・133・134・200・201



- SK-209**
1. 黑褐色土 (粘性強)
 2. 暗灰黃色土 (砂粒混入多)
 3. 黑褐色土 (砂粒混入多)
- SK-211**
1. 黑褐色土
 2. 黑褐色土
 3. 暗褐色土
 4. 褐色土
 5. 暗褐色土
- (\square -A較混入少)
- SK-212**
1. 黑褐色土 (粘性強)
 2. 暗灰黃色土 (粘性強)
 3. 暗赤褐色土 (一部堆山砂粒混入, 粘性強)

第85圖 SK-203・204・206-1・206-2・207・208・209-1・209-2・211・212-1・212-2・212-3



第86圖 SK-123・126・200・201・203・204・206-1・207・208・211出土遺物

SK-204 (第85・86図、図版50)

本跡も不整形な形をした遺構で図示できる土器片が2点みられた。

14は緩やかな波状を呈した口縁の一部で、口唇部では沈線ではなく、むしろ凹みと表現できる作りがみられる。また口辺には2条の粘土紐を貼付し刻目を施している。器面には調整が加えられており、半精製土器といえよう。時期的には堀之内Ⅱ式と考えられる。15は沈線と刺突による文様構成から称名寺式となろう。

SK-206 (第85・86図、図版50)

本跡は2基が接近して検出されたため枝番を付して区別した。遺物はSK-206-1から出土したもので図示できる土器片は3点であった。

16は隆帯の上下に沈線を施しており堀之内Ⅰ式と思われる。17は斜行する沈線、18は底部付近の破片で縄文帯が沈線によって区画されるものであろう。いずれも堀之内Ⅱ式とみなされる。

SK-207 (第85・86図、図版50)

本跡は皿状の掘り込みで円形を呈していたものと思われる。図示可能な土器が1点のみ存在した。

地文が縄文ではっきりした沈線により文様が描出されている。口縁部の特徴から堀之内Ⅰ式となろう。

SK-208 (第85・86図、図版50)

本跡は小型の土坑であり、柱穴状のピットが南にみられる。ピットは開口部から19cmと浅いものであった。遺物は数点出土し、図示できるものが2点あった。

口縁と胴部片であり、20の口縁部の作りは堀之内Ⅰ式の特徴をよく表現している。21も同時期と思われる。

SK-211 (第85・86図、図版72)

本跡の平面形は楕円形を呈するものと推測できる。未掘中央部には落ち込みがみられるものの詳細は把握できなかった。遺物は若干の土器と剥片が1点出土した。

22では加工痕はみられないが、その形状から石鍬素材には十分といえる。

SK-223 (第87・88図、図版50)

本跡は小型の土坑で、遺物はSK-223-1から図示できる土器が4点出土した。

1は中期で加曾利EⅢ式となろう。2は粗製土器の胴部片で縄文の間隔は粗い。3は浅鉢型の口辺部でヘラによる刻目と沈線によって文様が描かれている。器面では調整痕が残る。時期的にはともに加曾利BⅠ式となろう。4は底部片で網代痕が観察できる。

SK-229 (第87・88図、図版50)

本跡は台形に近い形状で、コーナーにピットが存在する。遺物は少なく図示できる土器は1点のみであった。口縁部片で隆帯によって主文様が構成されている。胎土には雲母を多く含むところから阿玉台式の系譜に連なるものであろう。

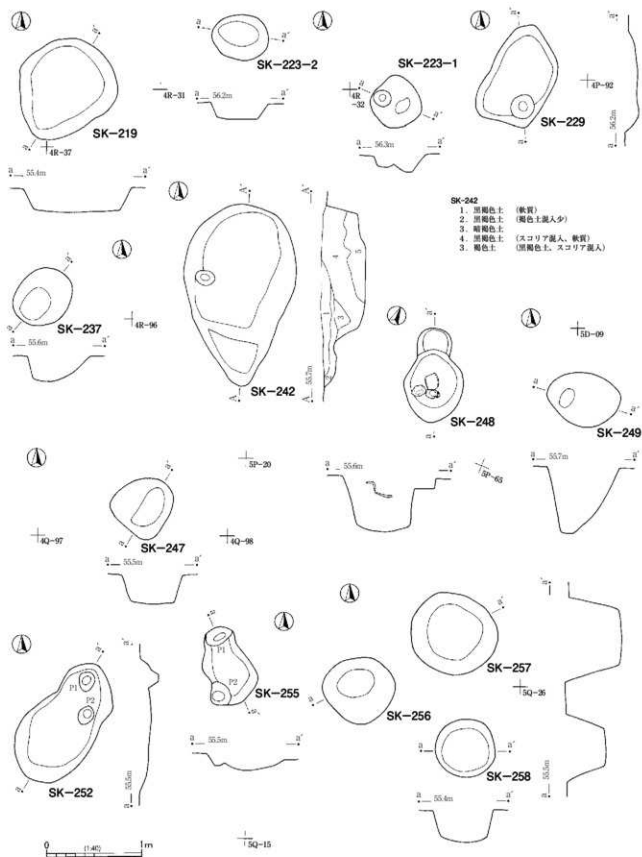
SK-237 (第87・88図、図版72)

本跡は小型の楕円形の土坑で、少量の土器と楔形石器が1点出土したのみである。

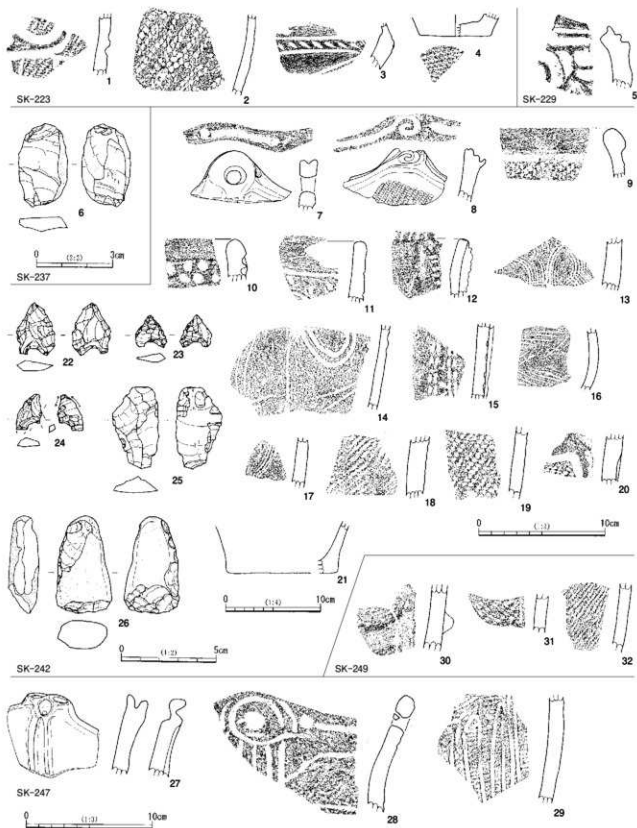
楔形石器は薄手の剥片を利用したもので、表裏面に剥離が施されている。右側面には自然面がみられるため小礫を素材にしたものであろう。

SK-242 (第87・88図、図版15・50・72)

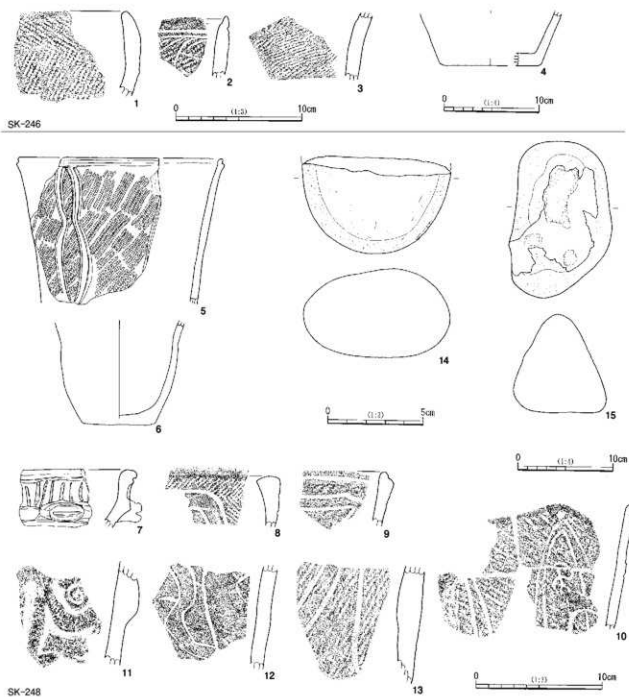
本跡は西壁に接してピットが穿たれており、南に足場状の段差がみられるが、堆積土からは2基の土坑が重複しているようである。出土遺物の多くは4層から出土している。ここでは図示できる遺物も多かつ



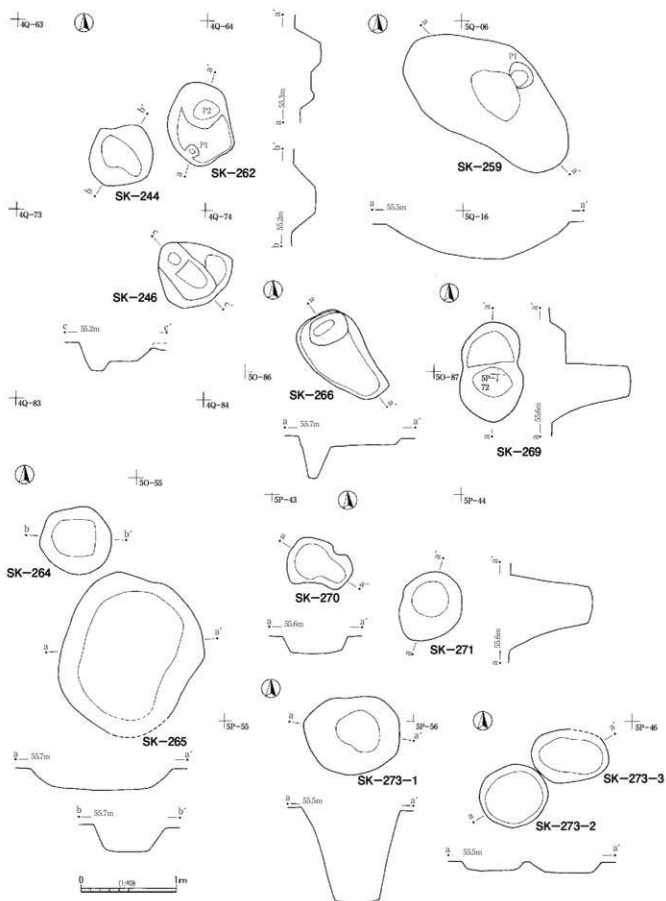
第87図 SK-219・223-1・223-2・229・237・242・247・248・249・252・255・256・257・258



第88图 SK-223·229·237·242·247·249出土遺物



第89図 SK-246・248出土遺物



第90圖 SK-244・246・259・262・264・265・266・269・270・271・273-1・273-2・273-3

た。出土土器についてみると、中期の阿玉台式・加曾利EⅡ式から堀之内Ⅱ式まで出土している。

9・10は加曾利EⅡ式となろう。10は連弧文系に属する深鉢である。11は沈線と刺突による文様構成であり称名寺式となろう。7・8・12は口縁部の作りや粘土帯の貼付から堀之内Ⅰ式となろう。胴部片についてみると、15には雲母の混入がみられ、隆帯に沿って竹管による押しが施される。阿玉台Ⅱ式となろう。20は加曾利EⅢ式に位置づけられよう。そのほかはおおむね堀之内Ⅰ式となろう。21は底部が約1/3ほど遺存したもので、文様等は認められない。時間的には後期となる。

石器では石鏃等5点が図示できた。22は仕上げは雑となるが成品といえよう。23も完形品といえるが概して作りは粗悪といえる。24は石鏃か石鏃の破損品と考えられる。25は剥片で表面には二次剥離が数回施されている。26は小型の打製石斧である。扁平なチャートの礫を加工した数少ない例といえる。

SK-246 (第89・90図、図版41・51)

本跡の平面形は複雑で足場状の平坦面があり、その上部から若干の遺物が出土している。口縁部片が2点出土した。

1は縄文の施文方向を変えて羽状の効果を作り出している。中期でも新しいタイプとなろう。2は縄文地に半截竹管による沈線で器面を飾る。内面には浅い沈線が認められるため堀之内Ⅱ式となる。3の縄文は細く密に撚られている。2よりも古式となろう。4は後期の底部で無文はみられない。

SK-247 (第87・88図、図版51)

本跡は小型の土坑で、図示できる遺物は土器が3点であった。

27は口縁部だが器面の磨耗が著しい。28とともに縄文施文がほとんど磨滅している。29は沈線間に辛うじて縄文がみられる。沈線による文様構成が主体となっているところからすべて堀之内Ⅰ式となる。

SK-248 (第87・89図、図版15・41・51・72)

本跡は小土坑を切り込んで設けられた土坑で出土土器から堀之内Ⅰ式期の所産となろう。遺物は図示したように覆土上層から多くが出土している。

5は口縁部から胴部にかけて約1/4が遺存した深鉢で底部から直線的に立ち上がるタイプとなる。推定口径は22cmと小型品で施文から堀之内Ⅰ式となる。6は小型品となる。器面は無文でヘラにより簡単な整形が施されるのみであるが、内面はきれいに調整されている。7は口辺の有段部に切り込みを入れた粘土塊を貼付している。時間的には加曾利EⅠ式となろう。11は隆帯上に刻目が施され、渦巻きを形作る。7と同時期となろう。8は平縁で口唇部が特徴的といえる。太い沈線間は磨り消されており、型的には称名寺式と考えたい。12も同時期となろう。9・10・13は堀之内Ⅰ式で9の口縁の作りは典型的なものである。

図示できる石器が2点出土した。14は欠損しているが、遺存する表裏面は滑らかである。15は断面三角形を呈した巖石で被熱している。中央部には打痕が残る。平坦な側面は台石として使用されたらしく表面には表皮部分の剥落がみられる。

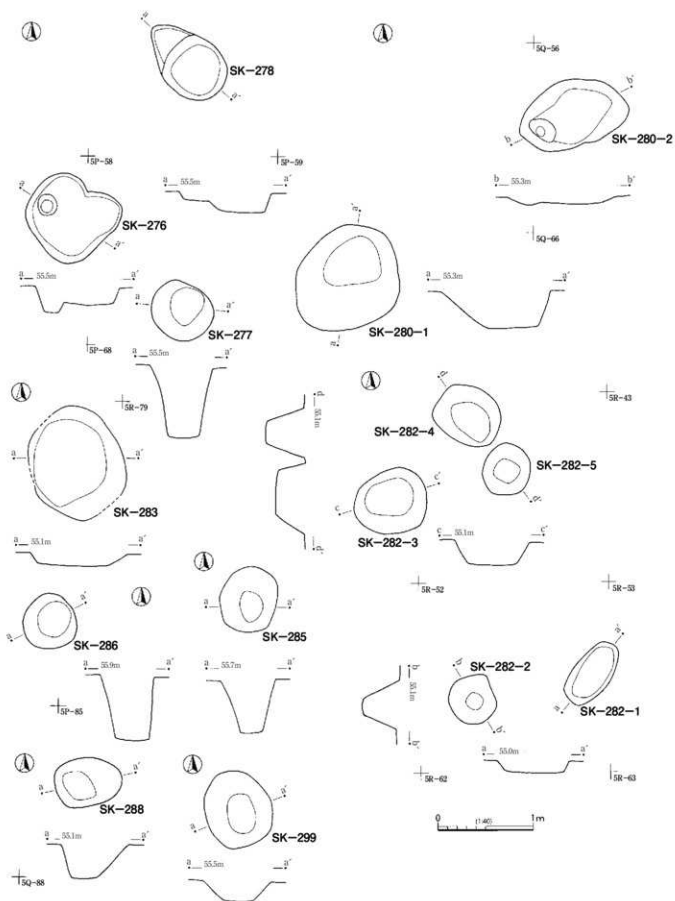
SK-249 (第87・88図、図版51)

本跡は柱を引き抜いたような断面となっていた。図示できるような遺物が3点みられた。

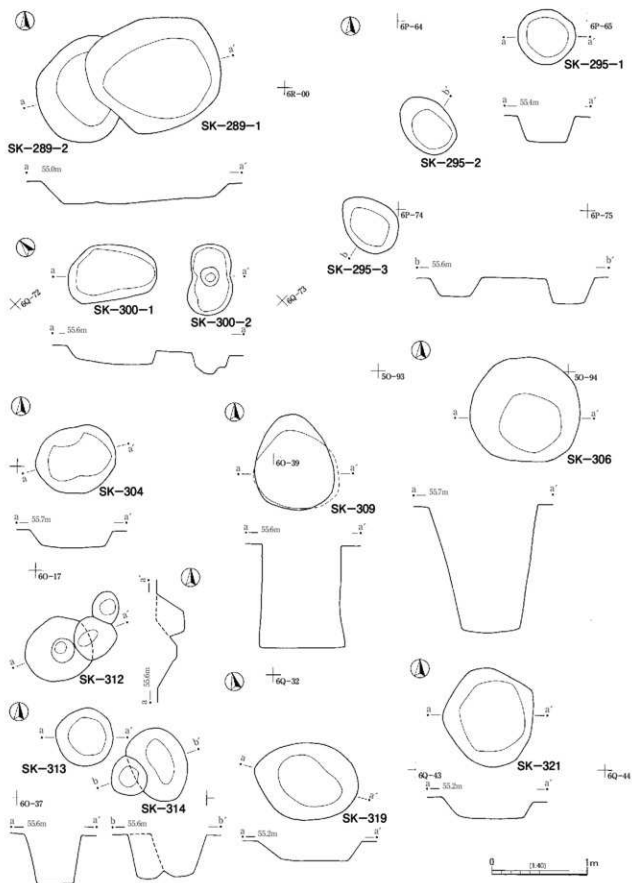
30・31は中期の加曾利EⅡ式で、32は堀之内Ⅰ式となろう。

SK-259 (第90・93図、図版51)

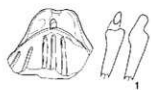
本跡は緩やかに立ち上がる楕円形に近い土坑であり、覆土上層から図示できた堀之内Ⅰ式の口縁部と胴部が各1点出土した。



第91圖 SK-276・277・278・280-1・280-2・282-1・282-2・282-3・282-4・282-5・283・285・286・288・299



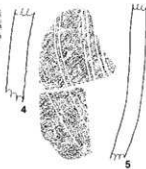
第92图 SK-289-1 · 289-2 · 295-1 · 295-2 · 295-3 · 300-1 · 300-2 · 304 · 306 · 309 · 312 · 313 · 314 · 319 · 321



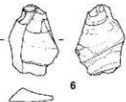
SK-259



SK-262



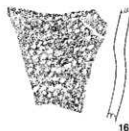
SK-269



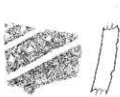
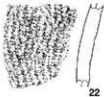
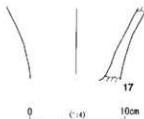
SK-278



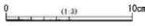
SK-295-1



SK-299



SK-306



第93図 SK-259・262・269・278・295・299・306出土遺物

1の口縁部は堀之内Ⅰ式の典型で、2の沈線間で左右に揺れる曲線はしばしばみられる文様である。

SK-262 (第90・93図、図版51・72)

本跡にはピットが穿たれており、堆積土では確認できなかったが、P2は、土坑の重複とも考えられる。図示できる土器は3点出土している。

3は小型の深鉢で地文には細縄文を用いている。5も同様な縄文がみられ沈線による施文も共通するが器厚にかなりの差が認められる。時期的にはともに堀之内Ⅰ式となろう。4は磨消縄文と幅広の沈線が特徴的な加曾利EⅡ式からEⅢ式にかけてのものであろう。器厚は13mmと厚く内面の緩やかな湾曲からかなりの大型深鉢と考えられる。

6は自然面を残す剥片である。打点部では二次剥離、裏面ではバルブ部分を削除している。

SK-269 (第90・93図、図版51・72)

本跡はおそらく2基の土坑が重複したものとと思われるが堆積土からは確認できなかった。出土遺物には土器と石器がみられたが、決めてとなる遺物はみられず、土坑の時期については即断できない。

7は幅広の連続爪形文が口縁とその直下を横走する。文様から阿玉台Ⅲ式となろう。8の加曾利EⅡ式、11の曾利系の深鉢である。また9・12は堀之内Ⅰ式となり、10は裏面に細く深い沈線が2条みられる。堀之内Ⅱ式となる。

出土石器は両端が欠損しており断言することはできないが、石材と形状を考えると石棒とも考えられる。また表面は研磨したように滑らかであり砥石としても使用されていたようである。

SK-278 (第91・93図、図版72)

本跡も重複したような形状である。出土遺物は若干の土器と石鏃であるが、土器は図示できるようなものはなかった。

石鏃は脚部が欠損するが裏面はきれいに調整剥離が施され左右対称で精緻な作りとなっている。

SK-293 (第98図、図版16・54・72)

本跡は6P-68グリッドを中心に長径4.85m、短径1.80mの巨大な落込みとして検出されたものである。その堆積土について観察すると、中心部に堆積していた層は褐色土であったが、しまりのない層で地山である粘土層等の混入も認められたため、後世のイモ穴かとも考えられた。このため遺構としての記載は省略した。ただ遺物は大型の土器片等多彩であったため図示することとした。

土器についてみると、1～4は中期に属するものである。1は阿玉台Ⅱ式で雲母を多量に含んでいる。2は加曾利EⅠ式の口縁部で、3は加曾利EⅡ式に属するものである。4は連弧文系となろう。5・15～17は堀之内Ⅰ式と思われる。17は把手部となろう。6～14はおおむね加曾利BⅠ式の範疇に入るものと思われる。6は口縁部が大きく開く浅鉢である。縄文帯は沈線により区画されたものである。7・8は6と同様の浅鉢であるが口縁部の作りに相違がみられる。14は大きく内彎する鉢形で沈線と「S」字状の縄文帯による文様構成となる。11は紐線文系の深鉢である。12・13は縄文のみの施文で内面には沈線が施される。

石器で図示できるものは8点を数える。器種は楔形石器が最多で4点、ほかはスクレイパー、石錐、剥片、敲石が各1点となる。18・19・23・24は楔形石器となる。18は板状の礫の一端を両面から剥離し楔としている。19は表皮部分の残る剥片に両面から剥離し刃部を作出している。23も扁平な礫を利用したものである。右からの剥離は整形のためのものであろう。24は両面から大きく剥離し斜行する刃部を作り出している。20は錐部が欠損したものと考えられる。周囲は簡単に加工して下部には予備となる錐先部分を残

しているようにも思われる。21は先端部分に両面加工が施されているため楔とも考えられるが、大きく剥離された裏面からスクレイパーとした。22は下端部に小さな剥離が認められる。掻器のように使われたものであろう。25は被熱した敲石である。欠損したものであり、表面にも若干打痕が認められる。

SK-295 (第92・93図、図版52)

本跡は3基の土坑が接近して検出されたため枝番を付して記録した。図示した遺物はSK-295-1から出土した堀之内I式の銅部片である。

縦位に粘土帯を添付し、その上を棒状工具で押捺している。

SK-299 (第91・93図、図版52)

本跡は掘込みの浅い土坑である。図示できる2点の土器が出土している。

16は撚りの緩い不規則な縄文であり、加曾利B式にみられる粗製土器の特徴を残している。17は底部片で文様は認められない。時期的には後期に属するものである。

SK-306 (第92・93図、図版52)

本跡の開口部はほぼ円形を呈しており、開口部からの深さも133cmを計測する。この点、前述した小竪穴Cタイプとの類似点を見出すこともできるが、出土遺物に共通性は認められない。

18は波状口縁となり、波頂部の作りに特徴がみられる。加曾利EⅢ式の深鉢である。24も同時期のものとなろう。19・20は口縁部の作りと沈線による文様は堀之内I式となろう。21は粘土帯の貼付が特徴的である。こうした手法は加曾利EⅠ式にみられる。25はしっかりした隆帯から加曾利EⅣ式と思われる。26は沈線と刺突文の組み合わせから称名寺式となる。

SK-309 (第92・94・95図、図版16・52・53・72)

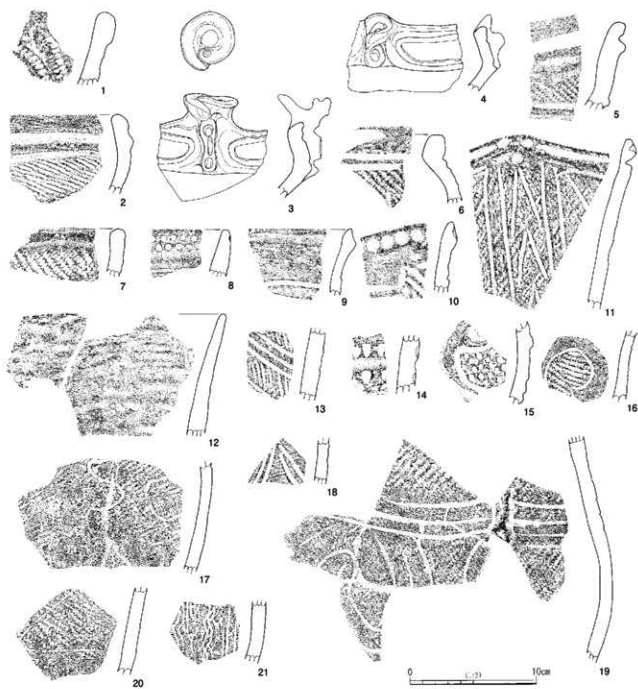
本跡もSK-306と同様に深い掘込みとなっている。出土遺物も豊富で一括土器はみられないものの堀之内I式を主体とした中期の阿玉台式から堀之内I式までが確認されている。一方、石器の出土量も多く、石鏃や打製石斧、砥石等が出土している。

1は隆帯間に幅広の押引文がみられる。阿玉台Ⅲ式になろう。胎土には雲母が若干混入する。2・5～8・13はおおむね加曾利EⅡ式からEⅢ式に位置づけられよう。13には撚り糸の地文に連弧文の一部が認められる。15・16は沈線によって区画されており、称名寺式と思われる。そのほかは堀之内I式と考えてよいであろう。3・4や9～11の口縁部は堀之内I式の特徴をよく表現している。12は朝顔形に開く無文の鉢形土器である。

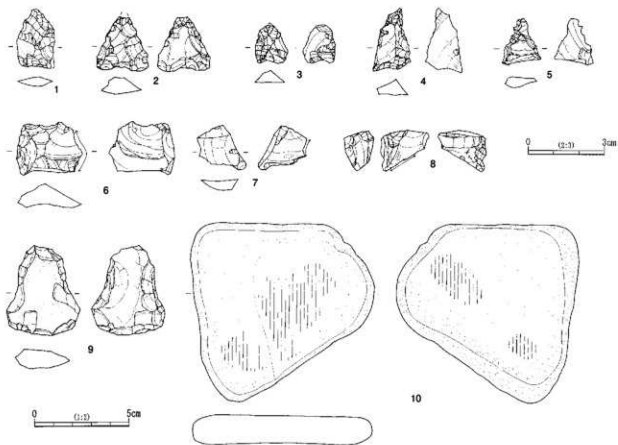
石器は10点を図示することができた。1は非対称の作りで自然面を残す。欠損部はみられないため成品となろうが、出来映えとしては良好とはいえない。2は唯一チャート製である。先端部が欠損するものの、ほかと比較すると作りは丁寧といえよう。3は僅かに先端部を欠損する。使用によるものか、製作時のものか判別しにくく、裏面の整形も粗雑なものである。4は左右非対称であるが、これで完成品と思われる。裏面は主剥離面をそのまま残している。5は上下逆から見ると有茎鏃の可能性も否定しきれない。6・7は剥片で共に使用痕が観察できる。8は残核となろう。9は小型の打製石斧である。表面では自然面がみられる。整形のための剥離は裏面より丁寧になる。10は砥石である。斜線部分は滑らかで僅かに窪んでいる。

SK-314 (第92・95図、図版53・72)

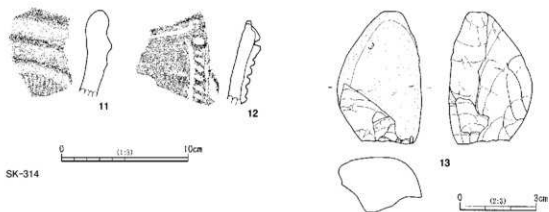
本跡は小型の土坑と重複したもので、若干の土器と石器が出土している。図示できるものは土器2点、石器1点となる。



第94图 SK-309出土土器



SK-309



SK-314

第95圖 SK-309出土石器、SK-314出土遺物

11は大きな波状を呈する深鉢の口縁部となる。口縁部には丸味を帯びた隆帯が2条みられる。時期的には加曾利EⅢ式となろう。12も波状口縁の一部で波頂部下には押捺を加えられた粘土帯が垂下する。堀之内I式に位置づけられる。

13は打削した礫の一方に再度剝離を施し刃部を作出している。刃部の整形は整ってはおらず、楔形石器の製作途中品とも思われる。

SK-033 (第96・97図、図版14・53)

本跡は小規模な土坑であるが、大型の土器片が出土している。

1・2は同一個体で磨消縄文が特徴的である。また胎土には多くの雲母を混入している。1の弯曲する度合いから口辺部の径は65cm前後と推測できた。時期は加曾利EⅡ式でも新しいものとなろう。

SK-074 (第96・97図、図版14・40)

本跡は土器出土状態からみるといわゆる埋壙といえよう。胴上半部は失っているものの、意識的に設置したような状態で出土している。

器面は磨耗が著しく縄文はほとんど消滅した状態で一部に痕跡を残す程度であった。そのほかに数条の垂下する沈線を認められ、磨り消し部の幅が広いようである。底部も加曾利EⅡ式以降の作りであるためEⅢ式とみなされる。

SK-076 (第96・97図、図版15・53)

本跡はトレンチによる確認調査時にその一部を掘削したものである。

出土土器は底部に近い部分で上部には縄文施文が認められる。時期的には加曾利EⅡ式からEⅢ式となろう。

SK-251 (第96・97図、図版53)

本跡は柱穴状の深い掘込みに切られており、遺物は皿状の浅い掘り込みから出土したものである。

5は口縁部が大きく外反するタイプであり、胴部に向かって逆「く」の字状に屈曲する。8・9は胴部片で沈線による施文がみられる。いずれも堀之内I式となる。6は大きな波状口縁の一部であり、内面には蓋受けと思われる張出部が存在する希有な例である。口辺部には低い隆帯により杵状の区画文がみられる。時期は加曾利EⅢ式となろう。7は6と同時期で磨消縄文を採用したものである。

SK-254 (第96・97図、図版54)

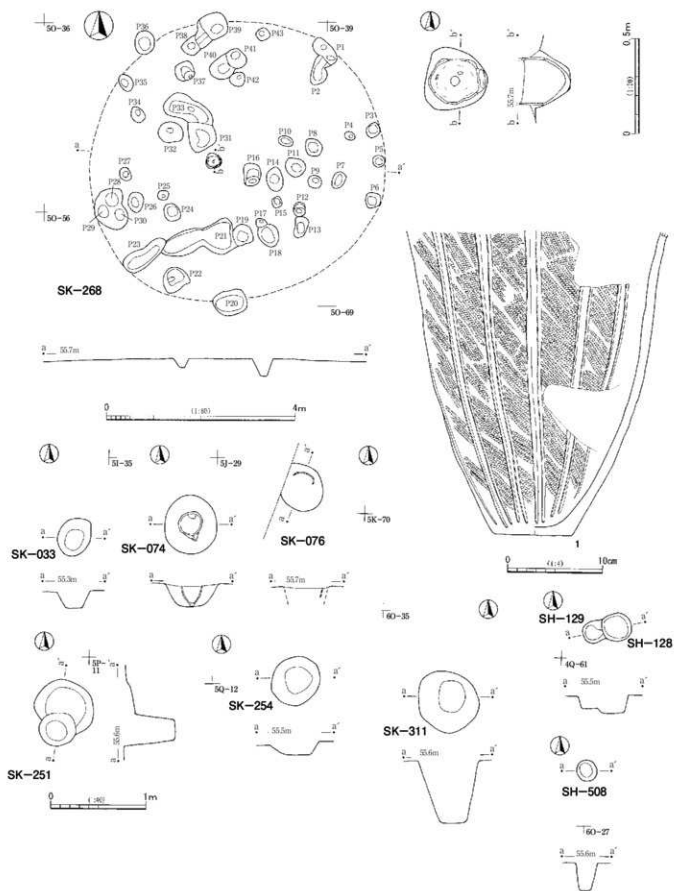
本跡は浅く小さな土坑であるが、器形を把握できる浅鉢が出土している。

10の遺存は約1/4となる。器面は無文でヘラによりきれいに整形されている。また内面でも調整痕が認められ仕上げは至って丁寧である。11は縄文地に横走する沈線で文様を描出したものであり、時期的には10も含めて加曾利BⅠ式となろう。

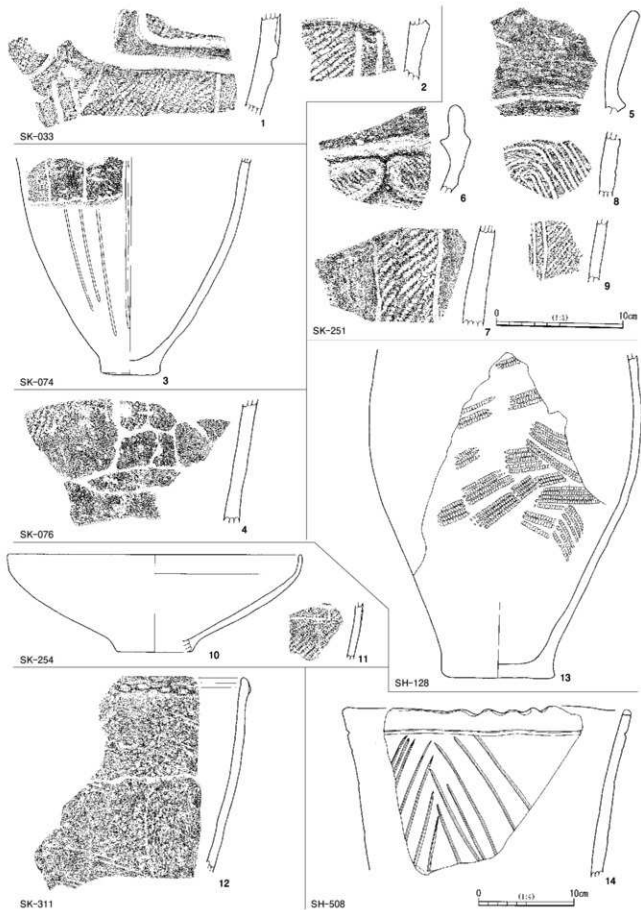
SK-268 (第96図、図版16・41)

本跡周辺には柱穴跡を思わせるようなビットが多々みられたため住居跡の存在を予想してビットを含めた平面図を作成してみた。周辺でのビット数は40か所で見られ、深さでも30cm以上を計測できたP4やそのほかのビットは十分柱穴としての機能を有するものであろう。しかしが跡らしき痕跡や焼土等は検出されていないので、住居跡と断定することはできなかったため、土坑として取り扱った。遺物としては、口縁部の失われた深鉢が出土している。また、このような出土状況は埋壙と捉えられるものとなろうが、ほかに目に付くような遺物はみられなかった。

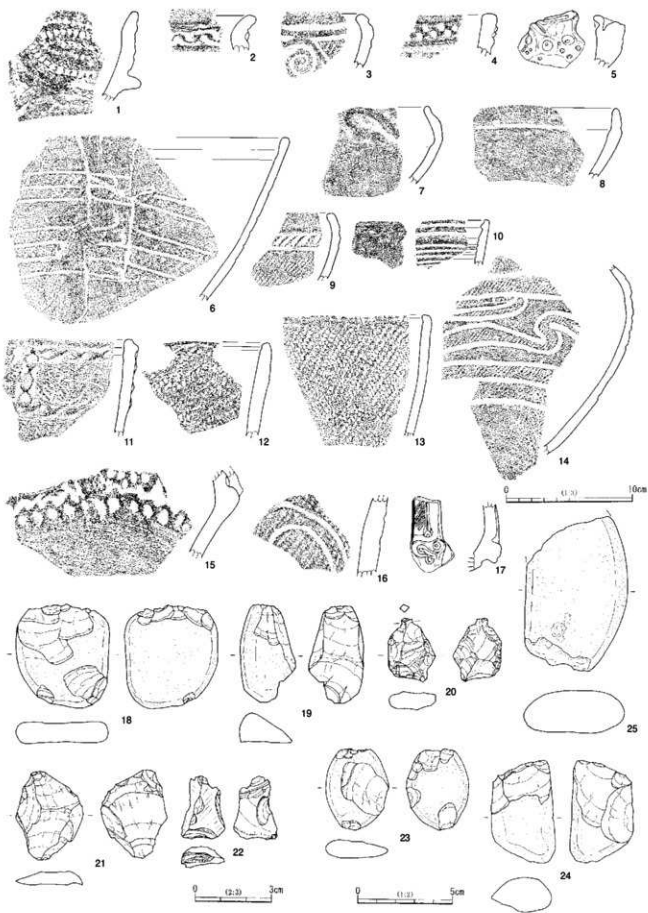
口縁部を欠損した深鉢は縄文を地文として沈線間に磨り消しがみられる。時期的には加曾利EⅡ式としてよいであろう。



第96图 SK-268·033·074·076·251·254·311、SH-128·129·508、SK-268出土土器



第97图 SK-033·074·076·251·254·311、SH-128·508出土土器



第98図 SK-293出土遺物

SK-268周辺ピット一覧表（数字は開口部からの深さ、単位=cm）

P 1-18	P 2-7	P 3-8	P 4-47	P 5-15	P 6-14	P 7-6	P 8-13
P 9-12	P 10-15	P 11-31	P 12-30	P 13-20	P 14-14	P 15-20	P 16-9
P 17-13	P 18-22	P 19-70	P 20-12	P 21-14	P 22-28	P 23-7	P 24-12
P 25-16	P 26-34	P 27-28	P 28-45	P 29-25	P 30-25	P 31-13	P 32-20
P 33-14	P 34-40	P 35-50	P 36-15	P 37-27	P 38-13	P 39-20	P 40-24
P 41-64	P 42-45	P 43-24					

SK-311（第96・97図、図版54）

本跡は円形の土坑で開口部から67cmと深く掘られていた。底面からの立ち上がりはSK-271やSK-306と類似点が見られる。遺物は加曾利B式の組線文系の深鉢で口縁部から胴部にかけて約1/5が遺存したものである。

器面は磨耗が著しく地文の縄文は僅かにその痕跡を残すのみで、半截竹管状工具による斜行する沈線は漸く確認できる程度であった。

SK-128（第96・97図、図版41）

本跡は小規模であったため柱穴等に用いる遺構記号のSHを用いて遺構番号を付した。その一部はSH-129と重複する。

遺物はSK-311と同様に組線文系の深鉢である。これも耕作によるものか胴上半部を失う状態で出土した。器面には撚りの粗い縄文が無雑作に施文されている。

SH-508（第96・97図、図版54）

柱穴状の本跡からは大型の口縁部が出土している。

口縁部の約1/4が遺存しており、推定口径は約28cmを計測する。口唇部の一部には指頭による押捺がみられ、その直下にははっきりとした沈線が横走る。胴部には斜行する沈線で山形文の文様が描かれている。時期は堀之内I式とみなされる。

第7表 久保塚ノ台遺跡2土坑計測表

（数値単位=cm）

番号	遺構番号	位置	形状	長径	短径	深さ	ピット数	P番号	深さ	備考（伴出土器）
1	SK-002	5J-41	円形	50	49	20	0			加曾利EⅡ式
2	SK-008	5I-21	円形	138	130	23	0			
3	SK-013	5J-52	円形	134	107	14	0			
4	SK-017	4I-12	円形	215	-	35	0			加曾利EⅡ式
5	SK-018	5I-13	楕円形	134	113	10	1	1	10	
6	SK-019	5I-14	楕円形	90	85	17	0			
7	SK-021	5I-26	楕円形	83	57	25	0			
8	SK-022-1	5I-26	不整楕円形	160	115	55	0			加曾利EⅡ式の一括土器3点
9	SK-022-2	5I-26	隅丸方形	65	60	30	0			
10	SK-024	5H-08	円形	78	72	83	0			
11	SK-028	5I-36	楕円形	62	56	48	0			
12	SK-030	5I-36	円形	58	55	30	0			
13	SK-031	5I-35	楕円形	65	60	15	0			深掘りは後世のものか
14	SK-032	5I-45	楕円形	71	56	49	0			
15	SK-033	5I-34	楕円形	47	35	20	0			
16	SK-035	5I-27	楕円形	84	65	49	0			

番号	遺構番号	位置	形状	長径	短径	深さ	ピット数	P番号	深さ	備考(伴出土器)
17	SK-038	5J-00	楕円形	55	45	45	0			
18	SK-057	4J-97	円形	69	61	59	0			
19	SK-062	4J-75	円形	53	50	25	0			
20	SK-072	4I-76	円形	110	107	29	0			SI-10と重複
21	SK-079	5J-05	楕円形	80	70	40	0			
22	SK-082	4J-96	円形	90	90	45	0			
23	SK-083	4J-96	円形	82	75	28	0			
24	SK-089	5J-55	楕円形	121	108	15	0			
25	SK-102	5J-27	楕円形	75	57	30	0			
26	SK-119	5I-38	楕円形	67	52	24	0			加曽利EIV式の一括土器2点
27	SK-122	5K-30	不整楕円形	156	100	31	0			
28	SK-123	5K-12	円形	87	85	18	0			
29	SK-125	4K-91	円形	73	70	21	0			
30	SK-126	4K-81	楕円形	105	95	21	0			称名寺式
31	SK-127	4J-24	長楕円形	-	102	68	0			未掘部あり
32	SK-128	4K-60	不整形	116	105	15	0			
33	SK-129	4J-30	不整楕円形	123	83	19	1	1	10	
34	SK-131	4K-56	隅丸方形	112	106	55	0			
35	SK-133	4K-50	楕円形	61	32	42	0			
36	SK-134	4K-36	隅丸方形	102	85	40	0			
37	SK-200	5O-14	不整形	121	52	20	0			2基の重複か
38	SK-201	4P-38	楕円形	64	60	45	0			
39	SK-203	4Q-32	不整形	100	77	16	0			
40	SK-204	4Q-42	不整形	125	73	10	0			
41	SK-206-1	4Q-54	楕円形	84	61	18	0			
42	SK-206-2	4Q-34	楕円形	78	56	15	0			
43	SK-207	4Q-25	-	-	-	0				1/2程度の調査
44	SK-208	4Q-56	円形	63	54	27	0			ピットと重複
45	SK-209-1	4R-42	楕円形	135	108	24	1	1	16	
46	SK-209-2	4R-41	楕円形	73	50	20	0			
47	SK-211	4R-34	楕円形	-	-	20	1	1	13	1/2程度の調査
48	SK-212-1	4R-46	不整形	163	105	15	0			2基の重複か
49	SK-212-2	4R-36	楕円形	72	60	10	0			
50	SK-212-3	4R-36	楕円形	96	80	80	0			
51	SK-219	4R-37	不整楕円形	113	104	25	0			
52	SK-223-1	4R-32	円形	55	53	20	1	1	-	
53	SK-223-2	4R-21	楕円形	60	48	18	0			
54	SK-229	4P-91	不整形	107	70	14	1	1	6	
55	SK-237	4P-85	楕円形	65	55	28	0			
56	SK-242	5P-10	不整楕円形	191	117	45	1	1	5	
57	SK-244	4Q-63	不整形	67	60	24	0			
58	SK-246	4Q-73	不整形	75	70	18	0			ピットと重複か
59	SK-247	4Q-87	不整楕円形	64	60	30	0			
60	SK-248	5P-54	楕円形	76	63	60	0			一括土器、浅いピットと重複
61	SK-249	5O-09	楕円形	75	56	69	0			
62	SK-250	5D-07	円形	37	35	12	0			SI-025参照
63	SK-252	5P-27	不整楕円形	140	76	13	2	1 2	12 9	
64	SK-255	5Q-04	不整形	83	50	15	2	1 2	3 18	
65	SK-256	5Q-25	円形	70	69	40	0			
66	SK-257	5Q-15	円形	93	85	57	0			
67	SK-258	5Q-25	円形	64	61	24	0			
68	SK-259	5Q-06	不整楕円形	200	107	40	1	1	3	

番号	遺構番号	位置	形状	長径	短径	深さ	ビット数	P番号	深さ	備考(伴出土器)
69	SK-262	4Q-73	楕円形	87	68	25	1	1	4	
70	SK-266	5O-76	不整楕円形	116	65	7	1	1	33	
71	SK-268	5O-47	円形	37	35	12	0			加曾利EⅡ式
72	SK-269	5P-62	楕円形	-	61	10	1	1	70	ビットと重複か
73	SK-270	5P-43	不整楕円形	68	52	20	0			
74	SK-271	5P-43	楕円形	77	65	89	0			
75	SK-273-1	5P-55	楕円形	100	80	100	0			
76	SK-273-2	5P-45	楕円形	71	65	9	0			
77	SK-273-3	5P-45	楕円形	82	55	10	0			
78	SK-276	5P-57	不整形	88	88	18	1	1	10	
79	SK-277	5P-58	円形	65	59	75	0			
80	SK-278	5P-48	円形	66	62	21	0			2基の重複
81	SK-280-1	5Q-65	不整円形	110	110	40	0			
82	SK-280-2	5Q-56	不整楕円形	116	71	8	0			
83	SK-282-1	5R-52	長楕円形	75	40	12	0			
84	SK-282-2	5R-52	円形	50	48	39	0			
85	SK-282-3	5R-41	楕円形	80	66	26	0			
86	SK-282-4	5R-42	楕円形	71	58	42	0			
87	SK-282-5	5R-42	円形	54	50	31	0			
88	SK-283	5R-78	楕円形	119	100	13	0			
89	SK-285	5O-98	楕円形	69	62	56	0			
90	SK-286	5P-74	円形	58	57	67	0			
91	SK-288	5Q-78	楕円形	72	51	37	0			
92	SK-289-1	6Q-09	不整楕円形	140	120	23	0			
93	SK-289-2	6Q-09	楕円形	110	-	24	0			
94	SK-295-1	6P-64	円形	61	59	27	0			
95	SK-295-2	6P-64	楕円形	67	49	37	0			
96	SK-295-3	6P-73	楕円形	70	53	20	0			
97	SK-299	6Q-72	楕円形	81	72	22	0			
98	SK-300-1	6Q-62	楕円形	93	60	15	0			
99	SK-300-2	6Q-62	楕円形	75	45	15	1	1	13	
100	SK-304	5O-71	楕円形	86	70	19	0			
101	SH-447	5O-71	楕円形	75	60	14	0			SHで記録
102	SK-306	5O-93	円形	116	110	133	0			
103	SK-309	6O-39	円形	100	83	108	0			
104	SK-312	6O-17	円形	72	66	18				2基の重複
				45	44	30				
105	SK-313	6O-27	円形	60	60	50	0			
106	SK-314	6O-27	楕円形	78	60	43	0			ビットと重複
107	SK-319	6Q-32	楕円形	112	81	20	0			
108	SK-321	6Q-33	楕円形	104	95	19	0			
109	SK-033	5I-25	楕円形	43	33	19	0			破片のみの出土
110	SK-074	5J-28	円形	62	55	24	0			SI-017の西
111	SK-076	5J-79	楕円形	-	46	-	0			SI-015と一部重複、その一部か
112	SK-251	5P-10	円形	63	-	11	0			破片のみの出土
				38	36	53				
113	SK-254	5Q-02	円形	53	48	14	0			
114	SK-311	6O-35	円形	67	61	67	0			
115	SH-128	4Q-51	円形	31	30	19	0			
116	SH-129	4Q-51	楕円形	23	-	14	0			
117	SH-508	6O-17	円形	23	21	30	0			周辺にビット多数、柱穴か

第4節 溝状遺構

本遺跡では4H区を中心とし調査区西部分(SD-001~003)とP・Q区(SD-004~007)において溝状遺構が検出されている。規模的には後者のほうが大きく、結果的には調査区を縦断するような形で設置されていたようである。時期については出土遺物から16世紀後半の磁器も出土しており、一概には断定できないが18世紀前後に掘削された溝と考えられる。遺物については遺構ごとにまとめてみたが、陶磁器類については遺構外出土品も含めてここで一括して記載することとした。

SD-001 (第22図)

本跡は調査区の西側にあたる3H区において検出された溝で、その大半は調査区外に延びていたため一部の調査で終了した。溝は東西に走っており地山部分から計測すると、幅が約70cm、深さ10cm前後の規模であった。むしろ深さや幅については掘削当時よりもだいぶ縮小しているものと考えてよいであろう。遺物はほとんどみられなかった。

SD-002 (第22・99・100図、図版55・73)

本跡は4H区から5H区に延びており南北方向に走っていたようである。だが、SD-001と同様調査区外となるため一部の調査となった。規模に付いてみると、幅が約1.5m、深さは20cm~25cmとなる。

遺物 出土量は少なく図示できたものは計5点となった。

1は磨消縄文のみられる胴部片で、2とともに加曾利EⅡ式であろう。3は細沈線が横方向にみられる。おそらく堀之内Ⅰ式であろう。

石器は打製石斧が2点出土している。2は頭部が若干欠損している。表裏に自然面が認められることから薄く扁平な礫を素材にしたものであろう。3は剥片を利用したもので刃部と左側縁を簡単に整形して石斧としている。

SD-003 (第22・100図、図版73)

本跡は4H区で検出されたものであるがSD-002とはほぼ直線的な位置にある。このことから本来は1条の溝として存在していたとも考えられる。規模についてみると、長さ8.5m、幅45cm~55cm、深さは20cm前後を計測する。なお、本跡の西に位置する小規模な溝は長さ4.5m、幅25cm、深さは7cm~8cmと浅い。遺物も出土しなかったため遺構番号は省略した。

遺物 ここで図示できる遺物は石鏃1点のみである。作りは粗雑で左右は非対称である。

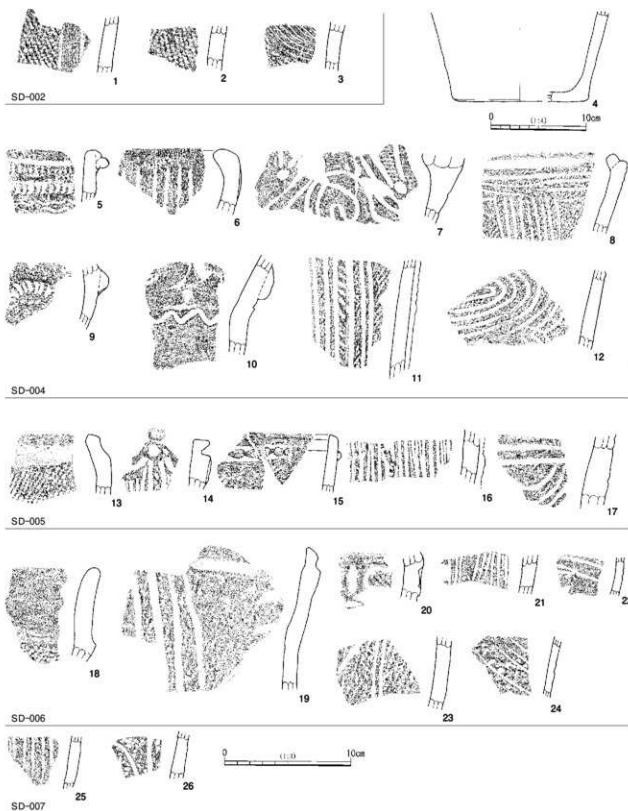
SD-004 (第23・99~101図、図版41・55・73)

本跡は遺跡を縦断するように掘削された溝のSD-006から分岐し、さらに北へ向かう溝をSD-004とした。規模についてみると、現存する長さは約13.5m、幅100cm~120cm、深さは25cm~30cmを計測する。

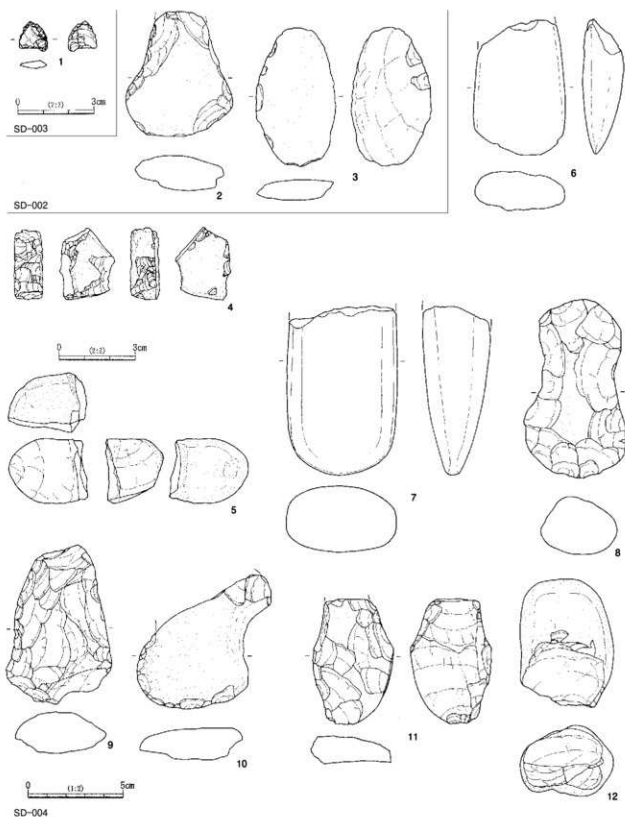
遺物 土器は中期から後期にかけて出土している。石器では削器や磨製石斧・打製石斧・石核などが出土している。図示できた石器は20点と多い。

5・9・10は幅広の押し文がみられるところから、阿玉台式でも新しいタイプとなろう。6は口唇部の作りから曾利系である。7は明確な沈線と刺突文・縄文とで文様が構成されている。5・8・9は口縁部の作りや垂下する粘土紐からとも堀之内Ⅰ式である。また、4は後期の底部と考えられる。

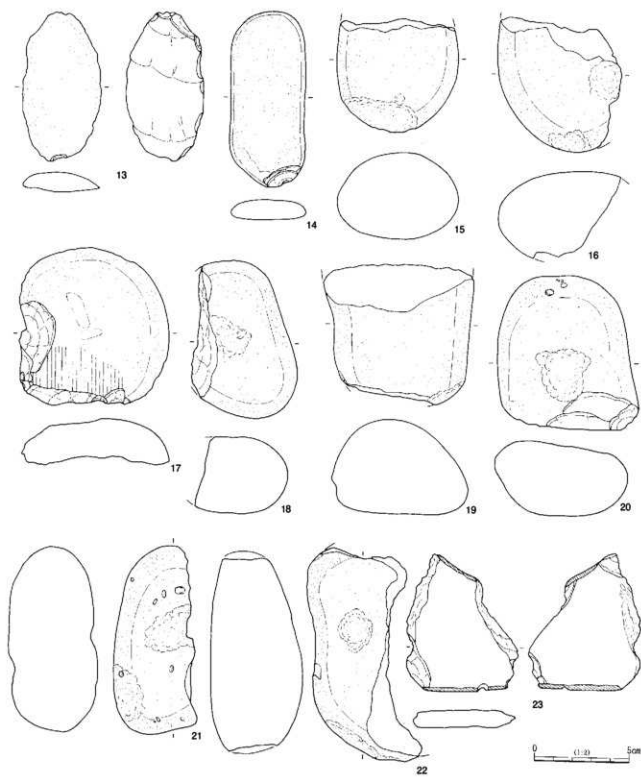
石器では第100図の4は、板状の黒曜石の右側面を弯曲に加工している。加工部分を削器のように使用したものであろう。5には打痕がみられるため敲石として使用していたものであり、次に平坦面を打面として剥片剥取を試みている。6・7は磨製石斧でいずれも頭部を欠損する。7は刃部が磨耗しているため



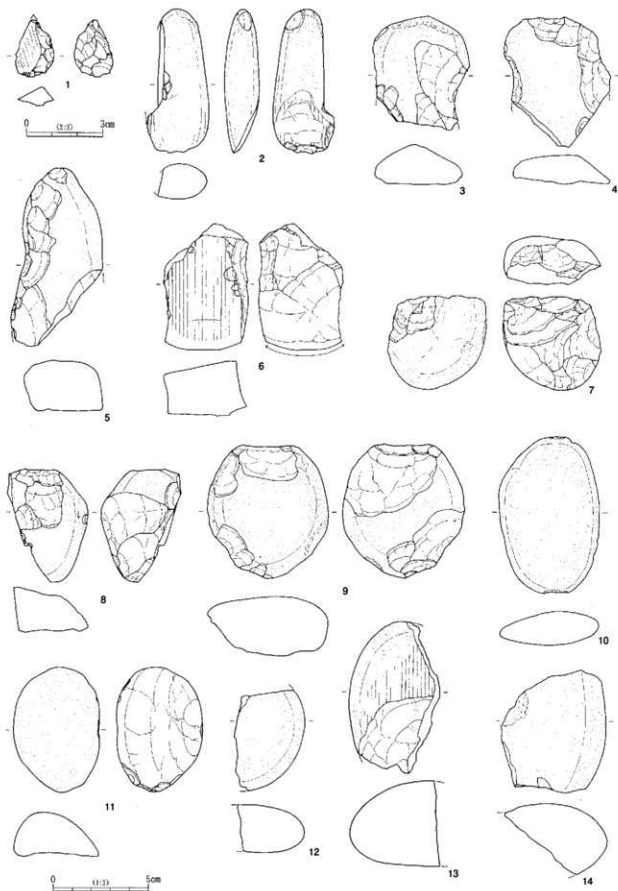
第99图 SD-002·004·005·006·007出土土器



第100图 SD-002·003出土石器、SD-004出土石器(1)



第101图 SD-004出土石器(2)



第102图 SD-005出土石器(1)

敲石として再利用されたものである。8～11は打製石斧で、10は典型的な分銅タイプである。11は頭部が欠損しており、側面での整形が認められるため打製石斧とした。13は頭部に整形のための剥離がみられる。14は下部に剥離痕を残す。打製石斧の未成品と思われる。12・17は礫器となろう。12は大きな剥離で刃部を作出していたものであろう。17は磨石として使われていたことが、滑らかな表面の状態から窺われる。15・16は敲石兼用の磨石である。18～22は敲石で、すべて破損品である。23は板状の緑泥片岩を利用したもので、下部には研磨が施されている。しかも切り込みの痕跡があるため石錘と考えた。

SD-005 (第23・99・102・103図、図版55・74)

本跡はSD-004の分岐点と同一地点から東へと向かう溝である。規模は約25mまで確認でき調査区外へとなる。幅は45cm～50cmでほぼ一定の広さとなっている。深さは15cm前後と浅い。

遺物 土器で図示できるものは少なかったが、石器はSD-004と同様に豊富な出土量を示す。

13は口縁直下に浅い沈線を描き、以下は縄文となる。このタイプは加曽利EⅢ式からEⅣ式にかけてみられる土器群である。14は波頂部の特徴から堀之内Ⅰ式となろう。17も同時期の胴部片である。15は加曽利B式の紐線文系深鉢で内面の沈線は極めて浅い。16は粘土帯の貼付と縦方向の条線から曾利系の胴部片となろう。

第102図のⅠは節理面を多く残す石礫である。裏面の調整も簡素な作りとなっている。2は磨製石斧の破損品である。刃部を整形し打製石斧として使用したものであろう。3～5は打製石斧の破損したものであり、6は破損した磨石の一部を打製石斧のように使用したものと考えられる。7は残核となろう。チャート製の打割し平坦な面を打面としている。8・9は楔形石器として分類できよう。8は製作途中で廃棄されたものと思われる。9も上部と左側面下部において表裏両面からの剥離が認められる。10は敲石で下端に打痕の痕跡がみられる。11～14は磨石の破損品で、11には右側縁に使用痕が観察できる。15は石皿の一部である。

SD-006 (第23・99・103図、図版55・74)

本跡は6Q区から台地中央部へと向かい、4P区でSD-004とSD-005と交わる。この交点は台地部から下のように流れてた水流の合流点とも考えられる。検出された7条の溝のうち本跡が最大となる。規模は長さ約44m、幅は1.8m～2m、深さは23cm～25cmを計測する。

遺物 土器は文様の鮮明なものを7点を図示した。また石器については6点図示することができた。

18は口縁部片で有段を形成する。屈折部以下では縄文施文となる。時期的には加曽利EⅣ式に位置づけられよう。19は地文の縄文と太い沈線で文様が構成されている。口縁部の作りから堀之内Ⅰ式となろう。20は楕円状の枠で区画されている。21・23も同時期とみなされる。22は精製土器の胴部片で沈線のみがみられる。時期的には新しくなるものと思われる。24は燃りの粗い縄文と斜行する沈線で文様を構成する。加曽利B式の粗製土器の一部であらう。

第103図の16は石礫であるが、成品か未成品か判別し難い作りといえる。本遺跡では他の遺構でも出土している。17は表裏面に剥離がみられる。おそらく楔形石器の製作を意図したものであろう。18～20は打製石斧でいずれも欠損品である。21は下部に顕著な打痕が観察できる。磨石兼用の敲石とは使用目的が異なるものと思われる。

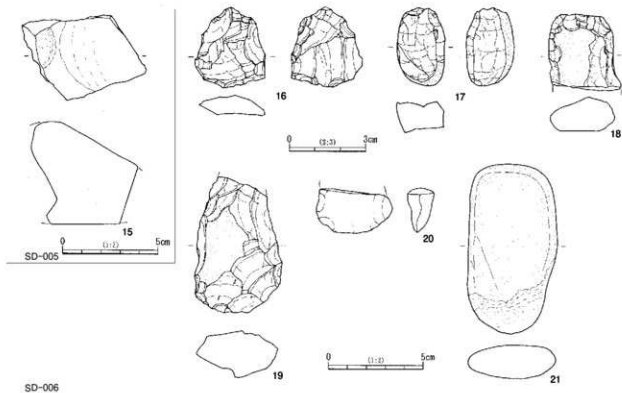
SD-007 (第23・99図、図版55)

本跡は6Q区で検出された小規模な溝で、SD-006に平行して位置する。その長さは10.5m、幅30cm、

深さ10cm前後を計測し、単独で位置しているようである。

遺物 土器が数点出土したのみである。

25は縦方向に沈線がみられ、26は縄文地に沈線による曲線が描かれている。時期的には堀之内I式あたりのものであろう。



第103図 SD-005出土石器2)、SD-006出土石器

第8表 久保塚/台遺跡2出土石器一覧表

標本No.	出土地点	遺物番号	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
第2781	SI002	127	尖頭器	メノウ	34.60	15.27	6.44	3.3	
第2782	SI002	122	石鏃	黒曜石	(15.28)	(11.73)	3.76	0.6	
第2783	SI002	120	石鏃	チャート	20.99	(22.87)	4.66	(2.6)	
第2784	SI002	118	楔形石器	チャート	(44.35)	(29.13)	(16.84)	(26.9)	
第2785	SI002	120	剥片	チャート	(34.08)	(38.56)	(6.08)	(9.0)	
第2786	SI002	22	磨製石斧	安山岩	49.93	30.12	11.06	21.8	
第2787	SI002	32	打製石斧	安山岩	(84.82)	46.22	23.81	(129.9)	
第2788	SI002	58	打製石斧	安山岩	(74.64)	52.21	(19.62)	(54.4)	
第2789	SI002	109	打製石斧	変質トワシ(焼熟)	(85.09)	(72.77)	21.72	(197.0)	
第27810	SI002	46	敲石	砂岩	(64.66)	54.83	26.36	(123.5)	
第27811	SI002	146	磨(製)石	石英斑岩(焼熟)	(123.28)	70.00	47.75	(584.6)	
第27812	SI002	27	磨石	石英斑岩	(61.46)	69.70	41.01	(250.2)	
第27813	SI002	33	磨石	砂岩	(51.05)	52.84	19.63	(62.5)	
第27814	SI002	123	敲石	砂岩	92.21	67.05	51.21	263.2	
第27815	SI002	138・139	敲石	砂岩(焼熟)	(65.27)	87.57	56.89	(483.0)	
第27816	SI002	26	敲石	砂岩	50.42	64.57	14.77	75.5	
第28817	SI002	145	敲石	砂岩(焼熟)	(147.05)	187.10	156.20	(4730.0)	
第28818	SI002	67・144	磨石	石英斑岩	172.45	108.25	64.46	1723.0	
第28819	SI002	141	敲石	石英斑岩	(106.30)	109.70	101.73	(1280.0)	
第28820	SI002	143	石鏃	多孔質安山岩	163.50	(106.77)	67.99	(1250.0)	(SI014-4と接合)
第29810	SI003	8	石鏃	黒曜石	21.66	(15.50)	3.15	0.6	
第29811	SI003	7	スクレイパー	細粒黒炭岩	36.32	42.42	10.29	17.1	
第29812	SI003	20	打製石斧	砂岩	(59.31)	45.07	14.97	(51.7)	
第29813	SI003	17	磨石	多孔質安山岩	133.60	84.29	40.06	644.2	
第2981	SI004	15	石鏃	チャート	23.67	14.63	4.98	1.8	
第2982	SI004	95	石鏃	チャート	13.24	16.49	2.40	0.38	
第2983	SI004	17	石鏃	チャート	24.58	(18.54)	3.07	(1.0)	
第2984	SI004	137	石鏃	チャート	21.79	(15.64)	5.83	(1.6)	
第2985	SI004	23	石鏃	黒曜石	(14.46)	6.95	4.10	(0.4)	
第2986	SI004	124	楔形石器	チャート	32.13	16.14	9.22	4.5	
第2987	SI004	16	楔形石器	チャート	31.83	15.95	4.92	3.2	
第2988	SI004	112	楔形石器	チャート	28.30	17.52	5.37	2.6	
第2989	SI004	17	剥片	チャート	31.09	(14.02)	5.18	(2.4)	
第29810	SI004	116	剥片	チャート	42.42	25.05	8.78	7.7	
第29811	SI004	116	剥片	チャート	30.44	42.47	8.10	6.4	
第29812	SI004	116	剥片	チャート	49.73	33.01	12.18	24.8	
第29813	SI004	4	磨製石斧	砂岩	(72.40)	48.78	24.19	(151.1)	
第29814	SI004	142	打製石斧	ホルンフェルス	91.60	56.66	28.00	189.6	
第29815	SI004	65	打製石斧	砂岩	65.25	43.07	19.77	64.8	
第29816	SI004	14	打製石斧	ホルンフェルス	(80.99)	42.23	21.45	(68.7)	
第29817	SI004	1	打製石斧	石英斑岩	(56.82)	(53.60)	33.45	(124.4)	
第29818	SI004	96	磨石	石英斑岩	86.74	71.78	45.71	353.7	
第29819	SI004	93	磨石	安山岩	79.89	62.76	36.23	229.8	
第29820	SI004	134	磨石	砂岩	(62.95)	(36.07)	(46.80)	(110.0)	
第33821	SI004	115	磨石	石英斑岩	120.34	72.10	(41.86)	(540.0)	
第33822	SI004	145	台石	砂質黒炭岩	(79.33)	(43.51)	28.83	(368.6)	
第33823	SI004	24	台石	砂岩(焼熟)	(126.08)	(110.39)	57.55	(930.0)	
第3881	SI005	42	石鏃	チャート(焼熟)	24.73	17.43	5.48	1.6	
第3882	SI005	62	石鏃	チャート	16.58	14.61	4.07	0.66	
第3883	SI005	24	石鏃	黒曜石	(11.99)	11.74	2.53	(0.31)	
第3884	SI005	136	石鏃	メノウ	12.43	8.66	2.16	0.17	
第3885	SI005	74	石鏃	黒曜石	(15.79)	16.21	3.82	(0.7)	
第3886	SI005	110	石鏃	チャート	(15.73)	15.48	2.96	(0.7)	
第3887	SI005	86	石鏃	黒曜石	(15.34)	(10.97)	2.76	(0.3)	
第3888	SI005	86	石鏃	黒曜石	(14.03)	(12.86)	7.12	(0.5)	
第3889	SI005	158	石鏃	黒曜石	(13.91)	(11.81)	3.63	(0.5)	
第38810	SI005	108	石鏃	黒曜石	(9.53)	7.50	1.52	(0.3)	
第38811	SI005	108	石鏃	チャート	(16.95)	7.47	2.44	(0.12)	
第38812	SI005	86	石鏃	チャート	28.02	(11.71)	5.35	(1.5)	未成の破損品
第38813	SI005	86	楔形石器	黒曜石	21.25	15.38	6.90	2.1	
第38814	SI005	149	剥片	黒曜石	26.24	11.24	5.42	0.9	
第38815	SI005	47	剥片	黒曜石	20.37	26.96	4.36	2.3	
第38816	SI005	149	剥片	黒曜石	11.87	5.90	1.91	0.1	
第38817	SI005	86	剥片	黒曜石	17.79	13.81	4.88	1.2	
第38818	SI005	161	打製石斧	細粒黒炭岩	(48.28)	30.24	17.33	(39.8)	
第38819	SI005	109	打製石斧	砂岩	(71.14)	52.95	24.23	(66.6)	
第38820	SI005	161	敲石	砂岩	(79.86)	46.47	30.97	(136.3)	
第38821	SI005	95	敲石	石英斑岩(焼熟)	67.04	(30.52)	(44.98)	(107.5)	
第38822	SI005	65	打製石斧	砂岩(焼熟)	82.91	51.67	13.75	81.9	

採回No.	出土地点	遺物番号	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
第38023	SI005	161	打製石斧	チャート	(51.71)	49.86	(13.33)	(34.9)	
第38024	SI005	100	礫石	砂岩	89.03	80.85	29.51	260.0	
第38025	SI005	142	礫石	石英岩	92.10	92.70	51.30	614.4	
第38026	SI005	108	礫石	石英岩(焼熟)	(53.52)	62.90	40.16	(157.5)	
第38027	SI005	162-163-166	石皿	多孔質安山岩(焼熟)	(129.66)	195.50	40.05	(1003.3)	
第40020	SI006	24	石皿	ガラス質ゼイサイト	15.21	10.86	2.99	0.44	
第40021	SI006	53	石皿	黒曜石	(12.57)	13.13	3.77	(0.6)	
第40022	SI006	58	石皿	黒曜石	14.97	9.29	(3.20)	(0.4)	
第40023	SI006	58	石皿	黒曜石	12.35	(7.349)	3.70	(0.3)	
第40024	SI006	37	楔形石器	頁岩	29.53	24.43	7.65	6.0	
第40025	SI006	58	剥片	チャート	(24.49)	(38.59)	(10.62)	(11.5)	
第40026	SI006	54	石核	黒曜石	(26.41)	(33.69)	15.68	(10.3)	
第40027	SI006	37	スクレイパー	細粒凝灰岩	45.10	30.98	7.29	10.9	
第40028	SI006	58	打製石斧	砂岩	(54.14)	47.09	18.12	(43.9)	
第40029	SI006	40	礫石	石英岩(焼熟)	(75.94)	(65.49)	(51.68)	(278.1)	
第4101	SI008	111	石皿	チャート	17.38	(12.00)	3.96	(0.53)	
第4102	SI008	114	石皿	黒曜石	25.29	(15.77)	5.57	(1.3)	
第4103	SI008	112	石皿	ホルンフェルス	21.57	17.39	3.68	1.6	
第4104	SI008	107	石皿	チャート	(20.31)	(22.26)	8.28	(3.5)	
第4105	SI008	116	石皿	黒色安山岩	36.12	27.18	7.10	8.3	
第4106	SI008	114	石皿	黒曜石	18.92	9.40	5.24	0.8	
第4107	SI008	109	石皿	ホルンフェルス	(30.31)	7.40	3.68	(1.2)	
第4108	SI008	114	剥片	黒曜石	33.03	14.43	11.22	4.8	
第4109	SI008	113	剥片	流紋岩	(27.49)	(22.60)	(15.15)	(9.3)	
第41010	SI008	145	打製石斧	ホルンフェルス	97.42	53.28	17.80	119.3	
第41011	SI008	48	打製石斧	ホルンフェルス	68.06	(33.13)	10.23	(21.8)	
第41012	SI008	79	打製石斧	ホルンフェルス	(55.60)	44.80	14.09	(44.5)	
第41013	SI008	156	打製石斧	砂岩	(59.30)	54.36	21.55	(63.6)	
第41014	SI008	122	打製石斧	砂岩	(49.46)	53.03	15.62	(51.8)	
第41015	SI008	141	打製石斧	ホルンフェルス	(24.48)	(43.02)	11.76	(14.8)	
第41016	SI008	131	打製石斧	砂岩	(47.17)	57.35	25.34	(86.7)	
第41017	SI008	136	打製石斧	ホルンフェルス	(50.45)	62.01	27.31	(85.6)	
第41018	SI008	125	打製石斧	石英片岩	(68.12)	(47.88)	14.16	(47.9)	
第41019	SI008	159	打製石斧	砂岩	(76.58)	50.44	21.38	(100.6)	
第41020	SI008	18	礫石	御国結凝灰岩	52.46	48.58	31.58	48.1	
第41021	SI008	186	礫石	砂岩	58.27	28.80	14.32	29.6	加
第41022	SI008	74	礫石	御国結凝灰岩	(66.53)	33.62	32.28	(59.5)	
第41023	SI008	101	礫石	石英岩	(90.81)	64.90	(47.40)	(331.4)	
第41024	SI008	141	礫石	流紋岩	(77.33)	53.31	38.79	(202.0)	
第45025	SI008	183	台石	石英岩	(124.43)	(77.57)	71.94	(817.5)	加
第45026	SI008	36	礫石	御国結凝灰岩	122.65	(54.86)	52.00	(239.3)	
第45027	SI008	141	礫石	砂岩	116.02	58.02	42.45	410.4	
第45028	SI008	82	台石	石英岩(焼熟)	(67.85)	(108.62)	75.15	(627.2)	
第45029	SI008	39	礫石	御国結凝灰岩	83.82	53.17	32.60	102.2	
第45030	SI008	16	礫石	石英岩(焼熟)	(87.74)	(51.64)	45.07	(200.4)	
第45031	SI008	126	台石	御国結火山噴凝灰岩	(95.56)	(105.64)	80.85	(718.7)	
第45032	SI008	184	礫石	石英岩	(149.03)	101.34	(44.17)	(935.0)	加
第45033	SI008	23	礫石	砂岩	156.05	155.10	135.04	2980.0	
第4701	SI009	2	石皿	黒曜石	12.61	10.84	1.45	0.26	未成品
第4702	SI009	8	石皿	黒曜石	(12.71)	15.67	3.84	(0.5)	
第4703	SI009	1	石皿	黒曜石	(9.43)	11.85	3.19	(0.3)	
第4704	SI009	8	石皿	チャート	(22.15)	(14.89)	5.11	(1.5)	
第4705	SI009	2	石皿	チャート	22.18	19.38	4.87	2.0	
第4706	SI009	8	石皿	凝灰岩	(30.17)	(29.16)	(13.79)	(10.0)	未成品
第4707	SI009	2	石皿	チャート	21.20	21.25	(7.56)	(4.6)	未成品
第4708	SI009	8	剥片	黒曜石	23.14	15.50	4.20	1.3	
第4709	SI009	8	剥片	チャート	(21.20)	(28.10)	(5.77)	(3.6)	
第4710	SI009	8	剥片	チャート	22.98	25.31	5.40	3.3	
第4711	SI009	8	剥片	チャート	(16.78)	(31.98)	(7.20)	(3.7)	
第4712	SI009	8	剥片	頁岩	21.88	25.64	5.34	3.6	
第4713	SI009	2	石核	チャート	43.02	43.33	(13.59)	(31.5)	
第4714	SI009	8	打製石斧	安山岩	(44.67)	(51.82)	15.47	(44.7)	
第4715	SI009	8	打製石斧	砂岩	(71.75)	43.50	18.99	(79.4)	
第4716	SI009	2	打製石斧	安山岩	(51.89)	(55.96)	23.11	(75.5)	
第4717	SI009	2	礫石	石英岩(焼熟)	(29.32)	(62.64)	(24.48)	(82.3)	
第4718	SI009	3	礫石	砂岩	(62.27)	(34.43)	39.74	(176.4)	
第4719	SI009	5	礫石	御国結凝灰岩(焼熟)	83.26	67.21	38.06	124.9	
第4802	SI010	9	石皿	チャート	(21.05)	10.42	2.45	(0.5)	
第4803	SI010	1	打製石斧	砂岩	(52.38)	52.18	15.68	(44.5)	
第5101	SI011	57	打製石斧	ホルンフェルス	(49.45)	40.04	10.94	(30.1)	
第5102	SI011	183	打製石斧	ホルンフェルス	83.99	(45.90)	20.55	(89.5)	

採回No.	出土地点	遺物番号	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
0551083	SI011	78	打製石斧	ホルンフェルス	(65.52)	47.44	12.99	(47.7)	
0551084	SI011	175	打製石斧	安山岩	(53.15)	59.10	17.55	(72.5)	
0551085	SI011	197	磨石	砂岩	(87.34)	63.17	49.44	(282.8)	
0551086	SI011	101	磨石	石英斑岩	(66.76)	78.21	38.51	(217.8)	
0551087	SI011	98	磨石	安山岩	79.27	(63.80)	37.09	(262.2)	
0551088	SI011	36	磨石	チャート(焼熱)	94.86	64.14	43.44	304.0	
0551089	SI011	58	磨石	細粒凝灰岩	48.62	48.38	21.97	57.8	
0551090	SI011	47	石鏝	安山岩(焼熱)	(53.60)	(89.99)	37.57	(330.7)	
0551091	SI014	2	石鏝	黒曜石	18.69	11.30	3.15	0.6	
0551092	SI014	71	石鏝	黒曜石	19.06	11.15	4.28	0.8	
0551093	SI014	136	石鏝	黒曜石	(18.01)	8.88	3.15	(0.4)	
0551094	SI014	2	石鏝	柱状貫頁岩	17.43	16.90	2.32	0.7	
0551095	SI014	2	石鏝	黒曜石	(12.92)	9.97	3.34	(0.3)	
0551096	SI014	2	石鏝	チャート	40.11	31.68	6.65	9.7	
0551097	SI014	74	石鏝	黒曜石	19.37	(11.21)	4.71	(0.1)	
0551098	SI014	125	石鏝	黒曜石	(15.19)	19.82	5.29	(1.3)	
0551099	SI014	125	石鏝	黒曜石	(14.76)	20.72	3.53	(0.8)	
0551100	SI014	2	石鏝	黒曜石	15.06	7.48	2.91	0.2	
0551101	SI014	8	石鏝	チャート	(8.34)	(15.25)	3.45	(0.4)	
0551102	SI014	2	石鏝	黒曜石	(10.80)	(9.07)	3.40	(0.2)	
0551103	SI014	2	石鏝	黒曜石	19.68	16.29	5.77	1.5	未成品
0551104	SI014	2	石鏝	黒曜石	24.93	25.80	7.11	4.1	未成品
0551105	SI014	105	石鏝	チャート	(22.60)	27.80	9.02	(5.2)	未成品
0551106	SI014	74	楔形石器	チャート	24.32	19.24	4.80	2.8	
0551107	SI014	2	楔形石器	ホルンフェルス	(53.62)	(40.60)	(10.96)	(30.2)	
0551108	SI014	2	刮片	チャート	22.99	23.07	6.12	3.8	
0551109	SI014	2	刮片	黒曜石	40.11	12.27	6.29	2.8	
0551120	SI014	117	刮片	チャート	35.26	13.34	5.76	2.8	
0551121	SI014	2	刮片	チャート	38.51	30.04	6.79	8.5	
0551122	SI014	96	石鏝	チャート	(13.88)	(18.50)	3.67	(0.7)	
0551123	SI014	67	磨製石斧	流紋岩	(83.69)	56.66	35.05	(210.6)	
0551124	SI014	45	磨製石斧	塩貫ドレライト	74.60	40.62	22.55	104.7	
0551125	SI014	117	磨製石斧	ホルンフェルス	(30.31)	(26.81)	10.16	(7.9)	
0551126	SI014	117	打製石斧	ホルンフェルス	(33.24)	63.28	17.78	(36.2)	
0551127	SI014	115	打製石斧	ホルンフェルス	(53.10)	56.09	31.12	(69.2)	
0551128	SI014	79	打製石斧	ホルンフェルス	76.32	40.74	19.72	57.3	
0551129	SI014	103	打製石斧	ホルンフェルス	42.96	22.86	11.51	10.2	
0553030	SI014	16	磨石	石英斑岩	99.85	(83.18)	40.03	(408.4)	
0553031	SI014	4	磨石	砂岩(焼熱)	(64.75)	(46.06)	38.78	(155.8)	
0553032	SI014	54	磨石	頁岩	71.87	38.35	29.51	108.9	
0553033	SI014	61	磨石	チャート	79.30	59.69	48.13	302.0	
0553034	SI014	2	磨石	安山岩	87.72	65.81	39.06	326.4	
0553035	SI014	6	磨石	石英斑岩	137.07	82.35	69.92	930.0	
0553036	SI014	30	石棒	安山岩	(73.30)	(68.17)	(55.87)	(331.9)	
0553037	SI014	4	石鏝	多孔質安山岩	(215.05)	(116.82)	66.08	(1945.0)	(SI002-143と組合)
0553038	SI014	12	閃石	銅回結砂質凝灰岩	(142.19)	(114.57)	49.61	(638.6)	
0553039	SI014	5	台石	銅回結砂質凝灰岩	114.50	154.51	46.03	699.3	
055801	SI015	4	石鏝	黒曜石	12.86	(10.76)	5.14	(0.6)	
055802	SI015	32	楔形石器	黒色安山岩	25.98	18.07	6.12	2.9	
055803	SI015	4	棒頭	黒曜石	27.03	19.21	11.48	4.9	
055804	SI015	54	刮片	チャート	41.26	23.07	9.65	9.3	
055805	SI015	3	磨製石斧	緑泥片岩(焼熱)	(54.35)	35.35	22.34	(60.8)	
055806	SI015	3	打製石斧	ホルンフェルス	(75.96)	46.70	17.76	(70.7)	
055807	SI015	33	打製石斧	砂岩(焼熱)	(72.16)	57.14	30.56	(181.4)	
055808	SI015	33	磨石	砂岩	(101.63)	74.58	38.79	(422.6)	
055809	SI015	3	磨石	石英斑岩(焼熱)	(104.15)	76.67	45.06	(337.7)	
055810	SI015	33	磨石	石英斑岩(焼熱)	(60.76)	62.21	41.33	(201.9)	
060017	SI016	7	打製石斧	安山岩	(91.83)	63.53	25.17	(197.1)	
060018	SI016	3	磨石	砂岩	69.61	66.13	42.15	279.9	
060019	SI016	3	磨石	石英斑岩	138.24	67.83	60.12	743.4	
061019	SI017	14	石鏝	黒曜石	16.97	(14.99)	3.51	(0.38)	
063013	SI018	113	刮片	チャート	23.33	18.10	4.44	1.6	
063014	SI018	26	石棒	流紋岩(焼熱)	(61.94)	(63.47)	(39.10)	(132.8)	
063015	SI018	42	閃石	多孔質安山岩	(76.00)	(50.94)	30.86	(162.7)	
063016	SI018	26	閃石	銅回結凝灰岩	(90.29)	(115.99)	42.93	(289.3)	
063010	SI019	33	磨石	砂岩(焼熱)	(56.09)	(53.30)	61.22	(245.3)	
068015	SK001	1	石鏝	チャート	24.51	21.17	6.69	3.6	未成品
069010	SK025	23	刮片	チャート(焼熱)	(59.69)	(48.29)	(29.58)	(6.0)	
069014	SK025	32	打製石斧	砂岩	(37.57)	(23.60)	(6.19)	(88.0)	
071019	SK120	8	閃石	安山岩	(111.18)	(117.10)	(70.31)	(1285.0)	
071010	SK120	11	打製石斧	頁岩	(90.80)	59.20	21.68	(103.6)	

棟目No.	出土地点	遺物番号	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
0771014	SK121	7	石鏝	チャート	38.95	31.78	10.04	12.9	未成品
0771015	SK121	8	石鏝	黒曜石	17.29	13.72	5.16	0.8	
0771016	SK121	8	石鏝	黒曜石	19.21	15.31	5.77	1.4	
0771017	SK121	4	磨石	砂岩(焼熟)	104.10	72.45	40.15	406.9	
0771018	SK121	2	磨石	石英燧岩	102.72	60.28	34.73	285.3	
0770811	SK117	4	調片	黒曜石	(19.19)	(26.88)	(14.28)	(5.0)	
0770816	SK221	1	砥石	砂岩	(86.22)	(86.49)	9.93	(105.8)	
0770817	SK221	2	砥石	安山岩	(51.17)	(40.83)	18.95	(64.7)	
0770819	SK233	3	石鏝	黒曜石	17.86	13.95	5.58	0.92	未成品
0770820	SK233	3	石鏝	黒曜石	14.35	(13.17)	3.24	(9.42)	
0770821	SK233	2	打製石斧	ホルンフェルス	73.76	43.38	12.32	35.4	
0770822	SK233	2	打製石斧	砂岩	(85.39)	40.51	17.55	(80.4)	
0770823	SK231	2	打製石斧	砂岩	62.64	61.53	18.37	79.5	
0771087	SK275	1	石鏝	黒曜石	(18.87)	(16.34)	3.39	(0.7)	
0771088	SK275	1	石鏝	黒曜石	(12.08)	(10.82)	2.83	(0.3)	
0771089	SK275	1	調片	黒曜石	30.04	18.80	9.73	3.9	
0771010	SK275	1	調片	黒曜石	21.18	15.44	4.60	1.5	
0771021	SK308	2	調片	チャート	(39.35)	(31.87)	(6.94)	(10.5)	石鏝未成品
0770927	SK307	1	石鏝	黒曜石	25.69	(18.59)	3.56	(1.2)	
0770928	SK307	49	石核	チャート	85.72	(99.26)	42.55	(411.0)	
0770929	SK307	5	打製石斧	ホルンフェルス	(85.87)	51.85	20.48	(98.7)	
0770930	SK307	4	磨石	砂岩	(30.23)	(46.69)	(27.41)	(51.7)	
0770931	SK307	1	砥石	砂岩	45.32	37.10	22.11	47.9	
0820185	SK008	5	石鏝	黒曜石	24.37	(14.80)	3.75	(0.9)	
082016	SK017	2	砥石	砂岩	(77.51)	(47.02)	39.93	(131.2)	磨製石斧の再利用
082013	SK072	4	石鏝	黒曜石	(19.18)	(14.48)	3.59	(0.8)	
082014	SK072	2	磨石	石英燧岩	70.90	55.62	50.75	242.8	
082016	SK079	2	砥石	石英燧岩	130.64	77.18	55.42	756.1	
082017	SK079	3	磨石	ホルンフェルス	83.64	62.65	28.23	205.7	
082018	SK136	2	磨石	石英燧岩(焼熟)	(33.60)	(66.30)	(32.92)	(145.9)	
0820112	SK203	3	石鏝	黒曜石	(16.71)	(9.84)	4.24	(0.7)	
0820113	SK203	2	石鏝	創面結晶灰岩	41.88	(23.88)	4.74	(3.5)	
0820122	SK211	1	調片	チャート	(35.51)	(24.83)	(10.64)	(6.0)	石鏝素材
0820186	SK237	1	楔形石器	チャート(焼熟)	33.32	19.74	7.01	4.3	
0820122	SK242	2	石鏝	チャート	21.10	15.80	3.91	1.3	
0820123	SK242	2	石鏝	黒曜石	13.10	12.17	3.72	0.47	
0820124	SK242	2	石鏝	黒曜石	(13.92)	(9.29)	4.25	(0.4)	石鏝か石鏝の破損品
0820125	SK242	2	調片	チャート	(32.14)	18.65	6.35	(3.9)	
0820126	SK242	2	打製石斧	チャート(焼熟)	(51.11)	28.66	15.45	(30.1)	
0820114	SK248	2	砥石	砂岩(焼熟)	(48.10)	77.78	48.44	(240.1)	
0820115	SK248	6	砥石	流紋岩(焼熟)	165.50	104.46	105.69	2330.0	
0930186	SK262	1	調片	チャート	(28.46)	(20.82)	(6.07)	(2.8)	
0930183	SK269	2	砥石	貫岩	(98.40)	47.58	25.10	(188.8)	
0930114	SK278	1	石鏝	黒曜石	20.44	(8.91)	3.62	(0.5)	
0930181	SK309	4	石鏝	黒曜石	23.00	14.80	4.68	1.4	
0930182	SK309	5	石鏝	チャート	(21.95)	20.90	6.76	(2.8)	
0930183	SK309	5	石鏝	黒曜石	15.53	13.01	4.72	0.8	
0930184	SK309	5	石鏝	黒曜石	(24.62)	(15.09)	5.13	(1.9)	
0930185	SK309	5	石鏝	黒曜石	(16.91)	(15.77)	4.49	(1.0)	
0930186	SK309	5	調片	黒曜石	(19.81)	(26.72)	(10.08)	(5.3)	
0930187	SK309	4	調片	黒曜石	(17.47)	(20.33)	(8.04)	(1.3)	
0930188	SK309	5	石核	黒曜石	(13.95)	(22.80)	(11.12)	(3.1)	
0930189	SK309	5	打製石斧	ホルンフェルス	(46.15)	38.43	10.25	(20.9)	
0930110	SK309	6	砥石	砂岩	(95.14)	(94.30)	14.96	(194.7)	
0930113	SK314	2	楔形石器	チャート	(53.17)	32.67	(26.72)	(48.5)	
0930118	SK293	2	楔形石器	チャート(焼熟)	(42.95)	36.66	8.39	(20.4)	
0930119	SK293	2	楔形石器	石英	(39.40)	(22.50)	(13.05)	(11.9)	
0930120	SK293	2	石鏝	黒曜石	(25.85)	(18.28)	(7.41)	(3.3)	
0930121	SK293	2	スクレイパー	チャート	(35.22)	(26.56)	(7.14)	(6.0)	
0930122	SK293	2	調片	黒曜石	(25.33)	(16.62)	(6.26)	(2.9)	
0930123	SK293	2	楔形石器	黒曜石	(42.76)	33.34	10.47	(20.4)	
0930124	SK293	2	楔形石器	硬質細粒結晶灰岩	(55.54)	32.44	22.74	(47.3)	
0930125	SK293	2	砥石	砂岩(焼熟)	(83.73)	54.06	23.30	(150.1)	
010001	SD003	3	石鏝	黒曜石	11.90	11.22	2.71	0.34	
010002	SD002	2	打製石斧	ホルンフェルス	(67.25)	56.09	19.27	(73.1)	
010003	SD002	2	打製石斧	ホルンフェルス	73.43	41.65	10.62	37.3	
010004	SD004	1	スクレイパー	黒曜石	(29.15)	(20.68)	11.79	(8.2)	
010005	SD004	1	石核	チャート	(42.16)	33.51	33.49	(56.4)	
010006	SD004	1	磨製石斧	緑色岩(焼熟)	(70.90)	48.92	20.25	(106.6)	
010007	SD004	1	磨製石斧	緑色岩	(87.68)	58.99	35.24	(338.2)	
010008	SD004	1	打製石斧	安山岩	95.15	54.74	31.84	185.3	
010009	SD004	1	打製石斧	ホルンフェルス	(84.95)	55.65	24.08	(119.0)	

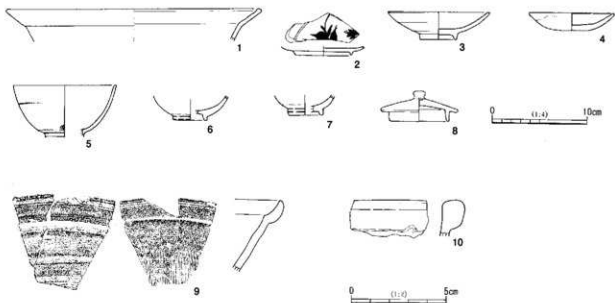
棟号No.	出土地点	遺物番号	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
第100010	SD004	1	打製石斧	中粒凝灰岩	(71.99)	58.90	18.25	(103.7)	
第100011	SD004	1	打製石斧	ホルンフェルス	(66.63)	(42.15)	15.75	(54.0)	
第100012	SD004	1	礫部	チャート	(69.84)	50.04	36.85	(164.8)	
第101013	SD004	1	打製石斧	ホルンフェルス	78.42	41.77	11.22	46.6	
第101014	SD004	1	打製石斧	ホルンフェルス	93.18	39.02	11.43	71.8	
第101015	SD004	1	礫石	石英凝灰岩(焼熟)	(63.07)	64.57	45.57	(238.3)	
第101016	SD004	1	礫石	石英凝灰岩(焼熟)	(78.36)	(55.64)	62.06	(273.7)	
第101017	SD004	1	礫部	流紋岩	(85.10)	(79.60)	(22.71)	(191.9)	磨石の再利用
第101018	SD004	1	礫石	チャート	85.34	(54.28)	41.18	(253.9)	
第101019	SD004	1	礫石	砂岩	(76.64)	78.76	(32.24)	(393.4)	
第101020	SD004	1	礫石	砂岩(焼熟)	(82.93)	72.60	39.62	(344.0)	
第101021	SD004	1	礫石	チャート(焼熟)	(45.27)	(98.86)	51.73	(258.1)	
第101022	SD004	1	礫石	砂岩(焼熟)	(61.20)	113.47	49.65	(364.8)	
第101023	SD004	1	石錘	凝灰片岩	(74.04)	(59.45)	10.18	(64.5)	下端部研磨
第10201	SD005	2	礫石	チャート	(21.91)	14.89	7.88	(2.3)	
第10202	SD005	2	磨製石斧	頁岩	(76.07)	32.38	18.77	(57.2)	
第10203	SD005	2	打製石斧	石英凝灰岩	(59.92)	(51.19)	(21.44)	(89.7)	
第10204	SD005	2	打製石斧	砂岩	(70.06)	(56.83)	18.479	(79.9)	
第10205	SD005	2	打製石斧	中粒凝灰岩	(98.75)	39.61	34.63	(161.1)	
第10206	SD005	1	打製石斧	砂岩(焼熟)	(66.61)	(44.00)	(28.15)	(114.8)	
第10207	SD005	2	石核	チャート	(57.74)	(52.91)	(27.91)	(85.9)	
第10208	SD005	2	楔形石器	チャート	(63.77)	(42.46)	21.24	(68.9)	未成品
第10209	SD005	2	楔形石器	砂岩(焼熟)	(70.07)	64.77	30.75	(173.7)	
第102010	SD005	2	礫石	石英凝灰岩	82.64	52.91	18.91	115.3	
第102011	SD005	2	礫石	ホルンフェルス	(65.92)	66.11	(21.87)	(82.7)	スクレイパーとして再利用
第102012	SD005	2	礫石	砂岩	(56.64)	(36.80)	27.93	(71.0)	
第102013	SD005	2	礫石	石英凝灰岩(焼熟)	(84.10)	48.46	47.08	(213.0)	
第102014	SD005	2	礫石	石英凝灰岩(焼熟)	(64.85)	(55.61)	(34.10)	(121.0)	
第102015	SD005	2	石錘	砂岩(焼熟)	(44.52)	(65.98)	52.87	(163.7)	
第102016	SD006	2	礫石	チャート	32.32	28.06	9.39	8.6	
第102017	SD006	6	網片	チャート(焼熟)	40.92	25.63	(25.85)	(24.0)	楔形石器の素材
第102018	SD006	2	打製石斧	砂岩	(41.11)	35.80	18.25	(44.4)	
第102019	SD006	2	打製石斧	ホルンフェルス	(72.21)	46.10	25.94	(79.6)	
第102020	SD006	2	打製石斧	ホルンフェルス	(23.33)	49.17	(13.68)	(14.8)	
第102021	SD006	2	礫石	砂岩	49.72	46.48	18.14	120.6	
第11201	4H	FG17	石礫	黒曜石	21.75	15.67	3.28	1.1	
第11202	50-18	1	石礫	黒曜石	19.56	17.84	4.06	0.9	
第11203	50-50	3	石礫	黒曜石	15.78	16.41	4.23	0.7	
第11204	50-81	2	石礫	黒曜石	14.96	13.79	2.75	0.28	
第11205	50-17	1	石礫	黒曜石	(15.77)	11.17	3.41	(0.36)	
第11206	50-10	2	石礫	黒曜石	15.67	15.43	3.58	0.5	
第11207	50-16	2	石礫	黒曜石	22.40	7.91	4.23	0.6	
第11208	50-00	2	石礫	黒曜石	14.53	13.15	3.60	0.96	
第11209	40-72	3	石礫	黒曜石	12.61	(13.26)	3.95	(0.48)	
第112010	50-27	2	石礫	黒曜石	13.01	(10.22)	3.38	(0.29)	
第112011	60-12	2	石礫	黒曜石	22.91	14.95	5.88	1.9	未成品
第112012	50-17	FG48	石礫	黒曜石	23.43	19.69	8.34	3.5	未成品
第112013	50-05	1	石礫	黒曜石	15.76	13.96	6.18	1.3	未成品
第112014	40-24	FG194	石礫	黒曜石	20.53	(9.33)	3.82	(0.7)	未成品
第112015	40-95	2	石礫	黒曜石	(28.32)	(14.35)	8.31	(2.7)	未成品
第112016	50-99	3	石礫	黒曜石	(16.62)	(19.28)	(9.95)	(3.1)	未成品
第112017	40-41	2	石礫	黒曜石	24.55	(16.98)	9.81	(2.2)	未成品
第112018	4H	(サブトレ)22	石礫	黒曜石	26.11	18.11	7.77	2.8	未成品
第112019	40-41	2	石礫	黒曜石	19.78	14.54	4.44	1.1	未成品
第112020	60-31	1	石礫	黒曜石	(20.47)	(19.42)	(5.88)	(1.9)	未成品
第112021	50-07	3	石礫	黒曜石	16.86	8.70	4.23	(0.49)	未成品
第112022	4H	FG100	石礫	黒曜石	15.39	10.10	1.64	0.24	未成品
第112023	4H	FG12	石礫	黒曜石	21.44	(11.49)	4.01	(0.9)	破損品
第112024	50-00	2	石礫	黒曜石	(21.36)	(18.02)	4.80	(1.29)	破損品
第112025	60-34	3	石礫	黒曜石	(12.619)	15.72	3.42	(0.49)	破損品
第112026	4H	FG12	石礫	黒曜石	(16.479)	14.39	3.80	(0.7)	破損品
第112027	50	2	石礫	黒曜石	18.67	(12.72)	4.03	(0.6)	破損品
第112028	40-00	FG175	石礫	黒曜石	21.00	16.16	5.17	1.4	破損品
第112029	40-01	FG172	石礫	黒曜石	(20.31)	(18.50)	5.46	(1.9)	破損品
第112030	4H	FG108	石礫	黒曜石	(14.23)	21.16	6.32	(2.1)	破損品
第112031	4H	FG3	石礫	黒曜石	(20.19)	(13.75)	5.71	(1.0)	破損品
第112032	50-30	2	石礫	黒曜石	(15.90)	23.92	8.86	(1.4)	破損品
第112033	40-36	1	石礫	黒曜石	(13.06)	16.47	2.92	(0.6)	破損品
第112034	4H	FG141	石礫	黒曜石	(23.55)	(8.82)	(7.139)	(0.9)	破損品
第112035	40-91	2	石礫	黒曜石	(14.39)	13.44	3.62	(0.4)	破損品
第112036	60-01	2	石礫	黒曜石	(22.75)	(13.36)	3.03	(0.7)	破損品
第112037	4H	FG87	石礫	黒曜石	16.70	(8.61)	2.85	(0.4)	破損品

棟図No.	用土地点	造物番号	部 種	石 材	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	備 考
第1120438	60-17	2	石牆	黒曜石	14.01	(8.64)	2.16	(0.2)	破損品
第1120439	6P-31	1	石牆	黒曜石	(10.82)	(8.60)	2.68	(0.2)	破損品
第1120440	40-99	2	石牆	黒曜石	(12.14)	(10.19)	2.88	(0.4)	破損品
第1120441	41	TC12	石牆	黒曜石	(13.66)	(12.89)	5.44	(1.2)	破損品
第1120442	41	(サブトレ)24	石牆	黒曜石	(11.41)	(11.84)	3.01	(0.3)	破損品
第1120443	4K-00	2	石牆	黒曜石	13.46	(9.62)	4.42	(0.5)	破損品
第1130444	60-17	2	楔形石部	黒曜石	(25.31)	(16.00)	(7.88)	(3.11)	
第1130445	4F-70	1	楔形石部	黒曜石	(16.67)	(11.66)	(5.16)	(1.2)	
第1130446	5P-13	2	楔形石部	黒曜石	(14.22)	(8.84)	(3.81)	(0.4)	
第1130447	41	TC12	調片	黒曜石	(27.53)	(24.47)	(7.96)	(6.5)	二次調査
第1130448	4J-88	1	調片	黒曜石	(26.46)	(17.12)	(8.01)	(2.5)	二次調査
第1130449	6Q-34	3	調片	黒曜石	(27.06)	(24.05)	(12.45)	(5.9)	二次調査
第1130450	5K-1T	TC19	調片	黒曜石	(24.05)	(24.78)	(9.499)	(2.8)	二次調査
第1130451	5R-2T	TC60	調片	黒曜石	(16.96)	(14.89)	(4.68)	(1.2)	二次調査
第1130452	5M-2T	TC56	調片	黒曜石	(12.90)	(24.33)	(8.22)	(1.9)	調整板
第1130453	5O-48	1	調片	黒曜石	(17.87)	(19.80)	4.17	(1.0)	調整板
第1130454	6P-30	3	調片	黒曜石	(16.49)	(12.98)	2.23	(0.5)	調整板
第1130455	6O-55	2	調片	黒曜石	(17.95)	(16.29)	3.69	(1.2)	調整板
第1130456	4J-23	1	石核	黒曜石	(15.94)	(14.96)	(10.04)	(2.4)	
第1130457	4J-29	5	石核	頁岩	29.77	(18.37)	4.79	(2.3)	
第1130458	41	(サブトレ)20	石核	チャート	(24.86)	(11.14)	4.47	(1.4)	
第1130459	6O-15	1	石核	チャート	24.25	(12.49)	5.17	(1.2)	
第1130460	6P-22	1	石核	チャート	(24.20)	(15.30)	4.05	(0.9)	
第1130461	4F-74	2	石核	珪質頁岩	23.80	21.24	4.32	1.7	
第1130462	5O-15	1	石核	黒色安山岩	24.68	19.41	3.92	1.3	
第1130463	去積	1	石核	チャート	28.11	21.60	9.67	3.1	
第1130464	4J-23	1	石核	ガラス質ダイサイト	23.33	20.79	3.07	0.7	
第1130465	41	TC5	石核	硬質細粒凝灰岩	27.27	22.64	6.12	3.7	
第1130466	4J-23	1	石核	チャート	30.40	22.22	8.05	4.7	
第1130467	5H-2T	TC72	石核	チャート	28.15	29.22	5.11	4.6	
第1130468	41	TC12	石核	ホルンフェルス	30.00	(17.20)	5.04	(2.1)	破損品
第1130469	41	(サブトレ)16	石核	チャート	21.17	(16.90)	5.53	(1.8)	破損品
第1130470	4K-17	TC163	石核	チャート	(23.25)	(15.01)	3.35	(0.9)	破損品
第1130471	6O-26	2	石核	チャート	(17.52)	21.54	4.96	(1.6)	破損品
第1130472	41	TC5	石核	チャート	(27.63)	(25.34)	(6.01)	(4.1)	未成品
第1130473	5L-2T	TC29	石核	チャート	22.90	(18.94)	3.21	(2.0)	未成品
第1130474	41	TC12	石核	チャート	(27.23)	(18.02)	6.42	(3.3)	未成品
第1130475	4F-65	2	石核	チャート	(25.41)	(17.01)	(5.97)	(2.3)	未成品
第1130476	5L-2T	TC29	石核	チャート	24.05	23.76	7.04	4.3	未成品
第1140477	4M-2T	TC76	石核	チャート	(47.05)	(29.37)	(8.56)	(16.5)	
第1140478	4K-00	TC178	石核	チャート	47.61	27.69	6.95	8.5	
第1140479	5P-61	2	石核	チャート	(27.95)	(33.26)	6.15	(6.6)	
第1140480	41	TC10	石核	チャート	(34.80)	18.21	9.75	(6.5)	
第1140481	7M-1T	TC31	石核	チャート	(44.38)	22.12	7.45	(8.5)	
第1140482	5O-20	2	楔形石部	石英片岩	(57.409)	35.79	13.39	(42.8)	
第1140483	4Q-33	1	楔形石部	チャート	52.19	39.41	11.47	25.7	
第1140484	41	TC6	楔形石部	安山岩	(53.90)	(35.36)	(12.34)	(26.2)	
第1140485	4K-02	1	楔形石部	チャート(凝灰)	(32.24)	(27.77)	(9.21)	(8.4)	
第1140486	41	TC8	楔形石部	チャート	(38.08)	38.11	(11.82)	(22.9)	
第1140487	41	TC8	楔形石部	頁岩	(37.19)	(30.54)	(11.65)	(13.9)	
第1140488	5O-30	2	楔形石部	チャート	37.54	30.97	14.97	16.2	
第1140489	5O-50	2	楔形石部	チャート	(17.85)	(26.95)	(6.01)	(3.2)	
第1140490	5O-36	1	楔形石部	チャート	(17.55)	(28.62)	(7.94)	(5.4)	
第1140491	41	TC12	楔形石部	チャート	(21.97)	(15.33)	8.33	(3.0)	
第1140492	5O-58	2	楔形石部	チャート	(16.79)	(15.17)	3.92	(0.9)	
第1140493	6O-36	1	楔形石部	チャート	(15.21)	(21.18)	(6.59)	(1.7)	
第1140494	5P-06	1	楔形石部	石英 (凝灰)	(25.40)	(20.90)	(7.08)	(3.9)	
第1140495	5R-2T	TC60	楔形石部	チャート	27.68	21.63	6.29	4.3	
第1140496	5O-06	2	楔形石部	頁岩	(33.86)	(21.33)	(3.94)	(4.3)	
第1150497	5Q-15	2	調片	ホルンフェルス	(33.10)	(41.79)	9.43	(13.9)	
第1150498	6O-38	1	調片	ホルンフェルス	(38.95)	(46.52)	8.50	(18.1)	
第1150499	5O-58	2	調片	チャート	34.98	15.99	8.63	4.4	
第1150499	5O-50	2	調片	砂岩	(20.15)	(25.88)	(5.82)	(3.2)	
第1150499	5O-58	2	調片	チャート	(33.32)	(31.80)	(9.93)	(14.1)	
第1150499	5O-11	1	調片	チャート	(51.39)	(38.93)	(7.40)	(20.0)	
第1150499	5R-2T	TC60	調片	黄色碧玉	34.97	23.33	7.90	7.0	
第1150499	6O-58	1	調片	チャート	(18.56)	(17.26)	(10.20)	(1.9)	
第1150499	5O-71	1	調片	チャート	37.12	25.60	9.04	7.6	
第1150499	4Q-71	1	調片	チャート	(28.18)	(25.81)	(10.91)	(8.6)	楔形石部
第1150499	5P-13	2	調片	凝灰岩	(28.68)	(22.44)	(4.57)	(2.8)	
第160499	6O-54	2	磨製石斧	透閃石岩	(38.98)	28.44	11.28	(16.5)	
第160499	5O-40	2	磨製石斧	緑色岩	(31.73)	19.93	9.06	(10.6)	

採石場No.	出土地点	遺物番号	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
第1160110	50-3T	TG61	磨製石斧	変質玄武岩	(30.84)	(15.43)	8.38	(6.6)	
第1160111	5I	TG114	打製石斧	ホルンフェルス	(53.15)	(20.74)	(11.69)	(11.6)	
第1160112	4F-65	2	打製石斧	砂岩(焼熟)	90.60	(42.64)	15.20	(84.9)	
第1160113	6P-1T	TG36	打製石斧	ホルンフェルス	(96.11)	59.37	(17.09)	(131.4)	
第1160114	4I-46	1	打製石斧	ホルンフェルス	86.37	51.37	14.74	66.2	
第1160115	6P-04	2	打製石斧	砂岩	(67.16)	49.12	18.33	(49.0)	
第1160116	50-3I	1	打製石斧	ホルンフェルス	59.21	35.80	13.52	37.3	
第1160117	4I	(サブトレ)28	打製石斧	砂岩	70.10	39.17	12.84	40.5	
第1160118	50-50	2	打製石斧	ホルンフェルス	(57.32)	(34.13)	(17.21)	(38.7)	
第1160119	6P-1T	TG36	打製石斧	ホルンフェルス	(50.50)	(31.29)	8.37	18.1	
第1160120	4H	(サブトレ)2	打製石斧	粘板岩	83.95	39.98	9.91	35.9	
第1160121	4O-87	2	打製石斧	ホルンフェルス	60.13	27.53	15.57	26.6	
第1160122	60-28	1	打製石斧	安山岩(焼熟)?	(65.48)	26.44	13.39	(36.2)	
第1160123	4H	TG86	打製石斧	石英斑岩(焼熟)	(82.18)	(63.23)	26.03	(186.9)	
第1160124	6P-24	2	打製石斧	ホルンフェルス	(80.00)	53.46	28.80	(136.8)	
第1170125	4I	(サブトレ)15	打製石斧	ドレイタ	(76.22)	64.59	17.59	(82.8)	
第1170126	50-15	2	打製石斧	ホルンフェルス	(78.72)	84.43	24.95	(162.2)	
第1170127	4J-24	TG191	打製石斧	安山岩(焼熟)	(61.75)	(50.30)	12.71	(44.2)	
第1170128	4I	(サブトレ)14	打製石斧	ホルンフェルス	(62.05)	(29.60)	19.39	(53.3)	
第1170129	4F-75	2	打製石斧	細粒凝灰岩(焼熟)	(52.50)	(42.98)	(19.19)	(59.5)	
第1170130	4I	TG3	打製石斧	安山岩	(46.81)	35.38	9.06	(26.0)	
第1170131	4H	TG86	打製石斧	ホルンフェルス	(47.43)	46.92	20.21	(52.1)	
第1170132	4K-00	174	打製石斧	砂岩(焼熟)	(49.36)	(36.29)	18.40	(44.7)	
第1170133	4J-41	1	打製石斧	ホルンフェルス	(46.08)	38.17	19.29	(37.0)	
第1170134	4I	(サブトレ)31	打製石斧	ホルンフェルス	(29.51)	69.80	10.50	(26.3)	
第1170135	4Q-51	2	打製石斧	ホルンフェルス	(39.92)	33.95	12.09	(18.6)	
第1170136	6P-32	1	打製石斧	ホルンフェルス	33.76	32.75	12.60	18.1	
第1170137	4I	TG1	打製石斧	砂岩	(27.83)	33.79	15.40	(16.7)	
第1170138	4J-41	2	打製石斧	ホルンフェルス	(28.74)	(40.04)	8.93	(13.0)	
第1180139	50-62	2	磨石	安山岩(焼熟)	130.62	91.03	45.88	742.2	
第1180140	5P-53	2	磨石	砂岩	125.08	73.45	(38.36)	(517.8)	
第1180141	50-50	2	磨石	石英斑岩	118.13	85.77	41.92	648.8	
第1180142	5K-56	8	磨石	石英斑岩	93.48	80.80	40.86	433.8	
第1180143	4I	TG95	磨石	砂岩	90.29	70.30	48.64	371.8	
第1180144	5J-56	2	磨石	石英斑岩	102.94	66.32	38.88	365.4	
第1180145	5K-62	1	磨石	砂岩	111.05	64.43	40.91	386.2	
第1180146	5S-00	2	磨石	チャート	62.11	65.54	41.04	246.0	
第1180147	6P-21	1	磨石	ホルンフェルス	93.46	69.77	40.48	382.1	
第1180148	4H	(サブトレ)2	磨石	砂岩	(70.27)	(79.34)	35.86	(209.5)	
第1180149	6P-26	2	磨石	石英斑岩	89.42	69.96	37.41	329.4	
第1190150	60-12	2	磨石	砂岩	(101.45)	53.55	36.45	(299.4)	
第1190151	60-68	1	磨石	石英	129.70	65.39	48.20	579.9	
第1190152	4I	TG83	磨石	石英斑岩	160.00	120.05	81.57	2140.0	
第1190153	5I	2	磨石	砂岩(焼熟)	(64.21)	79.74	(58.04)	(449.6)	
第1190154	50-92	1	磨石	砂岩	144.80	93.54	55.85	1095.0	
第1190155	4K-00	174	磨石	砂岩	67.87	45.41	24.99	104.6	
第1190156	4I	(サブトレ)15	磨石	ホルンフェルス	104.65	79.75	51.55	503.6	
第1190157	4I	TG95	磨石	チャート(焼熟)	(95.74)	87.02	42.76	(497.6)	
第1200158	6P-31	1	磨石	変質玄武岩	128.44	60.96	(54.48)	(619.9)	
第1200159	4H	TG120	磨石	チャート	102.15	60.11	31.22	484.58	
第1200160	4Q-36	2	磨石	石英斑岩(焼熟)	139.91	(72.71)	48.15	(703.9)	
第1200161	表孫	1	磨石	砂岩	(79.19)	(64.90)	27.33	(176.0)	
第1200162	6P-26	2	磨石	石英斑岩(焼熟)	82.89	59.52	38.51	261.5	
第1200163	5K	TG149	磨石	安山岩	(107.03)	(118.41)	(36.88)	(441.9)	
第1200164	4I	TG97	磨石	銅鉛鉛酸灰岩	89.96	57.55	36.82	113.8	
第1200165	4I	磨石	銅鉛鉛酸灰岩	67.25	63.84	(36.68)	(63.9)		
第1200166	60-05	1	磨石	ホルンフェルス	(57.51)	61.15	10.80	(58.6)	
第1200167	4J	TG104	磨石	砂岩	(47.71)	30.32	19.61	(41.5)	
第1210168	5K	TG146	石鏝	多孔質安山岩	(201.50)	(133.41)	75.50	(1185.0)	
第1210169	5I-35	1	石鏝	銅鉄鉱砂岩	(74.72)	(59.52)	(38.79)	(139.7)	
第1210170	5F-35	1	石鏝	銅鉄鉱砂岩	(92.44)	(51.47)	(56.65)	(225.0)	
第1210171	4J-36	1	軽石製品	軽石	(125.75)	73.83	33.02	(68.0)	
第1210172	5K-1T	TG19	磨石	砂岩	(111.16)	(96.88)	15.08	(82.4)	
第1210173	4K-00	2	石鏝	安山岩	(92.08)	(95.56)	(65.74)	(727.6)	
第1210174	4K-00	2	石鏝	安山岩	(126.42)	(75.87)	(18.21)	(247.8)	
第1210175	4I	TG93	軽石	軽石	29.60	13.94	9.42	0.6	
第1210176	4I	TG93	軽石	軽石	21.23	16.40	11.05	1.0	
第1210177	4I	TG93	軽石	軽石	30.19	20.50	12.84	1.4	

陶磁器 (第104図、図版63)

本遺跡では量的には少ないものの溝を中心に陶磁器の破片が数十点ほど出土している。大半は細片で図示できるものとして碗・皿・挿鉢等があった。出土地点についてみると、SD-004が多く、ほかは疎らな散布となっている。これらの陶磁器類で注目できるものとして染付皿(第104図2)をあげることができる。底部だけが遺存したもので畳付部分は鋭く「V」字状に作り出されており、大陸からの輸入品と思われる。器厚は薄く3mmほどで見込みには花卉文を描いており、16世紀後半から末期のものと考えられる。そのほかはすべて陶器である。以下、掲載した陶磁器類は第9表にまとめた。



第104図 近世陶磁器

第9表 久保塚ノ台遺跡2出土陶磁器一覧表

番号	出土地点	産地	器種	時期	遺存度	釉薬	色調
1	SD-004	唐津	皿	17世紀代	口縁部片	透明釉	褐色・褐灰色
2	表探	中国	染付中皿	16世紀後半	底部片	透明釉	青灰色・白色
3	SD-004	肥前	小皿	17世紀前半	口縁一部欠損	長石釉	灰白色・灰白色
4	SD-006	瀬戸・美濃	灯明皿	18世紀後半	約1/4	鉛釉	暗赤褐色・淡黄色
5	SD-004	肥前	染付碗	17世紀代	約1/3	透明釉	灰白色・灰白色
6	SK-235	瀬戸・美濃	小碗	18世紀代	底部～体部片	長石釉	灰オリーブ色・黄橙色
7	SI-002	瀬戸・美濃	小碗	18世紀代	底部～体部片	灰釉	淡黄色・明黄褐色
8	4P-65	信楽	蓋	19世紀前半	約2/3	鉄釉	黒色・明赤褐色
9	SD-004	瀬戸・美濃	挿鉢	18世紀前半	口縁部片	鉛釉	暗赤褐色・黄橙色
10	SD-006	唐津	堯	17世紀代	口縁部片	透明釉	暗褐色・褐色

第5節 遺構外出土遺物

ここでは出土土器に限り、遺構分布の空白部分を境として東西に分割してみた。西側では集落の一端が垣間見られ、中期後半から後期初頭に位置づけられる住居跡が検出されている。一方、東側では住居跡の存在は予想できるものの、遺構の主体は土坑等であった。この点、双方に土器群での差異がみられるかに興味もたれた。また掲載土器については口縁部を中心に図示可能な資料についてはできる限り図示した。

石器では石鎌や楔形石器が多数出土しており、遺跡内で石器製作が行われていたと考えられたため、未成品あるいは素材となるような剥片も掲載するようにした。さらに礫を利用した磨石や敲石等では破損品も含めて掲載の対象とした。

1 土器

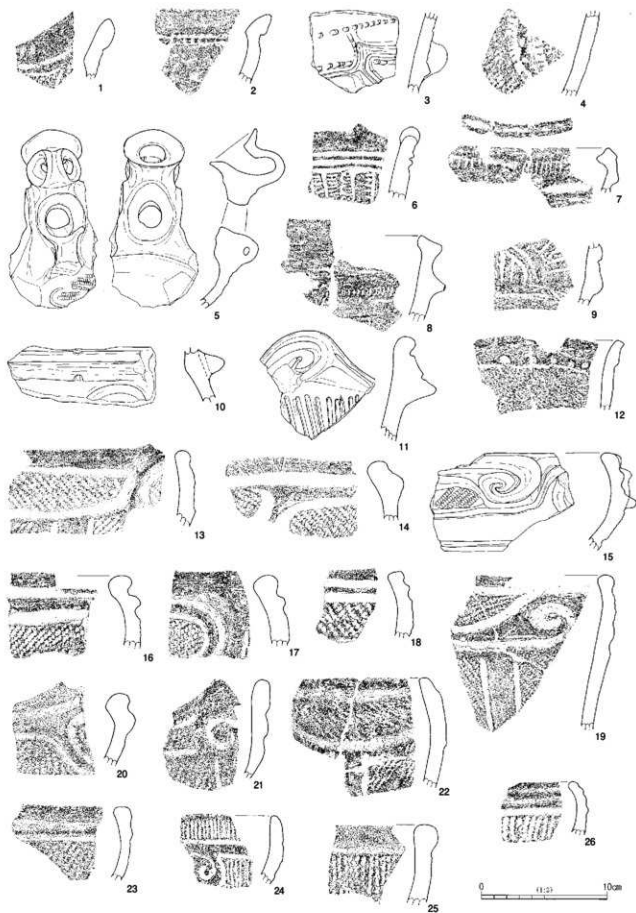
本遺跡から出土した土器群は図示したように中期前半から後期中葉まで継続しているが、それ以前と以後の土器群についてはほとんどみることができなかった。つまり土器型式からみれば阿玉台式から加曾利E式を経て後期の称名寺式・堀之内式へと続き加曾利B式をもって終焉を迎えることになる。このように限定された土器群の出土は集落を構成している遺跡では珍しく、しかも丘陵地に所在する周辺遺跡を含めて河川流域や海浜部に立地する遺跡との比較検討資料として貴重な遺跡となろう。

西地区（第105～107図、図版41・56～58）

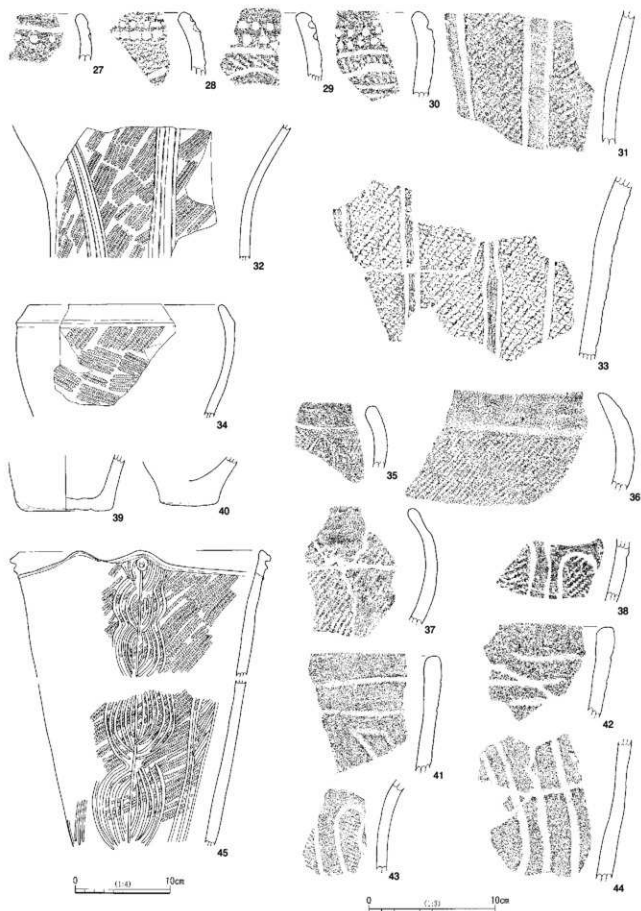
中期 1・2は波状口縁部で口縁直下に押引文がみられる。3は刺突による施文となる。これらは阿玉台Ⅱ式となろう。4は隆帯に沿った幅広の押引文が特徴的であり、3よりも後出と考えられる。5～8は勝坂式の影響を強く受けたものである。5は把手部分で空洞部が特徴的といえよう。下部には縄文が僅かにみられる。7・8は口縁部でヘラによる刻目が施されている。9は中峙式となろう。半截竹管により深い沈線が文様が構成されている。10～12は加曾利EⅠ式、13～33は加曾利EⅡ式である。口辺部を沈線により区画されたり、口辺部には渦巻文が描かれる。24～26では燃糸文が用いられている。27～30は円形の刺突文が口縁直下にみられる。加曾利EⅡ式でも新しいタイプとなる。34～38は加曾利EⅢ式からEⅣ式に位置づけられる土器群である。ここでの微隆起（34・37）は鮮明ではない。

後期 41～44は太く力強い沈線が特徴的である。43の沈線内は縄文で充填されている。これらは称名寺式に該当するものである。45～54はおおむね堀之内Ⅰ式と呼称できるタイプである。45は垂下する沈線を中心に楕円状文が描かれる。50では沈線により格子目文がみられ、52～54の口縁部にみられる円形刺突文はこの時期の特徴をよく表現している。55～60は加曾利B式に属するものである。55は口辺部に縄文帯の認められる鉢あるいは浅鉢で加曾利BⅠ式となろう。56は胴部に弧線文の施される浅鉢か台付と思われる。加曾利BⅡ式によくみられるタイプである。57～60は粗製の深鉢となる。61は無文であり、加曾利B式に伴うものと考えられる。62は小型品で、これも加曾利B式に属するものである。63・64は後期の底部である。東地区（第108～111図、図版41・59～62）

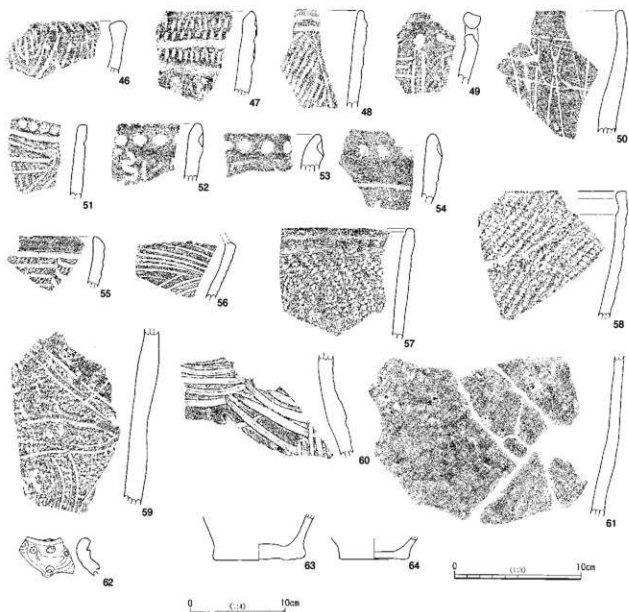
中期 1・2は隆帯に沿って押引が施されることから阿玉台Ⅱ式となる。3には条線が加わり、押引の幅も広い。この種は阿玉台Ⅲ式といえよう。4の内彎した把手部には沈線による渦巻がみられる。型的には3と同様であろう。5・6には縄文施文がみられ、5の把手裏面にも縄文が施文されている。これらは把手の形態や縄文施文から阿玉台Ⅳ式に属するものである。なお、3・5には若干雲母の混入が認められる。7～11は勝坂系に属するものと考えたい。7は隆帯上に刻目を施し、8は口唇部の作りが特徴的である。その直下には縦方向に縄文が施文される。9・10は胴部片で大きな渦巻文が際立っている。11は把手部で



第105图 遗構外出土土器(西地区1)



第106图 遺構外出土土器（西地区2）



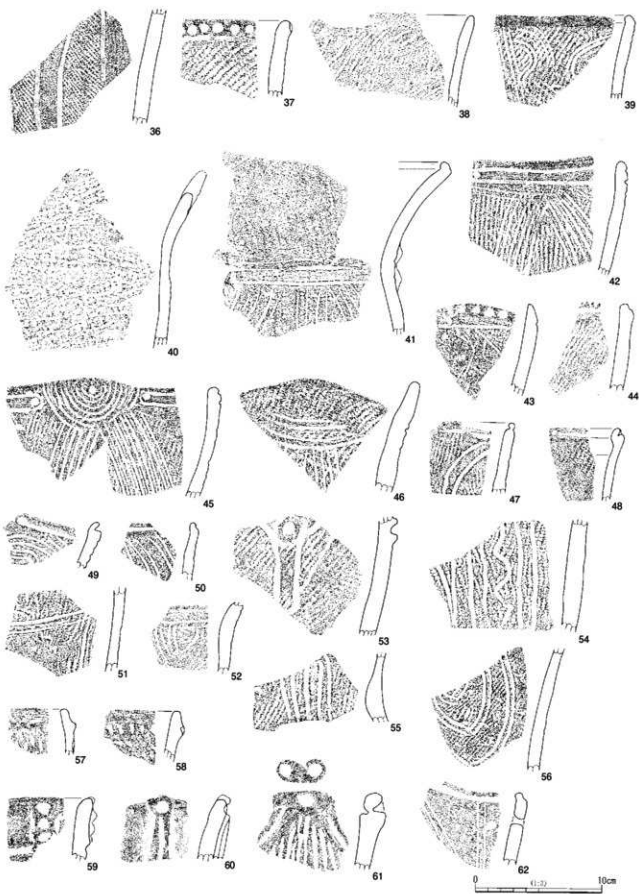
第107図 遺構外出土土器（西地区3）

沈線によるきれいな細工がみられる。12～18は粘土紐の貼付により主文様が構成されており、加曾利E1式となろう。12は手の込んだ細工がみられる口縁部で、刺突による中途穿孔もみられる。下部には縄文が施文されているため、胴部にも続くものと考えられる。13は深く抉るような沈線が特徴的である。14・15は口辺部に粘土紐を波状に貼付したものである。17の胎土には雲母が僅かに混入されている。19～31加曾利EⅡ式となろう。渦巻文とともに隆帯や沈線によって区画された中は縄文で充填される。30や31には刺突文が認められるため期的には新しいものである。32は口縁部が内彎する小型品で隆帯部分に穿孔が認められる。隆帯を重視すれば加曾利EⅢ式以降に位置づけられるものであろう。33は口唇部の作りと斜行する沈線から曾利系となろう。34・35は中期に伴う底部である。

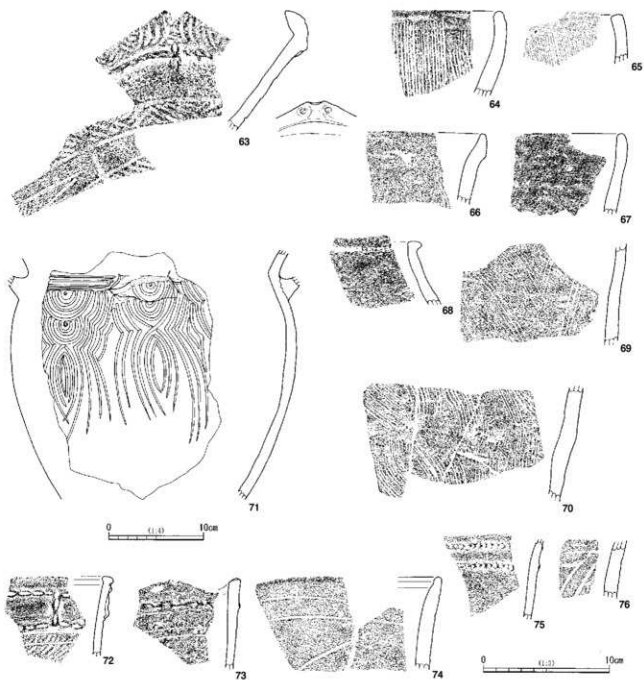
後期 36は沈線間の縄文と磨り消しは称名寺式の典型といえよう。37～71は堀之内Ⅰ式に属する土器群である。37～56は地文に縄文を施しているものである。40は編んだような縄文を不規則に押捺している珍しい例である。41は波状口縁であり、口縁の内面は大きく凹んでいる。このような口縁の作りは堀之内Ⅱ式



第108图 遺構外出土土器（東地区1）



第109图 遺構外出土土器（東地区2）



第110図 遺構外出土土器（東地区3）

に近いものといえよう。57・58は口縁部の小片であり、器面には刺突が加えられている。59・60では縦方向に粘土紐が貼付され、その上を指頭による押捺が加えられる。61では波頂部に孔がみられ、62は補修孔を有している。63は浅鉢か、口縁は大きく開くようである。64～70は櫛歯状工具による条線で器面が飾られ、68は大きく内に反るタイプの鉢で胴部には細い条線の一端が認められる。71は45と同様な文様構成となる。72～76は堀之内Ⅱ式となろう。口縁の内面には浅い沈線がみられる。72・73・75では口辺の隆帯上に工具による刺突でアクセントをつけ、76では沈線による三角文の一部が認められる。77～83は加曾利B式に属するものである。77・78は無文の浅鉢で、77の口縁には粘土瘤の貼付がみられる。79はほぼ口縁部

といえる破片で裏面では沈線の代用として2列の刺突がみられる。80は薄手の鉢形で細縄文を地文とし平行沈線が数条横走する。81は胴部片であるが、精製された器面と丸味を帯びた器形は壺形を連想させる。これらは加曾利B I式に位置づけられよう。82・83は紐線文系の深鉢で82には沈線が横走するため別個体としたが同一グリッドから出土している。84は胴部以下の遺存となる粗製の深鉢である。85～88は後期の底部で、85・86は網代痕がみられる。89は注口土器の注口部であり、文様は認められない。

2 土製品 (第111図、図版62)

土鍾 いずれも中期の土器片鍾である。90・93には若干雲母が含まれる。

円盤形土製品 96は周囲に加工がみられるため図示したものである。97は周囲の加工と裏面の中央部に穿孔の意図が窺われる小さな凹みが存在する。

3 石器 (第112～121図、図版75～82)

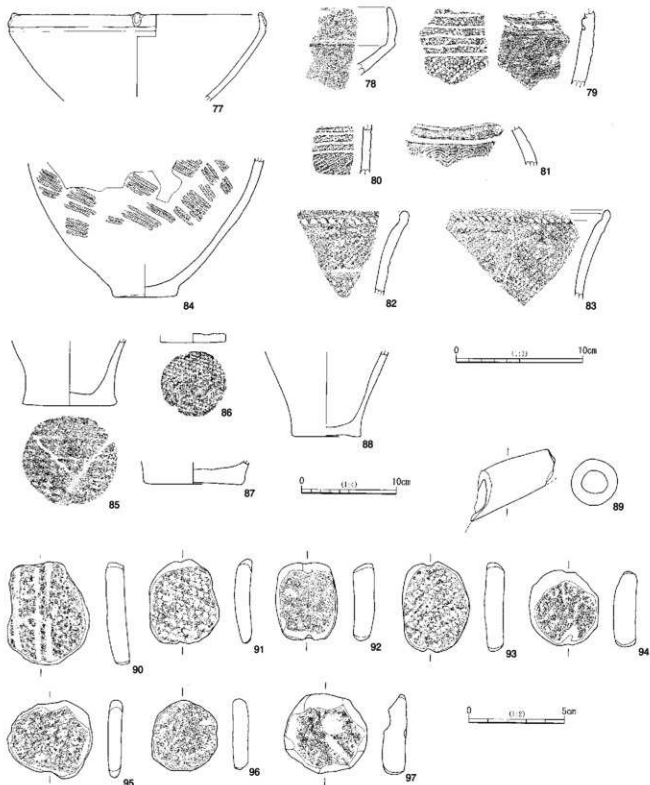
本遺跡では石鏃をはじめとする剥片石器類が多数出土している。これらを石材的にみるとほぼ黒曜石とチャート等に二分できるため、剥片石器についてのみ石材を重視して掲載した。

1～43・57～76は石鏃である。1～43は黒曜石製を一括した。1～10は明らかに完成品といえよう。6は「逆Y字」に整形された特異な器形を呈した石鏃で希有な例となろう。こうした例は後晩期に多い¹⁾ようである。7は左右が若干異なる柳葉形を呈した石鏃である。丸く加工した基部と両側縁は丁寧に剥離されている。11～13も成品と思われるが、加工という点では製作途中のような形状となっている。とりわけ12・13では狩猟の用具として機能するか疑問の残る作りである。14は幅広の剥片を利用したもので製作途中で作り損ねたものと思われる。15～22は未成品と考えたい。それぞれ先端部を鋭角に整形した18・19・22や周囲に整形を施した15・16・20などはまさにこれから調整剥離を施す段階といえよう。23～43は大きく破損したものである。25は6と同様類例の少ない形態を呈したものである。29は斜め左から打ち下ろしたような剥離が認められ、影器のような剥離面がみられる。38は薄手の剥片を用いたもので先端部の加工は精緻に施されている。36や41は脚部のみの遺存で、これから推測すると全長が4 cmを超える大型鏃となろう。57～76は黒曜石以外の石材を用いた石鏃で、チャート14点、そのほか6点となっている。ただ71～76については未成品の域を出ることはないであろう。ここでも59～62は丁寧に加工されているが、反面66・67といった鏃としては疑問視されるような成品も存在する。この点では黒曜石と共通したものとして捉えられる。

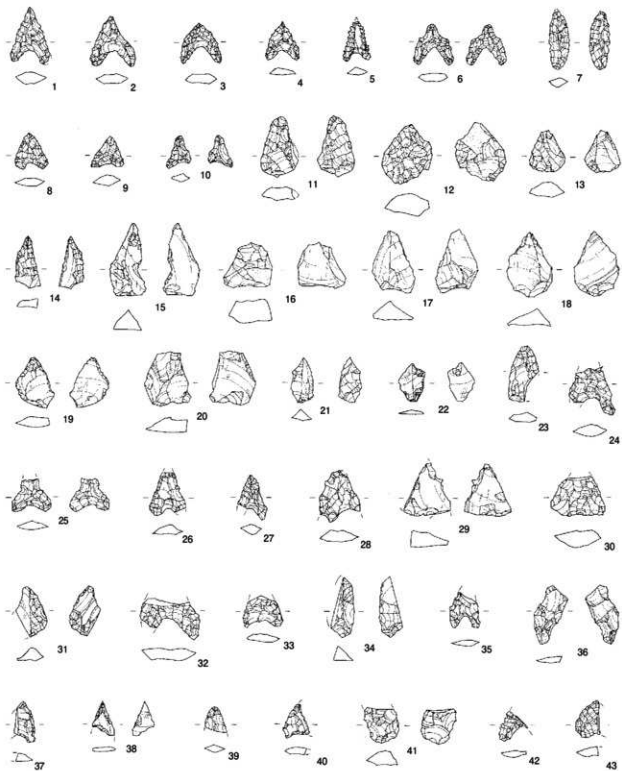
77～79はスクレイパーである。チャート製のスクレイパーが3点出土している。77は下端部に刃部を設定したもので器種としては搔器といえよう。78は側縁を加工しており削器に近い。79は礫の表皮部分を素材として採用したもので剥離面のみに剥離が施されている。

80・81は石鏃である。2点とも先端部が欠損しているため確実に鏃とはいえないが欠損部の断面や表裏面の加工から石鏃とした。

44～46・82～96は楔形石器である。44～46は黒曜石製の楔形石器と思われる。44では主剥離面での剥離が著しく、表面では調整程度の剥離である。45は縦長の剥片を折断したもので、上部は両面から調整が施されている。46の表面には細石刃剥離痕のような痕跡が残されている。裏面でも剥離されているためより楔としての条件を備えたものといえよう。82～96はチャートを主とした楔形石器で2/3はチャート製であ



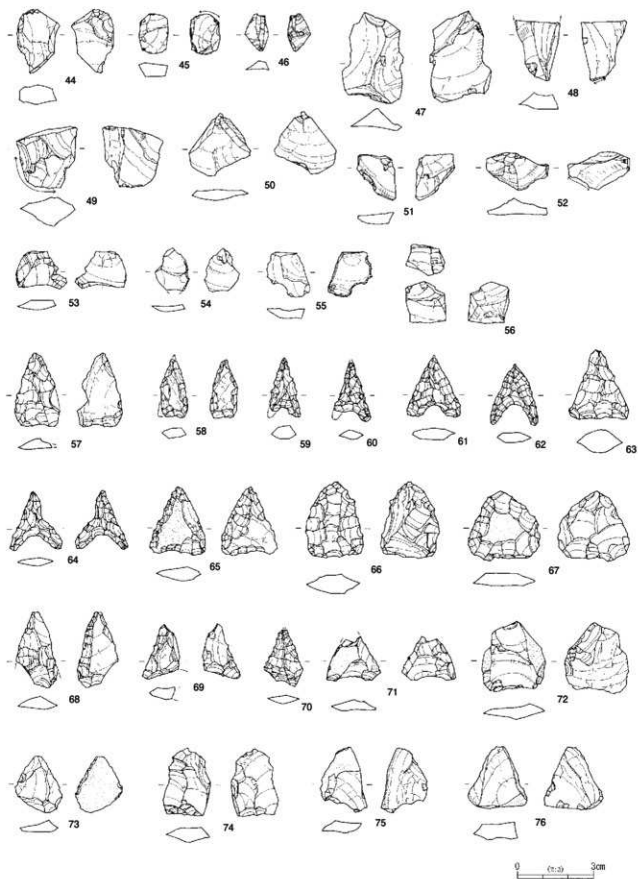
第111图 遺構外出土土器（東地区4）、土製品



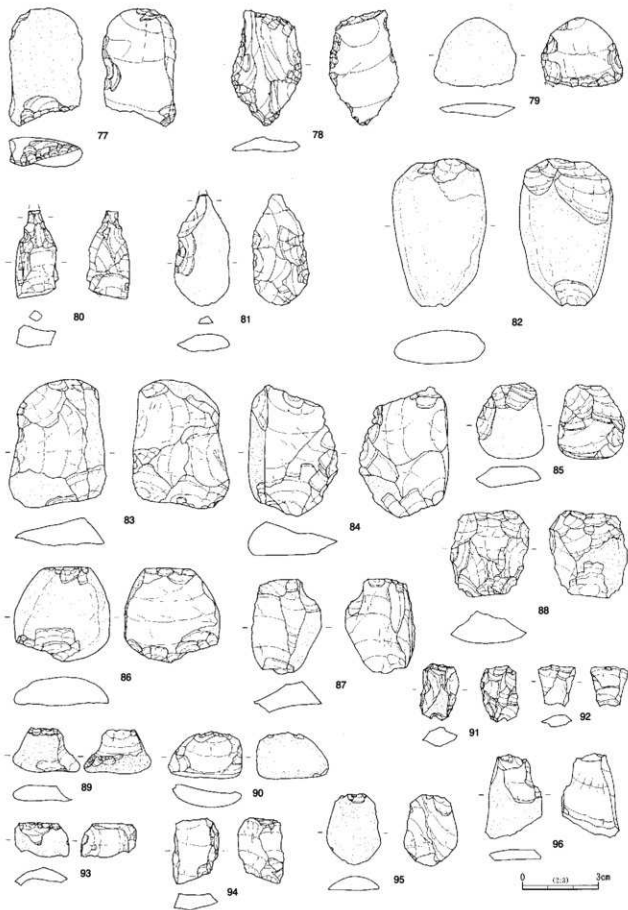
第112図 遺構外出土石器(1)



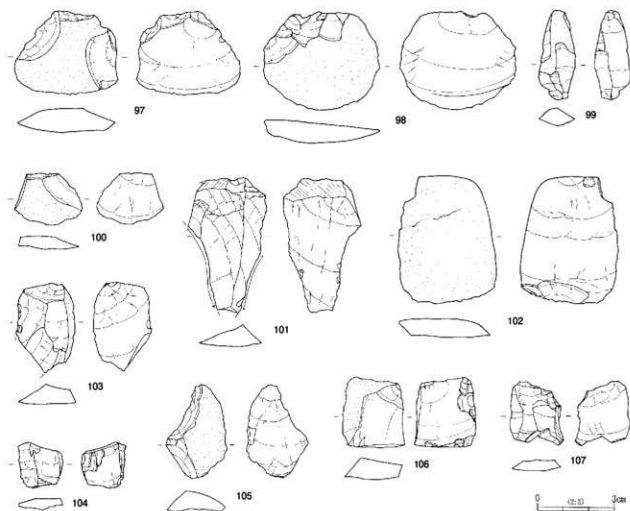
る。82は上端部に表裏から大きな剥離が認められる。83・84も複雑な剥離により刃部を作出したものである。86は上下端に両面から剥離しており楔らしい石器となっている。89以下は小型品で表皮部分がみられるため素材となった礫は拳大以下の小礫であったと思われる。95・96では簡単な剥離で刃部を作り出している。47～55、97～107は剥片である。47～51は表裏面の一部に二次剥離が認められる。52～55は銅線に微細



第113圖 遺構外出土石器(2)



第114圖 遺構外出土石器(3)



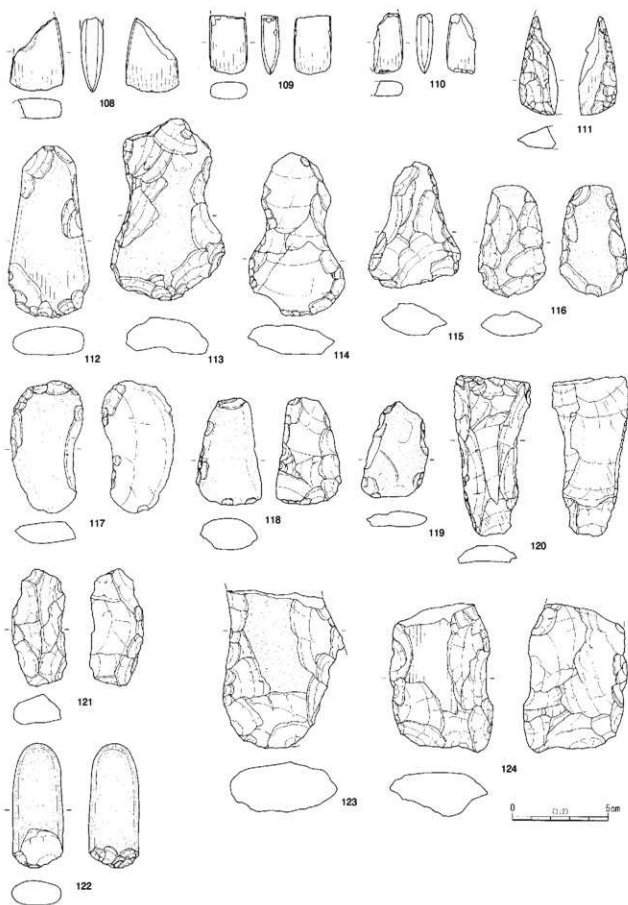
第115図 遺構外出土石器(4)

な調整痕が付されている。97・98・100は石斧製作時に剥離された剥片と考えられる。101は縦長剥片で両側縁では刃こぼれ痕がみられる。102は楔形石器の素材ともいえる。106は石器として使用されたらしく裏面の一部には二次剥離が認められる。

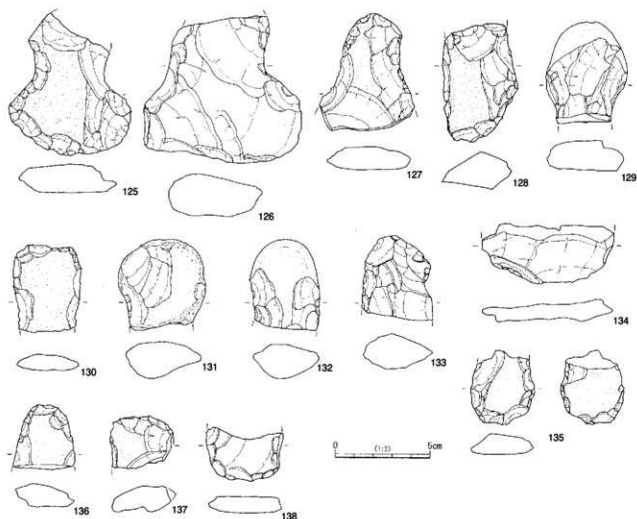
56は石核である。きれいな剥離面はみられないが、平坦面を打面として数枚の剥片を剥ぎ取っている。

108～110は磨製石斧で3点出土した。いずれも頭部や側面まで欠損した小型の磨製石斧である。108の刃部は広がり、109は平行に作られている。

111～138は打製石斧である。111は裏面の一部に磨製の痕跡を認めることができる。以下の石斧と比較すると、側面の整形や鋭利な刃部から磨製石斧を再利用したものと考えられる。112～122までは完形品となる。112は扁平な河原石の両端を簡単に整形して打製石斧としている。117・120は剥離した素材を利用して製作している。123～138は破損部がみられるものである。残された頭部をみると129・131・132では自然面の加工まではなされていないため手頃な大きさの礫を加工して成品としたものであろう。また石材についてみると、28点中16点がホルンフェルスによって占められている。次が砂岩の5点となり、明らかにホルンフェルスに偏っていることが理解できる。この点、前述した97・98の剥片の存在を考慮すると、少なくともホルンフェルスを用いた石斧類は、遺跡まで礫を運び込んで製作していたものと思われる。つまり遺跡から遠くない範囲で石材を獲得できたものと考えられる。



第116圖 遺構外出土石器5)

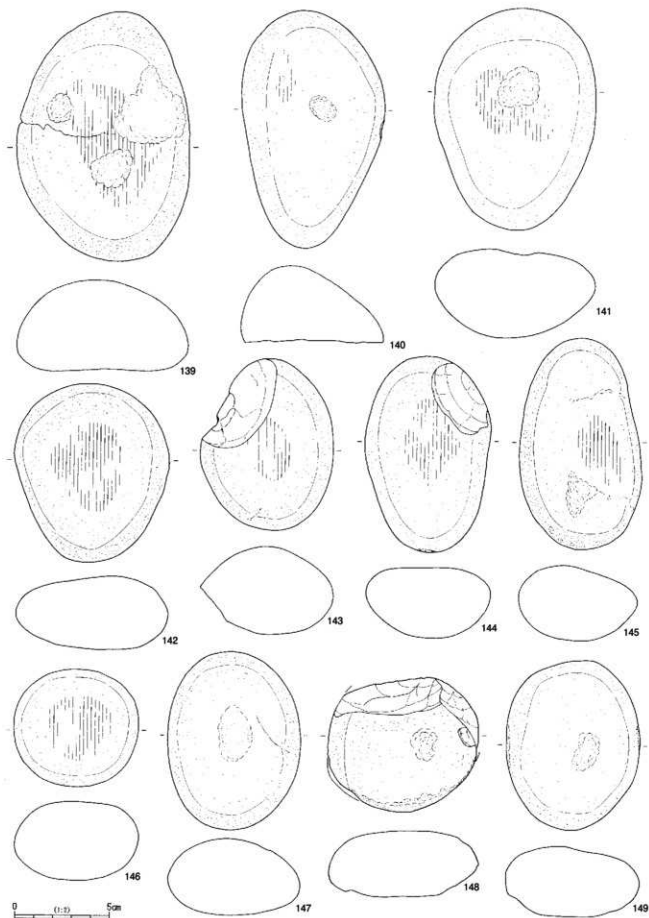


第117図 遺構外出土石器6)

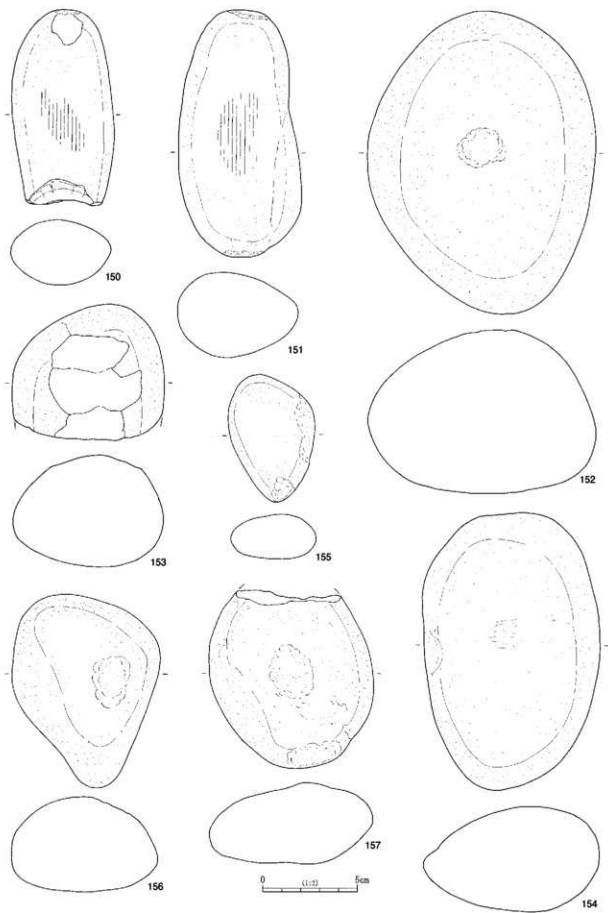
139～154は磨り石である。ここでは側面に打痕が残されているものを含めて磨り石として取り扱った。これらの中には表裏面の一部が磨耗により滑らかになっているもの（破線部）が少なくない。これは石皿との組み合わせの中では考えられないことであり、石材も石英斑岩・砂岩が多用されていることから、用途の差は明らかであろう。一方、敲石ではこのような事例はほとんどみられない。

155～167は敲石である。表裏面や側面に敲打痕のある礫13点を図示した。これらの形や大きさは千差万別であり、打痕の範囲や位置も様々といえる。158は側面を広く使用しており、152・154・159では表面中央部に打痕がみられる。166では下端部に打痕がみられるため剥片剥取用の道具と思われる。また、163は径10数cmの大きな球形を呈した礫の一部を利用したものであろう。中央部には打痕がはっきりと残されている。SI-002やSI-008で出土した球形敲打具と共通する石器であったものと思われる。

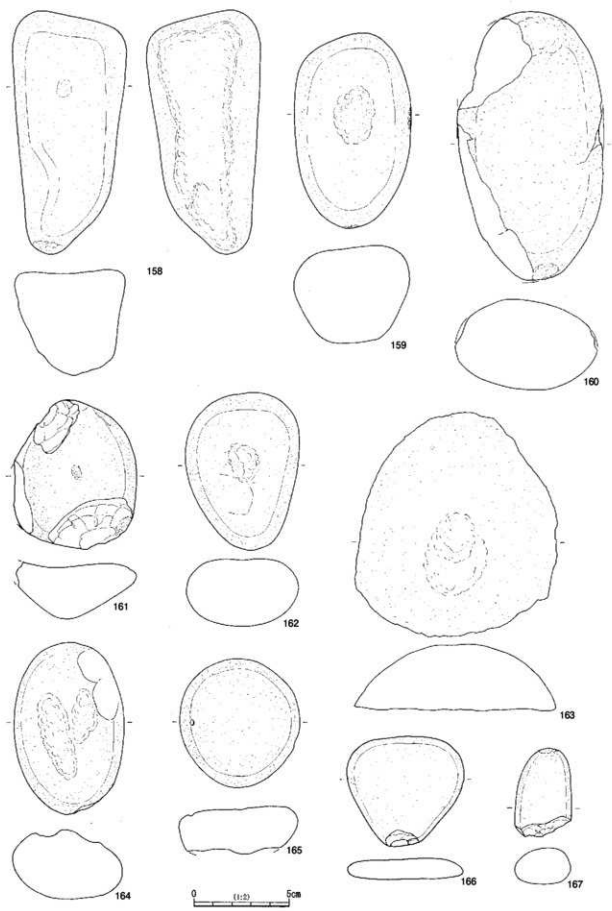
168～170は石皿である。3点はいずれも欠損品である。168は約1/4が遺存するもので、裏面では脚部を作り出している。また円形の窪みが7か所にあり、凹石としての機能も保有していた。他の2点は小片である。169・170は同一個体と考えられる。同一地点から出土した石皿片で、石材も特徴的な色合いを呈した褐鉄鉱砂岩である。



第118图 遺構外出土石器7)



第119図 遺構外出土石器(8)



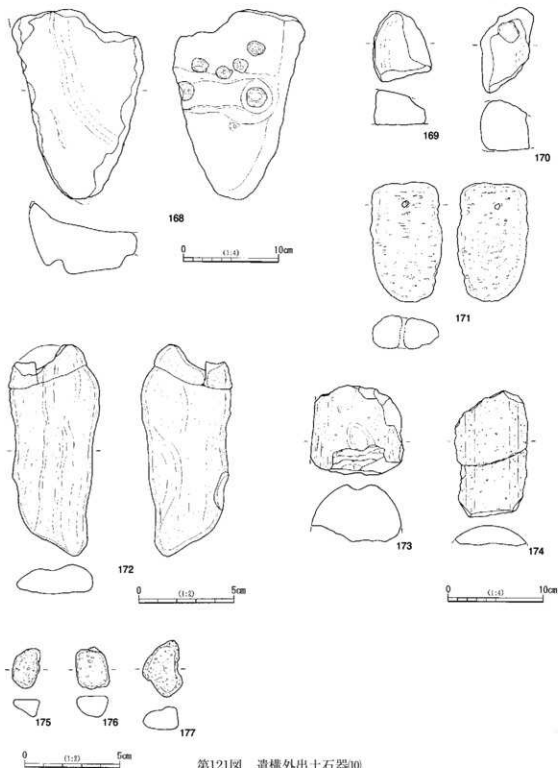
第120圖 遺構外出土石器⑨

4 石製品 (第121図)

171・175～177は軽石である。171は穿孔された成品である。175～177は破損品の類となろう。

砥石 (172) 砥石が1点のみ出土した。一部破損しているが中央部には溝状の凹みが認められる。矢柄研磨用の砥石と考えられる。

石棒 (173・174) 同一グリッドから3点が出土したもので2点は接合した。径は12cm～13cmとなる。これらも同一の石材である点から同一品とみなされる。時期的には中期としてよいであろう。



第121図 遺構外出土石器⑩

第6節 遺構・遺物からみた久保塚ノ台遺跡

1 集落と土器群

これまで述べてきたように久保塚ノ台遺跡1と久保塚ノ台遺跡2は地形的にみても同一台地上に位置する遺跡であり、ここでは両者を合わせて久保塚ノ台遺跡として若干の考察を加えてみたい。

まず集落の形成過程を遺構出土土器から考えてみたい。調査によって確認された遺構には住居跡のほか小竪穴・貯蔵穴・土坑がみられた。これらの遺構の中では最古の一括土器を出土したSK-307のフラスコピットとそれに伴う阿玉台Ⅲ式土器に注目したい。SK-308もその時期のフラスコピットとなる。この遺構を堅果類の貯蔵穴と考えると、一時的な居住ではなく長期の暮らしを想起することができる。仮にそのように考えた場合、この時期の住居跡は検出できなかったものの、複数の住居跡が存在し小さな集落を構成していたことは十分考えられる。次いで加曾利E式期を迎えると、とりわけ加曾利EⅡ式期からEⅢ式期では住居跡が7軒、小竪穴4基・土坑5基・埋甕というような多種類の遺構が検出されるようになる。しかし加曾利EⅣ式期以降では、土器の出土は少なく確実な遺構は認められない。

後期に移行すると初頭の称名寺式期では土器は出土するが量的には少なく明確な遺構はSK-126の土坑が該当する程度である。次の堀之内式Ⅰ式土器に移行すると、住居跡2軒、小竪穴や貯蔵穴が4基ほど確認されている。その後、加曾利BⅠ・BⅡ式期では住居跡3軒と小竪穴1基が検出されているが、この時期を最後に遺跡から人々の痕跡は消えていく。

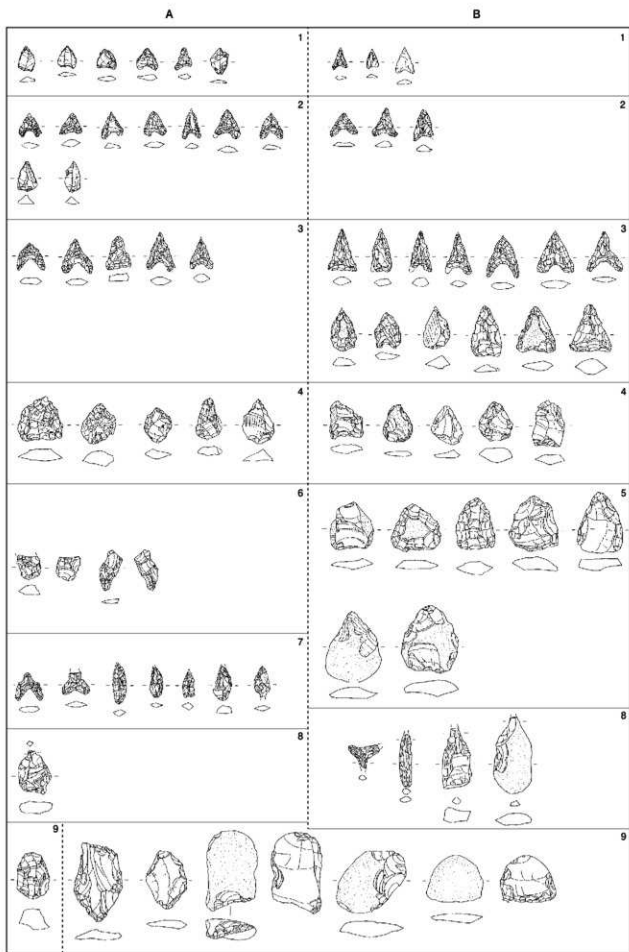
一方、出土土器を量的にみると、最多は加曾利EⅡ式となり、次に堀之内Ⅰ式、さらに阿玉台Ⅲ式・堀之内Ⅱ式などとなる。その間に存在する形式の土器群は僅かなものであった。

こうした遺構のあり方や出土土器の量から久保塚ノ台遺跡の消長を推測すると、集落が形成された時期は縄文時代中期の阿玉台Ⅲ式となり、同じく阿玉台式の終末期まで集落存続していたものと思われる。その後、加曾利E式期の初期の段階では集落として機能を見出すことはできず、次の加曾利EⅡ式の段階に入ると、小規模ながらもはっきりとした集落が形成されることとなる。遺構・遺物の変遷からこの時期が最も充実した集落を形成していたものといえよう。中期終末から後期初頭にかけは再び衰退期と捉えることができる。だが、堀之内式期になるとSI-017やSI-019といった住居跡が確認されている。小竪穴・貯蔵穴といった住居跡の付帯施設的な性格を有する遺構の存在も集落構成を考えるうえで重要となる。この点から堀之内Ⅰ・Ⅱ式期は加曾利EⅡ式期に次いで集落の条件を整えていた時期と看做すことができよう。さらに隣接する緑岡古墳²⁾でも堀之内式期の住居跡が検出されている。その後、加曾利B式期に移行してもしばらくは集落としての機能は保持されていたようである。しかし、加曾利BⅢ式以降では遺構・遺物が検出されることはなかった。

2 石器群とその組成

本遺跡の調査結果から石器の器種と出土量について興味ある事実が提供された。そのため出土石器群を器種ごとに集成し、その特質と遺存状況等から当時の人びとと石器との関わりについて考えてみたい。

石鏃 本遺跡から出土した石鏃は形態・重量等から多彩に変化に富むものであった。ここでは小型品と整形の粗い石鏃に注目してみたい。そこで形態や重量といった点から6タイプに分類して集成図を作成してみた。なお、集成図1・2については全長と重量を基準として形状の整った未成品の一部も含めて掲載した。Aには黒曜石、Bには黒曜石以外の石材を使用した石鏃を羅列した。



第122图 石器集成图(1)

小型タイプとした石鏃では、1の重量はほぼ0.2g~0.3gを計測し、2では0.4g~0.5gとなる。いずれにしても小さな石鏃で矢柄にセットするにも工夫を要するように思われる成品である。しかも狩猟の対象となる獣類も小型獣や鳥類に限られよう。ただ石材的には黒曜石が卓越していることを考えると、ガラス質という性質を利用して鋭い先端が作出できる点は矢として有効となろう。3は一般的にみられる大きさの石鏃であり、ここではチャートを主体とした石材で構成されている。

4・5は石鏃らしからぬ粗雑な作りとなっている。このタイプは早期の頃から出現しているため未成品とは考えられない。石材についてみると、ここでもチャートが主体を占めている。チャート製では表面面にはしばしば自然面が認められるところから小さな鏃からも製作できたという点は利点といえよう。

6は5の石鏃に対して黒曜石製の大型石鏃の使用状況を対象としたが、僅かな欠損品を確認できただけであった。つまり大型品を製作し得るような材料を入手できないか、あるいは移動時に貴重品として携帯していったものとも考えられる。

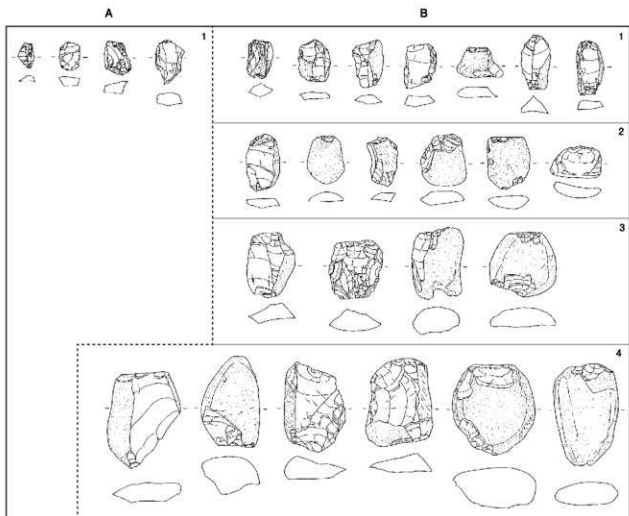
7は形態の異なるタイプを集めてみた。概して緻密に製作されたものであり、尖頭器に近い作りの石鏃が特徴的である。有茎部が欠損した石鏃もみられた。こうした精緻な作りは加工し易いガラス質の石材のみに有効であろう。

楔形石器 楔形石器にも大小が認められ、その形状から4分類してみた。使用されている石材はチャートが34点中18点と1/2以上を占めていた。ほかには黒曜石、頁岩、石英、ホルンフェルスなどで多彩な石材を用いている。このような石材の採用状況から楔形石器には身近な石材を利用して製作していたものと考えられる。石材と大きさの関係をみると、黒曜石はすべて小型品のみを利用しており、大型品では砂岩・安山岩・石英斑岩等がみられチャートの割合は減ずる傾向にある。また表面観察から自然面の残されているものが多く、これは石鏃にみられる傾向と一致するところでもある。

石鏃・スクレイパー 剥片石器では石鏃やスクレイパーも少ないながらも出土している。ここでも使用されている石材をみるとチャート等によって構成され、黒曜石は僅少である。鏃ではすべて先端部が欠損した状態であった。反面、スクレイパー類は原形を保ったままであり対称的な形を示している。

石斧 ここで図示した磨製石斧は、破損品も含めて全14点を掲載した。そのうち完形品は小型品の2点だけで、刃部の一部欠損品が1点みられた。そのほかは再加工しても目的とする石斧に整形することはできないと判断し廃棄されたものであろう。また使用されている石材についてみると、緑色岩やホルンフェルス、砂岩など多彩であり器形による石材の選択はみられない。また1点のみ久保塚ノ台遺跡1から出土したチャート製の石斧を取り上げた。細部加工に用いたものであろうが類例は少ない。こうした状況を考慮すると、磨製石斧はかなり大事に扱われていたようであり、集落の移動に際しては携帯していったものとみて間違いあるまい。

一方、打製石斧の出土は多く破損品まで含めると91点が出土している。このため、ここでの掲載資料は完形品のみとした。打製石斧は大別すると分銅形・撥形・短冊形に分類できることはよく知られている。本遺跡出土品では図示したように分銅形と撥形は多くみられるが、短冊形は図示8・9の一部と破損品に若干みられる程度であった。ほかに図示6のような楕円形を呈するものもあるが、量的には僅少といえる。石材ではホルンフェルスが多用され、次いで砂岩や凝灰岩となる。また磨製石斧にみられたチャート製も2点が確認されている。さらに大型剥片を利用し、周囲を軽く整形して石斧(第124図-9)に仕上げていることも興味深い。石器製作という点からみると、第113図に示した一部には石斧製作時に剥離された



第123図 石器集成図(2)

ような剥片も存在しており遺跡内でも打製石斧の製作が想定できる。いずれにしてもホルンフェルスや砂岩にみられる使用可能な石斧が多数廃棄されているということは磨製石斧と比較したとき明らかに石材が安易に入手できるということを示唆するものであろう。

磨石・敲石 磨石と敲石は兼用されている場合が多々みられる。そのため、ここではまとめて記載することとした。まず磨石について分類すると3タイプ(1~3)となる。1としたものは石皿製作に使用される安山岩と同質の石材であり、石皿とセットで使用されたものと考えられる。次いで砂岩や安山岩、石英斑岩を採用し、敲石としても利用したものの。最後に敲石として使用されてもいるが、器面中央部に滑らかな擦痕が認められるタイプがある。1・2は石皿と磨石のセット関係で理解できるが、3のタイプは前者とは異なる使用法となろう。滑らかに磨かれたような表面からは皮をなめす時などに使用されたものと推測できる。

一方、敲石としたものは形状によって四分類が可能となった。そのうち4としたものは一般的にみる縦長タイプの敲石となる。5は小型型で、さらに細分すれば縦長と楕円タイプとなろう。前者は剥片剥離などに用いられたものと思われる。後者は磨石としても使用されていたものであろう。6の場合、その大半は磨石との兼用品であることは疑いなかろう。ただ、打痕が顕著なものだけをここに含めた。7は2点の



第124图 石器集成图(3)

みの出土であったが、球形を呈しておりともに表面は被熱し一部が剥落していた。このため使用痕等の観察ができるような状態にはなかった。欠損品は遺存部のみで4.75kgを計測する。もう1点はやや小さ目で2.98kgを計測する。いずれも住居跡からの出土品でその重量は抜きだてており、欠損品では1/2弱が失われていることを考慮すると約9kgの重量と考えられる。しかも住居跡からの出土ということで道具としての使用を目的として搬入されたものと考えてよいであろう。用途としては持ち上げてから落として物体を破砕することが主となろう。そのため敲石として分類した。いずれにせよ稀有な例といえる。

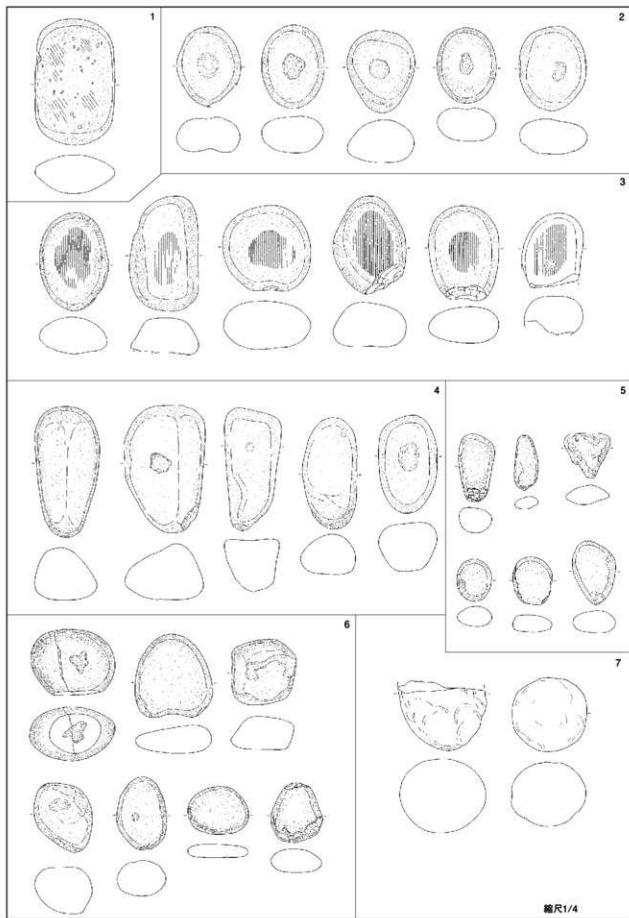
石皿・凹石 石皿や凹石といった石器は調理には不可欠な道具であることはいうまでもない。特に石皿は重く大きな石器で完形品が残されていることは稀である。本遺跡でも廃棄された破損品が数点出土したのみであった。とりわけ石皿に適した石材は多孔質安山岩と称されるものであり、この種の石材は内部に小さな気泡がみられるため堅果類の種子を磨り潰すのに好都合であったらしい。しかし、房総の地では産出しなため貴重品の部類に入り、長期の使用により底部が磨耗して壊れるまで使われていたことであろう。こうした点から石皿は磨製石斧同様に扱われていたと考えられる。

砥石 砥石と呼べる石器は3点出土している。2点は薄手で扁平な川原石を利用したもので表裏面に研磨痕が観察できる。他の1点は縦方向に浅い溝が認められる。この点を重視すれば矢柄研磨具として使用されたものであろう。ただ磨製石斧の刃部を磨いたような砥石はみられなかった。この種の砥石は石斧とセットになっているため残されることはないのかもしれない。

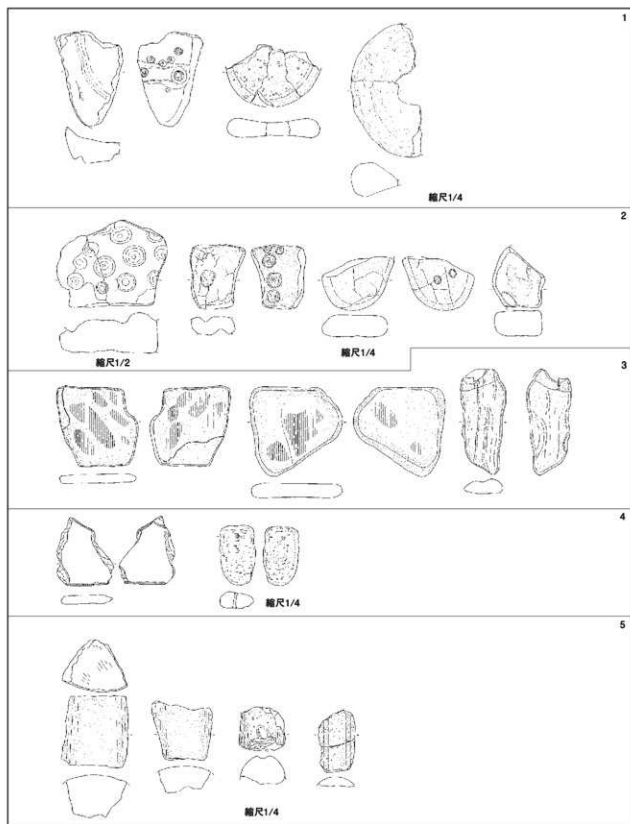
石錘 破損しているものが1点出土した。石錘ではないが漁具関連遺物として軽石製の浮子も掲載した。ほかに土錘も数点出土しており養老川での漁撈が想定できる。養老川流域では堀込貝塚や上高根貝塚が最奥部に位置する貝塚³⁾となり、高滝湖周辺では確認されていない。こうした状況から本遺跡でみられる漁撈具は淡水魚の捕獲に使われたものと考えることが妥当といえよう。

石棒 特殊な事例として掲載した。5点の破片が出土し接合もみられた。破片からの推定径は10cmを超える太さとなる。中期の典型的な石棒といえよう。石材は安山岩と流紋岩であったため少なくとも2点の石棒が存在していたものである。この種の石材も房総では産出しなため他地域から搬入されたことは間違いない。出土した5点のうち2点は廃棄後、日常的に使用される石器として再利用されている。1点は平坦面に若干の研磨痕が認められ、他の1点は周囲を少し整形し凹石としている。このように祭祀に使用された神聖な石器も目的を達成すれば破砕し廃棄する。そこで再利用という点を考えると石器石材に恵まれない房総の特質とも思われる。

以上、出土石器群について推測を含めて気づいた点を述べてきたが、長期にわたって営まれてきた集落という視点から残された石器群を考えると、多彩な器種と消耗する特定の器種（石鎌・打製石斧）、携帯品といった器種のあり方は集落の動向と深く結びつく一面を残しているようである。また石器石材に視点を移すと、材料となる円礫が安易に入手できる地域では成品であっても廃棄される傾向が認められる。一方、産地の限られた石材（搬入石材）では製作される石器（石皿・磨製石斧・石鎌の一部）の破損品のみに残されることになる。



第125图 石器集成图(4)



第126图 石器集成图(5)

3 石器製作跡と黒曜石

ここでは久保堰ノ台遺跡2として調査した部分の整理作業において黒曜石の成品及び剥片等の出土が一部の地域に集中していたことが判明した。そこで中心地点を確認するとともに成品、剥片等を一括して整理・分類してみた。その結果、黒曜石の総出土点数は1085点を数え、住居跡からの出土は531点、そのほか遺構とグリッド出土は554点となった。その中でもSI-005（155点）とSI-014（142点）では他の住居跡を大きく引き離れた数値を示していた。そのため再度黒曜石について緻密な点検を重ねてSI-005では石礫6点のほかに剥片5点を含めて11点、SI-014では石礫11点と剥片1点の12点を実測対象とした。この数値をみても2軒の住居跡で石礫を製作していたことが推測できる。このように石材と器種、加えて石器成品の数量を追っていくとSI-004ではチャート製の石礫と剥片が出土しており、SI-005でもチャート製の石礫5点と打製石斧1点が出土している。同じくSI-014でもチャート製の石礫、楔形石器、石錐、剥片とともにホルンフェルス製の磨製石斧や打製石斧が出土している。さらにSI-008ではホルンフェルスと砂岩製の打製石斧が9点、石英片岩1点を加えて計10点の打製石斧が出土した。しかもこれらの住居跡はいずれも中期の加曾利EⅡ式に属する土器群を出土する住居跡であった。このような事例をもとに住居跡から出土する特定器種の石器から石器製作を考えると、本報告に掲載した石器群の多くは中期に製作されたものと考えてもよさそうである。そして石器に使用される石材は神津島産の黒曜石⁴⁾と周辺でみられる万田野礫層から採取されるチャート等により石器を製作していたものであろう。

このような石器製作という点を重視すれば、本遺跡では縄文中期前半から開始された集落の形成は中期中頃の加曾利EⅡ式期にその盛期を迎えたものと推測することができる。

注1 鈴木道之助1981『図録 石器の基礎知識Ⅲ 縄文』柏書房

2 本事業の関連で調査された遺跡であり、堀之内式期の住居跡が数軒検出されている。

3 千葉県教育委員会1999『千葉県埋蔵文化財分布地図③』-千葉市・市原市・長生地区（改訂版）による。

4 黒曜石の産地推定では、付編に記載されているように住居跡出土の石礫を中心として50点を分析した。その結果、長野県産（諏訪・和田）が7点みられたが、ほかはすべて神津島産と推定されている。また、報告では触れなかったが、参考のため久保堰ノ台遺跡1遺跡（5点）と緑岡古墳群（5点）で出土した黒曜石を係パレオ・ラボの協力で分析していただいたがいずれも神津島産という結果が得られている。

第5章 結 語

これまで述べてきたように縄文時代における本遺跡の推移をみると、中期前半の阿玉台式期から小さいながらも集落が存在していたようである。その後、集落は中期中頃の加曽利EⅡ式の頃に盛期を迎えることとなる。中期の終末から後期初頭では一時的に集落規模は縮小傾向に転じるが、堀之内式期に移行すると再度充実した集落を営むようになる。そして次の加曽利B式土器が普及する頃になると人びとはこの地を離れていったことが調査の結果から想像できる。ただ調査は道路幅のみといった限定的なものであるため詳細を把握することはできないまでもおおむね縄文時代の様相を明らかにすることはできた。

また縄文時代中期は加曽利貝塚をはじめとして東京湾沿いに大規模貝塚を形成した時期でもある。養老川下流域では山倉地区にみられる貝塚群や瓜ヶ倍貝塚、堂谷貝塚、上高根貝塚などが下流域に形成されている。しかし中流域に入ると貝塚が形成されることはなく、本遺跡のような小規模な集落を営む遺跡が多くなるようである。つまり貝塚の形成は地形に左右されることとなり、流れの激しい河川では独木舟を自在に操ることができないため中流域から上流域では海への依存度は低下するようである。

出土遺物についてみると、土器では、SI-002・005・006・014では中部地方に分布する曾利式土器、さらにSI-005・006で東北南部を起源とする大木式土器が検出されている。特に後者は房総北部域ではしばしばみられるが、南部の山間部での出土例は少なく貴重な類例となろう。しかも隣接する緑岡古墳群¹⁾でも住居跡から一拵品が出土しており大木系文化圏との交流という点でも興味は尽きない。また石器では前節でも触れたように小型の石鏃、楔形石器をはじめ石器とは思えぬような巨大な敲石は類例をみないものであった。そうした点からも本遺跡の調査では貴重な資料を提供してくれたものといえる。

縄文時代が過ぎて弥生時代が到来すると、前述したように養老川の蛇行によって形成された番後台の台地に集落を営み、狩猟・採集の生活から農耕へと生活基盤が変化する。だが本遺跡では土器片等の痕跡を認めることはできなかった。以後、古墳時代を経て中世まで今回の調査により遺構・遺物は検出されることはなかった。

近世に属する遺構としては調査区の西側や4P区から6Q区にかけて斜行する溝状遺構をあげることができる。これらの溝から出土した陶磁器類を観察すると、古い磁器では16世紀後半と考えられる中国産の染付皿が出土している。この磁器は、当時一般庶民が入手できるものではないため、興味深い出土品といえよう。他では17世紀から18世紀の皿・碗・播鉢など生活臭の強い陶磁器がみられた。そこで明治期に「参謀本部陸軍部測量局」で作成された地形図で遺跡周辺をみると、遺跡の背後には平坦な台地が広がり畑として耕作されていたことが理解できる。このことから遺跡周辺は江戸時代から既に水田や畑地として耕作されていたと考えて間違いあるまい。この点、調査中にみられた表土・遺物包含層は粘性に富んだ土壌であるため水田としても利用できる土地であり、調査によって検出された溝は排水路としての役割を果たしていたものとも考えられる。いずれにしても調査によって得られた近世陶磁器類は当時の人びとと久保堰ノ台の地との関わりを示す証左となる資料といえる。

注1 古墳のほかにも縄文中期から後期の住居跡が7軒検出され、加曽利EⅡ式の住居跡から出土している。

付 章 黒曜石製石器の産地推定

竹原弘展 (パレオ・ラボ)

第1節 久保塚ノ台遺跡I出土黒曜石製石器の産地推定

1 はじめに

市原市久保に所在する久保塚ノ台遺跡Iは、養老川の北岸台地上に立地する集落跡であり、縄文時代中期後半(加曾利EⅡ式)を中心に、縄文時代中期～後期(阿玉台式～加曾利B式)にかけての遺物が出土している。ここでは、遺跡より出土した黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

2 試料と方法

分析対象は、黒曜石製石器5点である(表1)。時期は、加曾利EⅡ式期とみられている。試料は、測定前にメラミンフォーム製のスポンジと精製水を用いて、表面の洗浄を行った。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム(Rh)、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000μA、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた(望月, 2004など)。本方法は、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素のX線強度(cps: count per second)について、以下に示す指標値を計算する。

- 1) $Rb \text{ 比率} = Rb \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$
- 2) $Sr \text{ 比率} = Sr \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$
- 3) $Mn \text{ 強度} \times 100 / Fe \text{ 強度}$

表1 分析対象

資料番号	種類	遺構番号	遺構種類	注記No.	備考
1	石鏃	SI001	竪穴住居	23	
2	石鏃	SI002	竪穴住居	20	
3	楔形石器			37	
4	剥片			26	
5	剥片			-	注記なし(一括出土)

表2 黒曜石産地(東日本)の判別群名称(望月, 2004参照)

都道府県	エリア	判別群	記号	黒曜石産地
北海道	白滝	八芳沢群	STHR	赤石山遺跡・八芳沢遺跡・八芳沢・黒曜の沢
		栗原の沢群	STKY	栗原遺跡(36)
	志井川	曲川群	AIMK	曲川・土木川(5)
青森	木造	出来島群	KDOK	出来島海岸(10)
	深浦	八森山群	HUHM	阿久根(7)、八森山公園(8)
	男鹿	志々崎群	OGKS	志々崎温泉(10)
秋田	男鹿	輪本群	OGNM	輪本海岸(4)
	宮下	北上朝立群	KKOZ	北上朝立(9)
山形	沼沢	月山群	HGGS	月山近前(10)
宮城	宮崎	湯ノ谷群	MZYK	湯ノ谷(40)
	色根	熊野群	SMNG	熊野(40)
	駒倉	秋保上群	SDAI	土蔵(18)
		秋保下群	SDA2	
	塩釜	塩釜群	SSSG	塩釜(10)
新潟	新発田	飯山群	SHIY	飯山牧場(10)
	新津	金津群	NTKT	金津(7)
栃木	高梁山	甘藷沢群	THAY	甘藷沢(22)
		七尋沢群	THNH	七尋沢(3)、宮川(3)、穂沢(3)
和歌山(WD)	鴨山群	WDTY	鴨山(14)、鳥居(16)	
	小坂沢群	WDKB	小坂沢(8)	
	土屋橋西群	WDTN	土屋橋西(11)	
	ブドウ沢群	WOMB	ブドウ沢(20)	
	和歌山(WO)	和歌山群	WOMS	和歌山(20)
長野	高松沢群	WOTM	高松沢(19)	
	尾上谷群	SWID	尾上(3)、尾上(20)	
	豊村	TSTY	豊村(20)、豊村東(20)	
		芦ノ湯群	HNAY	芦ノ湯(20)
	飯沼	飯沼群	HNHJ	飯沼(51)
静岡	飯沼尾群	HNKJ	飯沼尾(20)	
	上多賀群	HNKT	上多賀(20)	
茨城	砂野群	AGKT	砂野(20)	
	砂野島群	KZOI	砂野島(27)	
東京	砂野島群	KZSN	砂野島(20)	
	久見群	OKHM	久見(パワイト中(6)、久見(現地無(5))	
鳥取	岩瀬群	OKMU	岩瀬海岸(3)、岩瀬(4)、岩瀬(3)	

4) log (Fe強度/K強度)

そしてこれらの指標値を用いた2つの判別図(横軸Rb分率-縦軸Mn強度×100/Fe強度の判別図と横軸Sr分率-縦軸log (Fe強度/K強度)の判別図)を作成し、各地の原石データと遺跡出土物のデータを照合して、産地を推定する方法である。この判別図法は、原石同士の判別図が重複した場合には分離は不可能となるが、現在のところ、同一エリア内に多少の重複はあっても、エリア同士の重複はほとんどないため、産地エリアの推定に問題はない。また、指標値に蛍光X線のエネルギー差ができる限り小さい元素同士を組み合わせて算出しているため、形状や厚みなどの影響を比較的受けにくいという利点があり、非破壊分析

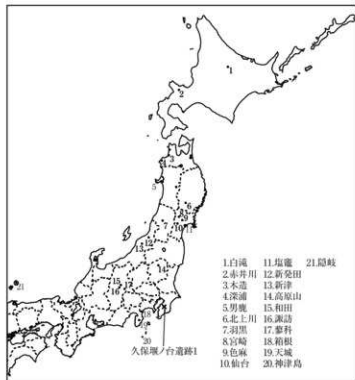


図1 黒曜石産地分布図(東日本)

を原則とし、形状が不規則で薄い試料も多く存在する考古遺物の測定に対して非常に有効な方法である。ただし風化試料の場合、log (Fe強度/K強度)の値が減少する(望月, 1999)。試料の測定面には、なるべく奇麗で平坦な面を選んだ。原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。表2に各原石の産地とそれぞれの試料点数、ならびにこれらのエリアと判別群名を示す。また、図1に各原石採取地の分布図を示す。

3 分析結果

表3に測定値より算出された指標値を、図2、3に黒曜石原石の判別図に今回の石器5点の結果をプロットした図を示す。なお、図は視覚的にわかりやすくするため、各判別群を楕円で取り囲んである。

分析の結果、5点いずれも神津島エリア恩馳鳥群KZOBの範囲にプロットされた。表3に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。なお、同じ台地上に立地する近隣の久保原ノ台遺跡2や緑岡古墳群においても産地推定を実施しており、やはり神津島産が主であったが、50点分析した久保原ノ台遺

表3 測定値および産地推定結果

資料番号	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	Mn*100/Fe	Sr分率	log Fe/K	判別群	エリア	資料番号
1	186.7	99.2	1263.4	322.9	423.0	258.2	617.7	19.55	7.85	25.61	0.83	KZOB	神津島	1
2	224.3	119.0	1505.1	382.8	478.4	301.7	745.6	20.06	7.90	25.07	0.83	KZOB	神津島	2
3	244.8	127.9	1611.2	406.6	505.6	323.4	806.4	19.91	7.94	24.76	0.82	KZOB	神津島	3
4	215.6	115.6	1425.1	359.5	480.4	289.1	729.5	19.34	8.11	25.85	0.82	KZOB	神津島	4
5	248.0	132.1	1645.0	403.9	508.0	319.5	796.1	19.92	8.03	25.06	0.82	KZOB	神津島	5

跡2では、7点信州産が確認されている。

4 おわりに

久保塚ノ台遺跡1より出土した縄文時代中期後半の黒曜石製石器5点について蛍光X線分析による産地推定を行った結果、5点すべてが神津島エリア産と推定された。

引用・参考文献

- 望月明彦（1999）上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定. 大和市教育委員会編「埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書2 -上和田城山遺跡篇-」: 172-179. 大和市教育委員会
- 望月明彦（2004）殿山遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定. 上尾市教育委員会編「殿山遺跡 先土器時代石器群の保管・活用のための整理報告書」: 272-282. 上尾市教育委員会

第2節 久保塚ノ台遺跡2出土黒曜石製石器の産地推定

1 はじめに

市原市久保に所在する久保塚ノ台遺跡2は、養老川の北岸台地上に立地する集落跡であり、縄文時代中期後半（加曾利EⅡ式）を中心に、縄文時代中期～後期（阿玉台式～加曾利B式）にかけての遺物が出土している。ここでは、遺跡より出土した黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

2 試料と方法

分析対象は、黒曜石製石器50点である（表1）。時期は、竪穴住居より出土した石器が加曾利EⅡ式期、それ以外の石器が阿玉台式～加曾利B式の範囲とみられている。試料は、測定前にメラミンフォーム製のスポンジと精製水を用いて、表面の洗浄を行った。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム（Rh）、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000μA、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた（望月、2004など）。本方法は、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム（K）、マンガン（Mn）、鉄（Fe）、ルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）、イットリウム（Y）、ジルコニウム（Zr）の合計7元素のX線強度（cps：count per second）について、以下に示す指標値を計算する。

- 1) $Rb \text{ 分率} = Rb \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$
- 2) $Sr \text{ 分率} = Sr \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$
- 3) $Mn \text{ 強度} \times 100 / Fe \text{ 強度}$

表4 分析対象

資料番号	種類	遺構番号	遺構種類	注記No.	備考
1	石鏃	SI005	竪穴住居	24	
2	石鏃			74	
3	石鏃			86	
4	石鏃			86	
5	石鏃			158	
6	石鏃			108	
7	楔形石器			86	
8	剥片			149	
9	剥片			47	
10	剥片			149	
11	剥片			86	
12	石鏃	SI014	竪穴住居	2	
13	石鏃			74	
14	石鏃			136	
15	石鏃			2	
16	石鏃			74	
17	石鏃			125	
18	石鏃			125	
19	石鏃			2	
20	石鏃			2	
21	石鏃			2	未成品
22	石鏃			2	未成品
23	剥片			2	
24	石鏃	SI015	竪穴住居	4	
25	搔器			4	
26	剥片			34	
27	剥片			34	
28	剥片			34	
29	石鏃	SI017	竪穴住居	14	
30	剥片			14	
31	剥片			14	
32	剥片			14	
33	剥片			14	
34	石鏃	4H	グリッド	TG117	
35	石鏃	50-18		1	
36	石鏃	50-50		3	
37	石鏃	50-81		2	
38	石鏃	50-17		1	
39	石鏃	5P-10		2	
40	石鏃	50-16		2	
41	石鏃	5P-00		2	
42	石鏃	4P-72		3	
43	石鏃	5J-27		2	
44	石鏃	60-12		2	未成品
45	石鏃	5Q-1T		TG48	未成品
46	楔形石器	60-47		2	
47	楔形石器	4P-70		1	
48	楔形石器	5P-13		2	
49	剥片	5M-2T		TG56	調整痕
50	石核	4J-23		1	

4) log (Fe強度/K強度)

そしてこれらの指標値を用いた2つの判別図(横軸Rb分率-縦軸Mn強度×100/Fe強度の判別図と横軸Sr分率-縦軸log (Fe強度/K強度)の判別図)を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定する方法である。この判別図法は、原石同士の判別図が重複した場合には分離は不可能となるが、現在のところ、同一エリア内に多少の重複はあっても、エリア同士の重複はほとんどないため、産地エリアの推定に問題はない。また、指標値に蛍光X線のエネルギー差ができる限り小さい元素同士を組み合わせて算出しているため、形状や厚みなどの影響を比較的受けにくいという利点があり、非破壊分析を原則とし、形状が不規則で薄い試料も多く存在する考古遺物の測定に対して非常に有効な方法である。ただし風化試料の場合、log (Fe強度/K強度)の値が減少する(望月,1999)。試料の測定面には、なるべく奇麗で平坦な面を選んだ。原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。表2に各原石の産地とそれぞれの試料点数、ならびにこれらのエリアと判別群名を示す。また、図1に各原石採取地の分布図を示す。

3 分析結果

表3に測定値より算出された指標値を、図2、3に黒曜石原石の判別図に今回の石器50点の結果をプロットした図を示す。なお、図は視覚的にわかりやすくするため、各判別群を楕円で取り囲んである。

表5 黒曜石産地(東日本)の判別群名称(望月,2004参照)

都道府県	エリア	判別群	記号	原石採取地
北海道	白滝	八号沢群	STHG	赤石山山頂・八号沢露頭・八号沢・黒曜の沢・観音林道(36)
		黒曜の沢群	STKY	
青森	赤井川	曲川群	AIMK	曲川・土木川(5)
	木造	出来島群	KDDK	出来島海岸(10)
秋田	深浦	八森山群	HUHM	岡崎浜(7)、八森山公園(8)
	男鹿	金ヶ崎群	OGKS	金ヶ崎温泉(10)
岩手	北上川	北上折居2群	KKO2	水沢市折居(9)
	山形	羽黒	HIGGS	月山産前(10)
宮城	宮崎	湯ノ倉群	MZYK	湯ノ倉(40)
	色麻	根岸群	SMNG	根岸(40)
	仙台	秋保1群	SDA1	土蔵(18)
		秋保2群	SDA2	
新潟	塩釜	塩釜群	SGSG	塩釜(10)
	新発田	板山群	SBHY	板山牧場(10)
栃木	新津	金津群	NTKT	金津(7)
	高尾山	甘湯沢群	THAY	甘湯沢(22)
長野	相田(WD)	七尋沢群	THNH	七尋沢(3)、宮川(3)、枝持沢(3)
		鷹山群	WDTY	鷹山(14)、東藤屋(16)
	相田(WO)	小深沢群	WDKB	小深沢(8)
		土屋橋西群	WDTN	土屋橋西(11)
		ブドウ沢群	WOBD	ブドウ沢(20)
		敦ノ沢群	WOMS	敦ノ沢F(20)
諏訪	高松沢群	WOTM	高松沢(19)	
蓼科	星ヶ台群	SWHD	星ヶ台(35)、星ヶ塔(20)	
神奈川県	箱根	冷山群	TSTY	冷山(20)、麦草峠(20)、麦草峠東(20)
		芦ノ湯群	HNAY	芦ノ湯(20)
静岡県	箱根	畑宿群	HNHY	畑宿(51)
	天城	殿治屋群	HNKJ	殿治屋(20)
東京都	神津島	上多賀群	HNKT	上多賀(20)
		柏崎群	AGKT	柏崎(20)
鳥取	神津島	思馳島群	KZOB	思馳島(27)
	隠岐	砂輪島群	KZSN	砂輪島(20)
	久見郡	OKHM	久見パークライト中(6)、久見採掘現場(5)	
	黄浦群	OKMU	黄浦海岸(3)、加茂(4)、岸浜(3)	



図4 黒曜石産地分布図(東日本)

表6 測定値および産地推定結果

資料番号	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	Mn ¹⁰⁰ Fe	Sr分率	log Fe/K	判別群	エリア	資料番号
1	149.8	83.4	1118.4	242.3	309.7	183.9	459.3	20.28	7.45	25.91	0.87	KZOB	神津島	1
2	217.8	116.5	1478.3	363.4	457.7	287.5	727.6	19.79	7.88	24.93	0.83	KZOB	神津島	2
3	173.6	93.9	1231.0	307.2	392.8	245.8	610.9	19.73	7.63	25.23	0.85	KZOB	神津島	3
4	194.6	110.5	1420.0	367.4	474.1	293.8	744.4	19.55	7.78	25.22	0.86	KZOB	神津島	4
5	154.7	83.8	1066.3	276.7	368.4	227.5	573.7	19.13	7.86	25.47	0.84	KZOB	神津島	5
6	161.6	87.7	1147.9	275.6	344.6	214.1	529.9	20.20	7.64	25.26	0.85	KZOB	神津島	6
7	245.3	129.7	1640.3	405.2	514.5	317.2	803.9	19.86	7.91	25.21	0.83	KZOB	神津島	7
8	309.2	105.0	1338.1	350.8	437.0	275.9	691.3	19.99	7.84	24.90	0.64	KZOB?	神津島?	8
9	293.7	116.4	1120.0	731.0	274.1	358.8	701.2	35.40	10.40	13.27	0.58	SWHD	諏訪	9
10	40.8	24.0	289.8	74.2	94.5	62.2	152.2	19.37	8.27	24.66	0.85	KZOB	神津島	10
11	301.9	121.9	1193.1	782.0	292.0	384.3	738.0	35.61	10.22	13.30	0.60	SWHD	諏訪	11
12	225.2	121.3	1577.7	391.9	498.6	312.5	775.9	19.80	7.69	25.20	0.85	KZOB	神津島	12
13	203.4	106.4	1326.0	349.8	444.8	287.0	715.9	19.46	8.03	24.75	0.81	KZOB	神津島	13
14	185.3	96.9	1277.6	309.3	391.3	240.1	621.1	19.81	7.58	25.05	0.84	KZOB	神津島	14
15	195.3	107.4	1378.1	339.8	434.6	272.6	674.0	19.75	7.79	25.25	0.85	KZOB	神津島	15
16	192.2	75.4	964.5	253.0	315.8	200.2	500.1	19.94	7.82	24.88	0.70	KZOB?	神津島?	16
17	185.7	99.6	1273.2	326.0	414.5	259.6	644.8	19.82	7.82	25.20	0.84	KZOB	神津島	17
18	240.1	95.3	956.7	633.3	241.2	320.2	617.4	34.95	9.96	13.31	0.60	SWHD	諏訪	18
19	27.4	15.7	195.2	55.4	70.4	46.0	115.8	19.26	8.06	24.46	0.85	KZOB	神津島	19
20	182.2	99.4	1290.5	301.8	384.9	232.1	580.4	20.13	7.70	25.67	0.85	KZOB	神津島	20
21	221.3	119.7	1484.7	379.6	482.1	303.7	759.0	19.73	8.06	25.05	0.83	KZOB	神津島	21
22	209.5	113.2	1415.3	368.2	467.8	300.6	763.6	19.38	8.00	24.62	0.83	KZOB	神津島	22
23	249.7	134.2	1650.1	413.5	536.9	324.3	815.8	19.78	8.13	25.68	0.82	KZOB	神津島	23
24	203.4	103.7	1353.5	341.1	428.9	272.7	686.1	19.73	7.66	24.81	0.82	KZOB	神津島	24
25	308.3	119.2	1195.7	739.6	270.4	357.9	694.8	35.58	9.97	13.17	0.59	SWHD	諏訪	25
26	195.1	102.5	1311.7	321.3	428.8	252.5	669.1	19.22	7.81	25.65	0.83	KZOB	神津島	26
27	270.7	108.2	1068.0	675.3	246.9	329.9	636.7	35.75	10.14	13.07	0.60	SWHD	諏訪	27
28	204.3	112.6	1463.7	369.5	490.0	292.9	747.3	19.45	7.69	25.79	0.86	KZOB	神津島	28
29	99.2	53.8	672.1	184.1	238.3	154.0	385.6	19.14	8.01	24.77	0.83	KZOB	神津島	29
30	354.8	112.1	1452.1	387.9	486.9	308.3	776.8	19.79	7.72	24.84	0.61	KZOB?	神津島?	30
31	227.0	118.5	1539.3	377.5	486.0	300.7	758.3	19.63	7.70	25.28	0.83	KZOB	神津島	31
32	237.6	127.0	1612.4	401.5	509.3	320.4	830.4	19.47	7.88	24.71	0.83	KZOB	神津島	32
33	117.8	63.8	838.4	222.9	294.5	181.2	461.9	19.21	7.61	25.38	0.85	KZOB	神津島	33
34	332.3	152.1	1306.4	1465.6	138.1	615.1	848.8	47.78	11.64	4.50	0.59	WDBK	相田	34
35	198.6	105.6	1330.9	332.2	418.3	266.6	653.5	19.89	7.93	25.04	0.83	KZOB	神津島?	35
36	140.2	73.8	941.6	231.4	291.1	183.2	462.0	19.82	7.84	24.93	0.83	KZOB	神津島	36
37	152.3	80.7	1057.8	263.2	328.1	206.9	543.7	19.61	7.63	24.45	0.84	KZOB	神津島	37
38	148.7	77.8	1009.5	228.3	285.8	173.5	432.9	20.38	7.71	25.51	0.83	KZOB	神津島	38
39	169.0	95.0	1207.9	308.7	396.0	246.9	626.8	19.56	7.87	25.09	0.85	KZOB	神津島	39
40	183.7	98.0	1252.6	305.8	403.2	244.4	600.3	19.68	7.82	25.95	0.83	KZOB	神津島	40
41	40.9	22.2	265.6	76.8	98.3	66.9	161.1	19.07	8.36	24.38	0.81	KZOB	神津島	41
42	208.5	114.0	1473.3	342.5	451.7	270.8	678.9	19.64	7.74	25.90	0.85	KZOB	神津島	42
43	130.8	67.6	886.7	231.9	272.3	183.6	451.3	20.36	7.62	23.90	0.83	KZOB	神津島	43
44	244.6	129.5	1633.2	391.1	491.2	314.1	769.2	19.90	7.93	24.99	0.82	KZOB	神津島	44
45	235.0	124.9	1488.9	388.9	505.0	316.2	789.4	19.45	8.39	25.25	0.80	KZOB	神津島	45
46	522.9	124.8	1545.8	399.2	488.0	305.3	753.9	20.51	8.08	25.07	0.47	KZOB?	神津島?	46
47	253.2	132.9	1686.3	425.7	540.5	335.1	832.9	19.95	7.88	25.32	0.82	KZOB	神津島	47
48	208.8	69.3	914.3	208.0	269.9	162.9	404.6	19.90	7.58	25.82	0.64	KZOB?	神津島?	48
49	303.6	115.3	1077.3	762.4	292.7	382.6	754.9	34.77	10.70	13.35	0.55	SWHD	諏訪	49
50	213.3	110.7	1376.6	341.2	441.7	274.9	700.8	19.40	8.04	25.12	0.81	KZOB	神津島	50

分析の結果、38点が神津島エリア恩馳島群KZOB、6点が諏訪エリア屋ヶ台群SWHD、1点が和田エリア小深沢群WDKBの範囲にプロットされた。残り5点は、図2ではKZOBの範囲にプロットされたが、図3ではKZOBの範囲の下方にプロットされた。これは先述したように遺物の風化による影響と考えられ(望月, 1999)、SWHDに属する可能性が高い。表3に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。また、表4に石器種類別の、表5に出土遺構別の産地推定結果を示す。神津島産を主とし、少量信州産が含まれるという結果であった。

表7 石器種類別の産地推定結果

種類	神津島	諏訪	和田	計
石鏃	29	1	1	31
楔形石器	4	-	-	4
掻器	-	1	-	1
剥片	9	4	-	13
石核	1	-	-	1
計	43	6	1	50

表8 出土遺構別の産地推定結果

遺構	神津島	諏訪	和田	計
SI005	9	2	-	11
SI014	11	1	-	12
SI015	3	2	-	5
SI017	5	-	-	5
その他	15	1	1	17
計	43	6	1	50

4 おわりに

久保塚ノ台遺跡2より出土した縄文時代中期～後期の黒曜石製石器50点について蛍光X線分析による産地推定を行った結果、43点が神津島、6点が諏訪、1点が和田エリア産と推定された。

引用・参考文献

- 望月明彦 (1999) 上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定. 大和市教育局委員会編「埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書2 - 上和田城山遺跡篇 -」: 172-179, 大和市教育局委員会
- 望月明彦 (2004) 殿山遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定. 上尾市教育局委員会編「殿山遺跡 先土器時代石器群の保管・活用のための整理報告書」: 272-282, 上尾市教育局委員会

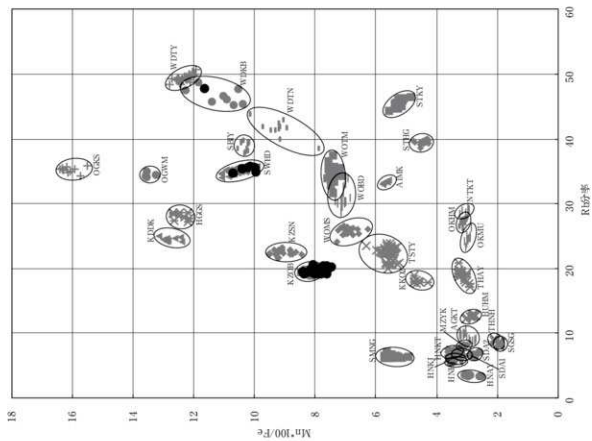


图5 黑曜石产地推定判别图(1)

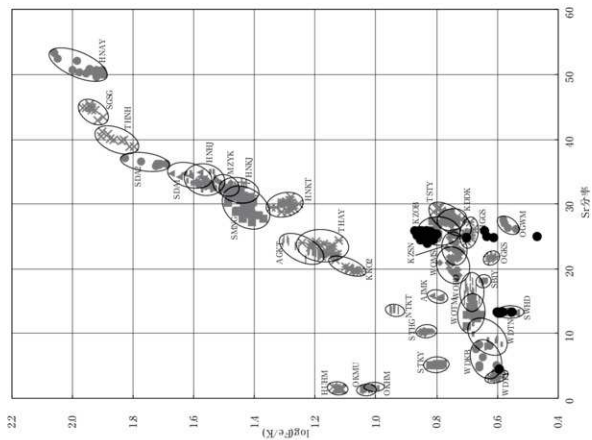


图6 黑曜石产地推定判别图(2)

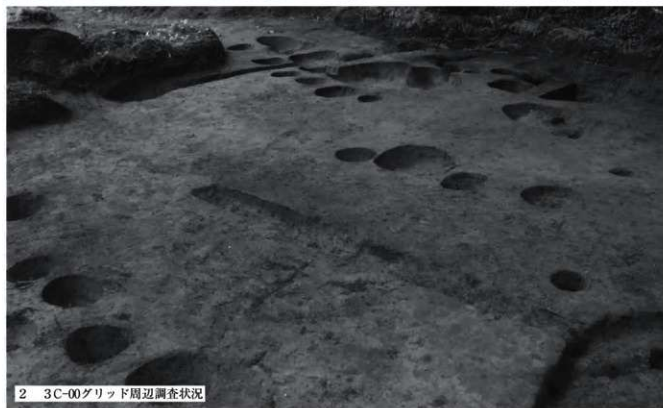
写 真 图 版



1 久保堰ノ台遺跡 2 番後台遺跡 3 緑岡古墳群

久保堰ノ台遺跡周辺の航空写真

久保塚ノ台遺跡 1



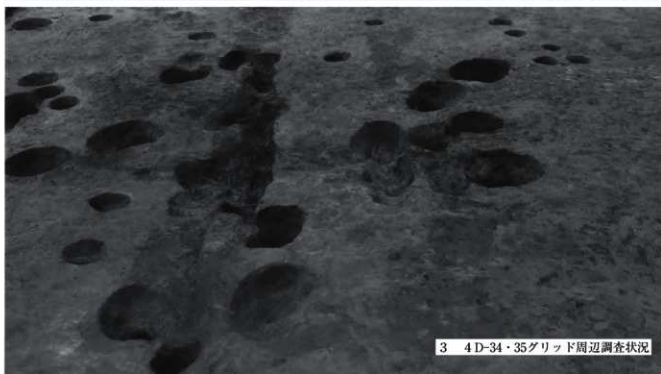
久保塚ノ台遺跡1



1 SI-001・002調査状況



2 SI-002全景



3 4D-34・35グリッド周辺調査状況

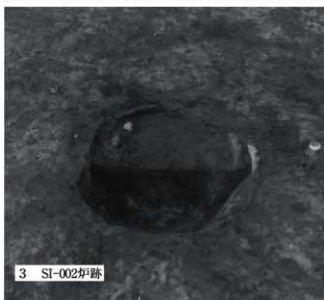
久保堰ノ台遺跡 1



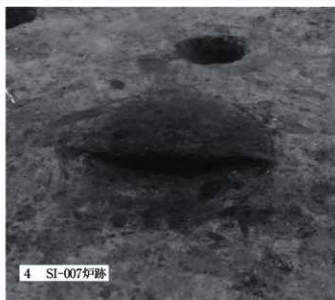
1 4C・D区調査状況



2 SI-007全景



3 SI-002埴跡

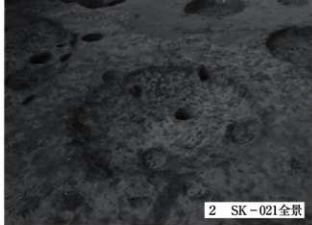


4 SI-007埴跡

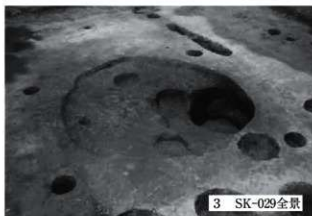
久保塚ノ台遺跡1



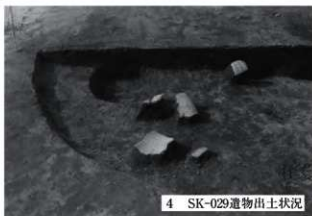
1 SK-015・017・018・019・020全景



2 SK-021全景



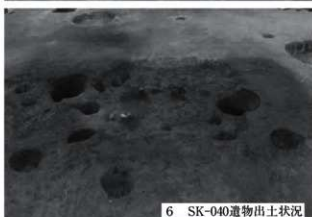
3 SK-029全景



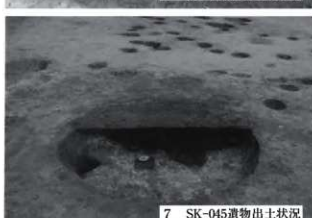
4 SK-029遺物出土状況



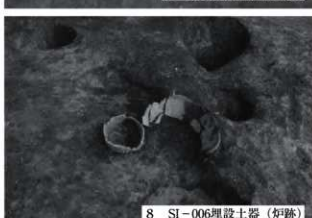
5 SK-033遺物出土状況



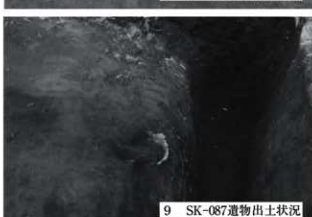
6 SK-040遺物出土状況



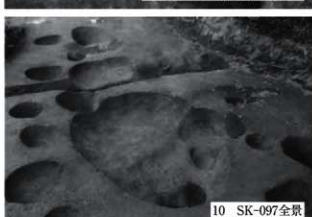
7 SK-045遺物出土状況



8 SI-006埋設土器(存跡)



9 SK-087遺物出土状況



10 SK-097全景



1 空撮1(遺跡西部全景)



2 空撮2(遺跡全景・西方から)

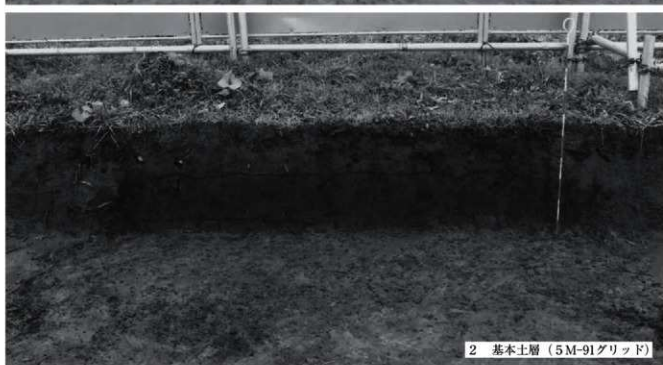


3 空撮3(4J区遺構検出状況)

久保環ノ台遺跡2



1 基本土層 (6P-64グリッド)



2 基本土層 (5M-91グリッド)



3 ビット群検出状況 (4R-42~46グリッド周辺)



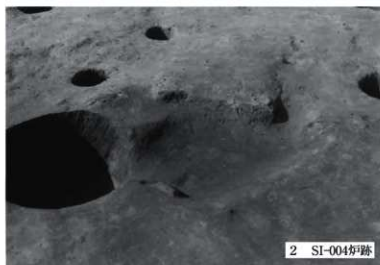
1 SI-002全景



2 SI-002遺物出土状況



3 SI-003全景





1 SI-005遺物出土状況



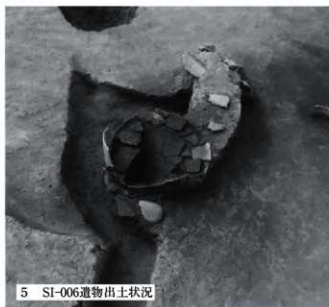
2 SI-005埋設土器(炉跡) 1



3 SI-005埋設土器(炉跡) 2



4 SI-005埋設土器(炉跡) 3



5 SI-006遺物出土状況



1 SI-008遺物出土状況



2 SI-008伊跡(配石)



3 SI-008全景

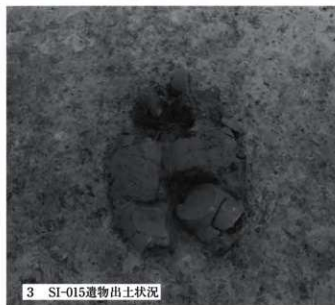
久保塚ノ台遺跡2



1 SI-006全景



2 SI-014遺物出土状況



3 SI-015遺物出土状況



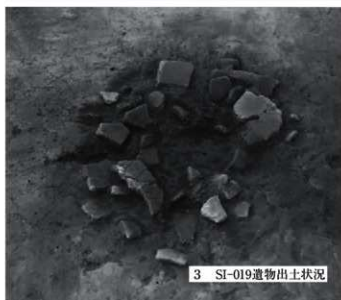
4 SI-010全景、SI-002 (右)



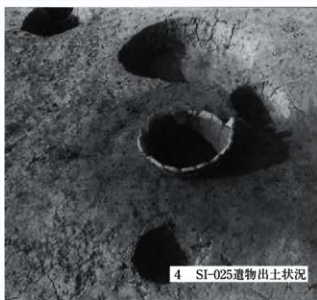
1 SI-016全景



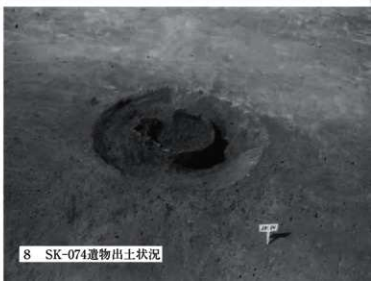
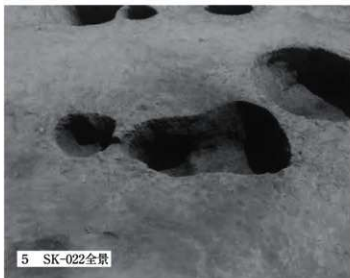
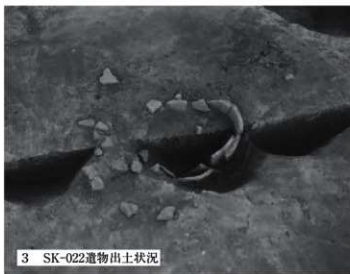
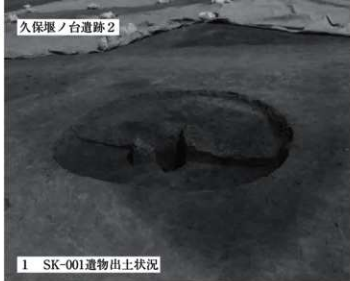
2 SI-018全景



3 SI-019遺物出土状況

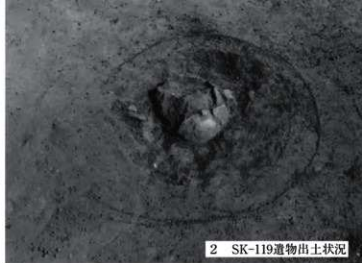


4 SI-025遺物出土状況

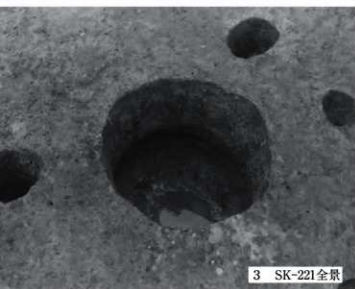




1 SK-076遺物出土状況



2 SK-119遺物出土状況



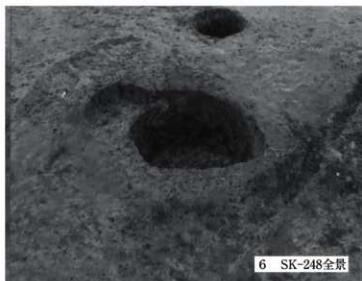
3 SK-221全景



4 SK-231全景



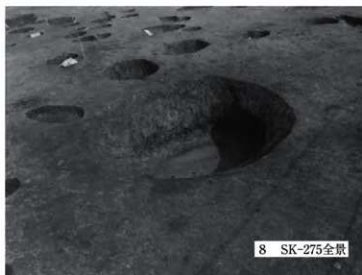
5 SK-242全景



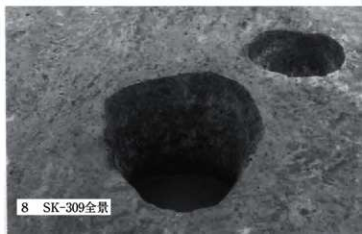
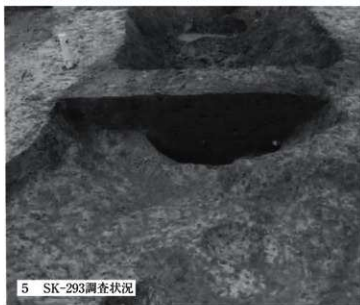
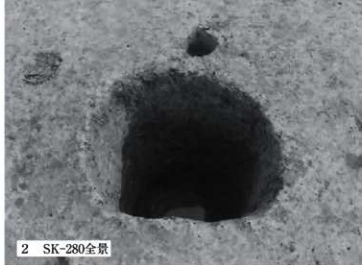
6 SK-248全景

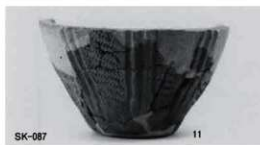
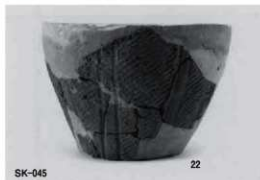
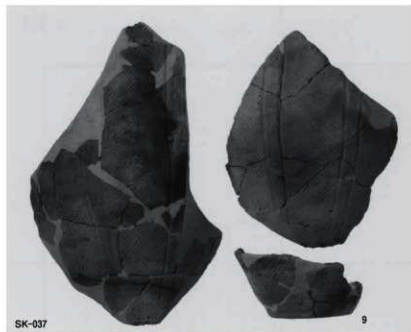
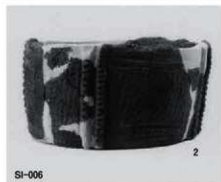


7 SK-275調査状況

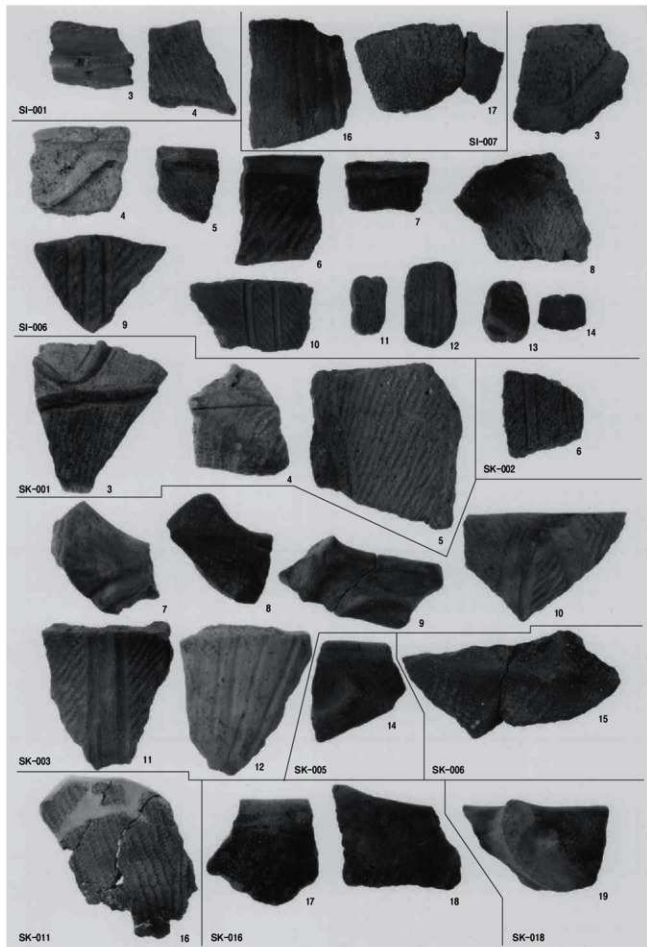


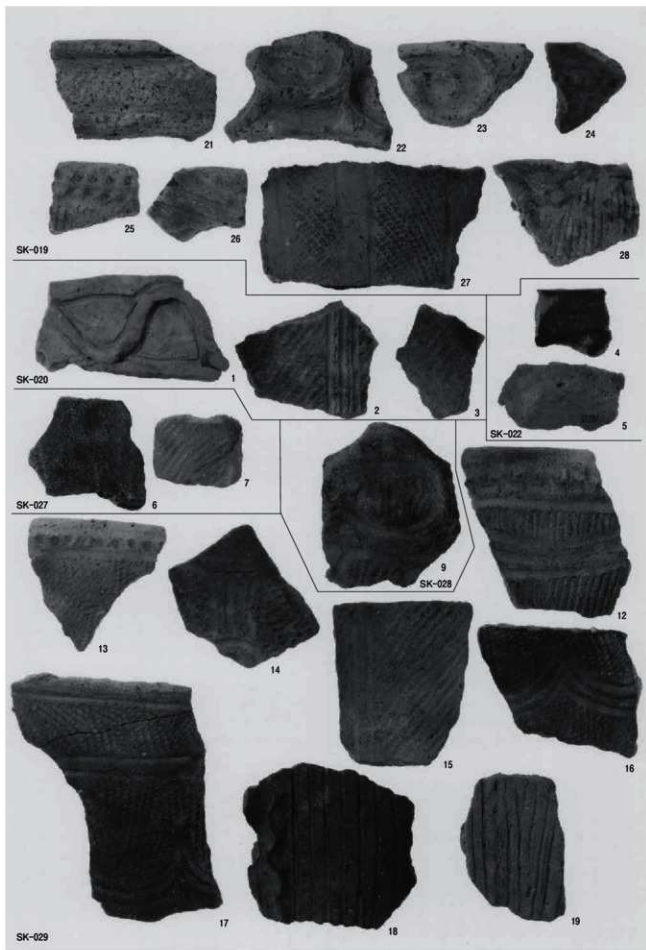
8 SK-275全景



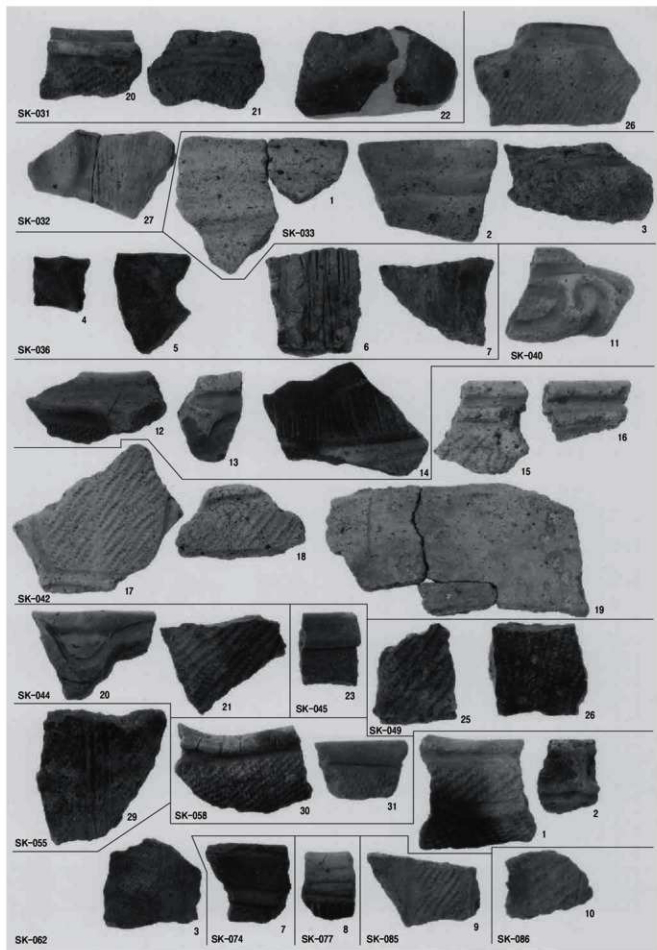


遺構出土土器(1)

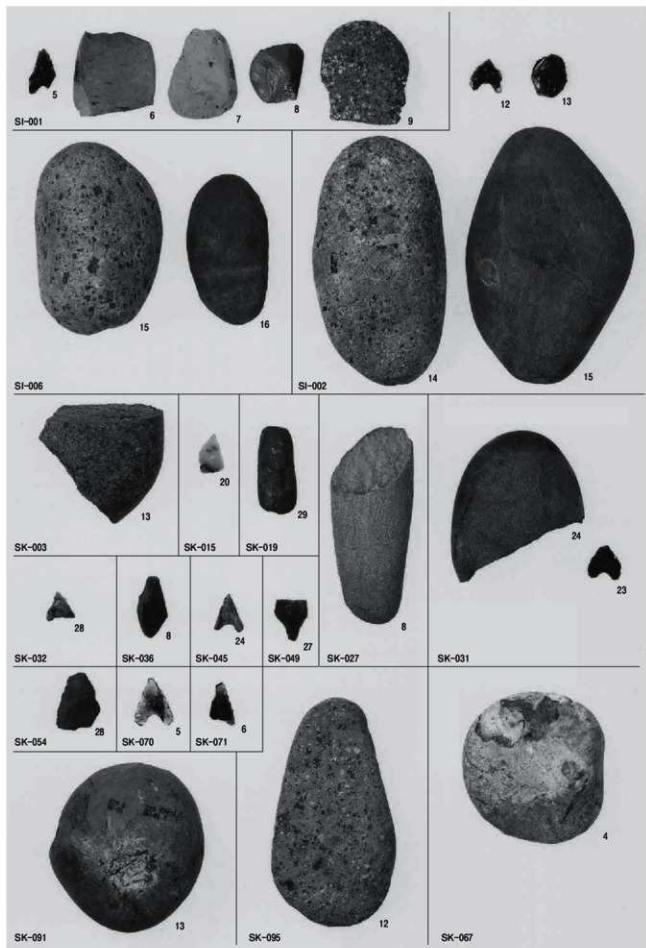




遺構出土土器(3)

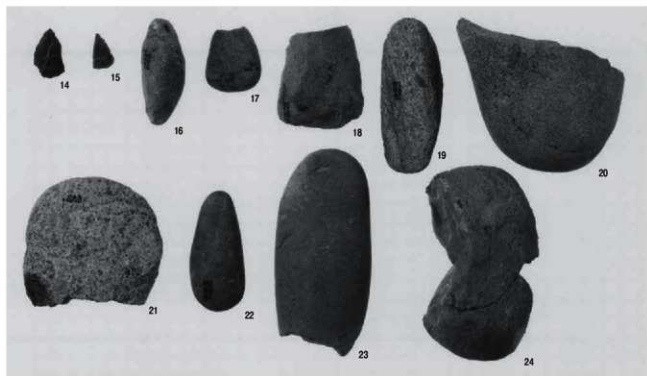


遺構出土土器(4)



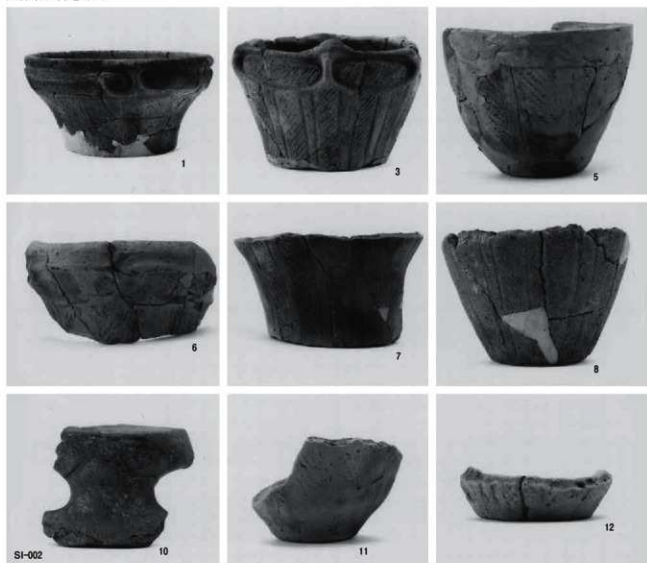
遺構出土石器(1)

久保塚ノ台遺跡1

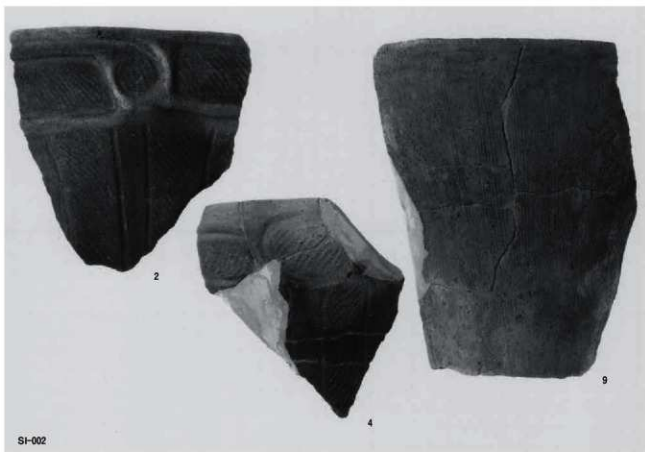


久保塚ノ台遺跡2

遺構外出土石器



遺構出土土器(1)

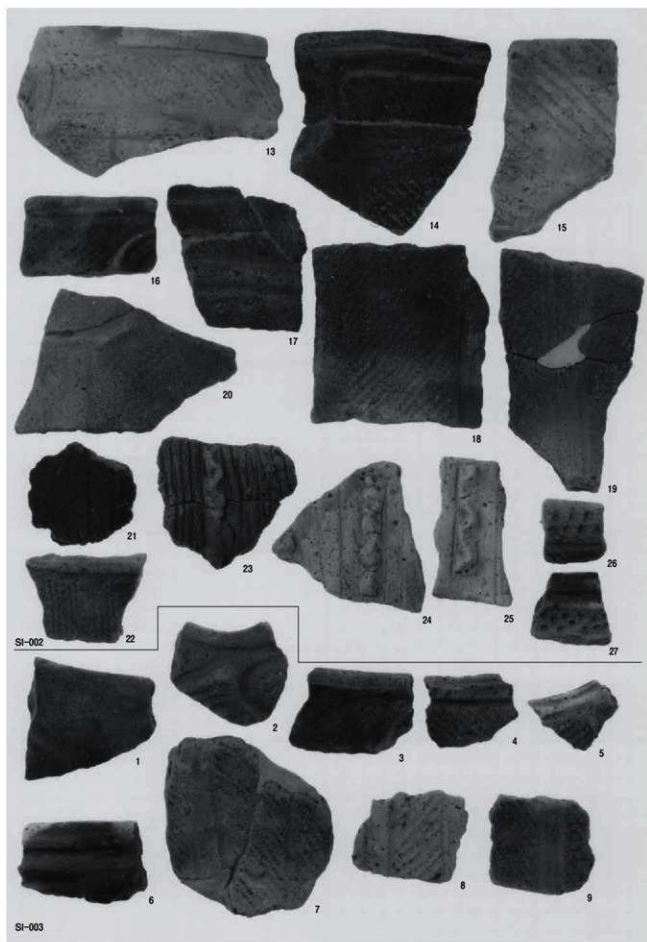


SI-002

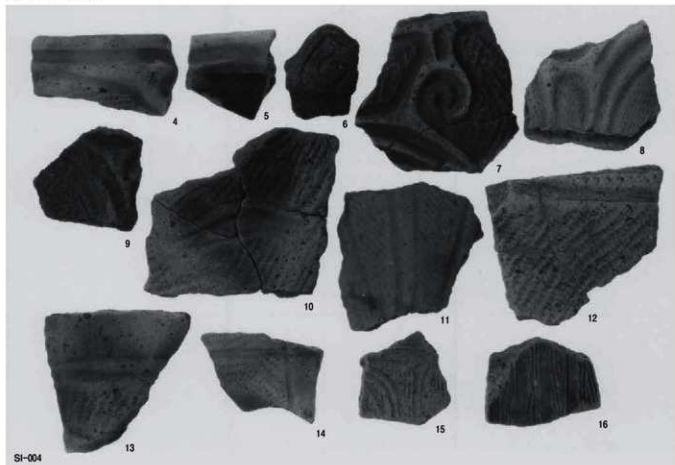


SI-004

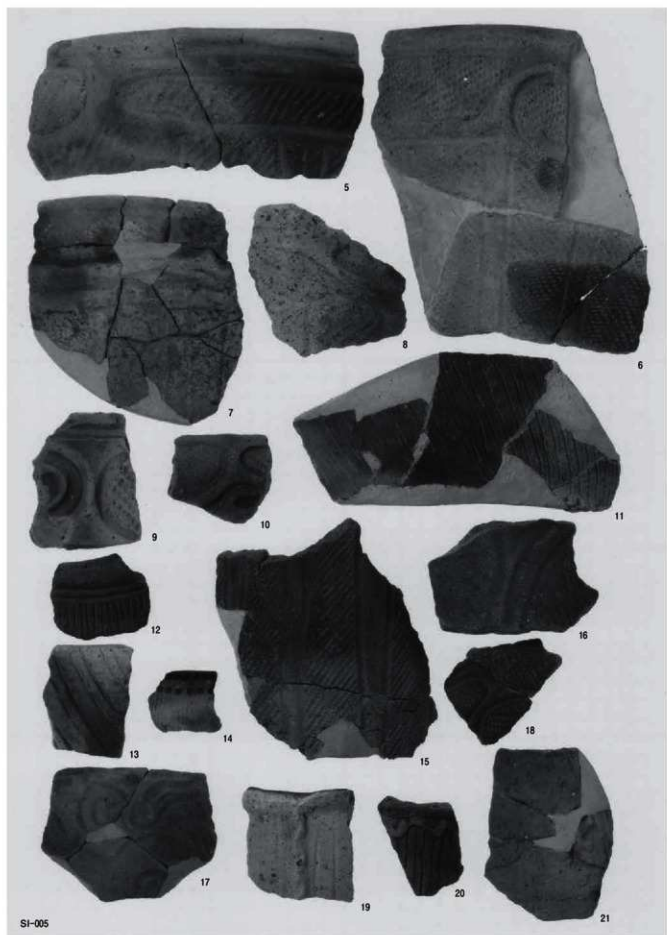
遺構出土土器(2)



遺構出土土器(3)

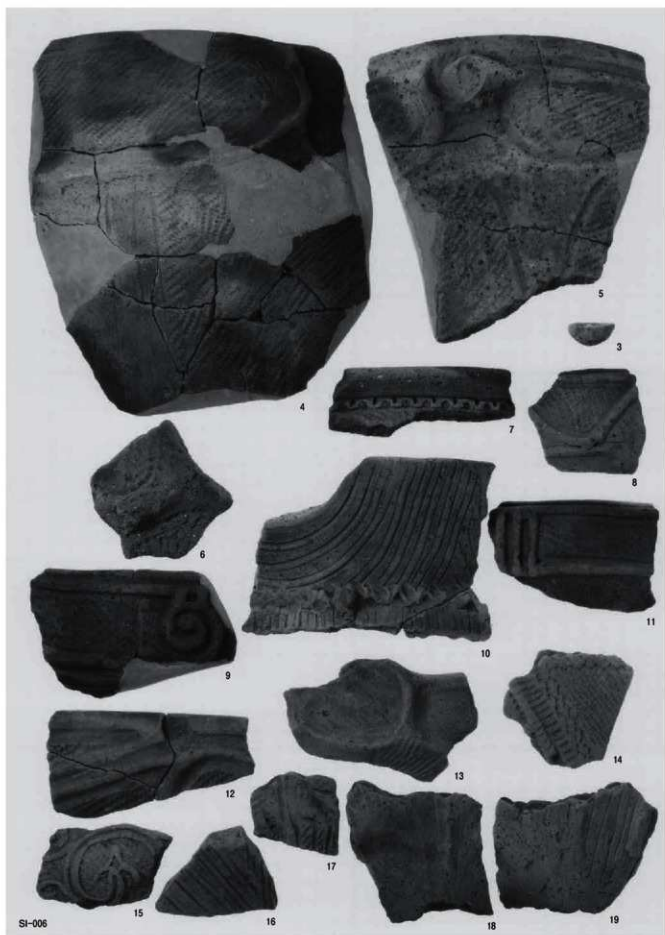


遺構出土土器(4)



SI-005

遺構出土土器(5)

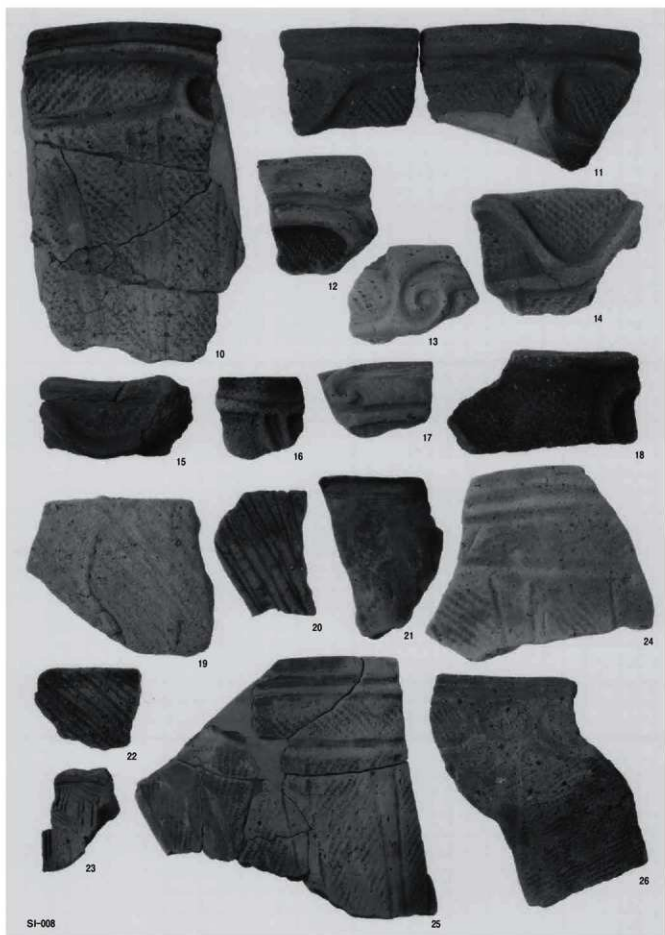


遺構出土土器(6)

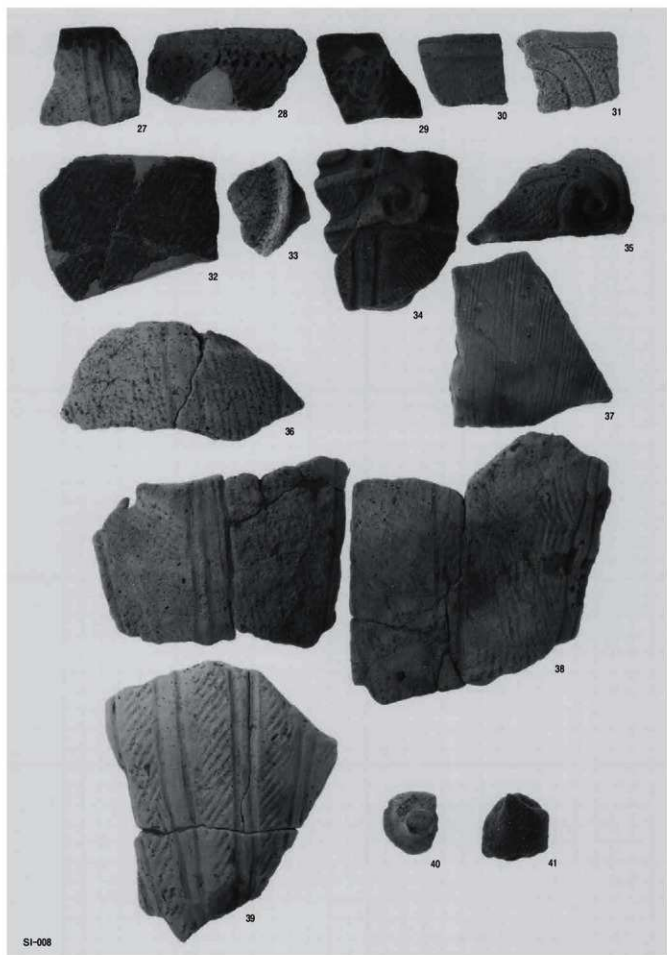


SI-008

遺構出土土器(7)

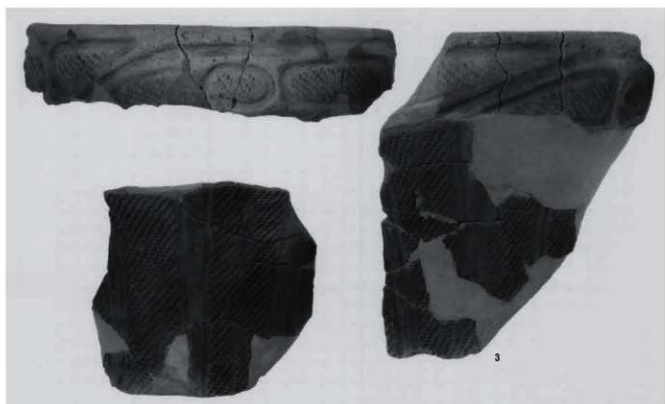


遺構出土土器(8)

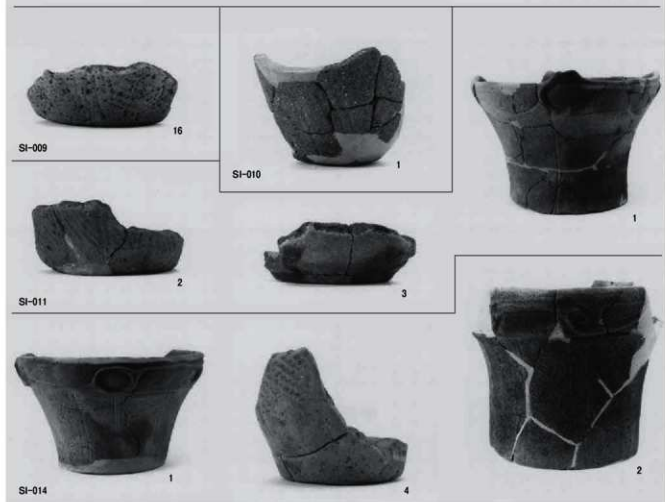


SI-008

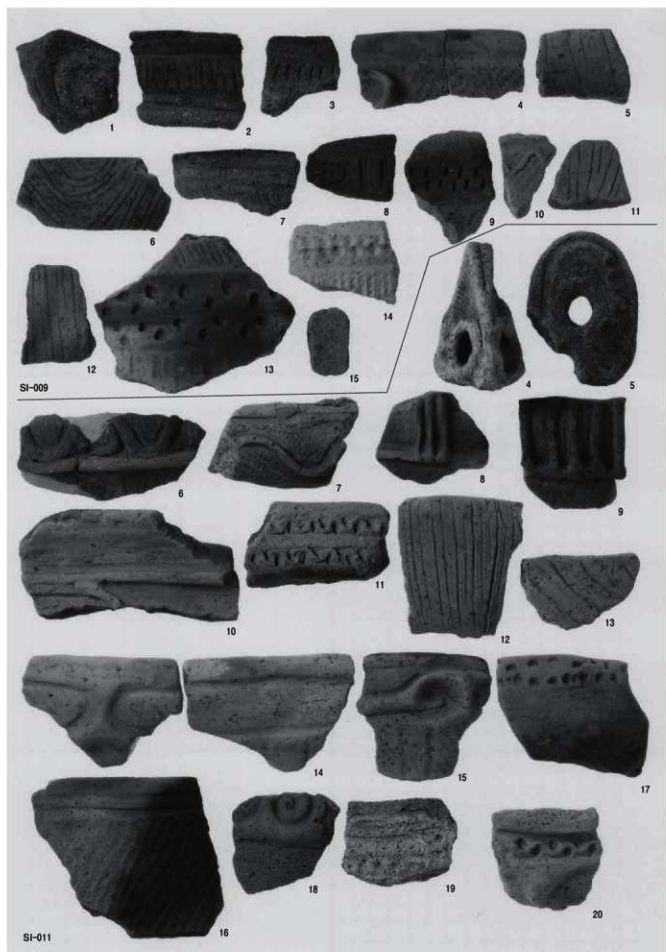
久保塚ノ台遺跡2

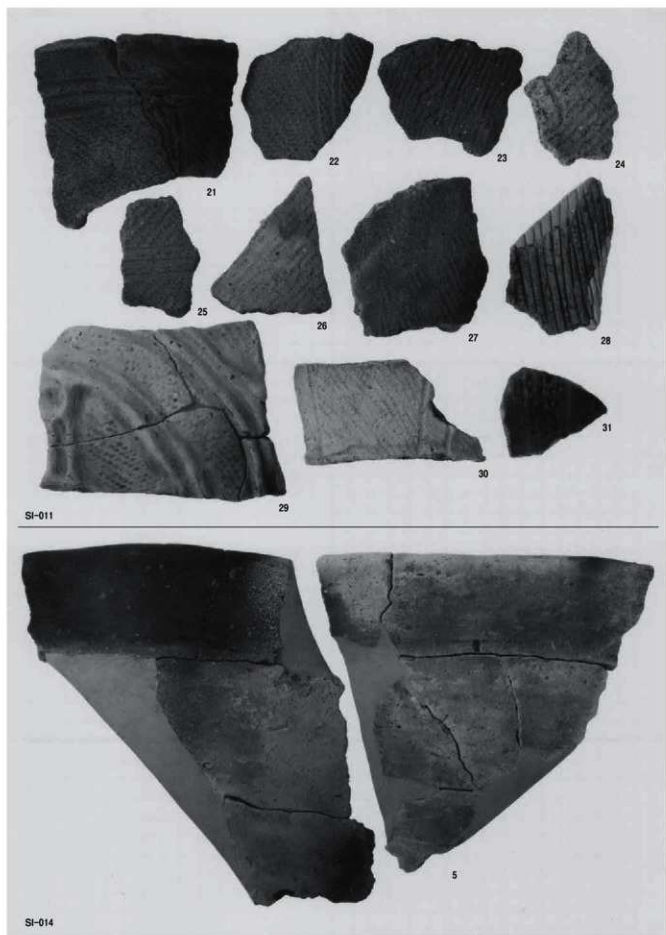


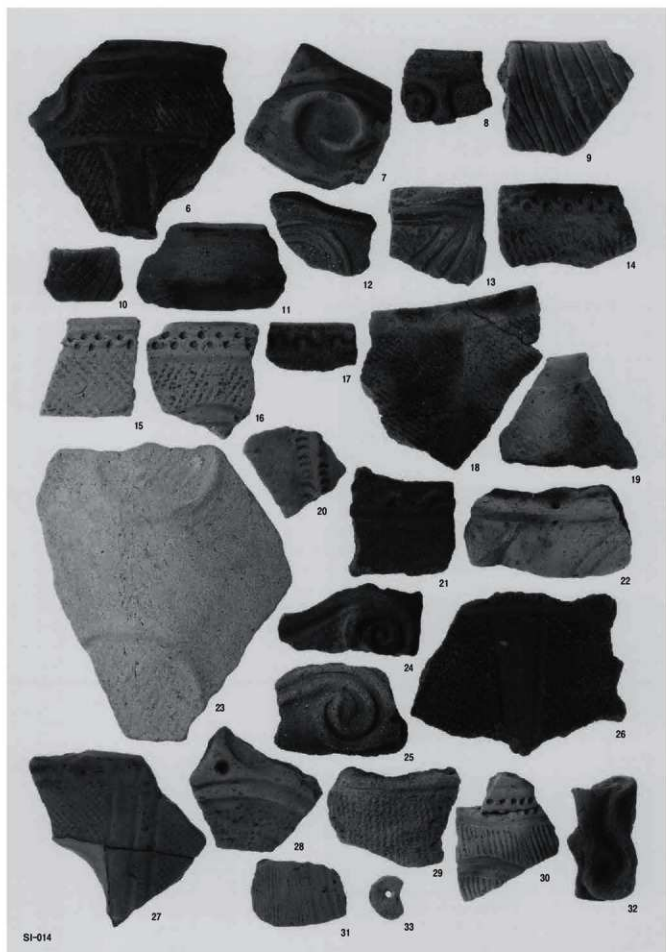
SI-014



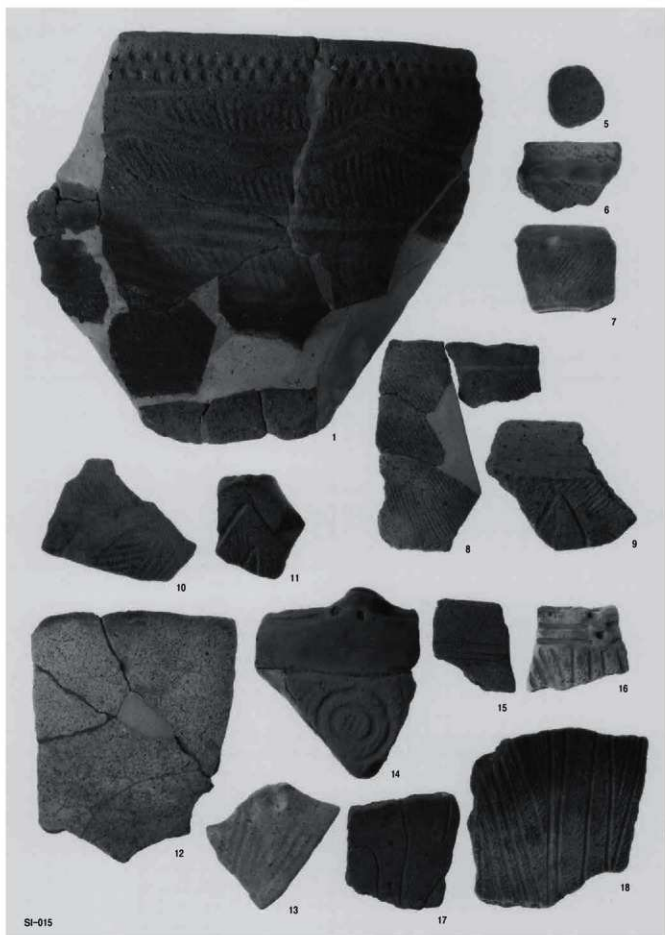
遺構出土土器00





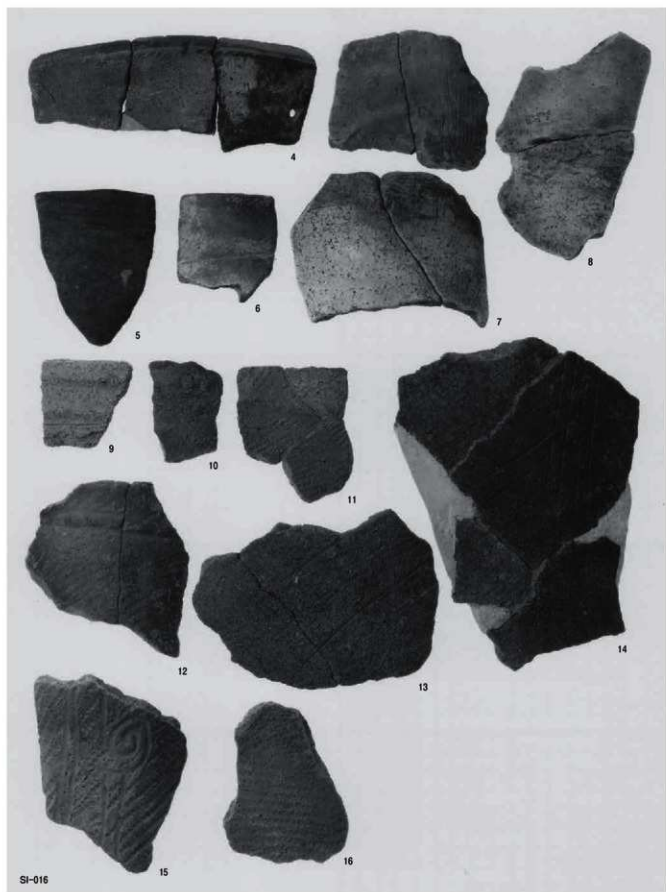


SI-014



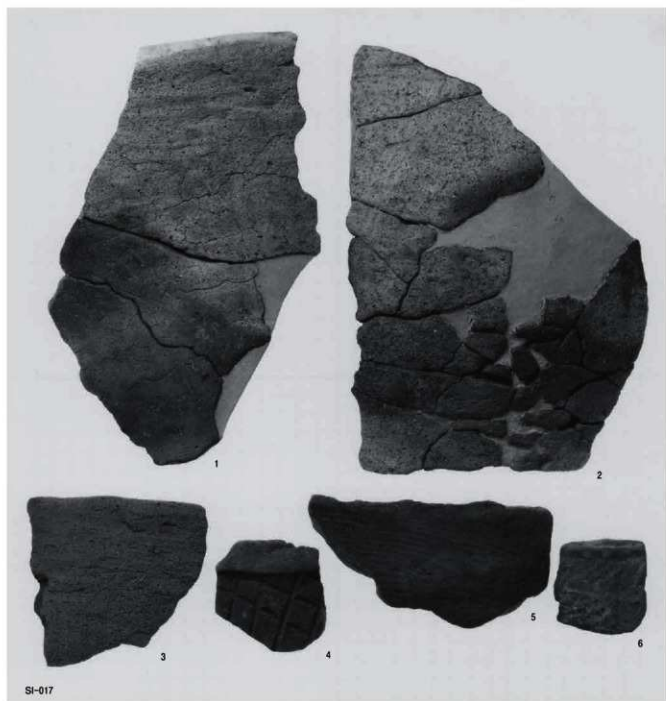
SI-015

遺構出土土器04

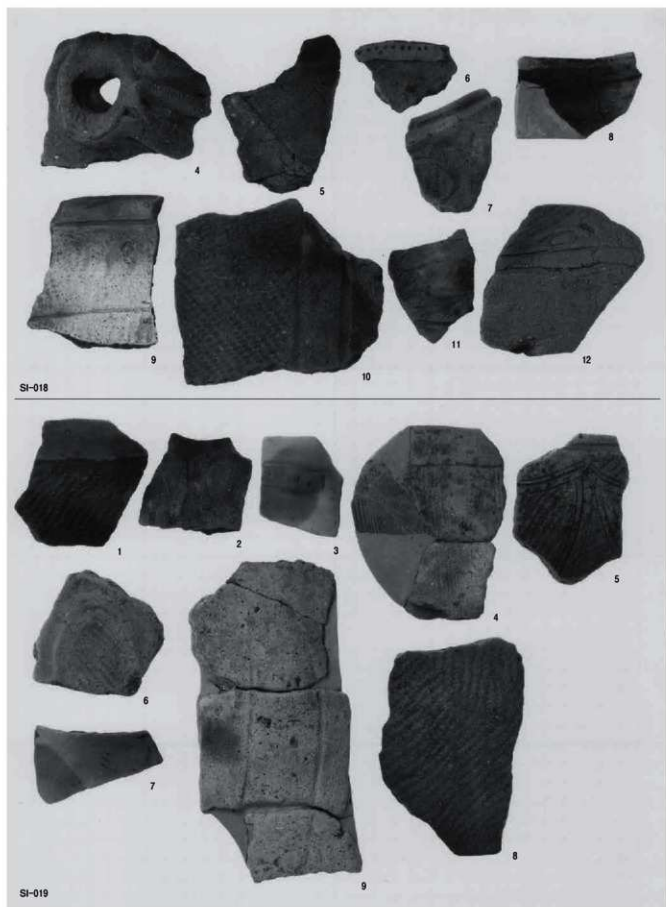


遺構出土土器(15)

久保塚ノ台遺跡 2



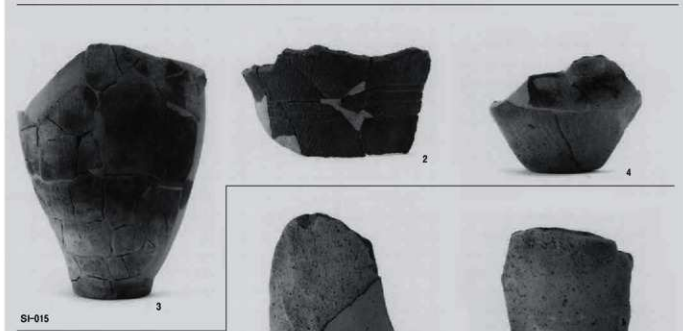
遺構出土土器06



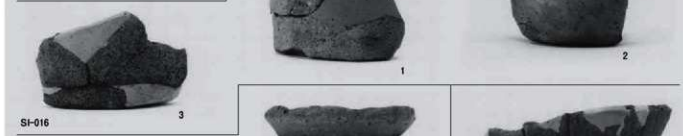
遺構出土土器07



SI-018



SI-015



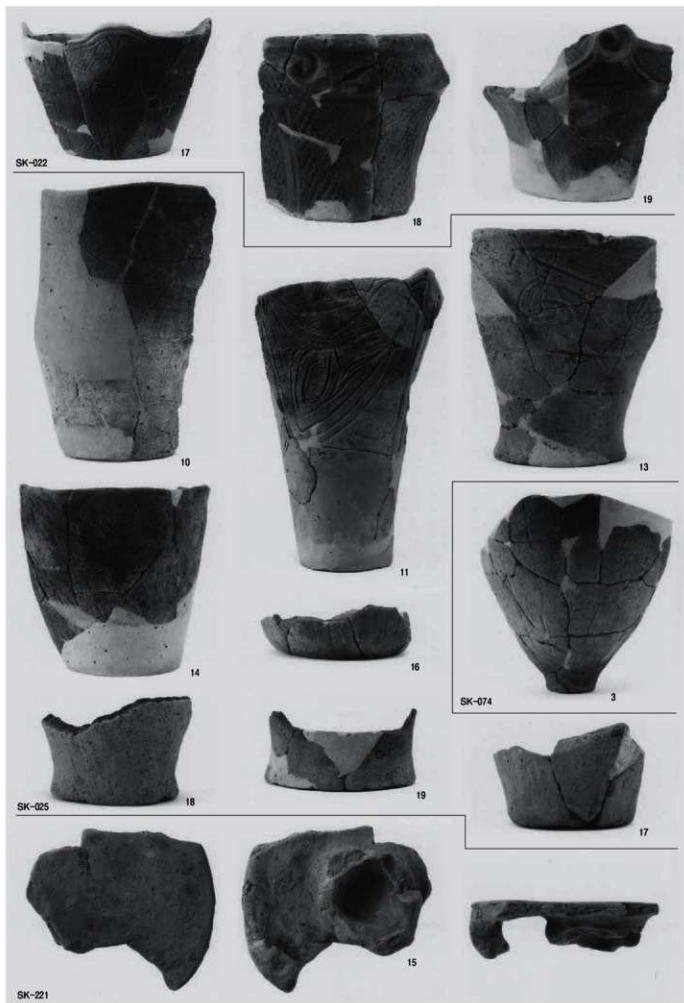
SI-016

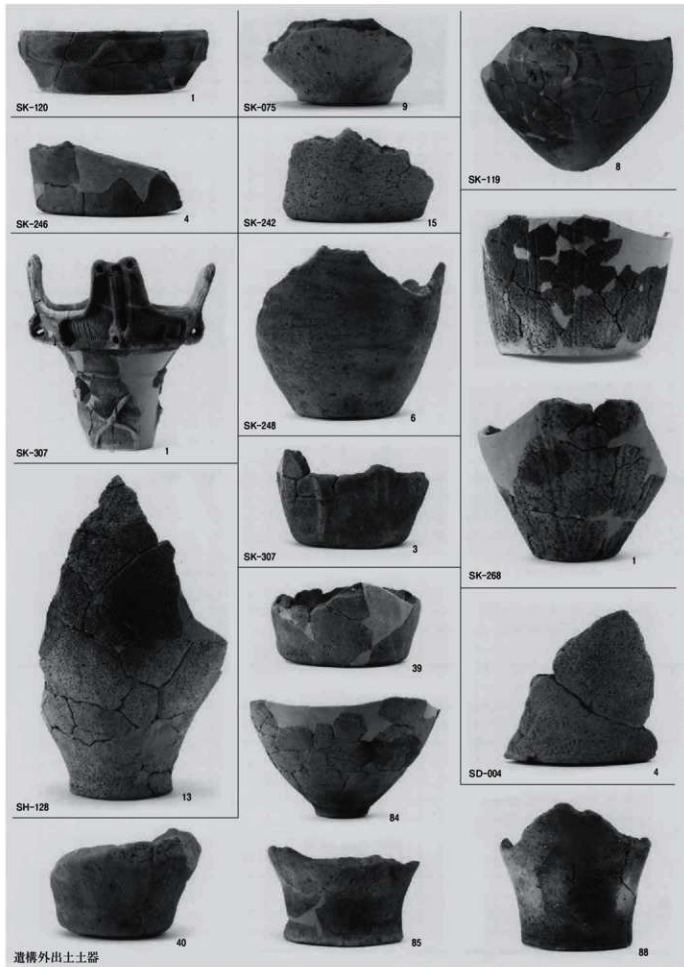


SI-017

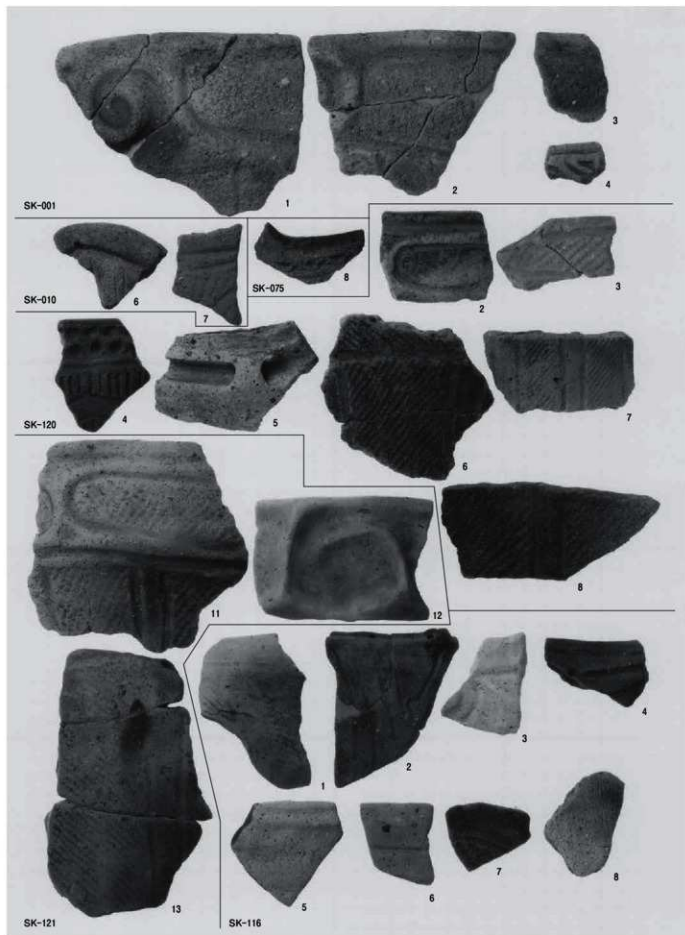
SI-018

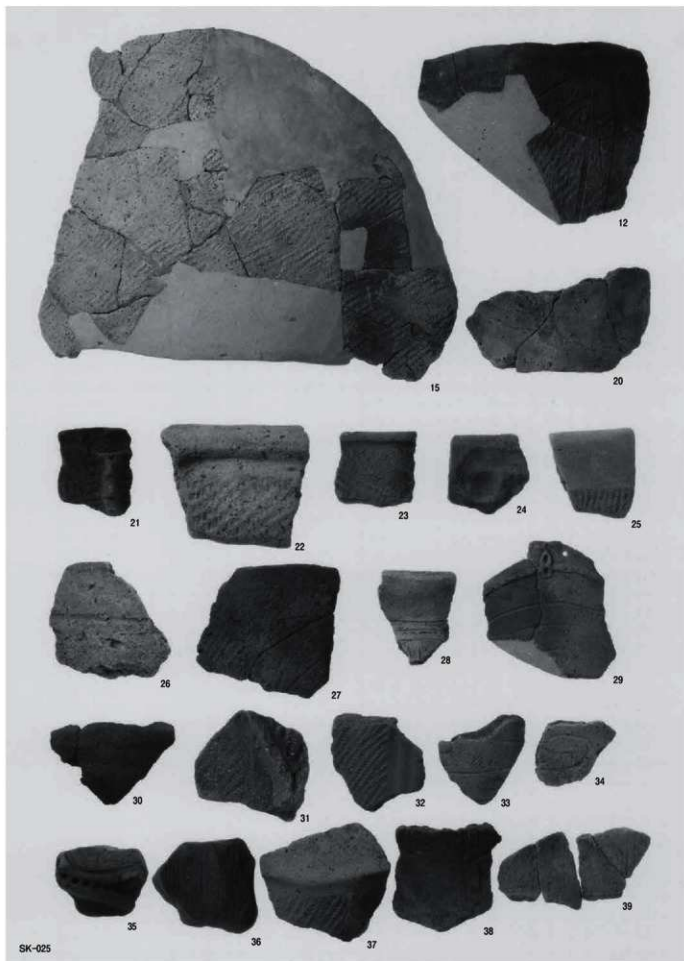
SI-025



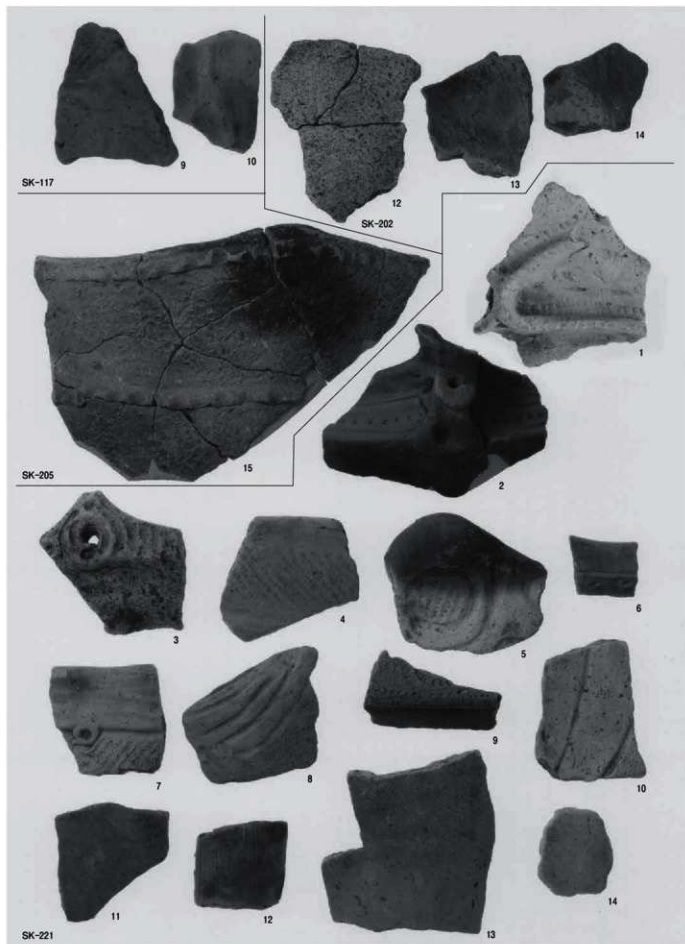


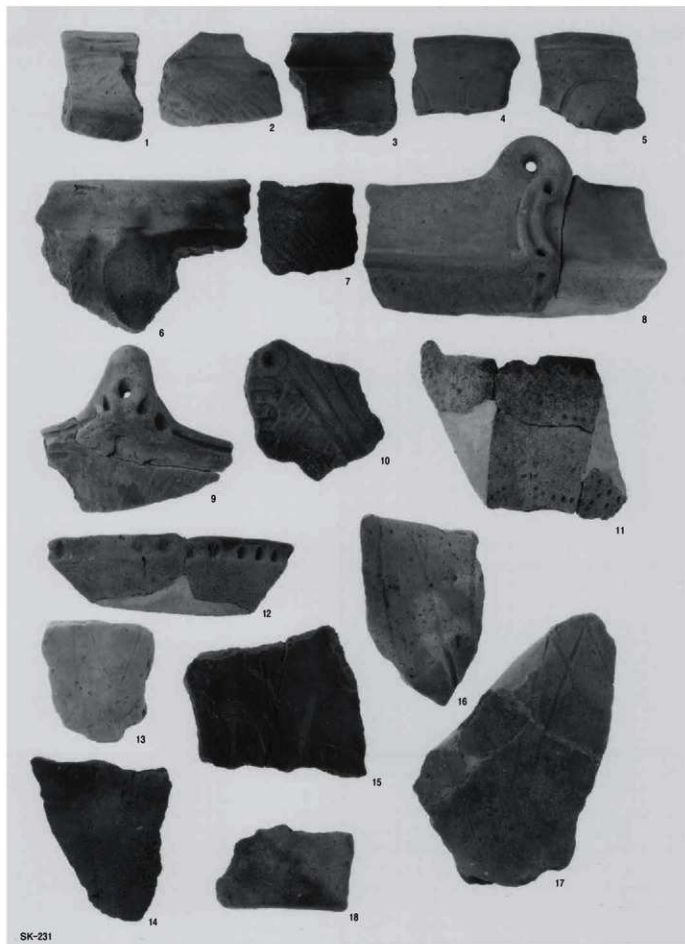
遺構出土土器20、遺構外出土土器





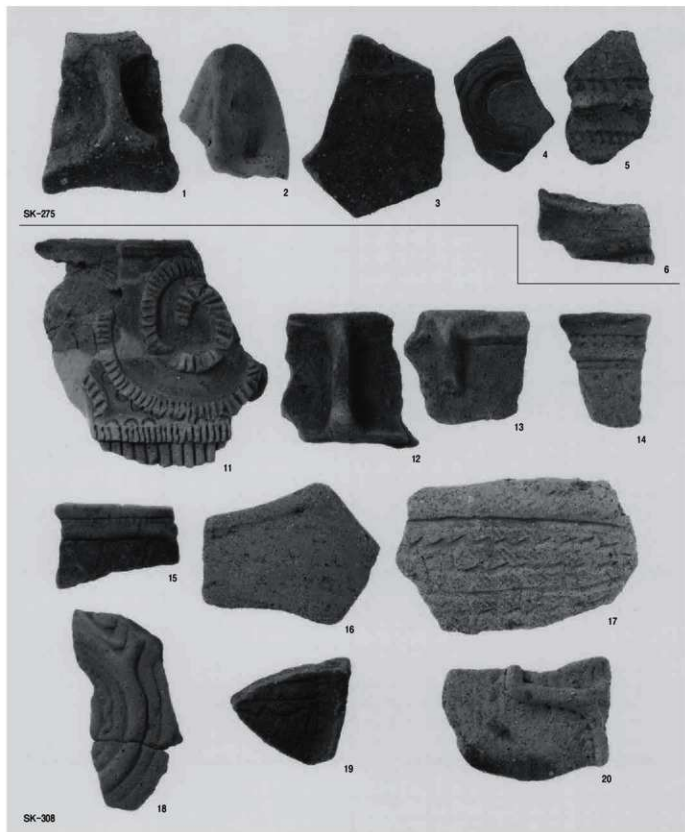
遺構出土土器22

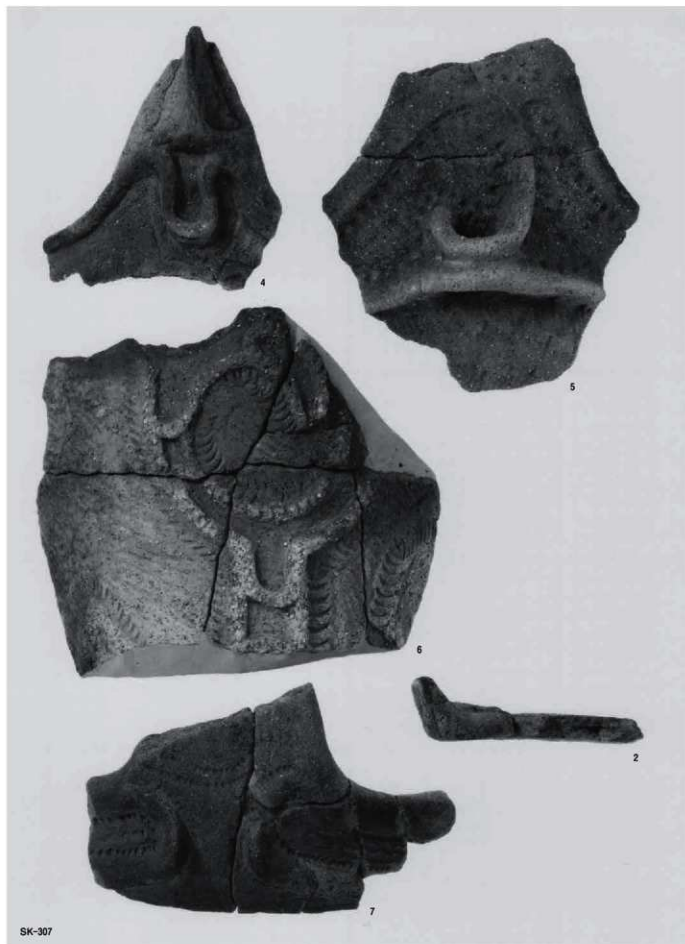




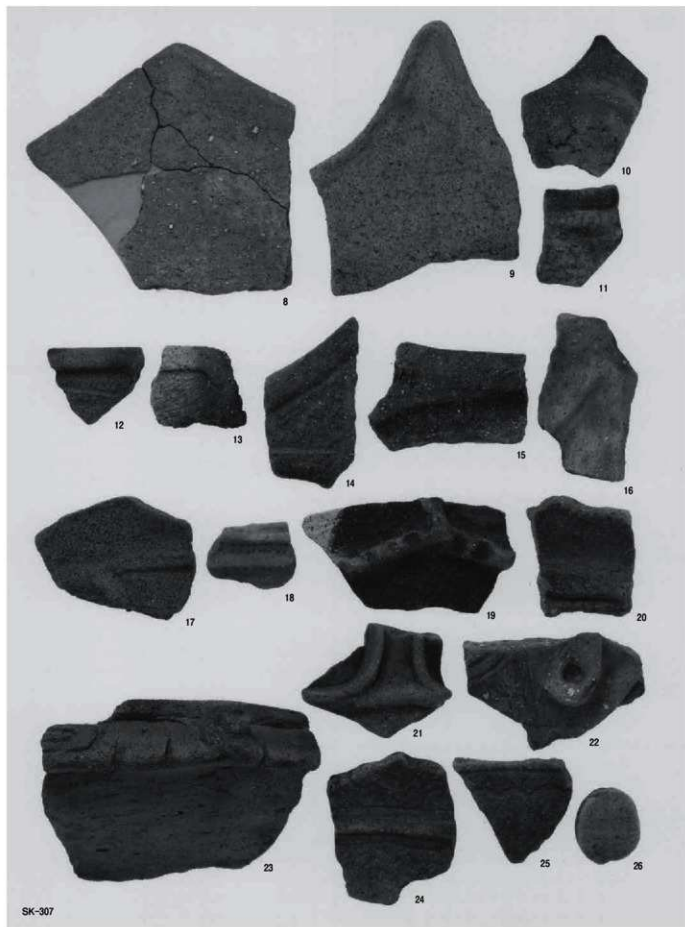
SK-231

遺構出土土器24

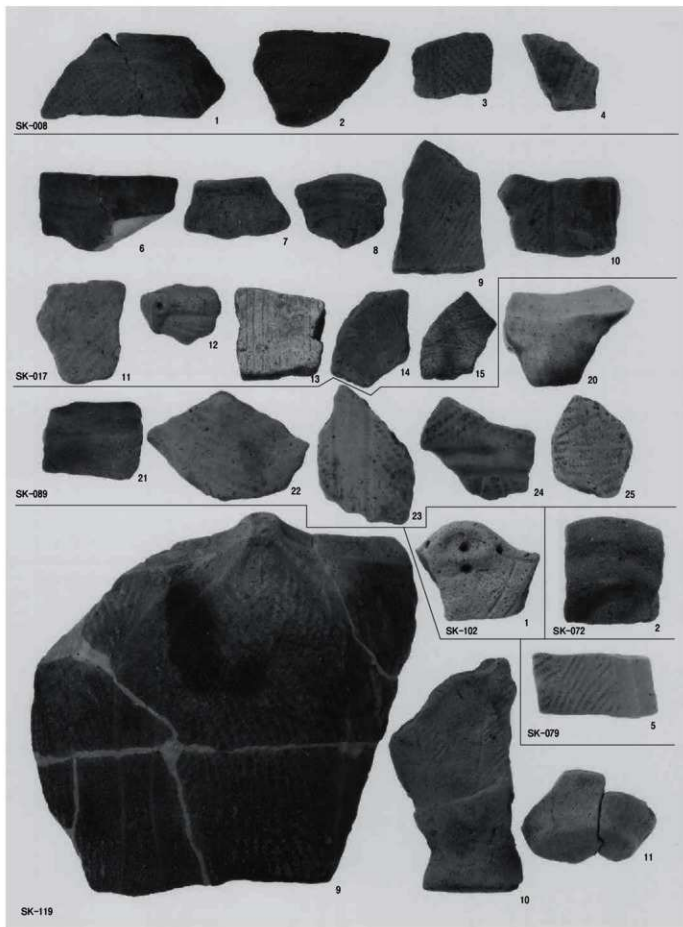




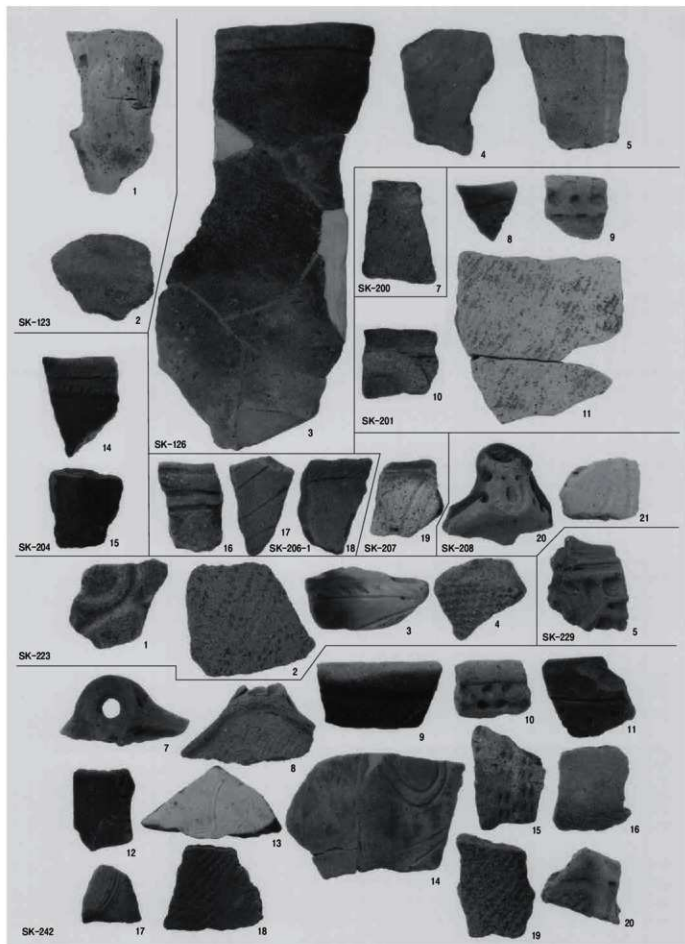
遺構出土土器26

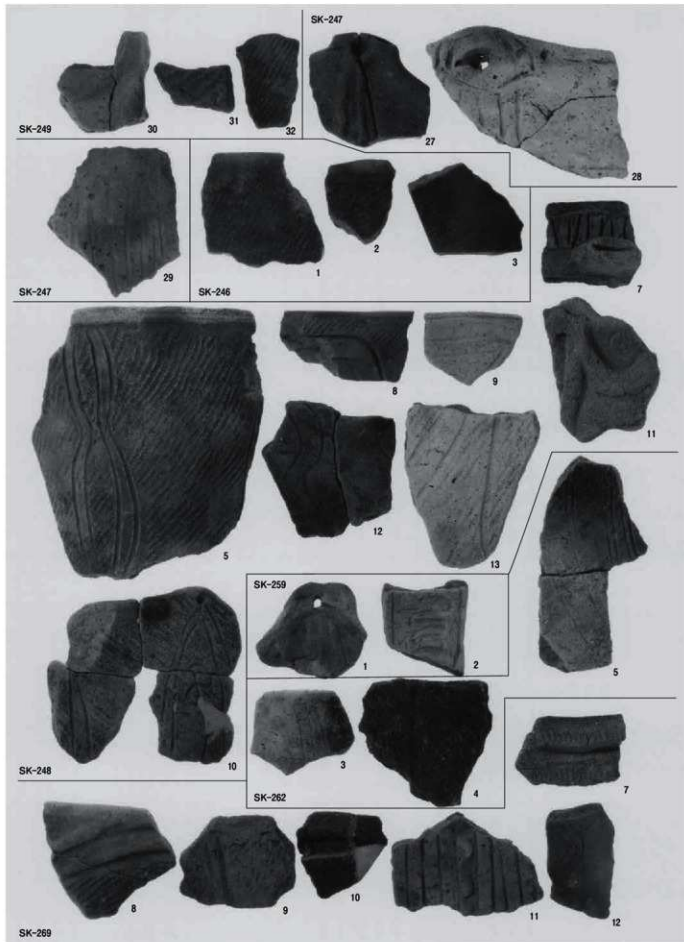


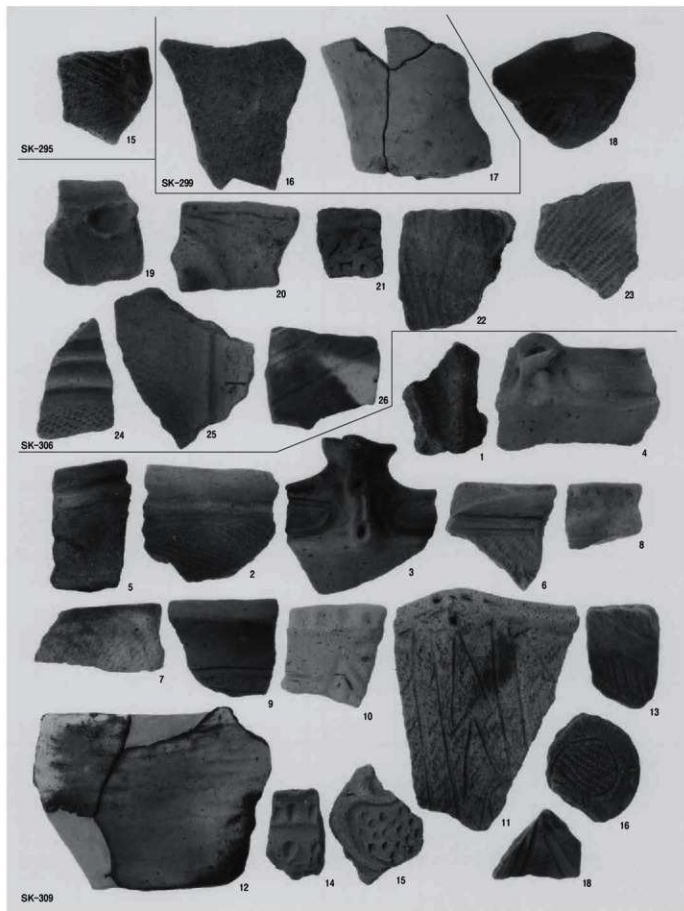
遺構出土土器②



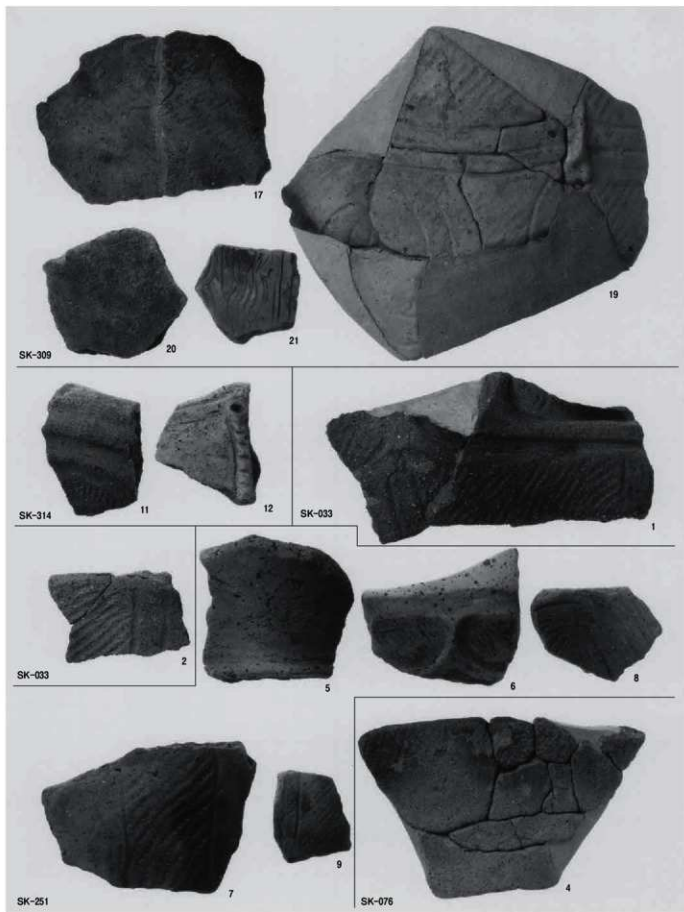
遺構出土土器28



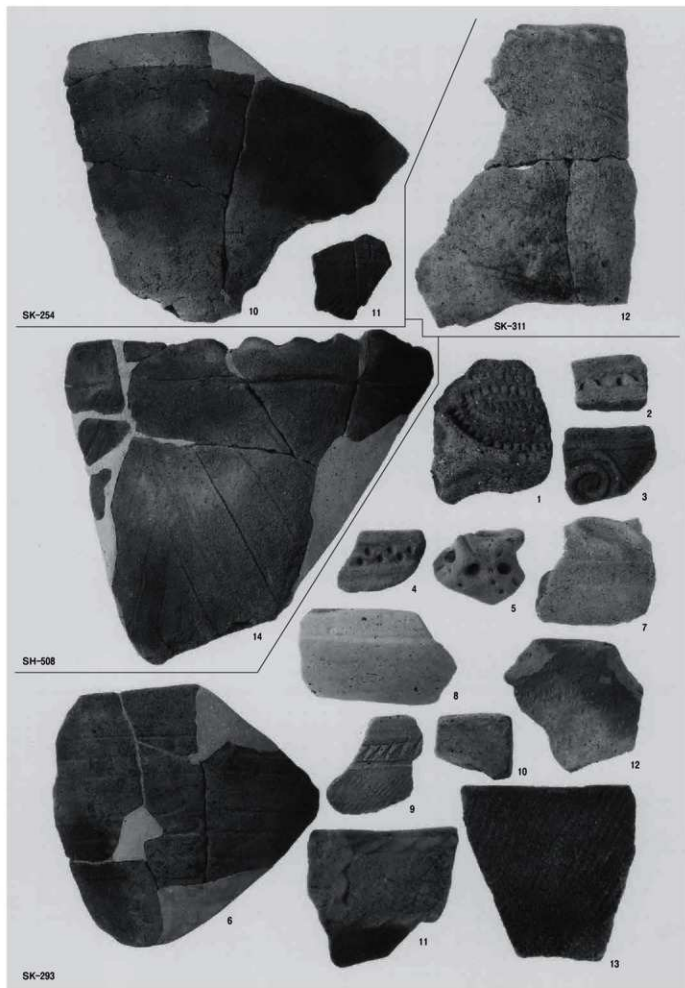


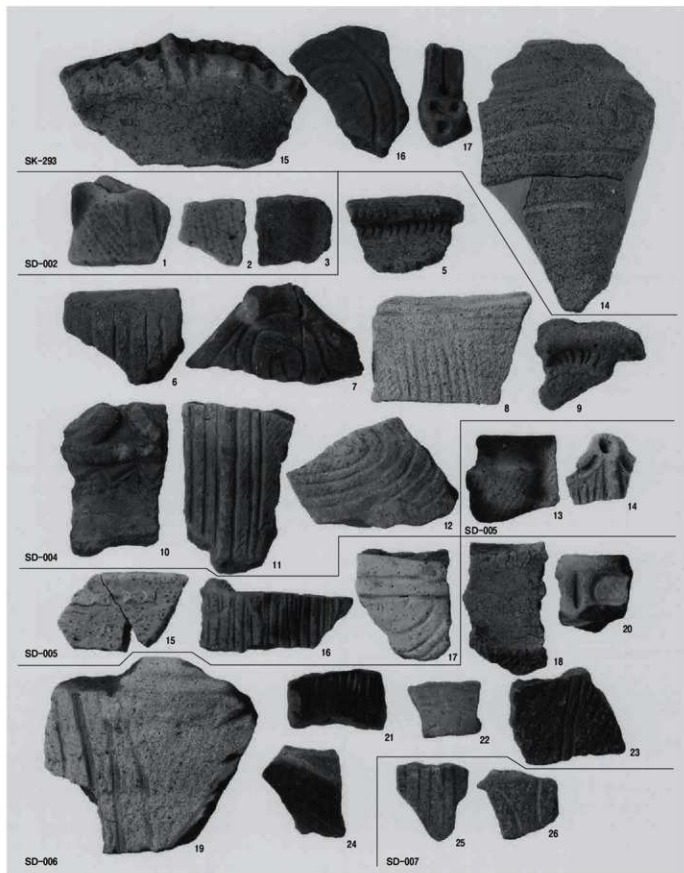


遺構出土土器30

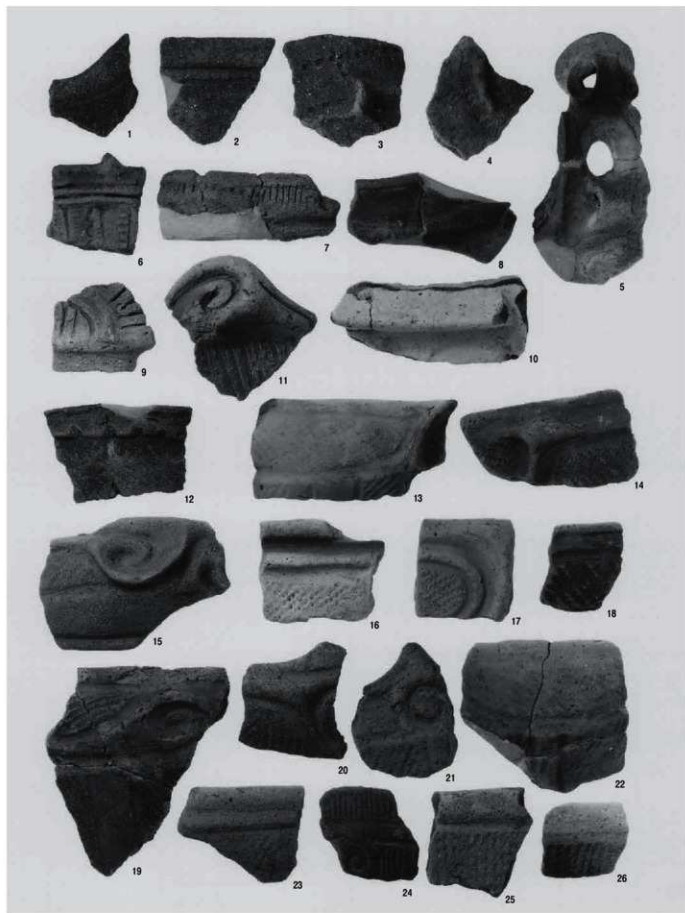


遺構出土土器32

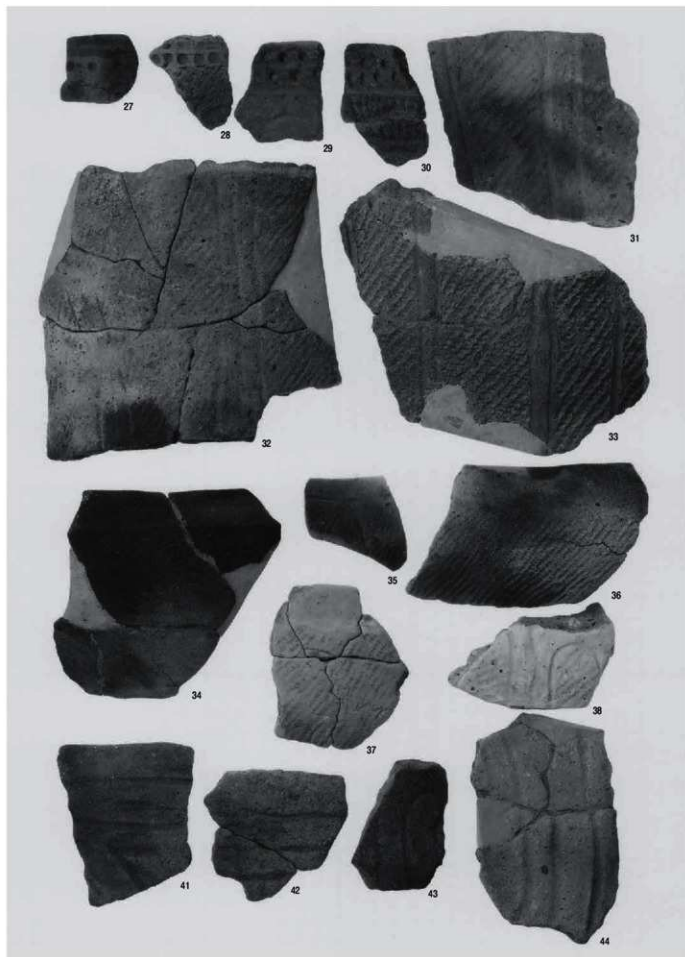




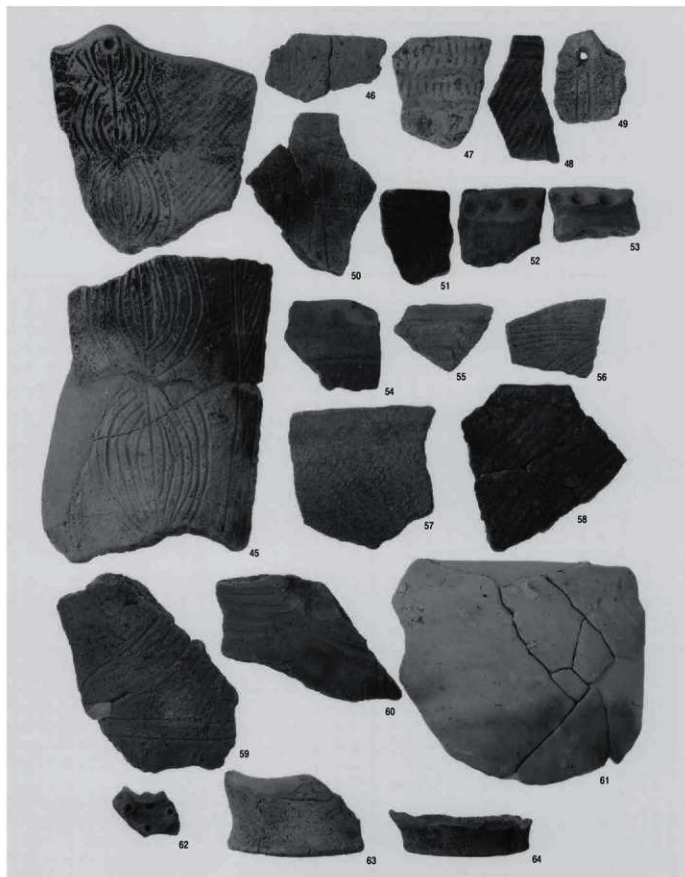
遺構出土土器34



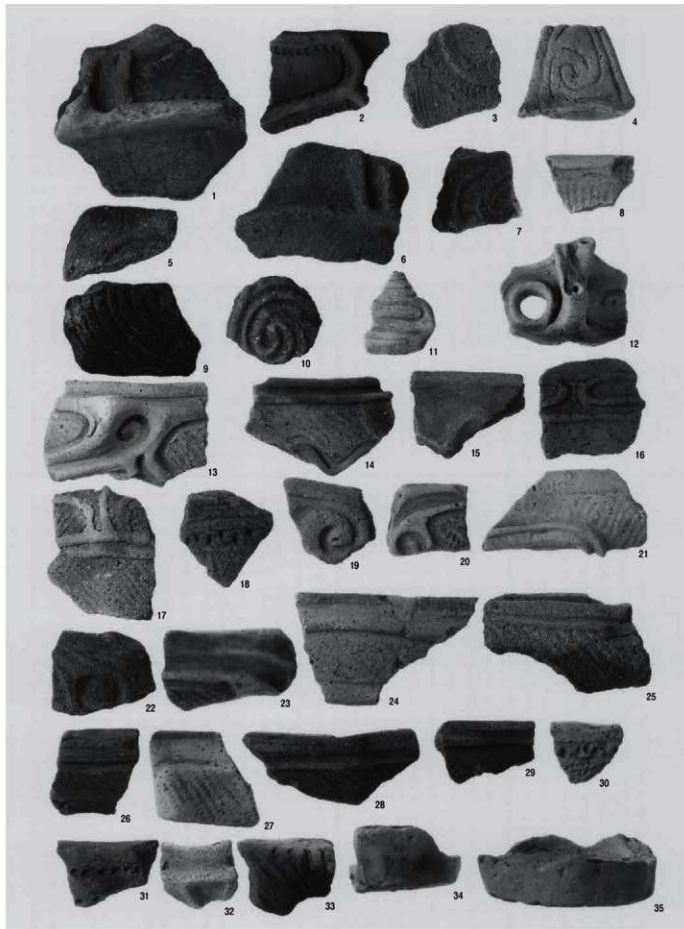
遺構外出土土器（西地区1）



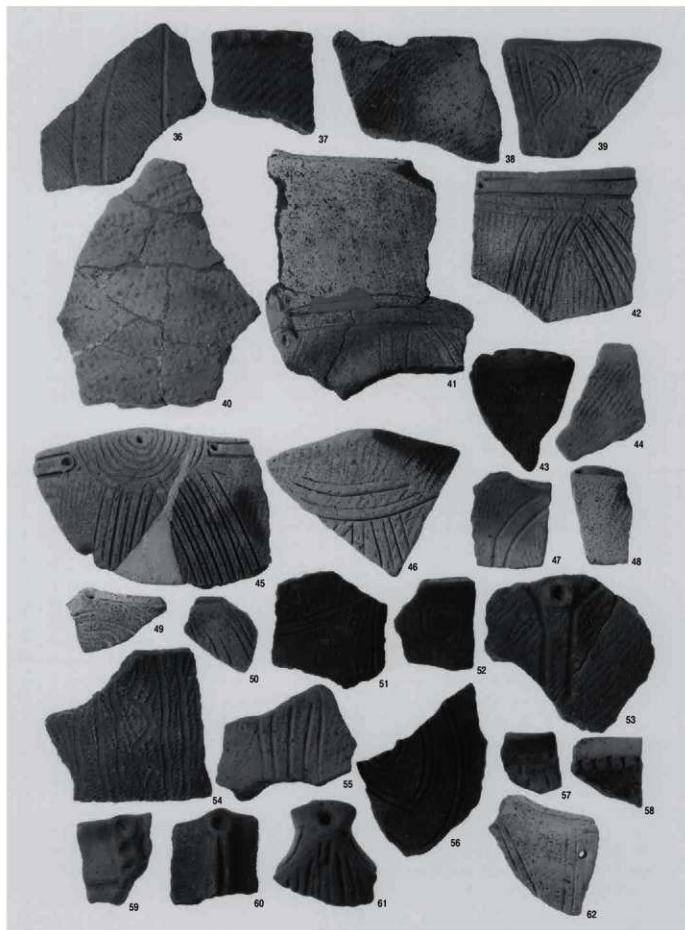
遺構外出土土器 (西地区2)



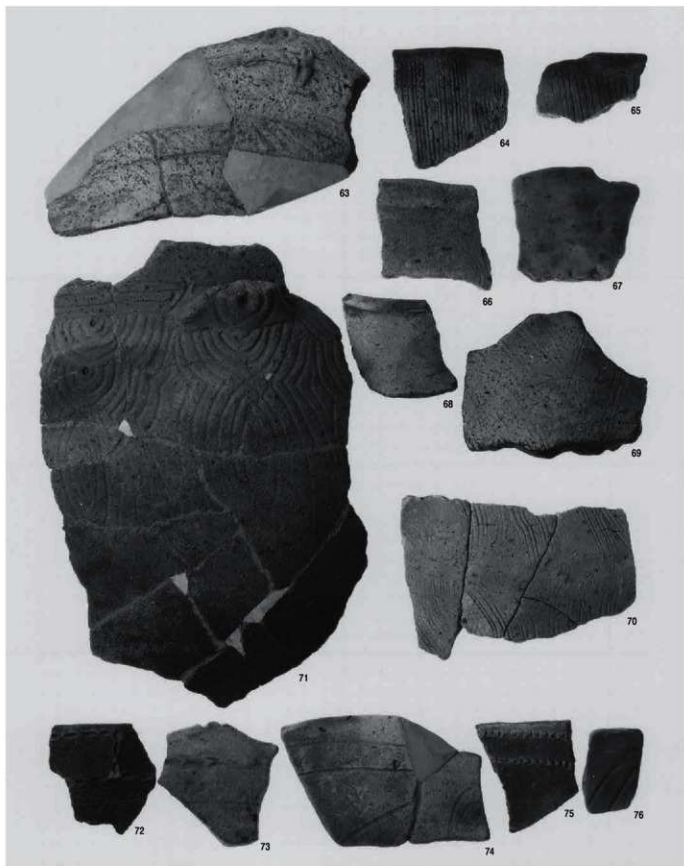
遺構外出土土器（西地区3）



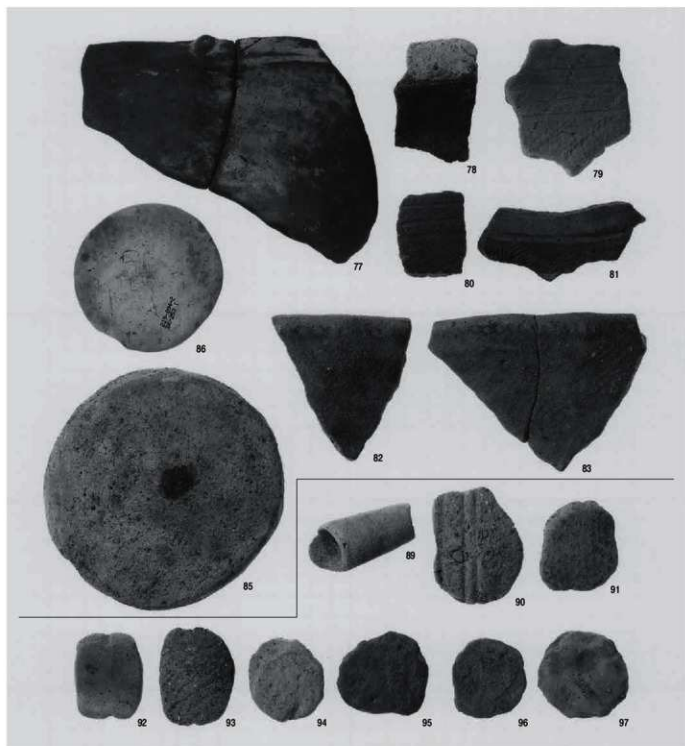
遺構外出土土器（東地区1）



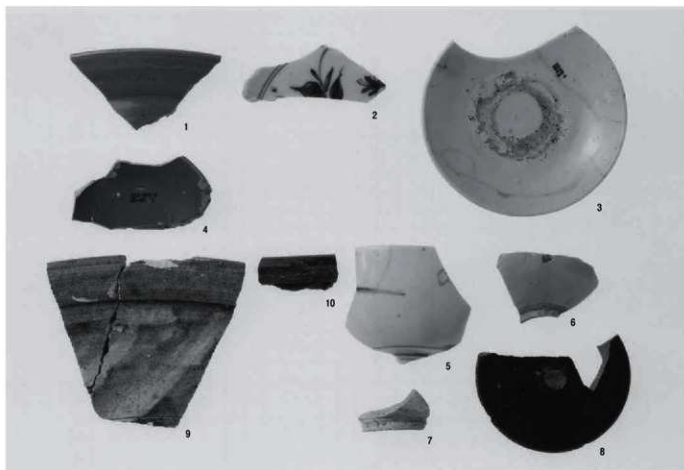
遺構外出土土器（東地区2）



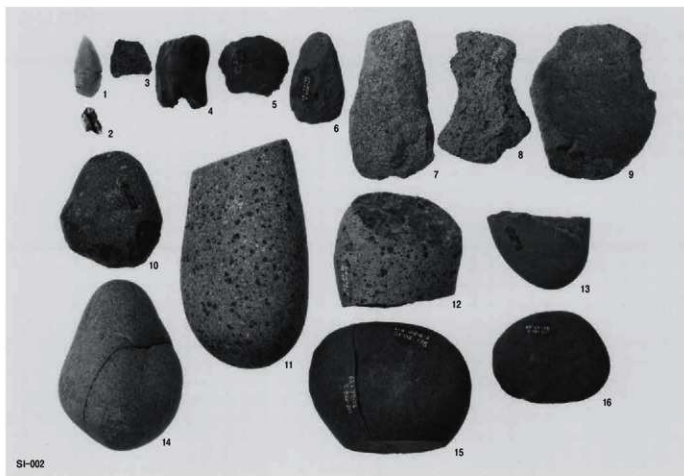
遺構外出土土器（東地区3）



遺構外出土土器（東地区4） 遺構外出土土製品

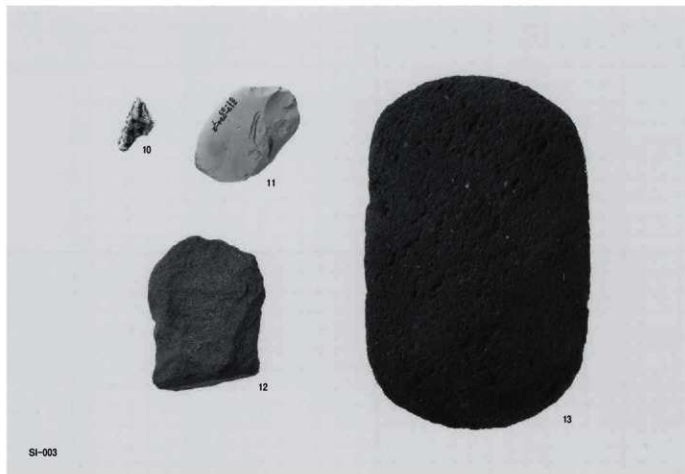
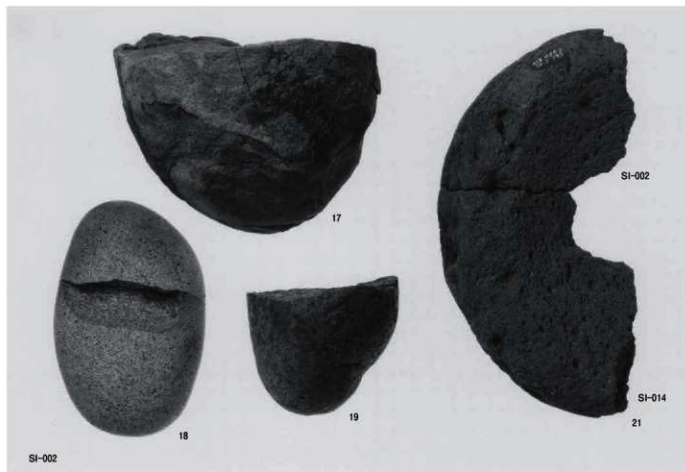


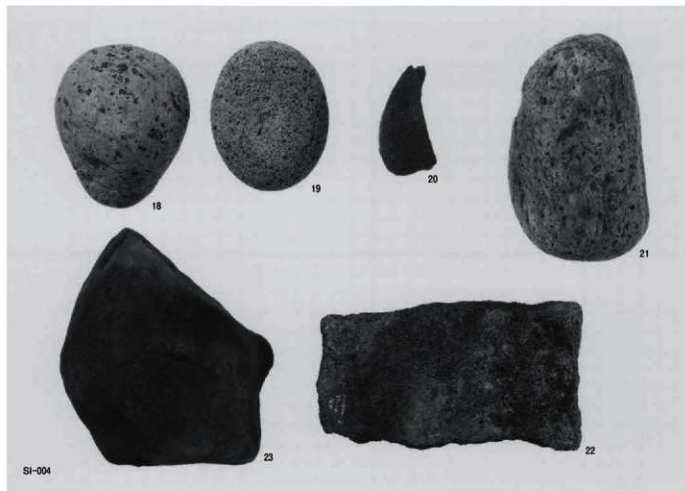
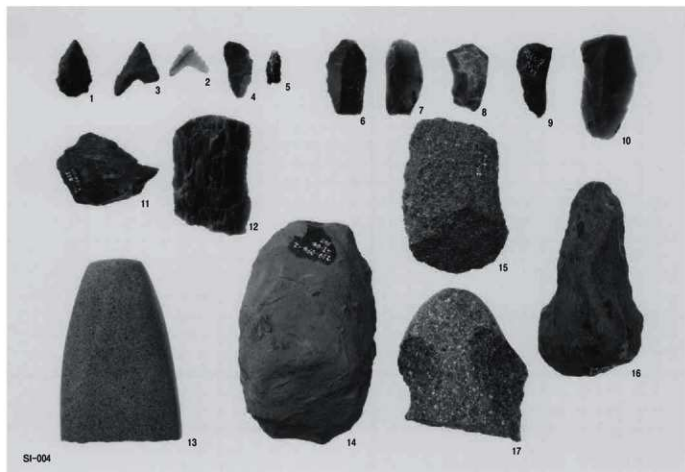
近世陶磁器

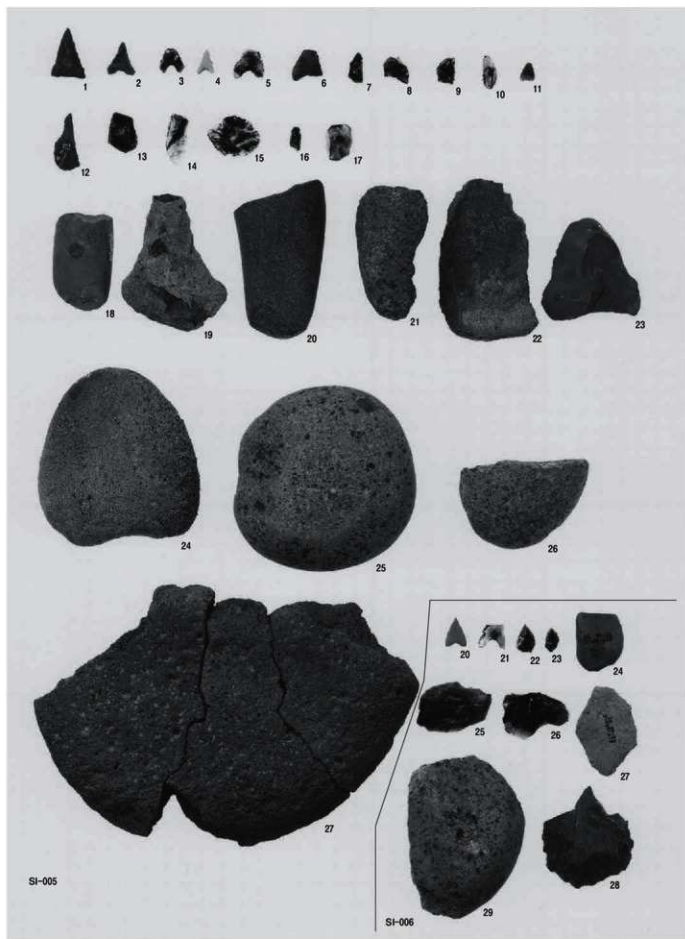


SI-002

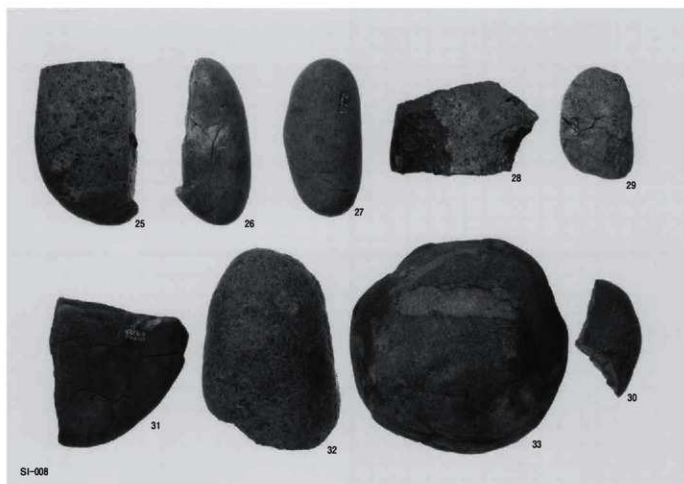
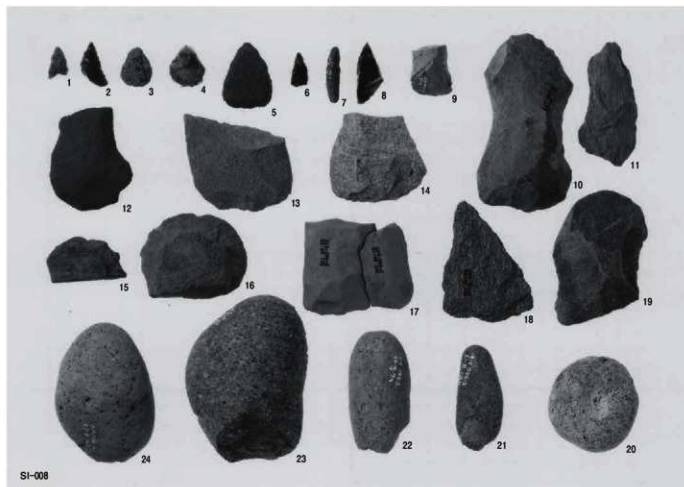
遺構出土石器(1)



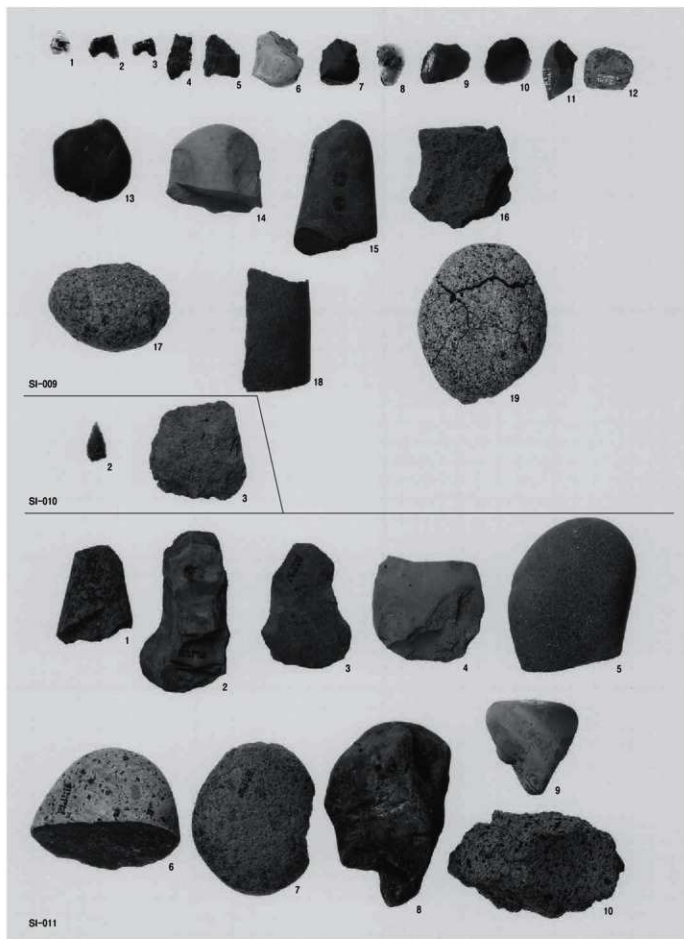




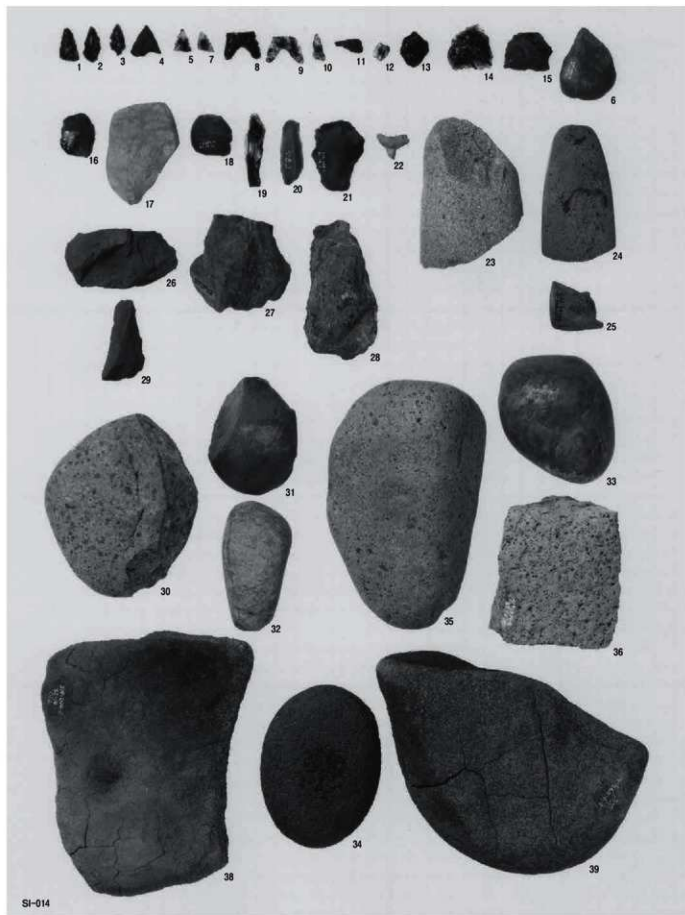
遺構出土石器(4)



遺構出土石器(5)

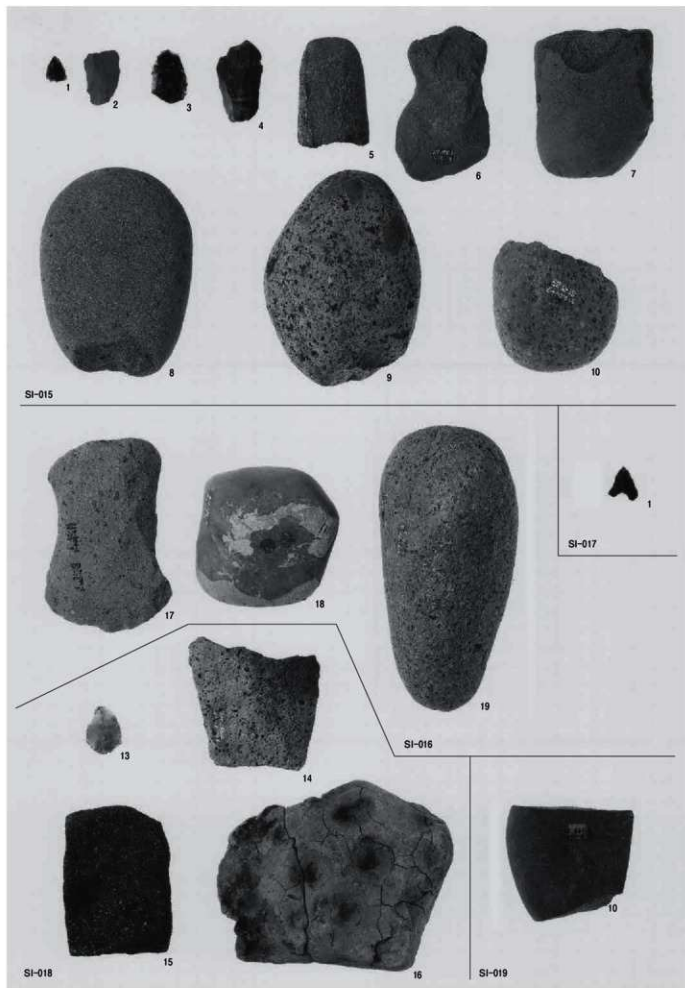


遺構出土石器(6)

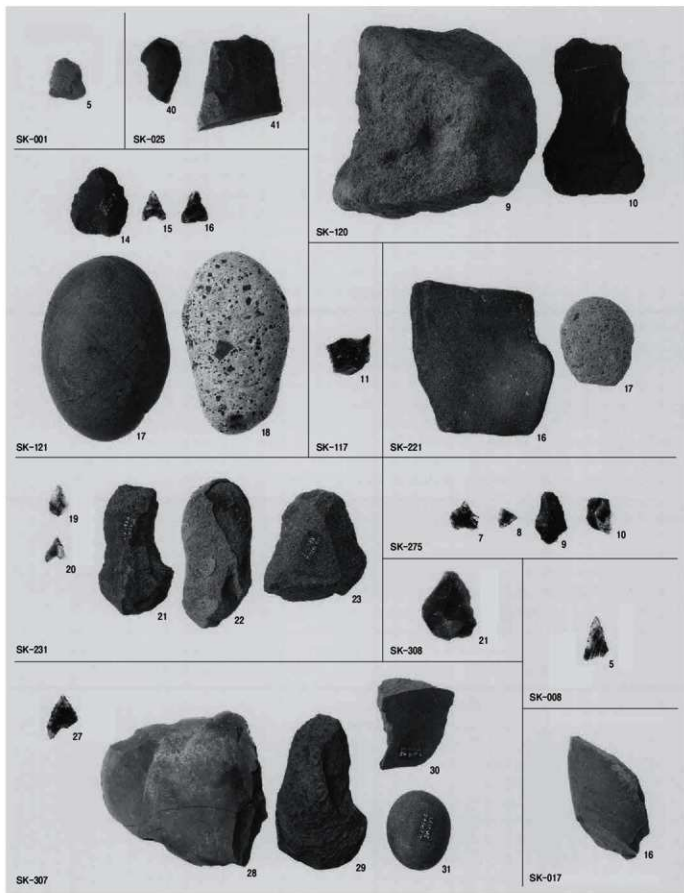


SI-014

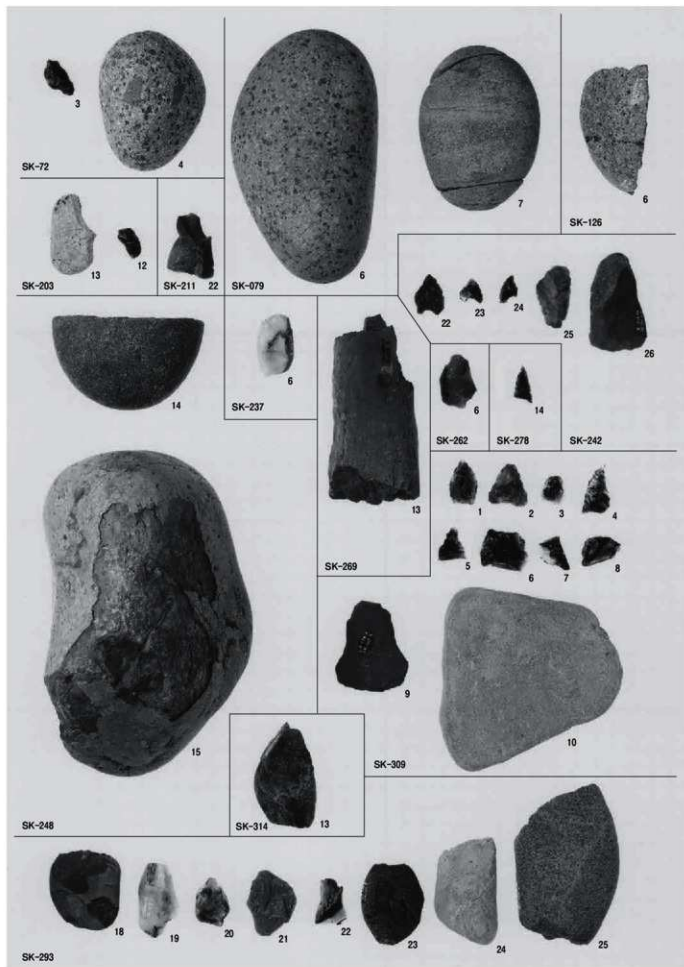
遺構出土石器(7)

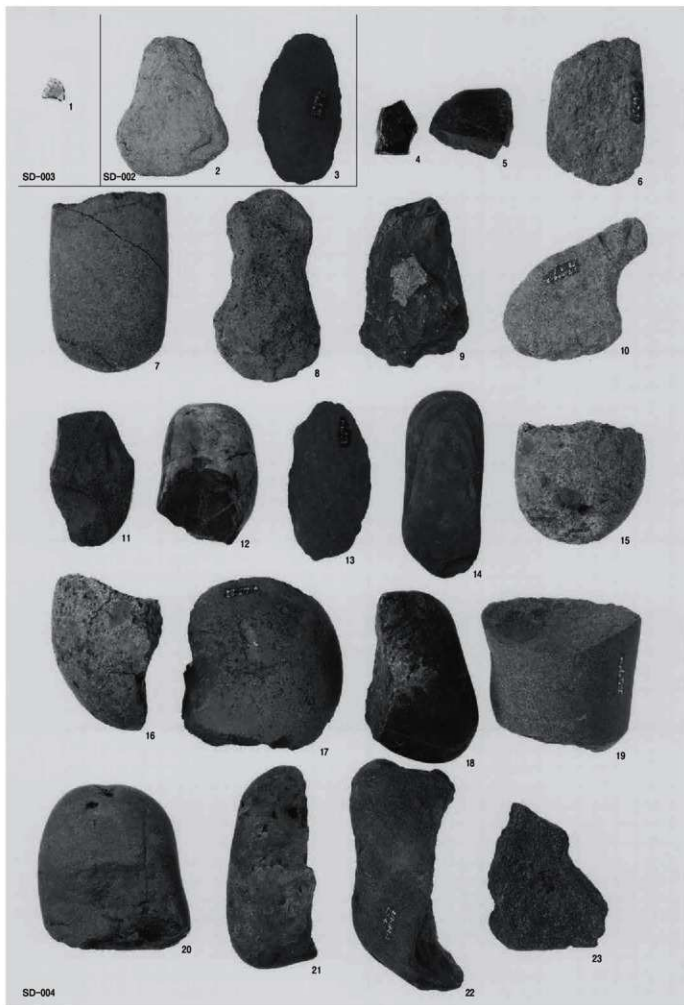


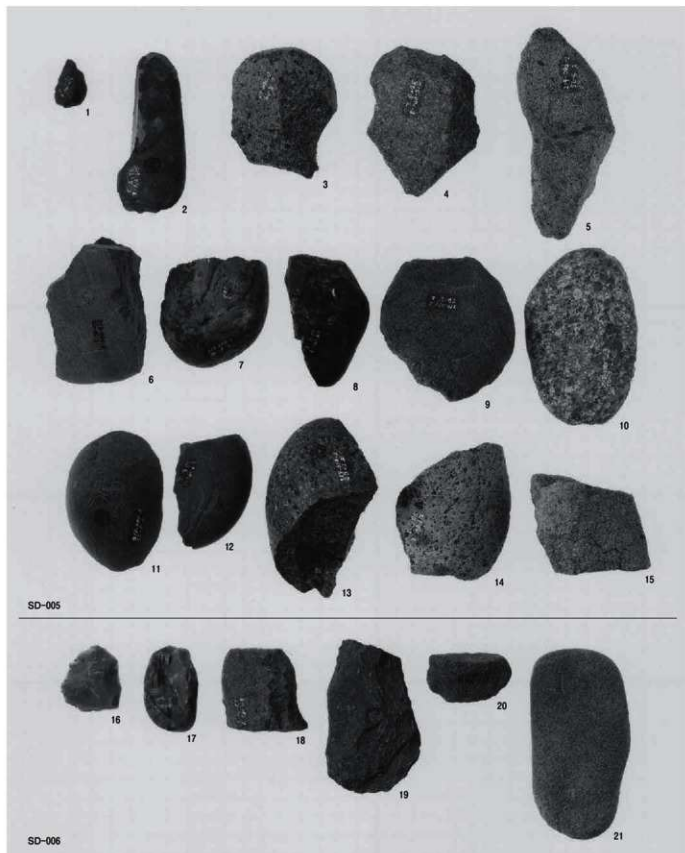
遺構出土石器(8)



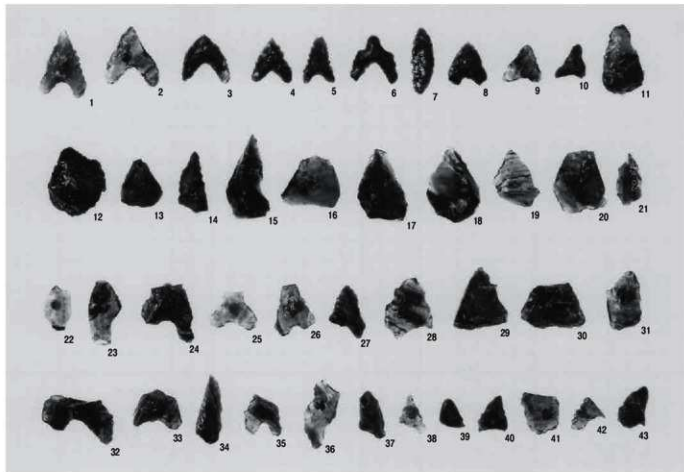
遺構出土石器(9)



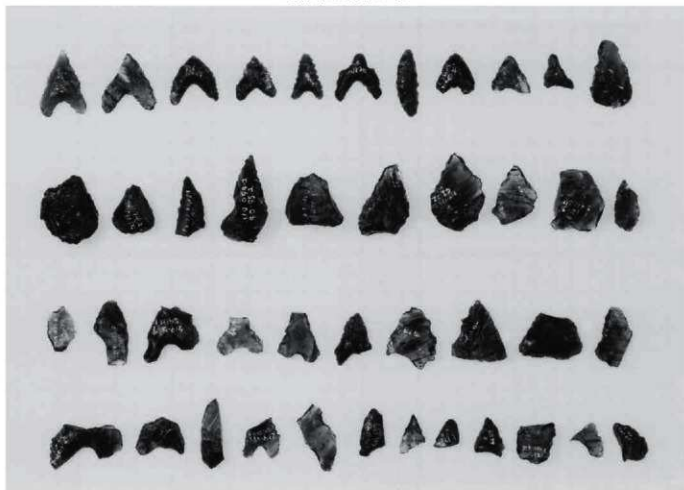




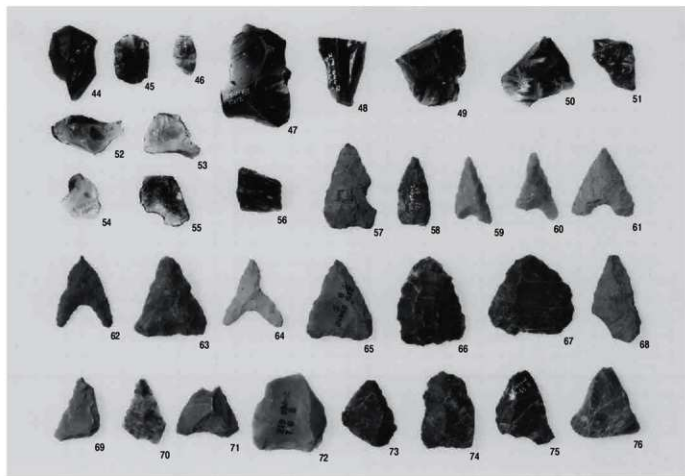
遺構出土石器02



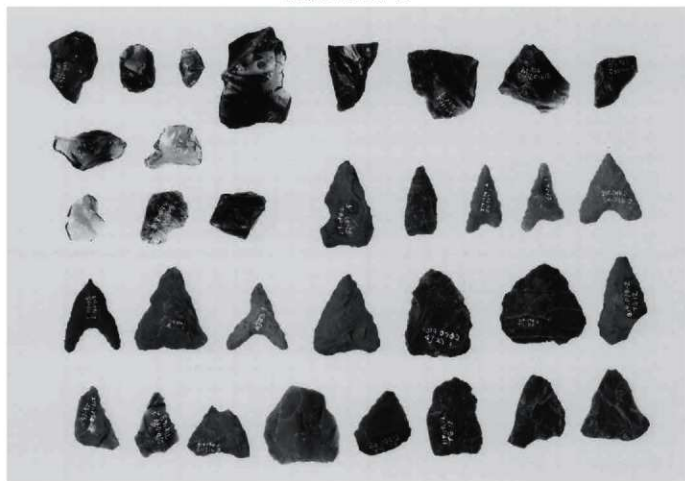
遺構外出土石器(1)-表



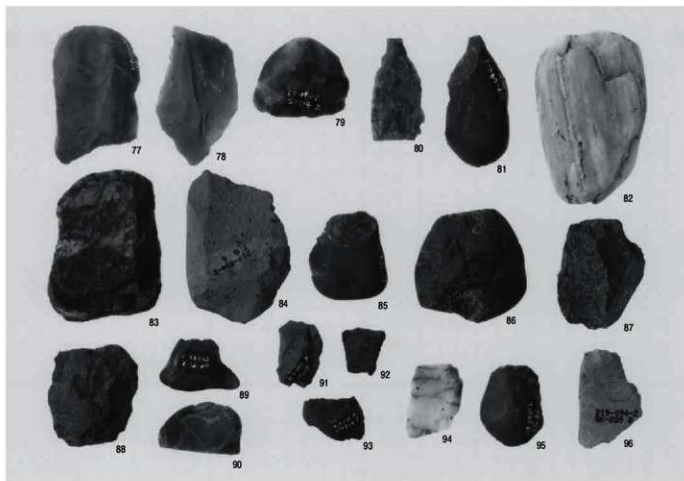
遺構外出土石器(1)-裏



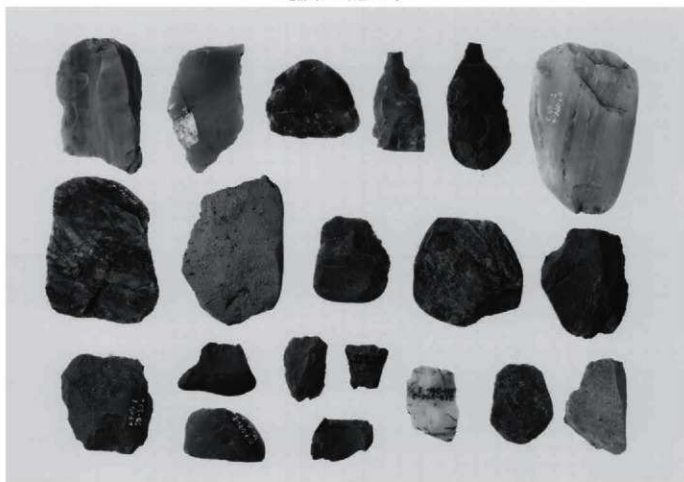
遺構外出土石器(2)-表



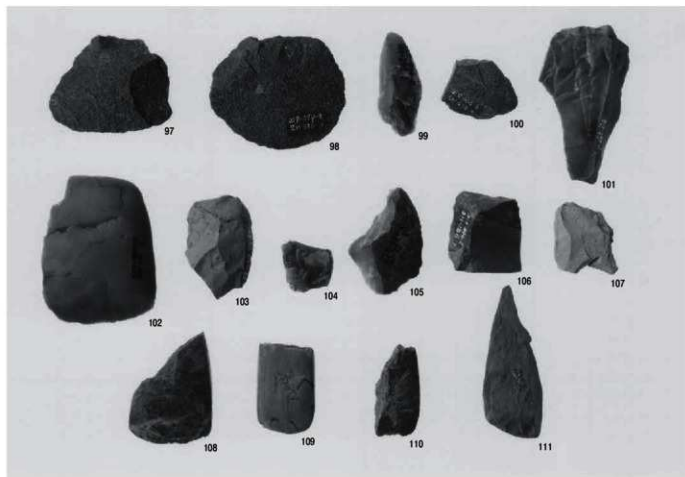
遺構外出土石器(2)-裏



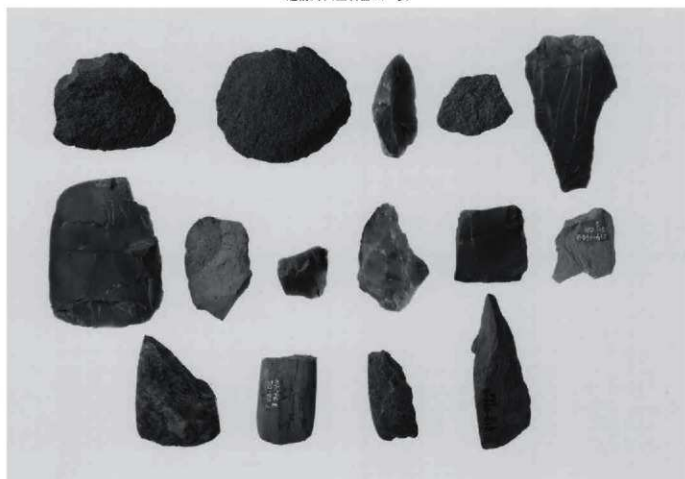
遺構外出土石器(3)-表



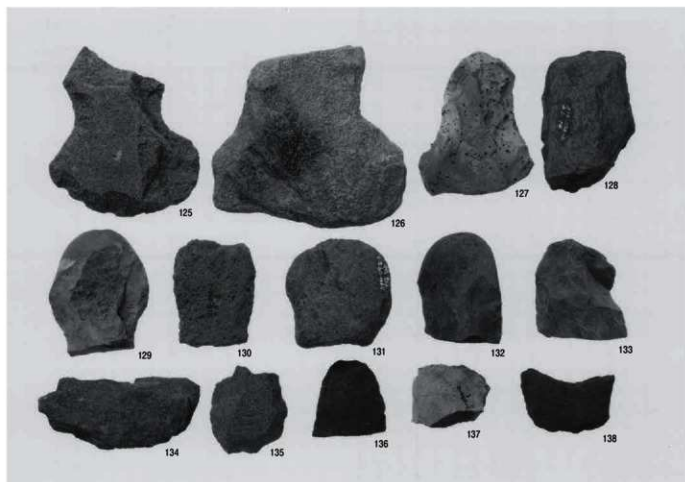
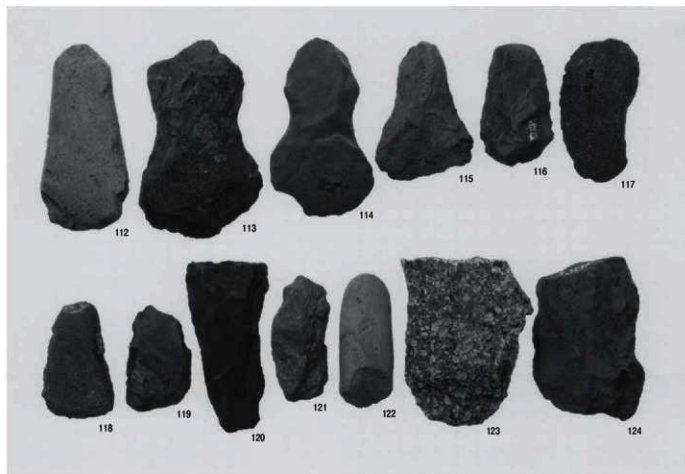
遺構外出土石器(3)-裏



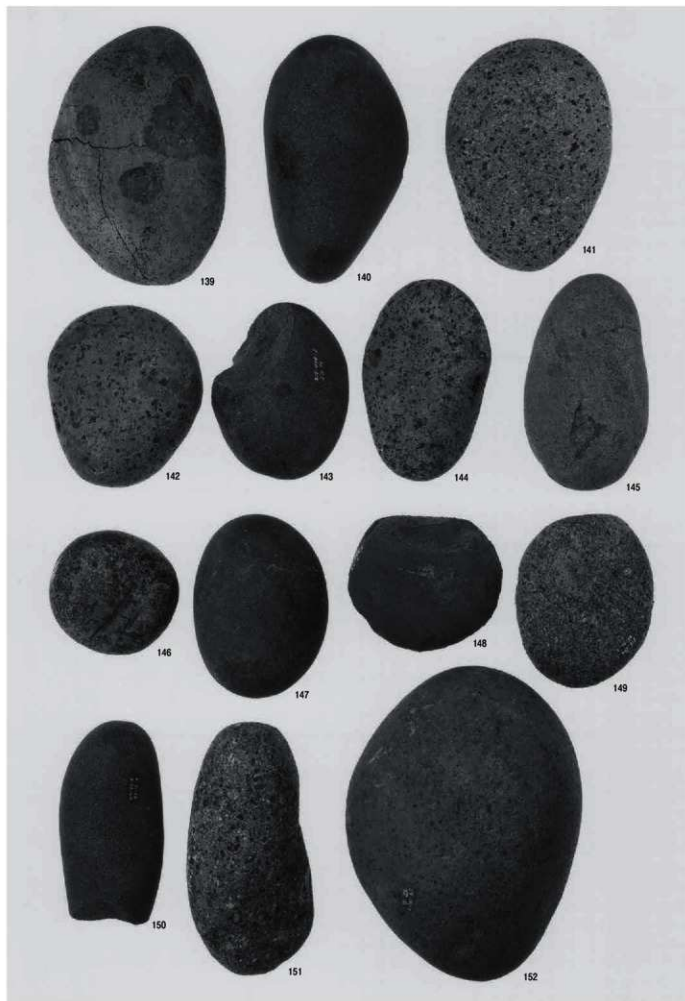
遺構外出土石器(4)-表

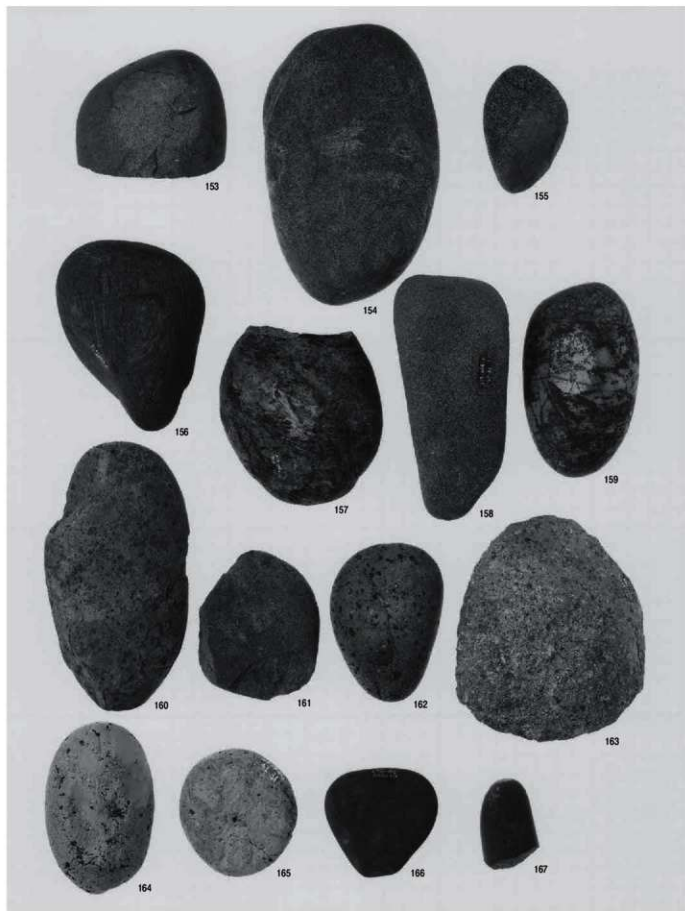


遺構外出土石器(4)-裏

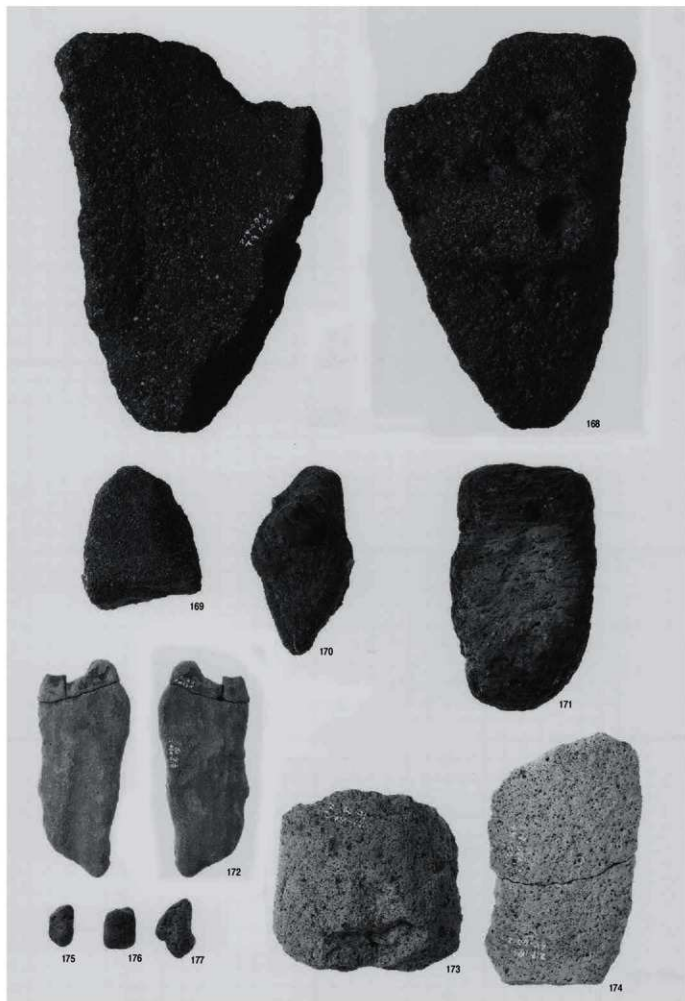


遺構外出土石器(5)





遺構外出土石器(7)



遺構外出土石器(8)、石製品

報 告 書 抄 録

ふりがな	しゅとけんちゆうおうれんらくじどうしゃどうまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしよ							
書名	首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書							
副書名	市原市久保塚ノ台遺跡1・2							
巻次	29							
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告							
シリーズ番号	第751集							
編著者名	古内 茂							
編集機関	公益財団法人千葉県教育振興財団 文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL.043-424-4848							
発行年月日	西暦2016年3月25日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				m	
久保塚ノ台遺跡1	千葉県市原市久保塚字馬頭台48-1 ほか	12219	094-1	35度 21分 35秒	140度 9分 15秒	20110411 ～ 20110622	4.000	圏央道建設に伴う埋蔵文化財調査
久保塚ノ台遺跡2	千葉県市原市久保塚字馬頭台48-1 ほか	12219	094-2	35度 21分 35秒	140度 9分 16秒	20110720 ～ 20111212	9.500	圏央道建設に伴う埋蔵文化財調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
久保塚ノ台遺跡1	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡4軒、 小竪穴32基、 土坑約100基	縄文土器・石器		養老川中流域における中期集落の構成。		
	包蔵地	近世	溝状遺構3条					
久保塚ノ台遺跡2	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡16軒、 小竪穴26基、 土坑118基	縄文土器・石器・ 土製品		養老川中流域における中期・後期の集落構成と中期の石器製作跡		
	包蔵地	近世	溝状遺構7条	近世陶磁器				
要約	<p>本報告書に掲載した2遺跡は同一台地に隣接して位置しているため1遺跡として扱うことが妥当であるが、鉄道敷設に伴い台地が分断されていたため2遺跡として調査した。調査の結果、集落は縄文中期の阿玉台式期から後期の加曾利B式期まで存続しており、その主体は縄文中期中葉の加曾利EⅡ式と後期前葉の堀之内Ⅰ式であった。また中期の住居跡から黒曜石製の石器や剥片が多量に出土し石器製作の痕跡を確認することができた。さらに黒曜石の産地同定からその大半が伊豆諸島の神津島から持ち込まれたものであることが明らかになった。</p>							

千葉県教育振興財団調査報告第751集

首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書 29

— 市原市久保塚ノ台遺跡1・2 —

平成28年3月25日発行

編 集 公益財団法人 千葉県教育振興財団
文化財センター

発 行 国土交通省関東地方整備局
千葉県国道事務所
千葉県千葉市稲毛区天台5丁目27番1号

公益財団法人 千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地の2

印 刷 株式会社 正文社
千葉市中央区都町1-10-6
